

平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡

2008 年

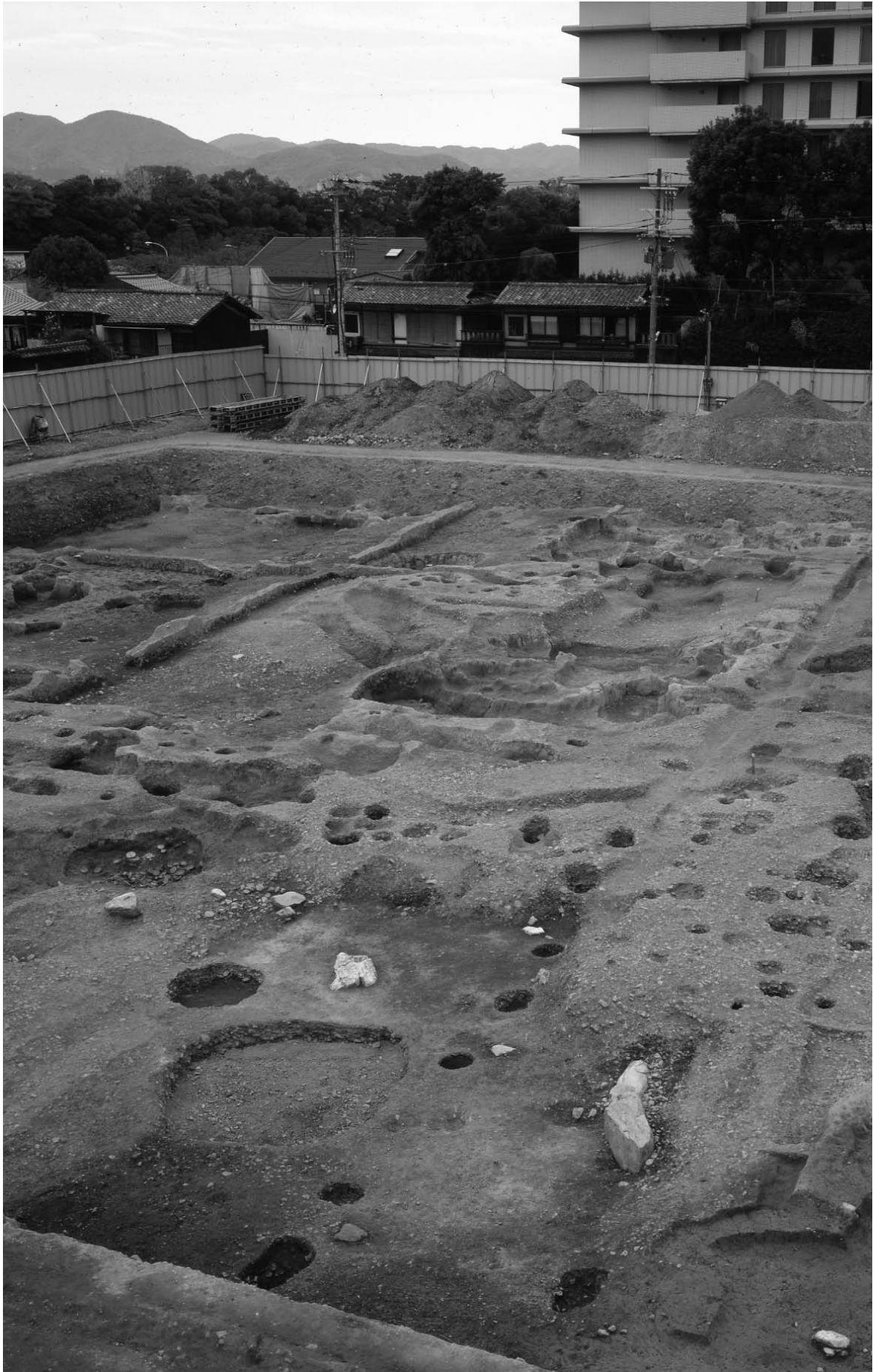
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



1 調査地遠景（南上空から、2007年9月撮影）



2 調査地全景（東上空から、2007年9月撮影）



池 1810 (手前) と池 1570 (左上、南東から)



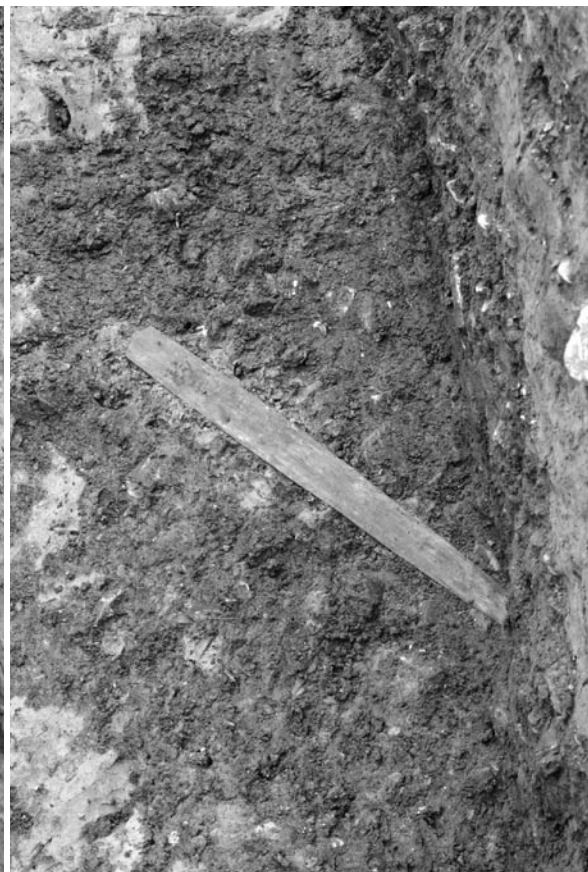
土坑 1840 (手前) と池 1810 (奥、北西から)



1 池 1570 (右下) と池 1810 (中央、北から)



2 木簡 1 出土状態 (地業 2000、南東から)



3 木簡 2 出土状態 (地業 2000、北から)

平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成13年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、高等学校移転整備事業にともなう平安京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

平成20年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

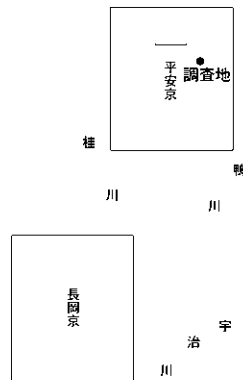
例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡
- 2 調査所在地 京都市中京区油小路通押小路下る押油小路町 238-1（元城巽中学校）
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2006年12月8日～2008年3月10日
- 5 調査面積 3,354 m²
- 6 調査担当者 丸川義広・東 洋一・田中利津子・南出俊彦・能芝妙子・加納敬二
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」、「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 各調査区ごとに通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。ただし、2区・3区の遺構は、頭に「2区」「3区」を付した。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、土器類は番号のみとしたが、軒瓦は「瓦」、銭貨は「銭」、金属製品は「金」、鑄造関係遺物は「鑄」、石製品は「石」、骨角製品は「骨」、ガラス製品は「ガ」、土製品は「土」、木簡・木製品は「木」をそれぞれ頭に付した。写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 丸川義広・東 洋一・田中利津子・加納敬二
- 14 執筆分担 丸川義広：第1章、第3章の1・2・5、第4章の4～11、第5章の1・2・3－（3）
東 洋一：第2章
田中利津子：第4章の1・2・11、第5章の3－（1）
南出俊彦：第3章の4
加納敬二：第3章の3、第4章の3、第5章の3－（2）
付章1：上野勝之（京都大学）
付章2：藤川昌樹（筑波大学大学院システム情報工学研究科）
付章3：丸山真史（京都大学大学院・環境学研究科）、
松井 章（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）
付章4：北野信彦（独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所）
付章5：北野信彦、竜子正彦
付章6：竜子正彦
付章7：株式会社 古環境研究所

付章8：竜子正彦

15 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。

16 協力者 秋山美津子（京都市学校歴史博物館）、青（京都造形芸術大学）、石田敏（高島市朽木村史編さん室）、石田志朗、上野勝之（京都大学）、川本重雄（京都女子大学）、小倉英昭（全日空ホテル）、重森千尼崎博正、菅原文太・文子（俳優・マネージャー）、鋤柄俊夫（同志社大学）、鈴木久男（京都産業大学）、竹村桂子（京都市学校歴史博物館）、仁木 宏（大阪市立大学）、西山良平（京都大学）、橋本清一（京都府立山城郷土資料館）、藤川昌樹（筑波大学）、堀内明博（京都府立大学）、美川 圭（摂南大学）、山岸常人（京都大学）、山田邦和（同志社女子大学）、吉川義彦（関西文化財調査会）、正定寺、古河歴史博物館（敬称略）



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

第1章 調査経過	1
1. 調査経過	1
2. 報告書作成	3
第2章 調査地の位置と環境	5
1. 位置と環境	5
2. 周辺の調査	10
第3章 遺 構	14
1. 基本層序	14
2. 1区の遺構	17
(1) 第4面	17
(2) 第3-2面	23
(3) 第3-1面	27
(4) 第2面	31
(5) 第1面	32
3. 2区の遺構	35
(1) 第3面	35
(2) 第2面	37
(3) 第1面	38
4. 3区の遺構	39
(1) 第4面	39
(2) 第3面	40
(3) 第2面	41
(4) 第1面	43
5. 拡張区の遺構	44
第4章 遺 物	48
1. 遺物の概要	48
2. 土器・陶磁器類	50
(1) 1区の土器	50
(2) 2区の土器	67
(3) 3区の土器	71
3. 瓦類	75
(1) 軒丸瓦	75

(2) 軒平瓦	78
(3) 刻印瓦・緑釉熨斗瓦	80
4. 銭貨	80
5. 金属製品	81
6. 鑄造関係遺物	83
7. 石製品	83
8. 骨角製品	87
9. ガラス製品	88
10. 土製品	89
11. 木簡・木製品	89
第5章 ま と め	93
1. 遺構の変遷	93
(1) 平安時代後期	93
(2) 鎌倉・室町時代	105
(3) 桃山・江戸時代前期	105
(4) 江戸時代中期	109
(5) 江戸時代後期	109
2. 遺構の特徴	110
(1) 井戸底の深さ	110
(2) 便所の可能性があると考えた遺構について	112
3. 出土遺物について	114
(1) 出土した土器類からみる調査地の変遷	114
(2) 堀河院出土軒瓦について	115
(3) 出土銭の年代的推移	119
付章1 池 1570 下部地業出土の木簡について	124
付章2 屋敷図からみた土井家京都邸の構成	128
付章3 動物遺存体について	146
付章4 出土瓦に付着した赤色顔料に関する分析	156
付章5 出土ガラス製品の理化学的分析	162
付章6 出土した種実等分析	173
付章7 土壌分析	182
付章8 池 1810 出土火山灰の分析	199

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 遺跡 1 調査地遠景（南上空から、2007年9月撮影）
2 調査地全景（東上空から、2007年9月撮影）
- 巻頭図版 2 遺構 池 1810（手前）と池 1570（左上、南東から）
- 巻頭図版 3 遺構 土坑 1840（手前）と池 1810（奥、北西から）
- 巻頭図版 4 遺構 1 池 1570（右下）と池 1810（中央、北から）
2 木簡 1 出土状態（地業 2000、南東から）
3 木簡 2 出土状態（地業 2000、北から）
- 図版 1 遺構 調査区断面図 1（1：40）
- 図版 2 遺構 調査区断面図 2（1：40）
- 図版 3 遺構 調査区断面図 3（1：40）
- 図版 4 遺構 第 4 面西半平面図（1：200）
- 図版 5 遺構 第 4 面東半平面図（1：200）
- 図版 6 遺構 第 3 - 2 面西半平面図（1：200）
- 図版 7 遺構 第 3 - 2 面東半平面図（1：200）
- 図版 8 遺構 第 3 - 1 面西半平面図（1：200）
- 図版 9 遺構 第 3 - 1 面東半平面図（1：200）
- 図版 10 遺構 第 2 面西半平面図（1：200）
- 図版 11 遺構 第 2 面東半平面図（1：200）
- 図版 12 遺構 第 1 面西半平面図（1：200）
- 図版 13 遺構 第 1 面東半平面図（1：200）
- 図版 14 遺構 断面図 1（1：200）
- 図版 15 遺構 断面図 2（1：200）
- 図版 16 遺構 池 1810 平面図（1：100）
- 図版 17 遺構 池 1570 平面図（1：150）
- 図版 18 遺構 池 1810 断面図（1：60）
- 図版 19 遺構 池 1570 断面図（1：60）
- 図版 20 遺構 池 1570 断面図（1：60）、溝 2010 断面図（1：40）
- 図版 21 遺構 池 1810 底の礎石・柱穴列実測図（1：60）、景石実測図（1：40）
- 図版 22 遺構 柱穴 1970 断面図（1：40）、柱穴 1524・1548 実測図（1：40）、石敷 370 実測図（1：30）、土坑 1840 実測図（1：40）、景石 2008、溝 1735、砂層 1685 断面図（1：40）
- 図版 23 遺構 井戸 2007・1510・1385・73・1355・1640 実測図（1：50）
- 図版 24 遺構 井戸 1197・1539・1085・7 実測図（1：50）

- 図版 25 遺構 井戸 915・1280・1400・771 実測図 (1:50)
- 図版 26 遺構 集石 1000・48・365・688・644・500・645・510 実測図 (1:50)
- 図版 27 遺構 柱列 1512・1637・1663 実測図 (1:60)
- 図版 28 遺構 礎石列 945・948・985 実測図 (1:50)
- 図版 29 遺構 溝 37・160・38 実測図 (1:50)
- 図版 30 遺構 柱列 1511 実測図 (1:60)、石室 105・89、漆喰 61、瓦組 135、埋甕 39・57・52・700・60・161 実測図 (1:40)、胞衣壺 12・13・314・570 実測図 (1:20)
- 図版 31 遺構 落込 920・925 断面図 (1:100)、土坑 641・1080・70・806・280・94・123 断面図 (1:50)
- 図版 32 遺構 2区第3面平面図 (1:200)
- 図版 33 遺構 2区第2面平面図 (1:200)
- 図版 34 遺構 2区第1面平面図 (1:200)
- 図版 35 遺構 2区井戸 276・229・250・145 実測図 (1:50)
- 図版 36 遺構 2区柱列 160 実測図 (1:50)
- 図版 37 遺構 2区石垣 13、溝 20 実測図 (1:50)
- 図版 38 遺構 3区第4・3面平面図 (1:150)
- 図版 39 遺構 3区第2・1面平面図 (1:150)
- 図版 40 遺構 3区建物 180 実測図 (1:80)
- 図版 41 遺構 拡張区 1・2 実測図 (1:60)
- 図版 42 遺構 拡張区 3・4 実測図 (1:60)
- 図版 43 遺物 井戸 1510・2007、地業 1800・2000、土坑 1840、池 1810、溝 1735 出土遺物実測図 (1:4)
- 図版 44 遺物 池 1570 出土遺物実測図 (1:4)
- 図版 45 遺物 層 1505、井戸 73、溝 1315、土坑 1247 出土遺物実測図 (1:4)
- 図版 46 遺物 土坑 1323、井戸 1640、溝 1387 出土遺物実測図 (1:4)
- 図版 47 遺物 井戸 1197、土坑 1190 出土遺物実測図 (1:4)
- 図版 48 遺物 土坑 1430、井戸 1238・1085 出土遺物実測図 (1:4)
- 図版 49 遺物 土坑 1175・1173・1316・1200 出土遺物実測図 (1:4)
- 図版 50 遺物 土坑 1200、井戸 1400 出土遺物実測図 (1:4)
- 図版 51 遺物 土坑 989、井戸 80、土坑 641・1146・904・1207 出土遺物実測図 (1:4)
- 図版 52 遺物 落込 925 出土遺物実測図 (1:4)
- 図版 53 遺物 落込 920、土坑 1080・1212・1213・1155 出土遺物実測図 (1:4)
- 図版 54 遺物 土坑 94・70・280 出土遺物実測図 (1:4)
- 図版 55 遺物 土坑 625 出土遺物実測図 (1:4)

- 図版 56 遺物 土坑 625、井戸 83 出土遺物実測図 (1 : 4)
- 図版 57 遺物 井戸 83、土坑 71、石室 105 出土遺物実測図 (1 : 4)
- 図版 58 遺物 その他遺構出土遺物実測図 (1 : 4)
- 図版 59 遺物 2区土坑 178、井戸 229、土坑 222・173、井戸 145 出土遺物実測図 (1 : 4)
- 図版 60 遺物 2区土坑 165・174・228、溝 60 出土遺物実測図 (1 : 4)
- 図版 61 遺物 2区土坑 16・3、その他遺構出土遺物実測図 (1 : 4)
- 図版 62 遺物 3区土坑 286、井戸 280、土坑 249、層 306、溝 255 出土遺物実測図 (1 : 4)
- 図版 63 遺物 3区層 304、土坑 200・281 出土遺物実測図 (1 : 4)
- 図版 64 遺物 3区土坑 88・83・7 出土遺物実測図 (1 : 4)
- 図版 65 遺物 3区井戸 89、土坑 10、その他遺構出土遺物実測図 (1 : 4)
- 図版 66 遺物 軒丸瓦拓影・実測図 1 (1 : 4)
- 図版 67 遺物 軒丸瓦拓影・実測図 2 (1 : 4)
- 図版 68 遺物 軒丸瓦拓影・実測図 3 (1 : 4)
- 図版 69 遺物 軒丸瓦拓影・実測図 4 (1 : 4)
- 図版 70 遺物 軒平瓦拓影・実測図 1 (1 : 4)
- 図版 71 遺物 軒平瓦拓影・実測図 2 (1 : 4)
- 図版 72 遺物 軒平瓦拓影・実測図 3 (1 : 4)
- 図版 73 遺物 軒平瓦拓影・実測図 4、刻印瓦・緑釉熨斗瓦拓影・実測図 (1 : 4)
- 図版 74 遺物 銭貨拓影 1 (1 : 1)
- 図版 75 遺物 銭貨拓影 2 (1 : 1)
- 図版 76 遺物 金属製品実測図 (1 : 3)、鑄造関係遺物実測図 (1 : 4)
- 図版 77 遺物 石製品実測図 1 (1 : 4)
- 図版 78 遺物 石製品実測図 2 (1 : 4)
- 図版 79 遺物 石製品実測図 3 (1 : 6、石 73 のみ 1 : 8)
- 図版 80 遺物 石製品実測図 4、骨角製品・ガラス製品・土製品実測図 (1 : 3、骨 17 ~ 19 のみ 1 : 1)
- 図版 81 遺物 木簡実測図 (1 : 3)、木製品実測図 1 (1 : 4)
- 図版 82 遺物 木製品実測図 2 (1 : 4)
- 図版 83 遺構 垂直空中写真 (上が北、2007 年 10 月撮影)
- 図版 84 遺構
- 1 調査区全景 (南から)
 - 2 重機掘削 (南から)
 - 3 調査風景 (北西から)
 - 4 調査風景 (北西から)
 - 5 地元説明会 (2007 年 5 月、北東から)
 - 6 現地説明会 (2007 年 7 月、北東から)

- 7 調査風景（井戸 1400、南東から）
- 8 調査風景（井戸 1197、南東から）
- 図版 85 遺構
 - 1 現地説明会（2007 年 10 月、北東から）
 - 2 現地説明会（2007 年 10 月、南西から）
 - 3 2 区調査前（北東から）
 - 4 2 区調査風景（南東から）
 - 5 2 区中学生チャレンジ体験（西から）
 - 6 2 区中学生チャレンジ体験（東から）
 - 7 3 区調査風景（北東から）
 - 8 3 区中学生チャレンジ体験（西から）
- 図版 86 遺構
 - 1 第4面全景（北から、右下は池 1570）
 - 2 第4面全景（西から、左下は池 1570）
- 図版 87 遺構
 - 1 溝 1600（北西から）
 - 2 池 1810（西から）
- 図版 88 遺構
 - 1 池 1810（北西から）
 - 2 池 1810 内の景石 1979・1980（北から）
 - 3 同景石 1979・1980（南西から）
 - 4 同景石 1976（南東から）
 - 5 同景石 1978（南東から）
- 図版 89 遺構
 - 1 池 1570（南東から）
 - 2 地業 2000（池 1570 下部、北西から）
- 図版 90 遺構
 - 1 土坑 1840（遺物出土状況、北西から）
 - 2 井戸 2007（底部の横棧、北から）
- 図版 91 遺構
 - 1 井戸 1385（手前）と井戸 73（東から）
 - 2 井戸 1355（木柵倒壊状況、西から）
 - 3 柱穴 1524 の礎板（北東から）
 - 4 柱穴 1548 の礎板（北西から）
- 図版 92 遺構
 - 第3面全景（南西から）
- 図版 93 遺構
 - 1 井戸 1197（遺物出土状況、西から）
 - 2 井戸 1197（完掘後、西から）
 - 3 井戸 1640（東から）
 - 4 井戸 1085（西から）
- 図版 94 遺構
 - 1 井戸 1539（東から）
 - 2 井戸 1238（西から）
 - 3 井戸 7（北から）

- 4 井戸 1280 (東から)
- 図版 95 遺構 1 井戸 1400 (北から)
2 井戸 777 (半截状況、東から)
3 井戸 777 (完掘後、東から)
- 図版 96 遺構 1 落込 925 (東から)
2 礎石列 985 (東から)
3 落込 925 内、瓦の出土状況 (南東から)
- 図版 97 遺構 第2面全景 (西から)
- 図版 98 遺構 1 中央部の集石群 (北東から)
2 集石 48 (北から)
3 集石 510 (北から)
- 図版 99 遺構 第1面全景 (西から)
- 図版 100 遺構 1 北西部の石組溝 (北から)
2 埋甕 51 (西から)
3 土坑 487 (南東から)
4 石組 67 (南から)
5 石室 89 (東から)
- 図版 101 遺構 1 2区北半第3面全景 (北西から)
2 2区井戸 276 (北東から)
3 2区井戸 229 (南から)
- 図版 102 遺構 1 2区南半第3面全景 (北から)
2 2区井戸 250 (北から)
- 図版 103 遺構 1 2区南半第2面全景 (東から)
2 2区土坑 228 (北東から)
- 図版 104 遺構 1 2区北半第1面全景 (北から)
2 2区南半第1面全景 (東から)
- 図版 105 遺構 1 3区第4面全景 (北東から)
2 3区井戸 280 (北西から)
3 3区井戸 280 断割状況 (東から)
- 図版 106 遺構 1 3区第3面全景 (西から)
2 3区第2面全景 (西から)
- 図版 107 遺構 1 3区第1面全景 (西から)
2 拡張区2の全景 (北から)
3 拡張区2の景石 (東から)
4 拡張区4の洲浜 (東から)

図版 108 遺物 井戸 1510・2007、地業 2000、土坑 1840 出土土器
図版 109 遺物 土坑 1840、池 1810、溝 1735 出土土器
図版 110 遺物 池 1570 出土土器
図版 111 遺物 層 1505、溝 1315・1387、土坑 1323、井戸 1640 出土土器
図版 112 遺物 井戸 1197、土坑 1190 出土土器
図版 113 遺物 土坑 1430、井戸 1238・1085、土坑 1175 出土土器
図版 114 遺物 土坑 1316・1200 出土土器
図版 115 遺物 土坑 989、井戸 80、土坑 641・1146・1207 出土土器
図版 116 遺物 落込 925 出土土器
図版 117 遺物 落込 920・1080 出土土器
図版 118 遺物 土坑 1213・1155・94 出土土器
図版 119 遺物 その他遺構出土土器
図版 120 遺物 2区土坑 222・173、井戸 145、土坑 165・174 出土土器
図版 121 遺物 2区土坑 174・16、溝 60 出土土器
図版 122 遺物 3区土坑 286・249・281、溝 255、層 304 出土土器
図版 123 遺物 3区土坑 88・83・7、井戸 89、土坑 10、その他遺構出土土器
図版 124 遺物 軒丸瓦 1
図版 125 遺物 軒丸瓦 2
図版 126 遺物 軒丸瓦 3
図版 127 遺物 軒丸瓦 4、金箔瓦、道具瓦
図版 128 遺物 軒平瓦 1
図版 129 遺物 軒平瓦 2
図版 130 遺物 軒平瓦 3
図版 131 遺物 軒平瓦 4、刻印瓦、緑釉熨斗瓦
図版 132 遺物 錢貨 1
図版 133 遺物 錢貨 2
図版 134 遺物 金属製品 1
図版 135 遺物 金属製品 2
図版 136 遺物 石製品 1
図版 137 遺物 石製品 2、鑄造関係遺物
図版 138 遺物 石製品 3
図版 139 遺物 石製品 4
図版 140 遺物 石製品 5、土製品 1
図版 141 遺物 石製品 6、土製品 2
図版 142 遺物 石製品 7

図版 143 遺物	石製品 8、骨角製品
図版 144 遺物	ガラス製品
図版 145 遺物	壁土
図版 146 遺物	木製品
図版 147 参考	1 1983 年度調査 1 区第 3 面全景 (西から) 2 1983 年度調査 1 区南北溝と石列 (南から)
図版 148 参考	1 1983 年度調査 2 区全景 (北から、裏は城巽中学校北校舎) 2 1983 年度調査 4 区南東部、景石の検出状況 (西から)
図版 149 参考	1 1983 年度調査 4 区南東部、景石の検出状況 (南東から) 2 1983 年度調査 4 区南東部、溝と景石の検出状況 (西から)
図版 150 参考	1 1983 年度調査 4 区南東部、溝完掘後 (東から) 2 1983 年度調査 4 区北西部全景 (東から)
図版 151 参考	1 1985 年度調査 遺構面 5 全景 (南から) 2 1985 年度調査 遺構面 5 全景 (東から)

挿 図 目 次

図 1	調査区配置図 (1 : 1,000)	2
図 2	九条家本『延喜式』左京図での堀河院とその周辺	8
図 3	鎌倉時代の閑院内裏と堀河院	8
図 4	周辺調査位置図 (1 : 2,500)	11
図 5	断面図作成位置図 (1 : 1,000)	15
図 6	木簡 1・2 の出土状態 (1 : 20)	21
図 7	建物 2014 実測図 (1 : 60)	24
図 8	井戸 777 実測図 (1 : 50)	28
図 9	落込 925 出土網代製品 (1 : 15)	29
図 10	落込 925 出土獣骨 (1 : 20)	29
図 11	炭・灰が詰まった土坑断面図 (1 : 50)	34
図 12	2 区流路 296 断面図 (1 : 50)	35
図 13	2 区溝 20・60・120 断面図 (1 : 40)	36
図 14	2 区土坑 228 断面図 (1 : 60)	37
図 15	3 区井戸 280 実測図 (1 : 40)	39
図 16	3 区溝 255、整地層 304 断面図 (1 : 40)	40

図 17	3区南北セクション断面図 (1:60)	41
図 18	3区門 301 実測図 (1:50)	42
図 19	拡張区 4 洲浜実測図 (1:30)	46
図 20	拡張区 5 実測図 (1:60)	47
図 21	錢貨の比率グラフ	81
図 22	硯裏面の線刻文字・墨書 (1:3)	84
図 23	木簡墨書部分実測図 (1:2)	90
図 24	遺構配置図 (平安時代後期、1:600)	95
図 25	1区第4面の等高線図 (1:300)	99
図 26	左京三条二坊九・十町 (堀河院) の遺構配置図 (1:1,000)	102
図 27	遺構配置図 (桃山・江戸時代、1:600)	106
図 28	「寛永後万治前洛中絵図」(1642年頃に成立)での調査地	108
図 29	井戸底の標高比較模式図	111
図 30	遺構配置図 (1:400)	113
図 31	軒瓦分布図 (1:400)	116
図 32	出土錢貨の年代的推移グラフ	119
図 33	「(土井家中京都屋敷略図)」読み取り図	133
図 34	「(土井家中京都屋敷略図)」読み取り図 (部分)	134
図 35	「(京都ほり川御屋敷指図)」読み取り図	137
図 36	「(油小路屋敷図)」読み取り図	141
図 37	動物遺存体組成	146
図 38	シジミ類の殻高分布	146
図 39	ハマグリ類の殻高分布	146
図 40	赤色顔料の蛍光X線分析結果	158
図 41	ガラス製品の蛍光X線分析結果 1	165
図 42	ガラス製品の蛍光X線分析結果 2	166
図 43	試料採集地点図 (1:1,000)	182
図 44	花粉ダイアグラム	192
図 45	主要珪藻ダイアグラム	195

写真目次

写真1	校舎解体風景（南から）	1
写真2	東校舎解体時の立会調査（北から）	1
写真3	地業2000の埋土（X=-109,579セクション、北から）	21
写真4	木簡1の写真撮影（地業2000、北東から）	21
写真5	土坑1316（北西から）	26
写真6	土坑1428（西から）	27
写真7	土坑989（北東から）	30
写真8	2区溝20と溝30の交点（南東から）	38
写真9	3区瓦敷303（南から）	41
写真10	3区礎石178（西から）	44
写真11	土師器小壺（土坑1840出土）	51
写真12	サイコロ状土製品	67
写真13	陶製オロシ金（土坑132出土）	89
写真14	「(土井家中京都屋敷略図)」(天保7～8年成立)	132
写真15	「(京都ほり川御屋敷指図)」	139
写真16	「(油小路屋敷図)」(幕末期成立)	140
写真17	落込925出土動物遺存体	154
写真18	土坑217出土動物遺存体	154
写真19	動物遺存体 1～7 井戸1400キツネ、8～10 落込925イヌ、11～15 落込925ネコ、 16 土坑82牛角、17 土坑625鹿角、18・19 落込925ウシ/ウマ	155
写真20	赤色顔料の観察	161
写真21	種実等写真1	180
写真22	種実等写真2	181
写真23	花粉・寄生虫卵1	193
写真24	花粉・寄生虫卵2	194
写真25	珪藻	198
写真26	池1810内の土坑1840（北西から）	199
写真27	池1810出土の火山灰	200
写真28	高島市朽木白土谷採集の火山灰	200

表 目 次

表1	遺構概要表	14
表2	遺物概要表	49
表3	池 1810・1570 の比較	100
表4	「(土井家中京都屋敷略図)」に見える家臣名	135
表5	「(油小路屋敷図)」に見える家臣名及び部屋名・収納品等	138
表6	「御下り之節御行列張」に見える家臣名	142
表7	種名表	147
表8	イヌ下顎骨計測値	150
表9	イヌの計測値	150
表10	動物遺存体集計表	152
表11	ガラス分析結果	167
表12	種実等一覧表	176
表13	花粉分析結果	190
表14	珪藻分析結果	196
表15	テフラ分析結果表	201

観 察 表 目 次

観察表1	井戸一覧表	202
観察表2	1区その他遺構出土遺物一覧表	204
観察表3	2区その他遺構出土遺物一覧表	205
観察表4	3区その他遺構出土遺物一覧表	205
観察表5	軒丸瓦一覧表	206
観察表6	軒平瓦一覧表	211
観察表7	刻印瓦・緑釉熨斗瓦一覧表	218
観察表8	銭貨一覧表	219
観察表9	金属製品一覧表	222
観察表10	鑄造関係遺物一覧表	223
観察表11	石製品一覧表	223
観察表12	骨角製品一覧表	227

観察表 13 ガラス製品一覧表	228
観察表 14 土製品一覧表	229
観察表 15 木簡・木製品一覧表	230

平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡

第1章 調査経過

1. 調査経過（図版 84・85）

本調査は京都市立音楽高等学校移転整備事業に伴う発掘調査である。調査地である城巽中学校跡地は平安京左京三条二坊十町にあたる。平安時代、この十町と北側の九町は、円融天皇・白河天皇・堀河天皇の里内裏「堀河院」に該当する。十町における鎌倉・室町時代での利用は知られていないが、江戸時代には徳川家の有力家臣、土井家の藩邸として使用された。その後、明治5年に学校用地となり現在に至っている。

校舎解体に伴う立会調査を平成18年（2006）10月初・中旬に合計4日間実施し、平安時代の遺構・遺物が残存することを確認した（写真1・2）。京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課は京都市教育委員会に対して発掘調査の指導を行った。京都市教育委員会はこの指導を受けて、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に発掘調査の委託を行った。

発掘調査は同年12月初めに開始した。敷地南東隅に仮設事務所を設置し、道具類を搬入した後、12月中旬より中央部に1区を設定した。1区の規模は、おおよそ東西58m、南北45mである。重機掘削では、現地表から0.55mで江戸時代末期の整地層（層75）を検出し、この上面を第1面とした。第1面では江戸時代末期から明治時代初頭の漆喰組の遺構、石垣をもつ溝、石組井戸などを検出し、3月中頃に最初の全景写真撮影と空中写真測量を実施した。

続いて、第1面を形成する層を掘り下げ、江戸時代後期の遺構群を調査した（第2面）。4月下旬に第2回目の全景写真と空中写真測量を実施した。

第2面を形成する層を「層810」として掘り下げ、遺構検出を行った（第3面）。この間、5月中旬には地元向けの説明会を開催した（参加者約120名）。5月下旬、北西部で方形の落込925を検出した。堀川に向かって開削されており、船入遺構の可能性があると考え、7月下旬に現地説明



写真1 校舎解体風景（南から）



写真2 東校舎解体時の立会調査（北から）

会を開催した¹⁾ (参加者約 250 名)。この第 3 面は、江戸時代前期と桃山時代の遺構を主としたが、室町時代の遺構も検出し掘り下げた。9 月初旬に第 3 回目の全景写真撮影と空中写真測量を実施した。

北西部で平安時代後期の池 (池 1570) が存在することがわかり、9 月上旬から 10 月上旬に調査した。池の様子が判明した 10 月初旬には記者発表と現地説明会を開催し、現場を一般に公開した²⁾ (参加者約 650 名)。一方、南端には平安時代後期の整地層 (層 1195) が広がっていたが、この下にも別の池 (池 1810) があることがわかり、11 月初めから調査を進めた。池底に景石や礎石が据わった本格的な池であることが判明したため、11 月後半に記者発表を行い、現場の状況を公開した³⁾。

12 月初旬には現場から出た排土を現場内に埋め戻す作業を開始した。しかし現場内の調査が完了していなかったため、埋戻し作業は、南半、東半、中央部、西半へと、調査が終了した後を追いかけるかたちで進めた。これらと併行して、池 1570 の下部では、池に先行する掘り込み (地業

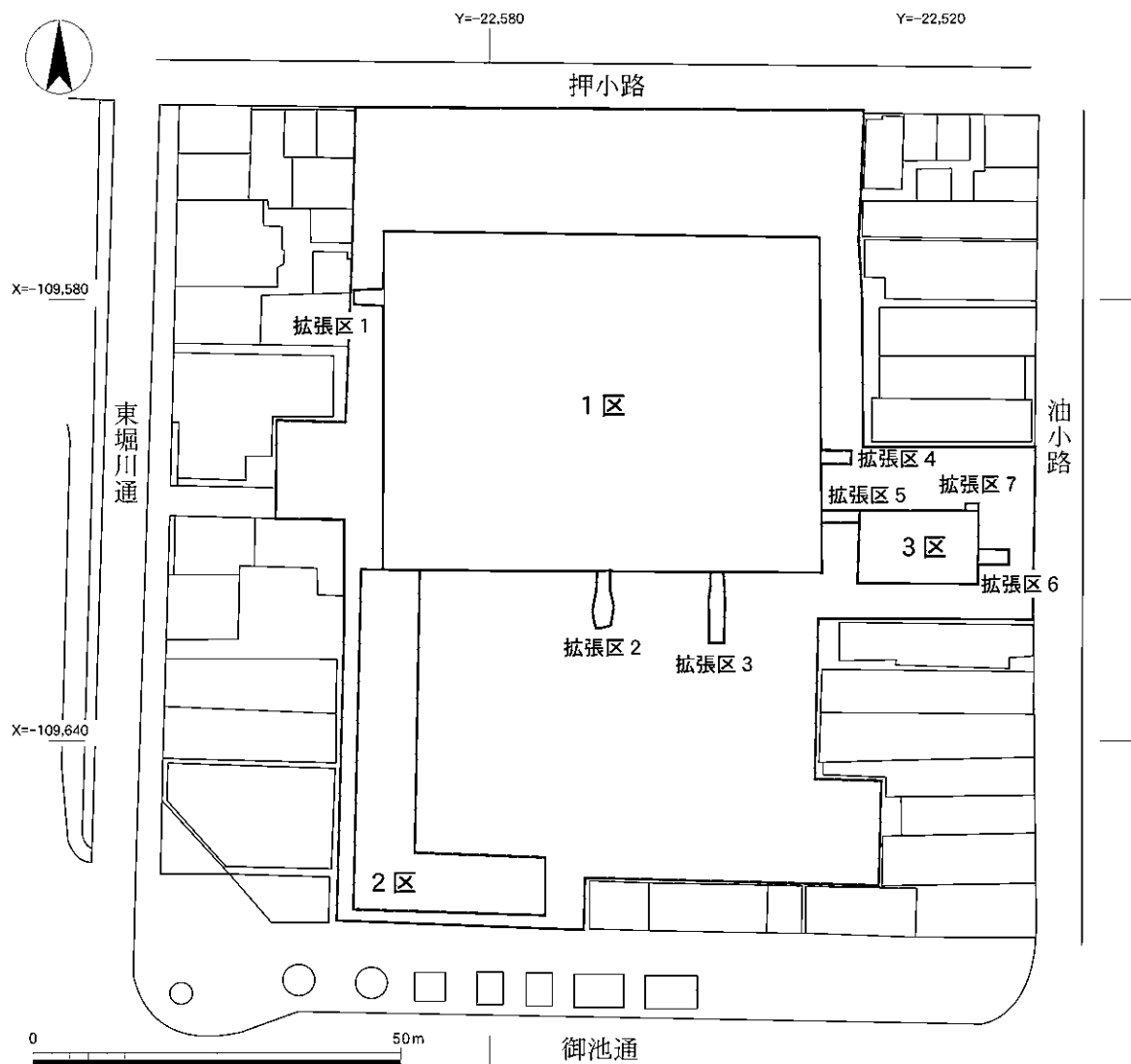


図 1 調査区配置図 (1 : 1,000)

1800・1999・2000 など) を12月中旬に調査した。また、これらの作業中に壁面に沿って断ち割り、土層断面図を作成し、12月後半には現場での調査を終了した。その際、北西部では落込925の西延長を知るために拡張区1を、南壁の中央部と南東部では池1810の南延長を知るために拡張区2・3を設定し、それぞれ所定の成果を収めた。

2007年10月初旬からは敷地内の南西隅に2区を設定し、調査した。この2区は、8月下旬の試掘調査で遺構が残存することを確認していたが、土置き場の関係から10月初旬に掘削可能となったものである。調査区は幅8mで南北約46m、東西約26mのL字形を呈し、第1面(江戸時代後期)、第2面(室町時代から江戸時代前期)、第3面(鎌倉・室町時代)を調査し、12月末に埋戻しを完了させた。この2区では、平安時代以前の流路跡、鎌倉・室町時代の井戸・土坑、桃山時代から江戸時代の土坑(土坑228など)、粘土採取のための土取穴、江戸時代の東西方向の小溝群、南半では室町時代の区画溝と柵、江戸時代後期から幕末期の東西方向の石垣・溝などを検出した。

2008年1月上旬から調査対象地の東端中央部、城巽自治会館跡地で新たに3区を設定し、調査した。調査区は東西16.5m、南北10mの長方形である。重機を用いて盛土、近代堆積土を除去し、1月中旬に第1面(江戸時代末)の写真撮影とオルソ測量を実施した。続いて、1月末に第2面(江戸時代前期まで)、2月中旬に第3面(鎌倉・室町時代)、2月末に第4面(平安時代後期)の記録を採った。その後、断面図を作成し、3月初旬に現場作業を終了した。この間、2月中旬より調査区の北西部と西・東・北東端に拡張区4～7を設定し、調査した。この3区では、平安時代後期の溝255を検出した。この溝255は、1区で検出した池への遺水の可能性がある。また、江戸時代の柱穴列からは東西方向の建物が復元でき、屋敷の東門と考えられる礎石列も東端で検出できた。この他、北西部に設定した拡張区4では礫敷洲浜を検出し、1区で検出した池との関連が注目された。

調査期間中、地元の方に対しては調査成果を順次資料として配付した⁴⁾。また、中学生によるチャレンジ体験発掘を8回受け入れた(2007年1月2回、2月1回、6月1回、7月1回、11月2回、2008年1月1回)。また「土曜みやこ塾」の体験発掘(2007年3月)、高倉小学校親子の体験発掘(2007年5月)も実施した。

2. 報告書作成

調査終了後、速やかに報告書作成作業を実施した。作業内容としては、現場で作成した図面類の整理と、出土した遺物の整理に大別できる。

図面類の整理 各時期の平面図については、全景写真撮影後に空中写真測量を実施し、報告ではそれを採用した。ただし、全景写真撮影時については時期が異なる遺構も写し込まれていたため、所属時期が一致するように図面上で調整した。2区・3区の平面図作成は、オルソ測量で実施した。個別遺構については、オルソ測量と手測りの両方を採用し、デジタルトレース時に調整した。

出土遺物の整理 洗浄は外部委託とし、調査期間中に順次発注した。洗浄済み遺物が返却された時点で内容を台帳に登録した。出土遺物の整理に当たっては、主要遺構を選定し、分類・接合・観察などを実施した。接合済みの遺物はマーキングしたのち実測した。実測は当方で実施したが、土

器類の一部については外部委託した。また、近世の陶磁器類で文様をもつ個体については、カラーでの嵌め込み合成を外部委託した。自然遺物の分析は、外部の調査機関に委託した。トレースはデジタルトレースとし、当方・外部委託で実施した。

作業の分担 遺構図面の整理は、1区を丸川、2区を加納、3区を南出が担当した。出土遺物の台帳登録と整理作業は田中が担当した。軒瓦の分類・整理は東、加納、南出が担当した。出土木簡の解読、土井屋敷絵図の解読、土壌分析は外部の専門家に原稿を依頼した。

註

- 1) 『平安京左京三条二坊十町（元城巽中学校）現地説明会資料』2007年7月28日（土）（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 2) 『平安京左京三条二坊十町（堀河院跡）現地説明会資料』2007年10月6日（土）（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 3) 『平安京左京三条二坊十町（堀河院跡）広報発表資料』2007年11月21日（水）（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 4) 1. 『平安京左京三条二坊十町（元城巽中学校）の調査 -その1-』2007年3月25日（財）京都市埋蔵文化財研究所
2. 『平安京左京三条二坊十町（元城巽中学校）の調査 -その2-』2007年5月12日（土）地元説明会資料（財）京都市埋蔵文化財研究所
3. 『平安京左京三条二坊十町（元城巽中学校）の調査 -その3-』2007年9月21日（財）京都市埋蔵文化財研究所
4. 『平安京左京三条二坊十町（元城巽中学校）の調査 -その4-』2007年11月（財）京都市埋蔵文化財研究所
5. 『平安京左京三条二坊十町（元城巽中学校）の調査 -その5-』2007年11月21日（水）（財）京都市埋蔵文化財研究所

第2章 調査地の位置と環境

1. 位置と環境

調査地は、平安時代中期から末期にかけて円融・白河・堀河天皇の里内裏となった堀河院跡地であり、「堀川院南北二町」（『拾芥抄』）すなわち平安京左京三条二坊九町・十町の内、南側の十町に該当する。また、九条家本『延喜式』左京図では十町の南北中央を東西通路である押小路によって分断されており、北半だけが堀河院に属するように描かれている（図2）。

調査地の自然環境は、鴨川西岸の鴨川水系によって形成された扇状地の中で加茂川・高野川合流地点より南西方向に広がる礫層を主体にした扇状地で、遺構面はこの扇状地上に形成されている。調査地現地地表下約1.5 mで露出する遺構成立面は礫層とシルト層の互層になっており、自然流路と湿地が繰り返されて形成されたと考えられる。

調査地は、縄文時代から古墳時代の「堀川御池遺跡」（中京区、463）に含まれている。周辺の調査では、縄文時代前期から後期にかけての土器が、基盤となる遺構成立面の上層から少量出土しているため、扇状地は凡そ縄文時代には形成されていたと考えられるが、近辺から火山灰層を検出していないので確実な年代は押さえられない¹⁾。この扇状地上には調査地西に位置する平安京最大の園池を有した神泉苑、北西に位置する方4町の冷泉院、北に位置する高陽院、東に位置する閑院・東三条殿などの平安時代の著名な湧水系の園池が集中しており、平安時代の調査地周辺は砂礫層を通過する鴨川の伏流水などによって形成された浅い地下水脈の存在が考えられる²⁾。周辺の調査では自然流路に包含している古墳時代の遺物を除いて、縄文時代以降から平安時代初頭に至るまで顕著な遺構・遺物はなく、平安京遷都以前の南西方向に向かう多くの砂礫層からなる自然流路が検出されている。

調査地である平安京左京三条二坊十町は、延暦十三年（794）の平安京遷都と同時に平安宮・平安京造営のために穿たれた人工運河である東堀川の東側に直接面している。東堀川を挟んだ調査地西側は平安宮造営のための木工寮・木工町が存在し、平安京造営の資材集積地に近接している。先に挙げた平安時代の代表的な離宮・邸宅である神泉苑・冷泉院・高陽院・閑院・東三条殿などが豊富な地下水脈の他に、水運の便のよい東堀川を挟んで集中して造営されていることは、これと無関係ではないであろう。東堀川の対をなす右京西堀川は、今日までの発掘調査で10世紀には運河の用を果たせず砂礫やシルトで埋まっていたことが判明している。運河としての機能を近世初頭に高瀬川開削によって取って代わられるまで保ち続けた東堀川とは対照的で、水運のための運河の存続が都市機能の発展にとって不可欠な存在であったことが理解できる。平安京右京が衰退した原因の一つとして、地質学的には右京は湿地によって形成されたシルト層が主体であり、井戸や池の水の得やすい透水層である礫層を主体とする扇状地に営まれた左京と異なることが大きな要因であったものとする。

調査地が文献上で明らかになるのは、9世紀末の元慶七年（883）十月九日『三代実録』に摂関政治を確立した摂政関白藤原基経の邸宅「堀川邊第」として使用されたというのが初現である³⁾。基

経はその邸宅に因んで「堀河太政大臣」と呼ばれたが、鎌倉時代に降っての資料『大鏡』によれば基経は堀河殿東隣の閑院第を日常生活用の「ケ」向きに、「地形のいとみじき」堀河殿を大饗などの儀式を行う「ハレ」向きに用いたとされている。その後、10世紀後半の円融天皇時代に関白となる藤原兼通（基経の曾孫）への伝領が明らかになるまでは不明である。

堀河殿を伝領した兼通は、『日本紀略』応和三年（963）正月二日に兼通の妹で、村上天皇の中宮安子が「堀川宅」に遷しており、安子が産んだ円融天皇が即位すると娘の苜子を入内させ天皇の外戚となる。天禄四年（973）の皇子入内に先だって天禄二年（971）に「ほり河なる家をいみしく造りて」新造していたことが『栄華物語』に記載されており、兼通もこの邸宅に因んで「堀川殿」と呼ばれ、彼の娘皇子は「堀川中宮」と呼ばれた。

貞元元年（976）五月十一日、二度目の内裏焼失のため円融天皇が兼通邸を七月二十六日から翌年七月二十九日に再建された内裏に戻るまでのほぼ1年間を里内裏として使用した。これが後に臣下の邸宅を里内裏とする先例となる。兼通邸が里内裏になるまで2箇月半の職曹司への避難期間があるが、それは『栄華物語』に記載されているように内裏焼亡直後から「ほり河殿をいみじう造りみかき給ひて、内裏のやうにつくりなし・・・いそがし給なりけり」ため、詳細は不明ながらも「今内裏」として堀河殿を内裏風の造りに改造していたことが窺われる。

天元三年（980）十二月二十二日、新造された内裏が再び焼亡したが、その時、堀河殿を円融天皇の里内裏として使用しなかったのは、既に兼通が貞元二年（977）、皇后皇子が天元二年（979）に共に堀河殿で亡くなっていたからだと考えられている。その後、四度目の新造内裏が天元四年（981）再建されたが、その内裏も1年後の天元五年（982）に焼亡した。その際には円融天皇は再び堀河殿を使用している。ただし、それは『日本紀略』「天元五年十二月廿五日、天皇自職曹司遷幸堀川院、件院為後院、公家被造之」とあるように円融天皇の「後院」とするためであり、先例の里内裏としての性格と異なる可能性がある。この「後院」の性格などについては、今後の研究に待たなければならないが、円融天皇第一皇子（後の一条天皇）の立太子と引き替えに先帝である冷泉上皇の皇子である花山天皇に譲位した永観二年（984）以降、円融院に遷御する寛和元年（985）まで堀河院は円融上皇の仙洞御所として用いられた。

堀河殿は、兼通の子で道長との政争で敗れた「堀川左大臣」と呼ばれた顕光に伝領された。顕光は治安元年（1021）に堀河殿で亡くなったが、後世「悪霊左府」とも呼ばれ、『小右記』万寿二年（1025）八月八日条に記載されているように道長一族に祟ったとされ、堀河殿も彼の怨霊が出没する地と噂された。

その後、堀河殿は長元五年（1032）頃に摂政関白である藤原頼道に献上された（ただし頼道は堀河殿を使わず弟で堀川右大臣と呼ばれた頼宗が用いたとされる）。この時、頼道にお供した源経頼の日記『左経記』に「長元五年三月廿五日、参殿、御共堀河殿、件家故経国朝臣宅也、而近江守行任依為因縁伝領、令献相府、日来加修理、来月四日密可渡給云々、山石水木誠是称翫、但故橘逸勢怨霊留此地、代々領主快不居住云々」とあるが、経国朝臣および近江守行任なる人物については不明である。太田静六氏は橘逸勢の記事については疑問としている。「故橘逸勢怨霊留此地」とあ

るのは『拾芥抄』の「東京図」に堀河殿南に位置する十一町に橘逸勢の邸宅である「嬪松殿」が描かれていることから「悪霊左府」が出没した堀河殿との混同の可能性もある⁴⁾。これによれば上記の伝領関係から堀河院南北2町は、かつては顕光へ伝領された北の九町と逸勢から経国朝臣・近江守行任へ伝領された南の十町とに別々に伝領されていた可能性があり⁵⁾、この伝領系譜の違いは『九条家本延喜式・左京図』にある押小路で分断された十町南半の所領を指しているのかもしれない。いずれにせよ、堀河殿が傍流となった顕光から摂関家の頼道に伝領が変化したことは確かであろう。

白河天皇が承暦元年（1077）四月二十八日に関白師実の堀河殿に行幸した記録が『婚記』（『台記』別記）にある。既に延久三年（1071）村上源氏顕房の娘賢子が師実の養女として後三条天皇の皇子貞仁の妃となっている。この東宮貞仁が後の白河天皇で、中宮賢子の実家である堀河殿が白河天皇の里内裏として用いられるようになる。

堀河院に関する建築関連史料は、寝殿造りの典型とされる東三条殿に次いで多く、それらを用い堀河院の建物配置などを詳細に復元された太田静六氏によれば、寝殿・西対・東対代廊・二棟渡殿・東中門廊・北対・西北対・釣殿などが存在したとされ、白河・堀河天皇時代を通して建物配置・規模などあまり変化がなかったと考えられている。

また関白師実の堀河殿時代に初めて庭園の遺構を示す具体的な史料が出てくる。すなわち『帥記』承暦四年（1080）四月二十八日条には白河天皇・賢子の皇子である善仁親王（後の堀河天皇）が堀河殿西中門から西対に入御する際「次龍頭鷓首、於南狭口吹調子、（中略）楽船益興池上、奏青海波、漸進龍頭、着南庭東岸、鷓首着南庭西岸、一鼓童各一人下舟、参前庭」とあり、前庭と南庭東岸から南庭西岸に至る巨大な池を有する南庭の存在が既に師実時代に整備されていたことが確認できる。しかし白河天皇が里内裏としたのは2回で、しかも短期間に留まる。白河天皇が初めて堀河殿を里内裏に使用したのは、同年の五月十一日から内裏に戻った十一月三日までで、その時に南釣殿や南廊が存在したことが記録に見える（『帥記』）。次に使用したのは内裏が永保二年（1082）七月二十九日に焼亡した後の八月三日から応徳元年（1084）頃まで約1年間である。

堀河殿が本格的に里内裏として機能したのは次の堀河天皇の時代になってからである。応徳三年（1086）十一月二十六日、堀河天皇が師実邸である堀河殿で白河天皇から譲位されて8才で即位。白河天皇の関白であった師実が幼少の堀河天皇の摂政となる。白河天皇は上皇となり鳥羽離宮の造営と院政を開始する⁶⁾。堀河天皇は堀河院が焼亡した嘉保元年（1094）十月二十四日までの8年間里内裏として使用した。また堀河天皇が堀河院で即位していることから、白河天皇中宮賢子の実家となる堀河殿で育った可能性がある。

堀河院焼亡以前の庭園の遺構を示すものに「雨下、或得晴、申時禁中（堀川院）、殿上小庭并南池東頭有虹見事」（『中右記』寛治六年（1092）六月七日）とあり、巨大な「南池」であったことがわかる。またこの時期に行われた儀式を挙げてみると、即位最初の除目が東対代で行われ、寝殿で万機旬の儀式、新穀を祝う豊明節会、その他、賭弓や相撲などを行っている。

堀河天皇は堀河院焼亡から10年後の長治元年（1104）十二月五日に再建された堀河院に遷御する。この空白期間に師実から師通へと関白家に伝領された堀河院は、堀河天皇の中宮篤子（後三条

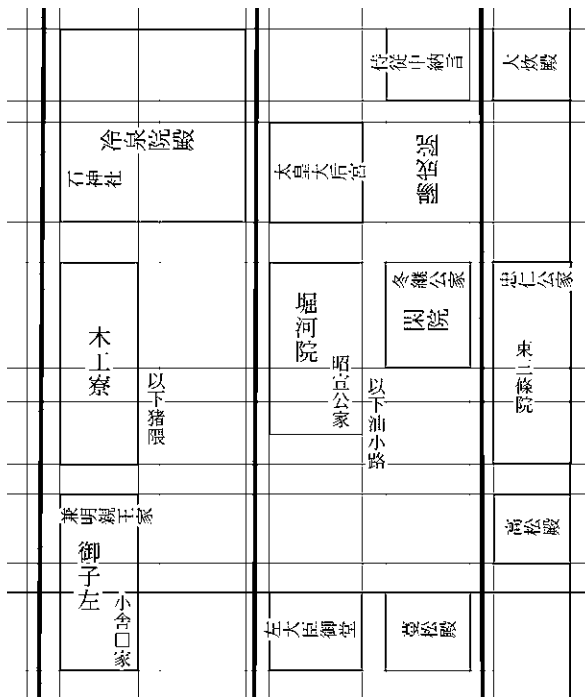


図2 九条家本『延喜式』左京図での堀河院とその周辺（東京国立博物館所蔵・提供を基に編集）

条にある。その後、堀河天皇は内裏に還るが再び嘉承元年（1106）十二月二十五日から御座所とした西対で崩御する嘉承二年（1108）七月十九日まで堀河院を使用した。崩御直前の六月二十七日に「皇居堀川院南山大樹折損」（『中右記』）という記事があり、南池の南方に「南山」と呼ばれた築山があった。また「南池砌立同幔、・次矢取自南幔東妻渡潺湲著座」（『永昌記』長治二年（1105）

天皇第4皇女）に献上されていたことが『百鍊抄』に「遷幸中宮御所堀川院」の割注「去八月十一日中宮先移徙、元是関白領也、被議進之」（長治元年十二月五日条）とあることで判明する。中宮への献上時期は、関白師通が急死しその子で22才の権大納言忠実が伝領した康和元年（1099）頃とされる。ただし忠実は、その年の八月に内覧となったばかりであり、関白に就任できたのは6年後のことである。摂関家と外戚関係のない堀河天皇より19才年上で叔母でもある篤子を入内させ、摂関家から堀河殿を中宮へ献上させた白河上皇の院政への意図が読み込める。なお、新造された堀河院は受領である備前守藤原仲実朝臣に命じて造営させたことが『中右記』長治元年（1104）二月二十二日



図3 鎌倉時代の閑院内裏と堀河院（註10の図1を転用）

正月十八日）とあり、南池に注ぐ遣水が南庭に存在しことが窺える。

即位から崩御まで2度の空白期間があるが生涯のほとんどを堀河院で過ごしたことから「堀河天皇」の追号となった。

永久元年（1113）七月二十四日、中宮篤子によって堀河天皇が亡くなった西対を御堂として九体阿弥陀像などを安置する。また再建以来、篤子の御所として使用されたが、永久二年（1114）十一月一日、篤子が堀河院で崩じた。

保安元年（1120）四月十九日、堀河院は焼亡する（『百鍊抄』）。

なお『京都坊目誌』（上京第22学区之部）では「堀川院ノ址」として、『百鍊抄』の保安二年（1121）十二月十三日「皇后宮遷御新造二条堀川第」、保安四年（1123）十二月十五日「皇

后宮供養堀川第内堂」という記事を収録しているが、この「皇后宮・二条堀川第」は、白河天皇皇女令子内親王の「太皇太后宮」のことであり、位置は堀河院北の二条二坊十二町であり、三条二坊九・十町の堀河院とは混同があると判断できる⁷⁾。

鎌倉時代以降の堀河院跡の明確な伝領系譜は示せないが、角田文衛氏は京都国際ホテル中庭に立てられた道元上人を顕彰する石碑の解説文で、鎌倉時代初期に摂関九条兼実の第2子藤原良経に伝領後、道元上人の育父である堀川大納言・堀川通具と呼ばれた源（久我通具）に譲られたとしている。しかし『平安京提要』などでは、土地の交換を示す寛元二年（1244）の文書『鎌倉遺文・六四三一号』などから「堀河院が焼失して後、その敷地は分割され、鎌倉時代中期には民家が立ち並ぶようになったらしい。」としている⁸⁾。

ところが鎌倉時代に作成されたと考えられている九条家本『延喜式』左京図には、南北2町の堀河院敷地が四分の一ほど南（十町中央付近）で東西に線引きされている（図2）。そして、そのライン上に鎌倉時代に里内裏として多用された閑院御所のための押小路堀河陣口⁹⁾（本来の押小路推定ラインより約30m南）が鎌倉時代に開かれており、民家が立ち退きさせられていた（図3）。この点について「四条天皇崩御後の閑院内裏修造の際、路地としてこの地が必要になったことによる処置である。おそらく西方の堀川から木材などの物資を運ぶのに都合がよかったのであろう。小宅が並び立っていた堀河院の跡地の押小路はこうして開かれたのである。」とする指摘があり¹⁰⁾、したがって九条家本『延喜式』左京図に描かれた堀河院の図は、押小路堀河陣口が開かれた後の状態を描いた可能性があり、本来は南北2町であった可能性が高い。堀河院廃絶後の鎌倉時代の土地利用のあり方や九条家本『延喜式』左京図の成立年代を考える上で興味深い。

室町時代の調査地は、中世に成立する上京と下京の街区間に位置することから史料に恵まれないが、調査地北隣の九町には住本寺という法華寺院が貞和二年（1346）頃から天文十一年（1542）まで存在しており、全くの空闲地ではなかったようである。また、中世を通じて材木座が五条堀川から三条堀川を中心に存続したことがみえ（『社家記録』など）、13世紀末の『一遍上人絵伝』（巻七）には七条堀川近辺で筏で材木を運上している絵が描かれている¹¹⁾。

戦国時代の永正十八年（1521）、調査地の東隣の閑院跡に足利義植の命により法華宗寺院の妙顕寺が移築される。この妙顕寺は天文五年（1536）天文法華の乱により焼亡するが、後に再建されており、『洛中洛外図』上杉家本では再建妙顕寺の様子を水堀で囲繞されたように描かれている¹²⁾。

天正十一年（1583）羽柴秀吉は大阪城の造営に着手するが、同年九月には京都支配の要として妙顕寺を「寺中悉く壊し取る」（『兼見卿記』）ことにより、妙顕寺跡地に妙顕寺城の造営を開始する¹³⁾。

天正十二年（1584）「外城の堀下京衆之を堀る」（『兼見卿記』）。

天正十三年（1585）七月「要害をかまえ、堀りをほり、天主をあげてあり」（『宇野主水記』）との記載がある。

天正十四年（1586）関白となった豊臣秀吉は聚楽第造営を開始する。この頃の調査地は、豊臣家の四名の武将（柘植大炊・稲葉右近・成田左衛門・山中山城）の屋敷であったとされている¹⁴⁾。

天正十五年（1587）秀吉は妙顕寺城の堀を埋める。

天正十八年（1590）から十九年（1591）秀吉が地割・御土居・屋敷替などの都市改造を行う。この時までには二条以北の堀川沿いに町人・大工などの職人からなる聚楽東川町が形成されていた¹⁵⁾。

慶長六年（1601）徳川家康が堀川を隔てた調査地北西に二条城の造営を開始する。

元和九年（1623）七月二十七日、土井利勝が徳川家光上洛に同行し、この時、調査地のほぼ全域（油小路屋敷・凡そ坪数二千百九十四坪半）を拝領、以後土井家の京屋敷・藩邸となる。茨城県古河市に所在する正定寺が所蔵する「油小路屋敷図」（写真 16）、古河歴史博物館が所蔵する「土井家中京都屋敷略図」（写真 14）には敷地内部が描かれており、当時の様相を知る貴重な図面である（付章 2 で考察している）。

近世初頭に造営された妙顕寺城、聚楽第、二条城そして調査地の土井屋敷などは、いずれも堀川沿いに位置しており、中世都市の西辺に位置し空地の多かった水運の便がよい堀川沿いから近世京都の城下町化が開始された。

小学校は明治 2 年（1869）学区内の下古城町に開校したが、明治 5 年（1872）には当地を買収し移転した。昭和 4 年（1929）には城巽学区と改まり、昭和 22 年（1947）には城巽中学校として新設され近年に至った。

2. 周辺の調査（図 4）

堀河院跡とされる九町・十町の発掘調査は、今回を含めて 5 回の調査を実施している。以下、1 次から 4 次までの発掘調査の概要を述べる。

1 次調査（1983 年度調査¹⁶⁾）堀河院推定地北半部の九町大半に相当する現京都全日空ホテル敷地約 4,000 m²を 4 区に分けて調査した。

北東部の 4 区で出土土器から 12 世紀前半と想定される池を検出している。池には北から南に水が注ぐ遣水と東側から水が落ちる滝口を伴っていた。遣水には景石を配し、滝口は 2 m 弱から 1 m 前後の石によって組まれていた。景石の材質は大部分はチャートであるが、一部に日本海沿岸産のピブロレッチャーが使用されていた。滝本体部分の石は抜き取られていたが、滝から水が流れ出る落口には礫が敷き詰めてあった。滝口付近の標高は他所より 0.9 m 高く、本来の滝は 1 m 程度の高低差があったものと推測される。池は北東から南西に延びる。北側の汀線はなだらかな傾斜の洲浜で所々に礫敷が残存していた。池の深さは約 0.8 m である。

調査区南半の 1・2 区は近世の土取穴などの攪乱・削平などが多く、池の範囲などを確定できなかった。

北西部の 3 区では鎌倉時代から室町時代にかけての方形池を検出している。規模は南北 9 m 強、東西 9 m 以上で、調査区外西に広がる。池の深さは 1.5 m あり、壁は 2 段に掘られており中ほどに幅 1.5 m のテラスが廻っていた。池底部は南北幅 4 m の平面で、池底には拳大の白い玉石を敷き詰め、外周に大小の石で護岸していた。北側に 1 箇所、東側に 2 箇所に景石を配している。北東部にテラスに降りる 3 段のなだらかな階段がある。この特殊な池は、出土遺物から 13 世紀末から 14 世紀

前半に埋没していたと考えられている。平安時代の遺構は井戸がある。

1次調査では鎌倉時代から室町時代の柱穴を約3,000基検出しているが、平安時代の園池に伴う建物は、後世の遺構との重複により確認できなかった。

その他、桃山時代から江戸時代にかけての遺構には土坑・溝・柱穴・井戸などがあり、調査区の北壁付近で二条城大手門に向かう東西方向の溝・柵を検出している。鎌倉時代から室町時代の遺構は前記の池・柱穴の他に井戸・溝などがある。なお、自然流路礫層から縄文時代中期初頭の鷹取・新保式土器が出土している。

2次調査（1985年度調査¹⁷⁾）九町の北西角および二条大路の調査である。南北の2箇所調査区を設定して実施した。北の調査区からは室町時代の砂利で堅く締まった二条大路の路面を検出した。この調査区は二条大路内に含まれ、堀河院外である。南西に設定した南の調査区は九町・堀河院北西角に該当する。この調査区では現堀川より10m以上東の地点で戦国時代の堀川旧流路東肩を検

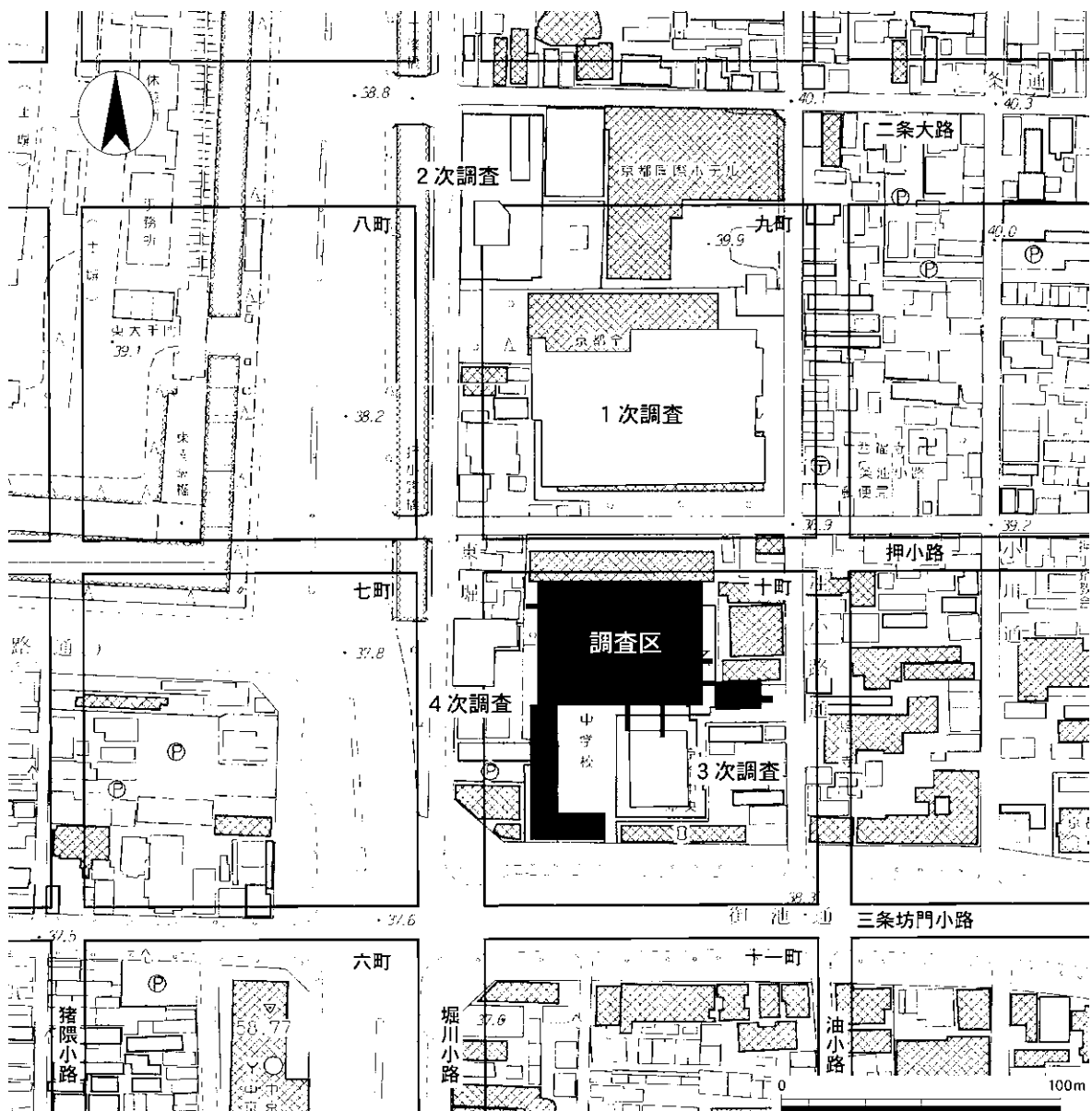


図4 周辺調査位置図 (1 : 2,500)

出した。流路の深さは約2mである。この調査区でも堀川旧流路のため堀河院関連遺構は検出して
いない。

3次調査（1985年度調査¹⁸⁾）城巽中学校体育館建設に伴う調査で、九町南半中央に該当する。計
5面の調査を実施している。第1面は江戸時代、第2面は中世、第3～5面は平安時代の堀河院の
遺構に比定されている。第1面では江戸時代以降の井戸・溝・溝状遺構・柱穴・落ち込み・土取穴
などを検出している。第2面では中世町屋に関連すると考えられる井戸・土坑・柱穴・溝・溝状遺
構や池状遺構などを検出している。第3面では井戸・土坑・柱穴・落ち込み・掘り込み・溝状遺構・
池状遺構などを検出している。第4・5面では平安時代中期後半から後期の土坑・井戸・柱穴・掘
り込み・溝状遺構などを検出している。第4・5面で検出された溝状遺構については性格不明とさ
れたが、今回調査で検出した池と関連するため、再検討を要する。

4次調査（1993年度調査¹⁹⁾）地下鉄東西線堀川御池駅出入口、堀川通に面する九町西側中央の
調査である。南北2箇所調査区を設けて調査した。調査区全体にわたって江戸時代後期以降の大
規模な土取穴などが見られた。南北両調査区では西壁に沿って南北に延びる溝を検出している。深
さは1.8m以上、検出幅は4m以上で、さらに西の堀川方向にも広がりをもつ。東肩部には石によ
る護岸がある。東肩ラインは平安京堀川小路東側溝推定ラインにほぼ重なるが、出土遺物の検討か
ら、16世紀前葉に開削・護岸され16世紀半ばに埋没したと推定されている。この溝が堀川の東へ
の拡張部なのか別遺構なのかは不明であるが、2次調査で検出した堀川旧流路に繋がるものと考え
られる。近世以前の遺構残存状態は極めて悪いが、平安時代前期から近世に至るまでの遺物が出土
しており、連綿と土地利用されたことがわかる。

註

- 1) 縄文土器が出土する地点の多くが自然流路の礫層であるのに対し史跡旧二条離宮内の調査（平城13
年度調査の1～2拡張区）では前期の土器が淡黄色粘土層（シルト層）内から石鏃と伴って出土し
ている。平田 泰『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-15（財）
京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 2) 堀河院周辺の自然的立地条件については、森 蘊『寝殿造系庭園の立地的考察』奈良国立文化財研
究所 1962年、鈴木久男「平安京条坊と庭園遺構検出地」付図『平安京右京三条二坊十六町の発
掘調査』庭園学会資料 2001年 を参照した。
- 3) 堀河院全般の記述は、太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館 1987年、古代学協会・古代学研究所
編『平安時代史事典』角川書店 1994年 に基づいた。
- 4) この項では、臣下の邸宅であった時期を「堀河殿」、天皇もしくは上皇の御所であった時期を「堀河院」
と区別して記述した。また史料の引用箇所以外「堀河」を用いた。
- 5) 美川 圭氏のご教示による。
- 6) 院政の成立過程については、美川 圭『白河法皇』NHK ブックス 日本放送出版協会 2003年。同『院
政』中公新書 中央公論社 2006年。
- 7) 『京都坊目誌 上巻 新修京都叢書』第19 臨川書店 1968年 P188「堀河院ノ址」による。

- 8) 『平安京提要』 角川書店 1994年 P229「左京三条二坊九・十町」(山田邦和執筆)による。
- 9) 陣口とは里内裏を内裏に模して里内裏を中心に三町四方の内側を陣中とした入り口のこと。里内裏に通じる陣中に設置された置道にはそれぞれ裏築地が築かれた。
- 10) 野口孝子「閑院内裏の空間構造」『院政期の内裏・大内裏と院御所』 文理閣 2006年 P90から引用。また里内裏の陣中については、飯淵康一『平安時代貴族住宅の研究』 中央公論美術出版 2004年がある。
- 11) 『一遍上人絵伝』 日本の絵巻シリーズ 20 中央公論社 1988年 P196による。
- 12) 『洛中洛外図』 上杉家本 洛中洛外図大観 小学館 1987年
- 13) 妙顕寺城については、『京都坊目誌』 前掲註7のP183「妙顕寺ノ址」、『史料京都の歴史9』 中京区 平凡社 1985年 P232「城巽学区」、『京都市の地名』 日本歴史地名大系 第27巻 平凡社 1979年 P766、などによる。
- 14) 土井家京屋敷については、藤川昌樹「徳川期京都における武家屋敷の成立」『武家屋敷』 山川出版社 1994年、永用俊彦『智の大老・土井利勝』 展示図録 古河歴史博物館 2000年 を参照。
- 15) 聚楽町については、杉森哲也「聚楽町の成立と展開」『年報・都市史研究』 山川出版社 1995年。
- 16) 菅田 薫・本 弥八郎・吉川義彦「左京三条二坊」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年。菅田 薫「堀河院跡庭園遺構」『発掘庭園資料』 奈良国立文化財研究所史料第48冊 奈良国立文化財研究所 1998年
- 17) 木下保明・丸川義広「平安京左京三条二坊1」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 18) 平安京調査会・原山充志・小森俊寛「平安京左京三条二坊2」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 19) 小森俊寛・上村憲章「平安京左京三条二坊・堀河院跡」『平城5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年

第3章 遺 構

1. 基本層序（図版1～3、図5）

断面1（1区西壁）X=-109,584付近の断面を示す。ここは桃山時代から江戸時代初めの遺構である落込925の南肩付近にあたる。南肩は標高37.2m付近にあり、10層～13層が薄く堆積している。肩の下部に堆積した16層～18層は土取穴の埋土である。作図箇所南では、16層上に薄い層が貼られた状態で堆積しており、16層も上面が堅く締められていたことから、土取穴を埋めた後、堅く整地されたことがわかる。落込925内部では南から北に下る層序がみられた。この傾斜した層序は、北肩付近にまで及んでおり、4層のような厚い砂礫層もみられた。同様の砂礫層は北側においてもみられ、繰り返し入れられたことが判明した。この砂礫層は、付近で基盤の砂礫が掘削されたものがここに入れられたと考えられる。8・9層は落込925底に堆積したシルト層で、8層には木質遺物が含まれていた。この付近の遺跡の基盤をなす層（以下、「地山」とする）は褐色粘土（19）で、「聚楽土」に類似する層である。

断面2（1区西壁）X=-109,597付近の断面を示す。現地表下0.25mには、江戸時代末期の整地層である黒褐色砂泥（1＝「層75」）が厚さ0.4mほど堆積する。この層は幕末から明治時代の遺物を包含し、耕作土の可能性がある。層75の上面を第1面、その下を第2面として調査した。作図箇所は落込920の南肩に該当する。落込920は南北長約9m、深さ0.8mあり、平面形は落込

表1 遺構概要表

時 代	1 区	2 区	3 区
平安時代後期	井戸1510*・2007*、柱穴1970、池1810*(池内に景石・礎石・柱穴・溝・土坑1840*・2011)、池1570*、地薬1800*・1999・2000*・2001、落込1580、井戸73*・1385、柱穴1524・1548、溝1315*・1600・1720・1735*・1740・1745・1750・1805・2010、砂層1685、景石2008、石敷370	土坑178*・285	井戸280*、溝255*、土坑286*・249*、柱列305
鎌倉時代・室町時代	建物2014、柱列1511、井戸7・82・915・1085*・1197*・1211・1238*・1280・1355・1400*・1539・1640*、溝1387*、集石1000、土坑1173*・1175*・1190*・1200*・1247*・1316*・1323*・1428・1430*	井戸145*・276・229*・250、溝120*、土坑222*・234・165*	瓦敷302・303、土坑195・227・200*・281*
桃山時代・江戸時代前期	礎石列945・948・985・1726、柱列1512・1637・1663、井戸80*・146・777、土取穴群2015・2016・2017、落込925*・920*、集石48・365、土坑641*・904*・989*・1080*・1146*・1155*・1207*・1212*・1213*	柱列160*、溝60*、土坑59・228*・48	建物180、門301、土坑54・58・68*・83*・88*・89*・110、溝115、土坑186
江戸時代中期	柱列2019、井戸83*・771、集石500・510・644・645・688、土取穴群2018、土坑70*・94*・123・280*・625*・806		井戸134
江戸時代後期	礎石列2020、井戸14・15・16・26・45・68、溝37・38・160、石室105*・89、石組67、漆喰組61、瓦組135、埋篋39・51・52・57・60・161・46・47、胞衣壺12・13・314・570、土坑4・5・71*・487	石垣13、溝20・30・4～6・9～12・14・15、土坑1・3*・7・16・19・21・24	礎石178、井戸116、土坑59・12・13・33・81

(*印は遺物掲載遺構)

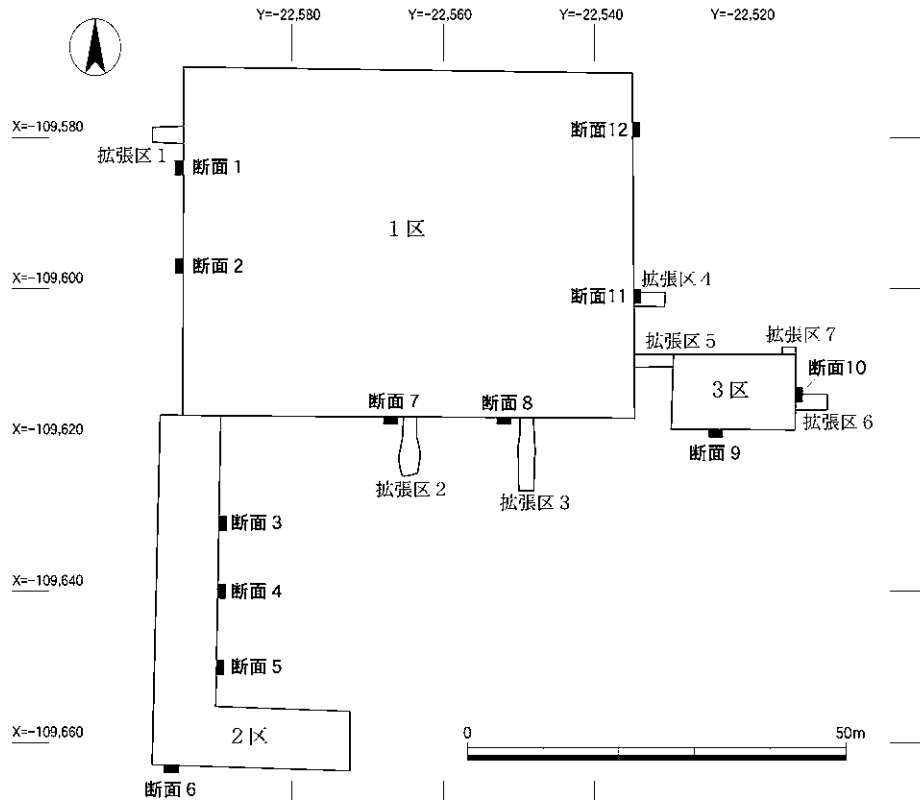


図5 断面図作成位置図 (1 : 1,000)

925 に類似する、より小型の遺構である。遺構底ではシルトの堆積はみられなかった。内部を埋めた層は、レンズ状堆積であった。落込 925 上に入れられた層と同様の砂礫層 (2・4)、砂泥層 (3・5) が互層状に入れられており、落込 925 と同時期に埋められたことが想定できた。南肩の4層・5層下に堆積した6層～8層は土取穴の埋土であり、この点も断面1と同様の堆積層序であった。9層以下は地山である。9層は聚楽土に類似する粘土層、10層はその下に堆積した砂礫層である。

断面3 (2区東壁) X=-109,631 付近の断面を示す。校舎建設時の攪乱などにより第1面は消失しており、第2面 (3の上面) から残存する。第3面 (7 = 地山上面) では自然流路 296 の砂礫層・砂層の互層が、地山の粘土層を浸食して北東から南西方向に堆積している。流路 296 の断面は逆台形状で、幅約 2.5 m、深さは約 1.2 m ある (図 12)。流路内の堆積層は上層 (図 12 の 5)、下層 (図 12 の 6) に大別でき、上層から縄文時代中期 (船元 I 式) の土器片が少量出土した。この流路堆積は、北側の1区から続く砂礫の堆積範囲の延長でもある。地山である7層の下では、微砂 (8)、粘土 (9・10) が堆積している。

断面4 (2区東壁) X=-109,640 付近の断面を示す。現代盛土の下は幕末から明治時代の焼瓦、漆喰、炭、焼土を多く含む火災整地層 (1) が約 0.4 m 堆積する。第1面 (2の上面)、第2面 (4の上面) 以下、第3面 (8 = 地山上面) では土取穴 (5～7) が重複してみられた。いずれも地山の粘土層 (8) を採取するために掘られた穴で、底部には土を採取した際の痕跡を示す凹凸が顕著にみられた。土取穴底は標高 36.0 m のやや下にある微砂 (9) 上部にとどまっており、シルト (11) には達していない。地山のシルト (11・12) 内にはラミナ (葉理) がみられ、断面3で述べた流

路 296 の下層にも水流による堆積があったことが認められた。

断面 5 (2 区東壁) X=-109,650 付近の断面を示す。断面 4 と同様、現代盛土の下には幕末から明治時代の焼瓦、漆喰、炭、焼土を含む火災整地層 (1・2) が堆積する。第 1 面 (3 の上面)、第 2 面 (4 の上面) 以下、第 3 面 (7 = 地山上面) では土取穴 (5・6) の重複する状態がみられた。土取穴底は標高 36 m 以下には達していない。7 層以下が地山であるが、微砂 (8)、細砂 (9)、粗砂 (10) が堆積しており、土取穴は 7 層より下までは掘られなかったようである。

断面 6 (2 区南壁) Y=-22,596 付近の断面を示す。調査区の南西端にあたり、現地表面は断面 3 ~ 5 より 0.65 m 低い。このため断面 3 から断面 5 までにみられた現代盛土は削平されており、現地表面下には幕末から明治時代の焼瓦、漆喰、炭、焼土を含む火災整地層 (1) が厚さ約 0.6 m 堆積していた。それより下では、第 1 面の整地層 (2)、第 2 面の整地層 (6)、が堆積する。地山 (8) 上面が第 3 面である。地山 (8) は砂泥であり標高 36.3 m 付近に堆積し、断面 3・4 とは 0.25 m ほど低いだけであった。

断面 7 (1 区南壁) Y=-22,567 付近の断面を示す。地山直上に堆積した 18 層 ~ 20 層は池 1810 埋土である。これらは泥砂・砂礫からなり、シルトの堆積は認められない。池底の標高は 36.55 m で、付近では最も深い箇所である。17 層は溝 1600 埋土である。シルトを主とし、厚さ 0.15 m 程堆積する。溝 1600 上に堆積した 14 層 ~ 16 層は平安時代後期の整地層で、「層 1195」として掘り下げたものである。その分布範囲は池 1810 の範囲に対応しており、池 1810 を整地するために入れられた層とみてよい。10 層 ~ 12 層は中世・江戸時代の整地層である。13 層としたものは柱穴埋土で、江戸時代初め頃のものであろう。9 層は「層 75」とした江戸時代末期・明治時代の整地層で、この層を境に上を第 1 面、下を第 2 面として調査を進めた。

断面 8 (1 区南壁) Y=-22,552 付近の断面を示す。ここでは、溝 2010 と溝 1600 に堆積したシルトが重複する。溝 2010 としたものは、池 1810 の東に広がるシルトの範囲で、13 層・14 層が内部の堆積層に当たる。13 層の底には凹凸があり、流水によるものか、あるいは人為的に踏み込まれた跡と推定できる。13 層上に堆積した 12 層は、地山の褐色粘土 (16) に礫が混じった層で、13 層を整地する目的で入れられた層である。この上に溝 1600 のシルト (11) が堆積する。この付近での厚さは 0.1 m 以内で、断面 7 での同層よりかなり薄い。溝 1600 底部の標高は東端 (Y=-22,548) が 37.2 m、西端 (Y=-22,572 付近) が 36.8 m で、西側に下がっていたようである。11 層上に堆積した 10 層は平安時代後期の整地層「層 1195」である。その上の 9 層は焼土塊を大量に含み、南壁のこの付近のみに認められた。鎌倉時代頃の堆積層とみられ、火災処理時に掘り込まれた遺構の一部とみられる。4 層は「層 75」とした土層で、この下面で検出した遺構は、江戸時代以後のものであった。

断面 9 (3 区南壁) Y=-22,524 付近の断面を示す。アスファルト舗装層直下に現代盛土が約 0.2 m あり、その下には黒褐色泥土層 (1) が厚さ 0.6 m 堆積している。この層には焼瓦や漆喰片が含まれる。その下にある 4 層 ~ 9 層は砂泥と砂礫が西下りの互層状を呈し、溝 255 を埋め立てた層とみられる。灰色シルト (10) は溝 255 内の堆積層で、厚さ 0.25 m ある。この層にはラミナは

みられず、湿地状あるいは流れの緩やかな状態で堆積した層とみられる。地山は褐色粘土（11）で、3区全域で認められた。

断面 10（3区東壁） X=-109,614 付近の断面を示す。東壁では攪乱が少なく、安定した層序がみられた。碎石層直下には現代盛土が 0.2 mあり、その下には礎石据付時の層（4～9）がある。さらに黒褐色砂泥（11）が 0.2 m、にぶい黄褐色砂泥（16）が 0.1 m、灰黄褐色砂泥（17）が 0.1 m堆積する。地山直上には、にぶい黄褐色砂泥層（18）が約 0.15 mが堆積するが、この層は平安時代後期の遺物を包含した整地層である。地山は褐色粘土（19）で断面 9 の 11 層と同じである。また、作図箇所南半では長さ 0.5 m、厚さ 0.2 mある石材が据えられていたが、この石材の北 4 mにも同規模の石材が据えられており、この 2 石は江戸時代の屋敷東門の礎石と想定される。

断面 11（1区東壁） X=-109,601 付近の断面を示す。全体的に南北校舎の攪乱が著しく、上半部を欠損する箇所が多いが、作図箇所では中位以下が三角状に残存していた。オリーブ褐色粗砂（4・5）は 2007 年 10 月 6 日の現地説明会資料では「白砂の範囲」としたものである。東西に帯状に分布し、東壁付近で最も厚く堆積し、南北方向の広がりも 7.5 mに及んだ。この粗砂の堆積は、北端と南端がわずかに高く、中央の凹んだ範囲に粗砂が堆積したものといえる。標高は、北端が 37.25 m、中央が 37.0 mあり、比高差は 0.25 mである。内部にはラミナがみられ、流水によることがわかる。4・5 層の下部に堆積した細砂～微砂（6）もラミナがみられた。4 層上に堆積した灰黄色粗砂（3）は、上面に礫を敷いた状況がみられた。粗砂（4）の東延長と礫敷の性格を明らかにするため、東（裏）側を拡張区 4 として調査したところ、粗砂は約 1 m東で肩となり消えていくこと、粗砂上の礫は東方に広がり洲浜状を呈することが確認できた。したがって、礫上に堆積した 2 層も池内に堆積したシルトとなり、この付近にも池を想定するのが妥当となる。この他、2 層上に堆積した 1 層も裏側を調査した結果、土坑埋土であることが判明した。

断面 12（1区東壁） X=-109,579 付近の断面を示す。作図箇所は校舎攪乱が比較的少ない箇所である。3 層は江戸時代後期の遺構埋土とみられ、層内には火災で生じた焼瓦、焼土、礫が多く含まれる。2 層はそれを覆う整地層で、均質の泥土層であった。その上の 1 層には、焼瓦や礫が多く含まれていたが、この層は敷地全体を整地した層とみられる。4 層は平安時代後期の整地層であるが、厚さは 0.15 m程度であった。地山（5）は褐色粘土で、いわゆる「聚楽土」に類似する粘土層であった。上面の標高は 37.3 mで、調査地内では最も高い位置にある。

2. 1 区の遺構

(1) 第 4 面（図版 4・5・86）

地山上面で検出したもので、平安時代中期・後期の遺構からなる。この面の地山は聚楽土に類似した粘土層であり、その上を砂礫が北東から南西方向に削り込む状況がみられた。砂礫の堆積する範囲を「流路 2009」とした。かつての自然流路であるが、砂礫中から土器・石器などは確認できなかった。この流路は調査区中央で南方向と南西方向に分流し、南西への流れ（流路 2009A）では縄文

時代中期の土器が1点、埋没後の上面から出土した。この流れは2区に至り、流路296となる。

平安時代中期の遺構は少数である。井戸、柱穴がある。遺物は各所から出土している。

井戸1510(図版23) 南西部で西壁にかかり検出した。方形を呈する木枠組井戸で、検出面から0.7mまで残存していたが、木枠は最下段の縦板と横棧が腐朽した状態で残存するだけであった。10世紀前半の遺物が出土した(図版43)。

井戸2007(図版23・90-2) 池1570の西岸下で検出した。上部は削平されており底部の方形横棧が残存するだけであった。横棧の枠内から10世紀中頃から後半の灰釉陶器椀が1点出土した(図版43)。

柱穴1970(図版22) 井戸2007の南西で検出した。一辺0.85mの方形で、柱穴としては規模の大きな部類に属するが、内部には柱痕跡は認められなかった。埋土の層序も水平堆積である。深さは検出面から約1mと深い。10世紀の遺物が出土し、平安時代の遺構としては最も古い遺構である。対応する遺構も周囲には認められなかった。

平安時代後期(11・12世紀代)に属するものとしては、池1570・1810、落込1580、砂層1685、井戸、東西・南北の溝などがある。11世紀中頃から12世紀前半頃までと推定でき、白河・堀河天皇が利用した里内裏「堀河院」の時期にあたる。最初に池1810とその付属施設、次いで池1570とその下層遺構について解説し、最後に第4面の遺構を種類ごとに解説する。

池1810(巻頭図版2・3・4-1、図版16・18・21・87-2・88) 調査区の南端で池の北東岸を確認した。西半分は聚楽土に似た粘土層、東半分は流路2009Bとした砂礫を掘り込んで作られている。北岸は総じて直線的で、直角に南に折れた後、鉤形に折れて調査区外に至る。北岸・東岸の形状はほぼ方形を呈するといえる。現状での規模は、東西約18m、南北約15m、深さは北肩検出面から0.8m程である。この池の最深部は、流路2009Bの中央部を掘り込んで作られている。特に景石1978を据えるに際しては、標高36.3mまで掘り込んでおり、湧水を期待していたことが推定できる。池内埋土から11世紀後半代を中心とする遺物が出土した(図版43)。この池に伴う施設として、景石、礎石と柱穴、溝、土器埋納土坑などを検出した。以下、それらを解説する。

1. 景石(図版21) 6石確認した。西より景石1976～1980とする。また拡張区2でも礎石2013を検出した。景石1976～1978は岸からやや離れた位置にある。これに対し景石1979・1980は北東岸に接し、2つの長軸を連ね横方向に据えている。景石の種類と色調、据え付け状況は以下である。景石1976は白色から紫色を呈するチャートで、池底よりやや浮いた状態で据えられている。不安定なため、二次的に移動させられたようにも見えるが、紫色の部分が池内を向くことから、当初の位置とも考えられる。景石1977は黒色の砂岩で、南東側にも小規模な石材が接する。平坦面を伏せた状態で据えている。景石1978は白色のチャートである。出土景石中では最も角張っており、珪化が進んで白色が顕著である。石の高さは0.8mほどであるが、据え付けが深いため、上半分が露出する状態であった。景石1979は粘板岩で淡緑色を呈する。景石中最も大きく、長さ約2m、幅0.65m、高さ0.85mある。平坦面を上にして据えられており、側面も平坦な面が

池内から見えるように据えている。景石 1980 は白色の花崗岩である。景石 1979 と同様に平坦面を上にする。上面はよく整形されており、礎石の上面のようにも見える。この景石 1979・1980 は長軸を南北に連ねて据えているが、景石 1980 の方が頭が低く、陸側の斜面は地山が階段状に削り出されており、池に降りる際の足場として利用されたように判断できる。拡張区 2 で検出した景石 2013 は白色のチャートであり、底部からもやや浮いた状態で据えられていた。

2. 礎石・柱穴列（図版 21）池底で礎石を 5 基（礎石 1971～1974・1981）検出した。また、礎石が抜かれたとみられる穴も 4 基（柱穴 1811・1945・1959・2012）あり、池内に構造物が及んでいたことが明らかとなった。礎石 1971～1973 は上面が平坦で、掘形を有し、柱穴底に据えられた礎石と考えてよい。礎石 1971 については、対応する礎石は認められなかった。しかし西約 3 m の位置に柱穴 2012 があり、この穴が礎石に対応した穴であった可能性がある。礎石 1972・1973 は南北 4.18 m 離れて検出したが、その間に礎石抜取穴とみられる柱穴 1811 があり、さらに北にある礎石 1981（当初は景石と考えた）までが、同一線上にあること、間隔が礎石 1981・1972 間が 1.75 m、礎石 1972・柱穴 1811 間が 1.68 m とほぼ等しいことから、3 間が復元できると考えた。次に、礎石 1973 の東で柱穴 1945、さらに東で礎石 1975 を検出し、礎石 1973 を西隅とする東西 2 間の柱筋が復元できた。礎石 1981 の北西約 2 m で礎石 1974 を検出し、またその南 2.45 m で柱穴 1959 を検出した。先の礎石・柱穴列との関連は明らかでないが、礎石 1974 は池岸の土層を外したことで検出できたため、時期差があった可能性もある。

3. 池内の溝 池 1810 の西半で溝 1816・1960・1965 などを検出した。溝 1816 は幅 1 m 前後で深さ 0.1 m ある。景石 1976・1978 間から始まり、南西方向、次いで西方向に延びる。池の水を西に流出させるための溝とみられる。しかし溝底部の標高が 36.7 m であるのに対し、池の最深部は景石 1978・1980 間は標高 36.5 m あるため、この溝の方が約 0.2 m 高く池内の水は完全には排出できなかったことになる。溝 1960 は東西方向に直線的に掘られた溝である。幅 0.5 m、深さ 0.1 m あり、底部の標高は 36.5 m で、池最深部の標高と等しいため、排水機能を担っていたものとみられる。また溝 1965 も直線的に掘られた東西溝であり、溝底の標高は 36.5 m であった。この溝は、東半が埋まった後に北東方向に掘り直され、溝 1816 となったのであろう。

4. 土器埋納土坑（巻頭図版 3、図版 22・90-1）池の北岸で土坑 1840 を検出した。平面形は不定形で、東西 2.5 m、南北 2.1 m、深さは北肩から 0.7 m ある。内部には土師器皿が完形の状態で多数納められていた。土師器皿は底部よりやや浮いた位置にあり、上面のものほど完形を保っていた。北西肩には 10 枚ほどが一行に並ぶように置かれていた。土師器皿には中央を穿孔したものがあり、それ以外では、コースター形皿の底部に高台を貼り付けたものや小壺など、珍しい器形が含まれていた。これらの遺物は 11 世紀中頃から後半に属する（図版 43）。なお西隣りで検出した土坑 2011 は、東西約 5 m、南北約 3 m、深さ 0.2 m 程あり、底部には木の根のような痕跡が広がっていた。

5. 東肩の土坑 池 1810 の東肩部で土坑 1860・1861 を検出した。浅く不定形の土坑であるが、底には木の根のような痕跡が認められ、樹木があった可能性がある。

池 1570 (巻頭図版 2・4-1、図版 17・19・20・86・89-1) 調査区の北西寄りで検出した。南北約 26 m、東西約 15 mあり、形状は西側に張り出した三日月形を呈する。深さは検出面から最大 0.8 mである。池の全容を検出しているが、削平された部分も多く、四周の肩が確認できたのは、南肩の大半、東肩の中央部、西肩の一部にとどまった。この池では、池 1810 で認められた洲浜、景石、礎石・柱穴、池底の溝などは検出していない。しかし、池底には掘り込み跡(「地業」とする)があることを確認した。

南東部を砂礫の流れ(流路 2009 A)が北東から南西に横断している。これによるためか、南東側が深く掘られており(標高 36.25 m)、池 1810 同様に砂礫を掘り込むことで湧水を期待したものと推定できる。この池の最深部は池の北西側(標高 36.19 m)であったが、ここは後述する江戸時代の遺構である落込 925 の南東隅にも当たるため、それより北西側が深かったかは確定できなかった。ただし池の最深部は北北西から南南東方向に設定されており、排水施設が検出できていないことからすると、池水の排水はこの筋に沿って北西側に設けられていたことも考えられる。

池岸については、南岸は急傾斜であり、斜面には灰色の粘土が薄く貼られていた。砂礫質であることに加え、地形が低いため、漏水を防止する目的で施されたとみられる。東肩は池内に舌状に張り出す。傾斜の途中までシルトが堆積し、地表との境界を復元することができた。西肩は残存範囲がわずかであったが緩やかな傾斜をもつ。しかし地表との境界は明確にできなかった。西側から池内に粗砂が流れ込んでいた。地表が粗砂で化粧されていたためであろう。

池底には全面にわたり灰黄褐色のシルトが堆積し、滞水状態であったことが窺われる。この点は池 1810 と好対照をなす。池底のシルトは厚い箇所では約 0.4 m程あり、2層に分層できた(シルト 1・2)。西肩では粗砂が堆積し、その下にもシルトが堆積していた(シルト 3)。粘土質の池底では凹凸が顕著であった。この凹凸はぬかるみを踏み込んだ跡のように見える。池底に堆積したシルトからは、11世紀末から12世紀前半の遺物が出土した(図版 44)。この他、池を整地した層(層 1505)からも12世紀前半の遺物が出土した(図版 45)。

地業 1800・1999・2000・2001(巻頭図版 4-2・4-3、図版 19・20・89-2、図 6、写真 3・4) 池岸の下部(北・西・南東部)で掘り込み跡を4基検出し、北東部のものを地業 1999、中央から西半にかかるものを地業 2000、西端のものを地業 2001、南東部のものを地業 1800とした。これらは池 1570 の造成に先立って掘られた遺構で、整地や造成を目的とする「地業」と考えたが、掘られた目的については不明な部分が多い。

地業の規模と形状、埋土の特徴について解説する。まず中央部の地業 2000 は池の北端から南端を貫くかたちで掘られている。南北長 24.4 mあり、西肩は明確でないが、南端では幅 2.5 mほどの円弧を呈し、X=-109,586 セクションでは東肩より西へ 3.2 mで浅い立ち上がりがあることなどから、幅は 3 m程度であったとみられる。深さは池 1570 底から 0.4～0.6 mである。埋土の状況は、断面図(図版 19・20)に示したように、砂泥・粘土が主体のⅠ層、砂礫を多く含むⅡ層、有機質の汚れた土層が多いⅢ層に大別できた。北東部の底部にはⅢ層が特に多く入れられ、後述する木簡 1・2 もこの層中に包含されていた。また X=-109,579 セクションと Y=-22,578 セクションの交差



写真3 地業 2000 の埋土
(X=-109,579 セクション、北から)



写真4 木筒 1 の写真撮影
(地業 2000、北東から)

部付近では、底に有機質土壌が入れられ、その上は非常に丁寧に整地されて水平面が造り出されていた。さらにその上は、有機質を含む灰黄褐色砂泥やにぶい黄褐色砂泥が交互に入れられ、雑な版築状の整地が観察された(写真3参照)。南半の埋土は砂礫質が主体であったが、これは周囲が砂礫層であったためといえる。

地業 2000 の北東隅から木筒が 2 点出土した。南側を木筒 1、北側を木筒 2 とした。2 つは座標上の Y=-22,577.15 で南北に並んでおり、中心間は 6.75 m 離れていた。木筒 1 は下端をほぼ南側に、木筒 2 は下端を北西側にし、各々墨書のある面を上にして底面に密着した状態で出土した。遺構の東肩が直線的であるため、東端に沿って入れられたといえる。下端が尖るため、周囲に立てられていたものが埋められたのであろう。標高は両方とも 36.2 m 付近である。

南東部の地業 1800 は南北長 8.2 m、幅 3 m あり、深さは最大で 0.9 m ある。埋土は I 層が主体をなす。II 層・III 層も含まれるが、版築状の整地は認められない。北東部の地業 1999 は南北長 10.7 m、幅 2.3 m、深さは作図箇所では 0.5 m 程である。各辺とも直線的で壁の掘り込みも垂直である。埋

土に有機質の土層はみられず、大半が砂泥層で底にシルトが堆積する状況がみられた。掘られた位置は地業 1800 とは南北対称の位置にある。西端の地業 2001 は池 1570 西肩の位置に一致し、その下を掘り込む。西肩は垂直に掘られるが、東肩の立ち上がりは確認できない。深さは西肩付近で 0.6 m ある。西肩側の埋土には有機質が多い III 層が含まれる。この遺構の西肩と池 1570 の西岸が一致することは、池の北肩と地業 2000 の北肩の関係に共通する。地業 2000 と地業 1800 からは 11 世紀後半の遺物が出土した(図版 43)。

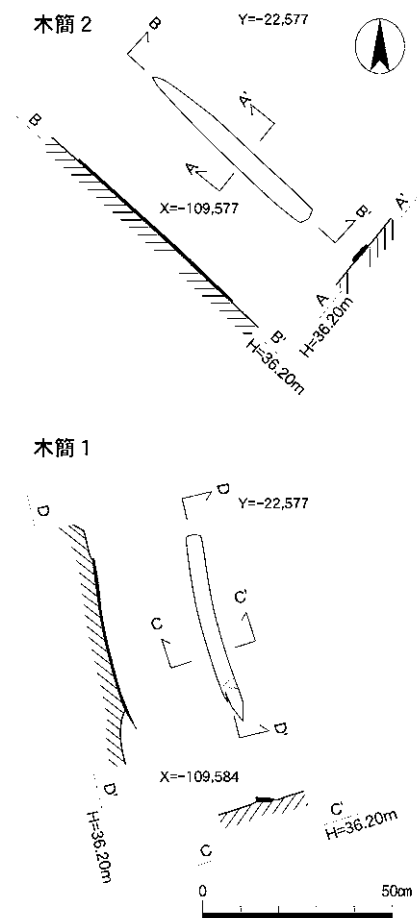


図6 木筒 1・2 の出土状態 (1:20)

落込 1580 (図版 19) 池 1570 の東側に掘られた不定形の落込みである。直径 4.5 m の不整円形を呈する。深さは 0.6 m ある。内部にシルト (断面図の B 層) が堆積し、池 1570 に伴う関連する遺構の可能性もあるが、砂泥からなる A 層、砂礫が主体の C 層、有機質を含む D 層なども堆積する。また断面図では、東西両側から埋められた様子が観察できた。出土遺物から池 1570 と同時期の遺構とみられる。

井戸 73・1385 (図版 23・91- 1) 南東寄りで検出した。西側の井戸 1385 が東側の井戸 73 に壊される。井戸 1385 は方形木枠組井戸であるが、木枠の残りは悪く、底の西辺と北辺の横棧のみが残存する。掘形は 0.8 m と小型で、深さも検出面から 0.45 m と非常に浅い。井戸 73 も木枠組井戸であるが、検出面より 1.2 m 下に曲物が残存する程度であった。井戸 73 からは 12 世紀中頃から後半の遺物が出土した (図版 45)。

柱穴 1524・1548 (図版 22・91- 3・91- 4) とともに南西部で検出した。底に礎板を敷いた柱穴で、南北対になると判断されるが、周囲への広がりには確認できなかった。柱穴 1524 の礎板は長さ 0.5 m、幅 0.2 m、厚さ 0.05 m ある。一枚造りで西端にほぞ穴が穿たれている。柱穴 1548 の礎板は長さ 0.35 m、厚さ 0.05 m の角材が 4 本並べられている。両方の距離は心々で 3.8 m ある。1 間とすると広すぎるが、中間は検出していない。南北方向の座標はほぼ一致し、底面の標高も 36.15 m でほぼ同じである。

礎石・柱穴群 北東部では礎石が散在的に残存していた。これらは建物の柱を受けた礎石とみられるが、残存状態が悪く、建物として復元することはできなかった。ただし、X=-109,592、Y=-22,550 にある礎石は長さ 0.5 m で規模が大きく、南 1.6 m には別の礎石がある。同様に X=-109,588、Y=-22,546 にも南北 1.8 m 離れて礎石が 2 基あり、これらは建物構造の一部とみられる。礎石には後述する東西溝 1740 の上に据わったものもあり、時期が遅れる可能性も考慮すべきであろう。

溝 1315 北東部で南北 17 m にわたり検出した。幅 0.7 m、深さ 0.2 m あり、南端は溝 1735 の手前で止まる。12 世紀後半の遺物が出土した (図版 45)。

溝 1600 (図版 86- 1) 現地説明会資料 (2007 年 10 月 6 日) では調査区南端で「池 1600」を想定したが、南側 2 箇所を拡張した結果、幅 1.6 m、深さ 0.25 m を有する東西溝であることが判明した。この溝は池 1810 を整地した上に掘られている。

溝 1720・1735・1740・1745・1750 (図版 22) 北西部で東西方向の溝を 4 条、斜め方向の溝を 1 条検出した。東西方向の溝は、北から溝 1740・1750・1720・1735 であり、いずれも直線的で、それぞれの間隔は 5～7 m 開く。溝の規模は、溝 1740 が幅 0.5～0.8 m で深さ 0.1 m、溝 1750 が幅約 1 m で深さ 0.4 m、溝 1720 が幅 0.8 m で深さ 0.25 m、溝 1735 が幅 1.8 m で深さ 0.3 m である。いずれの溝も底は東が深い。この点は後述する砂層 1685 も共通する。溝 1735 の底は凹凸が顕著であった。また埋没後上面には景石 2008 が乗せられていた (図版 22)。溝 1745 は溝 1720 と溝 1735 を結ぶように掘られていた。溝 1720・1750 からは 12 世紀末から 13 世紀初め頃、他の溝からは 11 世紀中頃から後半の遺物が出土した (図版 43)

溝 1805 中央部で検出した南北方向の溝である。南端では池 1810 の東肩に沿い、さらに南に延びる。幅は北端が広く 2.5 m 程あり、南は 0.8 m と狭い。深さ 0.15 m ある。溝 1735、砂層 1685 との交差部ではこの溝が下に位置する。

溝 2010 (図版 20) 池 1810 の東方にあり、2007 年 11 月 24 日の記者発表資料では「池 1810b」としたものである。東西 9 m ほど検出したが、拡張区 2・3 の所見から東西方向の溝であることが判明した。図版 20 に示した作図箇所では、幅 3.3 m、深さ 0.3 m ある。埋土はシルト・粘土 (図版 20 の 6 層) が主体をなし、溝底には凹凸がみられた。この溝は西端で南に折れ、現場内では池 1810 と接続しないが、西延長には溝 1855 があり、これは池 1810 と接続していたようにもみえる。

砂層 1685 (図版 22) 2007 年 10 月 6 日に実施した現地説明会資料では「白砂の範囲」としたものである。西端は $Y=-22,561$ 付近であるが、判然としない。幅 4～5 m 程で、南肩は傾斜があり比較的明瞭であったが、北端は不明瞭である。 $Y=-22,552$ セクション断面 (図版 22) では北端は $X=-109,598.3$ の地点で消えることを確認した。ただし調査区東壁では遺構の北端が立ち上がる状況を確認している。調査区東壁付近が最も厚く、約 0.2 m ほどある (図版 3 の断面 11)。東端を確認するため拡張区 4 区を設定したところ、砂層自体は 1 m 程東で立ち上がること、砂層上面には河原石を敷いた洲浜があることが確認できた (本章の 5 で解説)。この砂層は、南肩から流れ込んで堆積したと推定したが、ここが池であったかは、洲浜や景石は存在せず、範囲も明確にできなかった。しかし池 1570 における西肩部、北東部でみられた粗砂の堆積とは共通性が高いと判断でき、砂層 1685 の南側には白砂を敷いた地表面が広がっていたことが想定できる。

景石 2008 (図版 22) 中央部に単独で置かれていたチャート製の角礫である。東西方向に長軸を置く。長さ 1.1 m、幅 0.9 m、厚さ 0.55 m ある。溝 1735 が埋没した後にこの位置に据えられている。

石敷 370 (図版 22) 池 1810 北西部の整地層上面で検出した。南北 1.1 m、東西 0.8 m の範囲に、平坦な河原石が 35 個ほど敷き詰められており、このうちの 2 石は立った状態で据えられている。これらの石敷は、建物周囲に施される雨落溝に構造が類似する。立てられた石は縁であり、建物の南西隅を示す施設とみることができる。この場合、池 1570 南肩とは約 6 m しか離れていないが、ここに東西方向の細長い建物を想定することは可能で、池 1570 とは並存したものと想定するのが妥当であろう。溝底の幅は、南北 0.3 m 以上、東西は 0.4 m 以上となる。

(2) 第 3-2 面 (図版 6・7・92)

平安時代の整地層上面で検出した遺構群を当初は第 3 面としたが、鎌倉時代から室町時代、桃山時代・江戸時代前期までの遺構を含むため、鎌倉時代から室町時代 (13 世紀から 16 世紀前半代まで) の遺構を第 3-2 面、桃山時代から江戸時代前期 (16 世紀後半から 17 世紀代まで) の遺構を第 3-1 面として区別した。第 3-2 面に該当する遺構としては、建物、柱列、井戸、溝、集石、土坑などがある。遺構密度は低い。

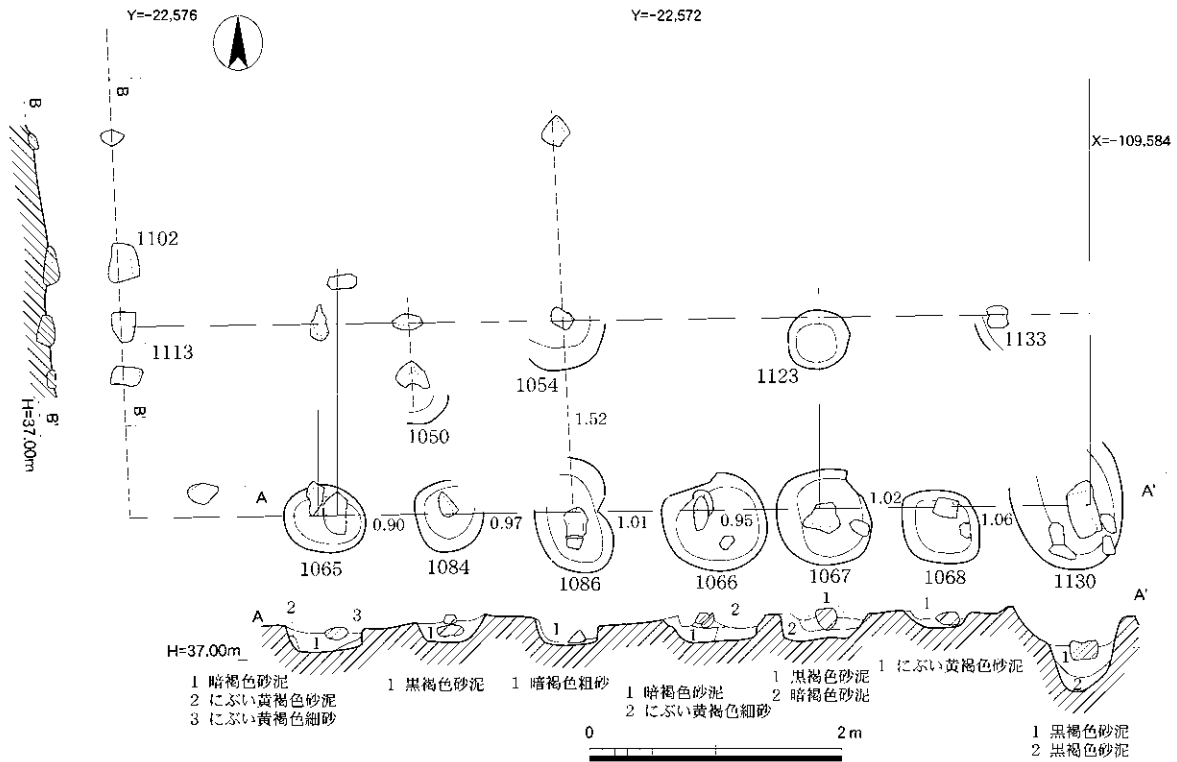


図7 建物 2014 実測図 (1 : 60)

建物 2014 (図7) 中央部の北西寄りで検出した。礎石列 1206 としたものを南側列とみて、その北側にも礎石が並ぶことから、ここに建物 2014 を想定した。西端は $Y=-109,576$ のやや西に礎石が 4 石並ぶ箇所が想定できるが、北端と東端については不明確である。現状で判明する規模は、東西は 7 間で約 7.5 m、南北は 3 間で約 4.75 m となる。礎石間の寸法は、ばらつきはあるものの、東西 7 間で約 1 m (半間)、南北 3 間で 1.5 m 前後 (0.75 間) に復元できる。この建物は井戸 1197 の埋没 (13 世紀中頃) 後に建てられている。

柱列 1511 (図版 30) 中央部の西寄りで検出した。 $Y=22,576$ の東 0.5 m にある南北方向の柱列である。柱穴が南北に 20 基ほど連続するが、東西には展開せず、南北方向の柵とみられる。底に礎石を置くものがある。柱間寸法は、北半の 2 ~ 5 間は 1.3 m、南半は 1.0 m とやや狭く、不揃いである。この柱列上部には第 1 面で検出した南北の溝 160 が造られる。溝 160 の位置は現在の町境と一致するため、この柱列はその前身的な遺構といえる。

井戸は 12 基検出した。井筒は木枠組と石組の両方がある。鎌倉時代では木枠組井戸、室町時代では石組井戸が主流をなす。

井戸 7 (図版 24・94-3) 南西部の南壁際で検出した。掘形の平面は円形で径 2.1 m ある。井筒は石組で一辺 1.1 m ある。底部には横板を方形に組んだ枅を据える。検出面から 2.1 m で底となる。

井戸 82 南東隅で東壁にかかり検出した。掘形の平面は円形で径 0.9 m ある。井筒は縦板組で内径 0.8 m あるが、板材は腐朽し、痕跡のみであった。掘形一杯に木枠を構築する。検出面から 1.1 m で底となる。なお、この井戸は、第 3-1 面で報告する井戸 80 と同じ構造であったが、出土遺物が 14 世紀後半のもののみであったため、これを井戸の所属時期とした。

井戸 915 (図版 25) 南西隅で西壁にかかり検出した。掘形の平面は隅丸方形を呈する。井筒は方形の木枠組で、各辺とも 3 枚で生まれ、長さ 1.3 m まで残存する。横棧は最下段のみ残存し、東西が雄、南北が雌で組まれる。底部には横板を二重に組んで方形の枡を作る。外枠の一辺は 0.6 m、内枠は 0.4 m あり。検出面から 2.0 m で底となる。

井戸 1085 (図版 24・93-4) 北西隅で検出した。掘形の平面は円形で径 1.9 m あり。井筒は石組で内径 1.1 m あり。底には横板を二重に組んだ枡を据える。石組の石は、この横板の上から積み上げる。枡の隅には大きめの石を斜めに置き、多角形とする。井筒内の埋土には木片や有機質の泥土が含まれていた。検出面から 0.55 m 下には大きめの石が入り、土器も埋納されていた。検出面から 1.7 m で底となる。この井戸は落込 925 底部で検出した。13 世紀後半から 14 世紀前半の遺物が出土した (図版 48)。

井戸 1197 (図版 24・84-8・93-1・93-2) 中央部の北西寄りで検出した。掘形の平面は隅丸方形で約 3.7 m と規模が大きい。井筒は方形の木枠組で一辺 1.1 m あり。縦板と横棧は厚く丈夫な板材が使用される。縦板は長さ 1.5 m まで、横棧は 4 段目まで残存する。横棧の組み方は、東西が雌、南北が雄であった。検出面より 0.8 m で木枠が残存し、この面には完形の土器も埋納されていた。検出面から 2.5 m で底となる。この井戸は池 1570 埋没後に掘られている。13 世紀中頃の遺物が出土した (図版 47)。

井戸 1211 中央部で検出した。南側は円形の土坑 1190 に壊され、北半のみ残存する。井筒は方形の木枠組で一辺 0.78 m あり。木枠の縦板は 4 枚組みで長 0.6 m まで残存する。横棧は長 0.75 m で両端に切り込みを入れる。底部中央には曲物 (痕跡のみ) を設置する。検出面から 1.6 m で底となる。

井戸 1238 (図版 94-2) 南東部の南壁際で検出した。掘形の平面は円形で径約 1.6 m あり。井筒は石組で内径 0.9 m ありが、西壁が部分的に崩れている。井戸の位置が南壁際であったため、底まで確認できていない。13 世紀後半の遺物が出土した (図版 48)。

井戸 1280 (図版 25・94-4) 中央部で検出した。掘形の平面は不整円形で長径 2.7 m あり。井筒は石組で内径約 1.0 m あり。底部には横板を四重に組んで枡を作る。上 3 段は、幅 0.15 m の板を一辺 0.8 m ほどに組み、最下段は一辺 0.6 m に組む。検出面から約 1.8 m の位置に大きめの石を埋める。検出面から 2.3 m まで掘り下げて記録を採ったが、以下は重機によって、3.5 m で底であることを確認した。

井戸 1355 (図版 23・91-2) 東端中央部で検出した。方形の木枠組井戸であるが、縦板は東側が内側に倒れ込んでいる。底部には横板を方形に組んで枡を作る。横板は一辺 0.8 m あり、東西が雌、南北が雄で組み合う。北辺には長 0.3 m の板材が縦に据えられていた。検出面から 1.9 m で底となる。

井戸 1400 (図版 25・84-7・95-1) 東端のほぼ中央部で検出した。掘形の平面は不整円形で径 2.7 m あり。井筒は石組で内径 1.8 m あり、石組井戸としては規模が大きい。底部には横板を三重に組んで枡を作る。検出面から 2.5 m で底となる。15 世紀後半の遺物が出土した (図版 50)。

井戸 1539 (図版 24・94-1) 南西隅で検出した。掘形の平面は南北に長い隅丸方形を呈する。

井筒は方形の木枠組で一辺 0.7 m あり。縦板は幅 0.26 m のものが一辺 3 枚で組み、長さ 1.5 m まで残存する。横棧は 4 段目まで残存する。横棧の組み方は、東西雄が、南北が雌である。隅柱も残存する。検出面から 1.7 m で底となる。

井戸 1640 (図版 23・93-3) 中央部の南東寄りで見出した。掘形の平面は楕円形で、長径約 3 m あり規模が大きい。井筒は石組で内径 1.3 ~ 1.5 m あり、正円ではなく方形気味に積まれる。検出面から 2.5 m で底となることを重機で確認した。13 世紀前半から中頃の遺物が出土しており (図版 46)、石組井戸としては時期が古い事例といえる。

溝 1387 北東部で見出した。南北に細長い溝状の遺構で、検出時の規模は南北 4.4 m、幅 0.7 m、深さ 0.5 m あり。13 世紀後半の遺物が出土した (図版 46)。

集石 1000 (図版 26) 中央部のやや南で見出した。東西 3.6 m、南北 1.35 m、深さ 0.3 m あり、東西に細長い。内部に石を詰めるが、石の密集度は粗く、大きさも不揃いである。14 世紀代に属する。

土坑 1173 北半の中央部で見出した。土取穴群 2016 内に掘られた穴の 1 基で、その東端に位置する。検出時の規模は、長径 2.5 m ほどの楕円形で、深さは 0.15 m あり、西半は別の土取穴で壊される。14 世紀前半の遺物が出土した (図版 49)。

土坑 1175 中央部の北西寄りで見出した。径 3 m ほどの不定型な広がりとして見出したが、遺構の下で井戸 1197 を見出したことから、その上部の窪みを遺構として調査した可能性がある。埋土は炭、焼土を多量に含み、南肩からは 13 世紀後半の土師器が完形品で多数出た (図版 49)。

土坑 1190 中央部で見出した。円形を呈し、径 1.9 m、深さは検出面から 1.5 m あり。井戸 1211 の南半を壊すが、この土坑も元は井戸であった可能性がある。13 世紀後半の遺物が出土した (図版 47)。

土坑 1200 南半の中央部で見出した。円形を呈し、径 1.5 m、深さは検出面から 1.7 m あり。形状は井戸の掘形に類似するが、木枠などは残存していなかった。14 世紀後半の瓦器鍋、羽釜が多く出た (図版 49・50)。



写真 5 土坑 1316 (北西から)

土坑 1247 北半の中央部で見出した。土取穴 2016 内の 1 基で、先述した土坑 1173 の北西部に位置する。長さ約 2 m、幅 0.5 m、深さ 0.5 m ほどの規模がある。13 世紀前半の遺物が出土した (図版 45)。

土坑 1316 (写真 5) 北東部で見出した。東西 0.9 m、南北 1.5 m あり、南北に長い楕円形を呈す。深さは検出面から 0.25 m あり、14 世紀中頃の土師器が多量に出た (図版 49)。土器を廃棄した土坑である。

土坑 1323 東半の中央部で見出した。東西 1.2 m、南北 2.5 m あり、南北に長い。深さは検出面から 0.35 m あり。13 世紀前半から中頃の土師器が細片状態で多量に出た (図版

46)。

土坑 1428 (写真 6) 北東隅で検出した。径 0.6 m の円形を呈し、深さ 0.15 m の内部に陶器甕が破碎された状態で入れられていた。13 世紀から 14 世紀に属する。

土坑 1430 先述した土坑 1428 の西約 1 m にある。東西 1.2 m、深さ 0.2 m あり、東西にやや長い小規模な土器廃棄土坑である。内部から 13 世紀中頃の遺物がまとまって出土した(図版 48)。



写真 6 土坑 1428 (西から)

(3) 第 3-1 面 (図版 8・9・92)

第 3 面として記録した遺構のうち、桃山時代、江戸時代前期に属する遺構を抽出したものである。礎石列、柱列、井戸、土取穴、落込、集石、土坑などがある。

礎石列 945・948 (図版 28) 北西隅の西壁際で検出した。南北方向の礎石列で、落込 925 が埋まった上に造られている。Y=-22,592 ライン上には比較的大型の石が約 1.45 m ごとに並び、その東 1.4 m にも石が並ぶことから、これらは主柱列と添柱列の関係を示すと推定できた。添柱列の特徴は、石がやや小さく複数あることと、北から 2 間目には木材、3 間目には木材と杭が残存することで、これらは添柱を固定するための痕跡とみられる。なお、これら両方の柱列は北で約 2 度東に振れている。

礎石列 948 は礎石列 945 の南端 (X=-109,586.5 付近) から東に延びる礎石列である。使用された石は小規模で、礎石の間隔も不揃いである。また、この礎石列 948 が造られた位置は、後述する礎石列 985 のやや南側であり、その後身とみることもできる。

礎石列 985 (図版 28・96-2) 落込 925・920 間の高まり上、X=-109,586 付近で検出した。東西方向の礎石列であるが、溝の内部に礎石を据える「布掘柱列」と呼ばれるものである。溝内に残存する礎石は 8 石で、間隔は広い部分が 1.6 m、平均 1.2 m である。中間には抜かれた穴があるため、本来は 0.6 m 程度の間隔で礎石が並んでいたとみられる。溝の全長は 9.7 m、礎石 8 石分で 8.45 m ある。

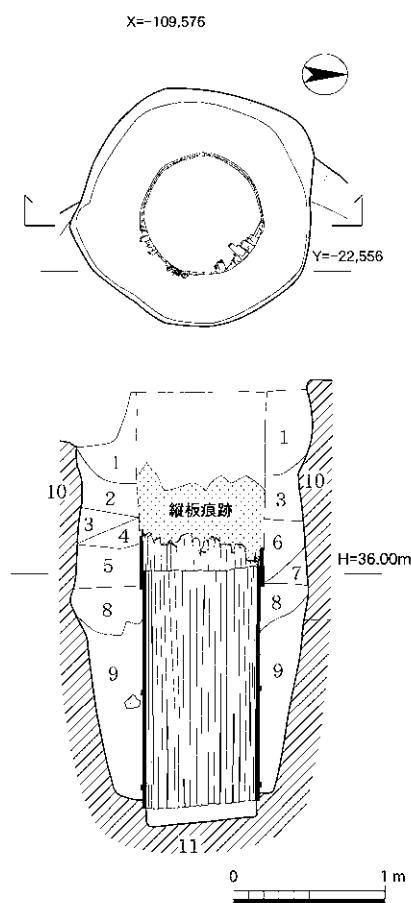
礎石列 1726 南壁際の中央部で検出した。礎石が南北方向に 4 石並び、南は調査区外に延長する。礎石列として命名したが、掘立柱の底部に礎石を据えた遺構の可能性が高い。礎石間の距離は北 1 間が約 2.10 m、北 2・3 間が 1.25 m・0.95 m である。後述する南北の柱列 1637 の東 2.0 m にあるが、規模ははるかに小さい。

柱列 1512・1637・1663 (図版 27) 中央部の南端で、2 筋の東西列と 1 筋の南北列が「コ」の字状を呈する箇所があった。北の東西列(北列)が柱列 1512、東の南北列(東列)が柱列 1637、南の東西列(南列)が柱列 1663 である。この柱列の特徴は、いずれも底が深いことと柱痕跡が明瞭なことである。北列は比較的浅い位置で検出できたが、東列と南列は平安時代後期の整地層(「層

1195) 上から掘り込まれていたものの十分に検出できず、このため図版 25 で示した断面図には浅い掘り込みとなっている。南列は柱穴 1667 以西に柱穴がないことから、ここが西端であったとみられるが、北列は西延長位置にも比較的深い穴（柱穴 1603・1536・1541・1542・1543）があることから、Y=-22,586 付近まで延びていたとみてよい。柱間寸法は、北列と東列は 1.5～1.7 m でまとまっているが、南列は 1.8～2.0 m とやや広い。頑強な構造からみて、江戸時代初期の屋敷内部を区画した柵の跡とみられる。

井戸 80 北東隅で検出した。掘形の平面は円形で約 1 m あり、井筒は痕跡のみであったが、内径 1.0 m の縦板組とみられた。検出面から 1.2 m で底となる。16 世紀後半の遺物が出土した（図版 51）。

井戸 146 北壁際中央部で検出した。掘形の平面は円形で径 1.1 m ある。井筒は縦板組で内径 0.6 m ある。縦板は幅 0.1 m で桶状を呈する。検出面から 1.95 m まで掘り下げたが、底は確認できなかった。



- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 2 10YR4/1 褐灰色砂泥
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 4 2.5Y4/1 黄褐色砂泥
- 5 2.5Y5/1 黄灰色粘土
- 6 2.5Y4/1 黄灰色粗砂
- 7 2.5Y5/2 暗黄灰色粘土
- 8 2.5Y4/1 黄灰色砂泥
- 9 7.5GY4/1 暗緑灰色粘土
- 10 7.5YR4/6 褐色砂泥
- 11 7.5YR4/6 褐色砂礫（地山）

図8 井戸 777 実測図（1：50）

た。

井戸 777（図版 95- 2・95- 3、図 8）北東部のやや西寄りで見出した。掘形の平面は円形で径 1.45 m ある。井筒は内径 0.75 m あり、幅 0.05 m の縦板を桶状に組んだものを 2 段に積み上げた構造をもつ。下段は長さ 1.57 m ある。埋土には汚れた泥土が入り、便所としての利用も想定したが、確証は得られなかった。東半分は攪乱で壊され、断面観察が可能であった。検出面から 2.9 m で底となる。

土取穴群 2015 西端の中央部から南寄りで見出した。地山の粘土（いわゆる「聚楽土」に類似）を採取した「土取穴」の密集する範囲を指す。土取穴が掘られた範囲の北東端は池 1570 に一致する。池 1570 は底に灰黄褐色シルトが堆積するため、土取りの対象から除外されたのであろう。また南東端は、砂礫層（流路 2009A）の境界と一致する。土取穴の形状や深さは不揃いである。底部も U 字形を呈し、江戸時代の土取穴が方形で、底が平坦なことと対照的である。北端に掘られた土坑 935・959・960 の 3 基は規模が大きく、南北に長い楕円形を呈する。落込 920 の下部では土取穴を多数検出したが、落込 925 下部は顕著でなかった。土取穴からは室町時代から桃山時代の遺物が出土した。また、土取穴群 2015 と池 1570 が接する付近の土取穴からは、平安時代後期の軒丸瓦（瓦 19～23）、軒平瓦（瓦 92～95）が多く出土した。軒瓦の組み合わせから、付近に瓦葺き建物の存在が想定できる（第 5 章の 2 参照）。

土取穴群 2016 北端の中央部付近で検出した。西端は池 1570、南東端は地山の砂礫層（流路 2009A）によって限られる。個々の土取穴は土取穴群 2015 に掘られた穴よりも輪郭が明瞭で、規模も大きい。南半部の穴からは主に桃山時代の遺物が出土した。北半の土取穴は南北方向に長いものが多い、出土遺物も江戸時代中期までのものが含まれていた。

土取穴群 2017 中央部で検出した。大規模な土坑 1080 の北側にあり、東西 7.5 m、南北 4.5 m の範囲に土取穴が数基集まっている。16 世紀末から 17 世紀の遺物が出土した。

落込 925・920（図版 31・96-1・96-3、図 9・10）北西隅で検出した。ともに東西に長軸があり、隅が丸い。西端は調査区外に延長する。落込 925 は、南北幅約 10 m、東西長 11.5 m 以上、深さは検出面から 1.4 m ある。三方の肩はなだらかな傾斜をもち、肩には石組や護岸の杭などはみられない。内部にはシルトが堆積し、滞水状態で開いていたことが窺われた。その上の約 1 m 分は遺構を整地した層である（図版 31）。層序は南から北に傾斜し、南側から順番に土が入れられている。北下りの層序は北端まで達する。整地層の中には砂礫層がまとまって入れられており、周辺で地山の砂礫層が掘られ、ここに運ばれてきたことが想定できる。層序の細部については、本章第 1 節の断面 1 で解説している。遺構内のシルトからは木質遺物が多く出土した。これらは保存状態が良く、網代製品（図 9）や、獣骨（図 10）が含まれ、また中央部からは木筒 3・4 も出土した（図版 81）。特に木筒 4 は付札であることから、この遺構を「荷揚げ場」と関連させる資料でもある。上部の整地層からは 17 世紀前半の遺物が出土した（図版 52）。この遺構は、形状ならびに堀川に向かう配置からみて、「船入」の可能性があり、江戸時代に土井屋敷ができる直前の土地利用を知る上での重要な遺構である。

落込 920 は落込 925 に類似する遺構で、落込 925 の南約 4 m にその北端がある、しかし、南北幅約 9 m、東西長 9.5 m、深さ約 1 m と、規模が落込 925 より小さいこと、この遺構の底部にはシルトが堆積しないことなどが相違点として指摘できる。ただし上部を整地した層は同じであり、同時に埋められたことは確実といえる。16 世紀末から 17 世紀前半の遺物が出土した（図版 53）。図版 31 は調査区西壁のうち、落込 925・920 部分を模式化したものであり、遺構上を整地される過程を示している。また両落込の間には土手状の高まりがあり、これも落込 925・920 と一体的に構築された遺構といえる。

集石 48（図版 26・98-2）北壁際の中央部で検出した。

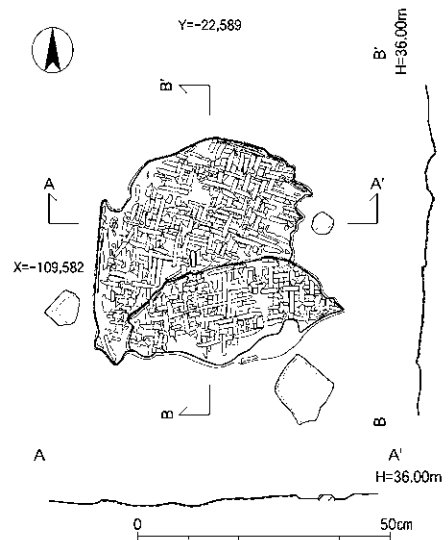


図 9 落込 925 出土網代製品（1：15）

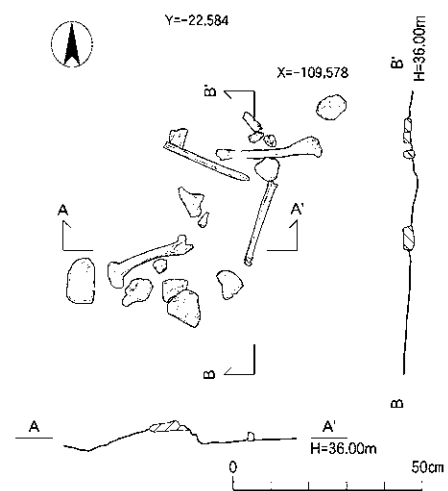


図 10 落込 925 出土獣骨（1：20）

掘形の平面は円形で径約 1.5 m、深さ 0.85 mあり、内部には石が密集する。16 世紀後半に属する。

集石 365 (図版 26) 北西部で検出した。掘形の平面はほぼ円形で径約 1.6 m、深さ 0.5 mあり、内部には拳大の石が密集する。16 世紀後半から 17 世紀前半に属する。

土坑 641 (図版 31) 東半の中央部で検出した。東西 5.0 m、南北 3.5 mあり、東西にやや細長い。図版 31 に示す断面作図箇所では、深さ 1.5 mあり、形状から土取穴とみられる。底から 0.5 mにわたり堆積した 9・10 層は水平堆積であり、土坑本来の埋土とみられるが、それより上部の層は肩口から斜めに入れられており、土坑上部を整地した層とみてよい。16 世紀末から 17 世紀初めの遺物が出土した (図版 51)。

土坑 904 北西隅で検出した井戸 1085 の上部に生じた窪みをさす。径約 2 mあり、井戸掘形の外側とほぼ一致する。16 世紀末から 17 世紀前半の遺物が出土した (図版 51)。

土坑 989 (写真 7) 西半のほぼ中央部で検出した。東西 1.4 m、南北 1.2 mあり、南北にやや長い楕円形を呈する。深さは検出面から 0.6 mある。西端中央部で広範囲に掘られた土取穴群 2015 の東端にあたる。16 世紀後半の土師器皿が多量に出土した (図版 51)。

土坑 1080 (図版 31) 中央部で検出した。東西 8.8 m、南北 4.5 mあり、東西に細長い楕円形を呈する。図版 31 に示す断面作図箇所では、深さ 1.5 mあり、土坑自身の埋土はなく、地山の粘土や砂礫が混じった層が両肩から入れられたことがわかる。土取穴群 2017 が北に接する位置にあるが、底部の形状から 1 基の穴として掘られたことは確実で、土取穴群 2017 には含めない。17 世紀前半の遺物が出土した (図版 53)。

土坑 1146 北半の中央部で検出した。東西 2.2 m、南北 1.2 mあり、東西に長い楕円形を呈する。深さは検出面から約 1 mある。土取穴群 2016 内に掘られた穴の 1 基で、その南東端にあたる。16 世紀末の遺物が出土した (図版 51)。

土坑 1155 北半の中央部で検出した。土取穴群 2016 内に掘られた穴の 1 基で、先述した土坑 1146 の北に接する。南北約 3 mあり、深さは検出面から 0.6 mある。16 世紀末から 17 世紀前半の遺物が出土した (図版 53)。

土坑 1207 中央部で検出した。土取穴群 2017 内に掘られた穴の 1 基で、東西約 5 m、南北約 2 mの広がりある範囲を想定したが、北は土坑 1137、東も別の土坑と重複し、端は明瞭ではない。



写真 7 土坑 989 (北東から)

深さは検出面から 0.8 mある。16 世紀末から 17 世紀前半の遺物が出土した (図版 51)。

土坑 1212 中央部で検出した。東西 1.2 m以上、南北 2.5 m以上あり、東肩以外の三方は同様の土坑で壊されている。深さは検出面から 0.6 mある。土取穴群 2017 内に掘られた穴の 1 基で、その東端に位置する。16 世紀末から 17 世紀前半の遺物が出土した (図版 53)。

土坑 1213 西半の中央部で検出した。土取穴

群 2015 内に掘られた穴の 1 基で、その北東端に位置する。東西 1.5 m、深さは検出面から 0.8 m あり、南東部は土坑 935 に壊される。16 世紀末から 17 世紀前半の遺物が出土した（図版 53）。

（4）第 2 面（図版 10・11・97）

「層 75」とした整地層を掘り下げて検出した遺構であり、江戸時代中期・後期（18 世紀代）に属する。柱列、井戸、集石、土取穴群、土坑などがある。

柱列 2019 西半の中央部、X=-109,593 付近で検出した東西の柱列である。西端は調査区外に延長し、東端は Y=-22,576 付近までは明瞭である。これ以东にも柱穴があるが、連続するかは確実でない。西壁から 7 間目まではほぼ等間隔に並び、柱間寸法は 1.3 m である。それぞれの柱穴は底が深く、底に礎石を置くものが大半であり、規模と構造は第 3-1 面で解説した柱列 1512・1637・1663 に類似する。また 1.3 m という柱間は第 3-2 面の柱列 1511 に類似するが、出土遺物からはこの第 2 面に相当させるのが妥当と考えた。

井戸 83 東壁の中央部やや北で検出した。掘形の平面は円形で径 1.1 m あり。井筒は縦板組で、縦板の裏側にはタガの痕跡があり、桶状のものを 2 段以上積んで作られている。井筒内からミニチュア土製品を含めた 18 世紀後半から 19 世紀前半の遺物が出土した（図版 56・57）。掘形埋土には地山の黄色粘土が多く含まれる。この井戸を含めた井戸 80・82 の 3 基は構造が類似する。

井戸 771（図版 25）中央部の東寄りで検出した。掘形の平面は円形で径 1.85 m あり。井筒は石組で内径 0.95 m あり、検出面から約 1 m 下に残存していた。石材は花崗岩の切石が使用されている。底部から 0.9 m までは縦板組みであった。検出面から 3.1 m で底となる。

集石 500（図版 26）中央部の北西寄りで検出した。掘形は東西 1.9 m、南北 1.8 m、深さ 0.4 m あり、内部には小さめの礫を密に詰める。18 世紀代に属する。

集石 510（図版 26・97）中央部で検出した。掘形は東西 1.75 m、南北 1.4 m、深さ 0.65 m あり、内部には拳大の礫を密に詰める。19 世紀前半に属する。

集石 644（図版 26）中央部の北東寄りで検出した。掘形は東西 2.1 m、南北 1.7 m、深さ 0.6 m あり、内部には拳大の礫を密に詰める。18 世紀代に属する。

集石 645（図版 26）中央部の北東寄りで検出した。掘形は東西 1.9 m、南北 1.2 m あり、東西に長い。東端は不明瞭である。深さ 0.65 m あり、他の集石よりやや深く、内部には拳大の礫を密に詰める。18 世紀後半から 19 世紀代に属する。

集石 688（図版 26）中央部の北東寄りで検出した。掘形は東西 1.7 m、南北 1.9 m、深さ 0.55 m あり、内部には拳大の礫を密に詰める。17 世紀代に属する。この集石 688 の周囲には、集石 644・645 が造られており、いずれも構造が類似する。建物の床下や建物周囲に水抜き用として造られたものであろう。

土取穴群 2018 南東部の土取穴が集中する箇所を指す。第 3-1 面で検出した土取穴群 2015～2017 に比べると密集度は低い。土坑 863・852・806 は方形で一辺 2.0～2.5 m、深さ 1.0～1.5 m あり、南北に並んで掘られている。また、その周囲にも小規模な穴があり、土坑 834 は土坑

852の西側を回り込むように掘られている。これらの穴からは18世紀代の遺物が出土した。この時期は土井屋敷であったため、屋敷内の空閑地に掘られた穴であろう。

土坑70(図版31) 南東隅で検出した。東西に細長い土坑である。東西2.9mあり、図版31に示す断面作図箇所では、南北1.55m、深さ1.6mある。底には段があり西側が低い。埋土は3層に大別できたが、最下層の3層は厚さ0.7mあり、有機質土壌が含まれていた。上の2層は整地のために入れられた層である。有機質土壌の存在から、便所の可能性を想定したが、寄生虫卵などは検出できなかった。18世紀前半の遺物が出土した(図版54)。

土坑94・123(図版31) 南東隅で検出した。東西1.8m、南北1.8mの方形を呈し、深さは検出面から1.2mある。底は平坦である。図版31に示す断面5～7層は有機質を多く含む。特に底に堆積した7層は炭・灰を主体とする層であった。土坑70同様、ここでも便所の可能性を考えたが、確証は得られなかった。土坑123は南半を土坑94に壊されたもので、北半で東西1.4m、深さは検出面から0.8mある。図版31では両方の遺構を貫く南北断面(西壁)を示した。18世紀前半の遺物が出土した(図版54)。

土坑280(図版31) 西壁際のほぼ中央部で検出した。径2.7mの円形を呈し、深さ1.1mある。図版31に示す断面作図箇所では、埋土は9層に分層でき、両肩から土が入れられる様子が観察できた。18世紀中頃の遺物が出土した(図版54)。

土坑625 中央部の南東寄りで検出した。東西3.9m、南北2.3mあり、東西に細長い遺構である。深さは検出面から0.2mと浅い。18世紀後半の遺物が出土した(図版55・56)。

土坑806(図版31) 南東隅で検出した。東西2.0m、南北2.3mあり、南北がやや長い方形を呈する。図版31に示す断面作図箇所では深さ1.2mあり、中位に堆積した2・4層は有機質を多く含む層であった。土取穴群2018内の1基であるが、東に掘られた土坑70・94とは形状、埋土が類似する。18世紀に属する。

(5) 第1面(図版12・13・99)

「層75」上面で検出した遺構群で、江戸時代後期、幕末期を中心に明治期までの遺構を含む。礎石列、井戸、溝、石室、石組、漆喰組、瓦組、埋甕、胞衣壺、土坑などがある。

礎石列2020 西壁際のほぼ中央部で検出した。礎石が東西に8石並ぶが、井戸15の南端は欠損する。礎石間の距離は、平均0.97mで当時の半間に復元できる。第2面で検出した柱列2019の北約1.5mにあるが、区画という性格からすると、同じ位置を踏襲したものとみられる。

井戸14・15・16・26 北西部で検出した。北から、井戸26・16・15・14が南北一列に並ぶ。掘形はいずれも径1.2mほどで、井戸としては小型である。井筒は井戸16・26が瓦積みで、内径0.8mある。井筒に使用された瓦は幅0.26m、高さ0.29m、厚さ0.03mの井戸椀瓦として製作されたものである。形状が類似する井戸15・14も同じく瓦積みであったと推定できる。井戸16には土管、井戸26には土管・レンガが入る。井戸間の距離は、北から3.0m、2.9m、4.3mあり、それぞれの家屋に付属する井戸であったと推定できる。4基とも底は深く未確認である。

井戸 45・68 ともに石組井戸で石組上面には漆喰を塗る。井戸 45 の石組は内径 1.2 m と通常の規模であったが、掘形は直径 3.3 m と大規模で、掘形内部には石材が大量に入れられていた。井戸 68 では井筒内部に鉄パイプが刺さっていた。両方とも底は深く未確認である。明治以降も使用された井戸と考えられる。

溝 37・38・160 (図版 29・100- 1) 北西部で、南北方向の溝 37・160、東西方向の溝 38 を検出した。3 条の溝は両側に石組をもつ構造であるが、石の残りは良くない。溝底は幅 0.25 m 程である。互いに接続しており、敷地内の水を外部に排水するために造られた溝とみられる。溝底は、溝 37 はほぼ水平、溝 160 は南が 0.2 m、溝 38 は西が 0.2 m 低い。

溝 37 は 14 m 分検出した。X=-109,590 以南には石材はみられず、東西方向の礎石列 2020 付近で西に折れ、場外に至っていたとみられる。溝 160 は溝 37 の東約 5.5 m で平行に造られている。南北方向に 23 m 分残存し、X=-109,600 付近に達するが、それ以南は形跡がない。使用された石材は、溝 37・38 のものより大きい。溝 38 の南側に取り付くが、接続部分は残りが良くない。この溝 160 に付属する施設として、石組 210 が造られている。石組の内径は 0.8 m あり、検出面から 0.7 m で底となる。構造は石組井戸に類似するが、底が浅いことと最下段には大きめの石が縦方向に据えられ上方が開くように積まれることが相違点である。この施設は溝内の泥を沈殿させる枡として造られたのであろう。溝 38 は X=-109,578、Y=-22,581 付近で溝 37 と直交する。検出時、この交差部は石で塞がれていた。溝 38 は交差部から西側に 5.5 m、東側に 27.5 m 延長する。西側部分には石組は残存しないが、東側は石組が残存する。ただし Y=-22,564 から Y=-22,576 間の 12 m 分は石が完全に抜かれている。

石室 105 (図版 30) 南東部で検出した。掘形は東西 1.5 m、南北 2.2 m あり、南北に主軸をもつ。東面のみ石組が 1 段 9 石残る。中央部が深く掘られるが、深い部分に石組はない。深さは検出面から 0.7 m ある。内部には有機質の土壌が溜り、木質遺物も含まれていた。便所の可能性が想定される遺構である。19 世紀前半の遺物が出土した (図版 57)。

石室 89 (図版 30・100- 5) 東半の中央部で検出した。掘形は東西 1.6 m、南北 1.3 m あり、東西に主軸をおく。石組は北辺を除く三方が残存し、最高 2 段まで残存する。石組の内法は東西 1.05 m ある。深さは検出面から 0.35 m あり、底部は平坦である。

石組 67 (図版 100- 4) 南西隅で検出した。北半は石と漆喰で室を作り、南半は石組で枡を構築する。北半の室は、長さ 0.85 m、幅 0.5 m ある。床は漆喰塗りで南西側が低く、ここから南の石組枡に至る。石組は長さ 0.35 m、幅 0.25 m、深さ 0.3 m あり、底部は素掘りのままである。西側へ排水する枡として造られたとみられるが、出口は不明である。

漆喰組 61 (図版 30) 北東部で検出した。掘形は一辺 0.8 m の方形を呈し、内部は石を方形に組み、周囲を漆喰で固める。石組は 1 段のみ残存し、内法 0.45 m ある。

瓦組 135 (図版 30) 南東部で検出した。平瓦を立てて方形に組んだ遺構である。瓦組みは 1 段のみで、上には積まれない。内法は東西 1.05 m、南北 0.6 m ある。南西部は壊されるが、北と東辺は完存し、東西に主軸をおく。掘形は明確でない。底は平坦である。

埋甕 39・51・52・57・60・161 (図版 30・100- 2) 陶器甕を埋めた遺構で、合計 12 基検出した。うち 6 基を図示した。分布は散在的である。北半に 3 基 (埋甕 39・46・47)、南西部に 2 基 (埋甕 9・161) あり、東半から南東部が 7 基 (埋甕 51・52・54・56・57・60・700) と最も多い。北西部にはない。大半は単独で設置されるが、2 基近接して設置されるものが 2 組ある (埋甕 57・60、埋甕 46・47)。特に埋甕 46 と埋甕 47 は組み合わせて使用されたことは確かであろう。すべて底部のみ残存する。最も保存が良いものは埋甕 161 で、底部から 0.4 m まで残存する。いずれも 19 世紀に属し、便所として使用されたと推定される。

胞衣壺 12・13・314・570 (図版 30) 土師質の扁平な体部をもつ壺を地中に埋めた遺構である。合計 4 基検出した。いずれも、蓋と身が組み合わさった状態で据えられていたが、蓋は薄いため、保存状態が悪く、図・写真ではうまく表現できていない。胞衣壺 12・13 は 0.1 m 離れて据えられ、同時期に存在したものとみられる。

土坑 4・5 南壁際の中央部で検出した。広がりのある大きな遺構で、上面の南半にあるものを土坑 4、北半にある下部を土坑 5 と考えた。深さは検出面から深い部分で約 1 m である。明治期までの遺物が多量に出土した。遺構の範囲が広く、重複することから、長くゴミ捨て場として利用されたものとみられる。

土坑 71 (図 11) 北東部で検出した。東西 3.0 m、南北 1.9 m、深さ 0.9 m あり。底部は平坦で、内部に炭・灰が詰まる。断面作図箇所によると、中位には焼土混じりの層が堆積し、その上位と下位には炭・灰の充満した層がみられた。19 世紀前半の遺物が出土した (図版 57)。

土坑 487 (図版 100- 3、図 11) 北壁際の中央西寄りで検出した。東西 2.0 m 以上、南北 3.0 m、深さ 0.7 m あり、東半は攪乱で破壊される。底部には炭・灰が厚さ 0.3 m ほど充満する状況がみられた。18 世紀から 19 世紀に属する。この炭と灰の成分については、イネワラと炭化米であることが顕微鏡観察で確認できた。(付章 6 を参照)

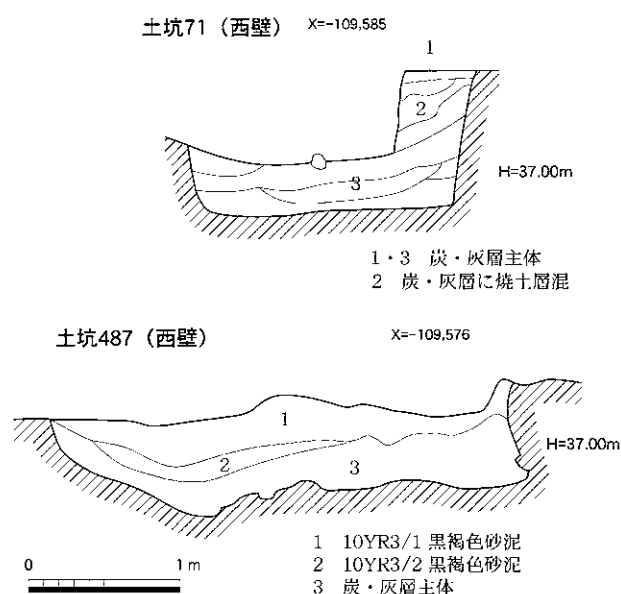


図 11 炭・灰が詰まった土坑断面図 (1 : 50)

また、このような炭・灰が内部に充満する遺構は、土坑 186・212・220・227・240 などでもみられた。いずれも 18 世紀後半から 19 世紀に属する (第 5 章の図 30 参照)。

なお、この第 1 面の北西部においては、漆喰塗の槽、その周囲には土間や礎石列が南北に並ぶ状態で構築されていた。漆喰槽は水利施設であり、土間は屋敷内部の通行部分と想定される。井戸 14・15・16・26 もそれぞれに付属しており、この部分には間口 5 m 程度の町家的な建物が南北に並列していたことになる。ただし、漆喰槽には

土管が使用されており、明治時代以後も使用されたとみられたので、ここでは詳しく解説しなかった。「土井大炊」「安永二発巳」と線刻した石碑片（石 68）も、この面で石列の一部として出土した。

3. 2 区の遺構

(1) 第3面（図版 32・101- 1・102- 1）

地山上面で検出した遺構群である。平安時代後期から室町時代に属する。自然流路、井戸、溝、土坑などがある。

流路 296（図 12） 北半で検出した。1 区から延長する自然流路であるが、2 区では幅が狭い。北東から南西方向に流れ、調査区外に延びる。断面は逆台形を呈し、幅約 2.5 m、深さは 1.2 m ある。流路内の堆積土は 3 層に大別できる。1～5 層は黒褐色砂礫を中心とした層、6 層は暗灰黄色砂礫で粗砂が多い。7 層は底に堆積した層で、オリーブ褐色シルトを主体とする。1・2 層の上面からは縄文時代中期（船元 I 式）の土器片が 2 点出土した（図 61）。

井戸 145（図版 35） 北半の東壁際で検出した木枠組井戸である。東半分は調査区外に延びる。掘形は南北 2.6 m、東西 1.1 m 以上で、深さは検出面から 2.1 m あり、底部の標高は 34.70 m である。縦板を方形に組む井戸とみられるが、縦板はほとんど残存せず、東壁で痕跡が高さ 0.8 m 残存することを確認した。底部には方形の木枠痕跡があり、一辺約 1 m と推定される。埋土は 3 層に分かれる。上から黒褐色砂泥、灰黄褐色砂礫、黒褐色砂泥で、いずれも礫を多量に含む。井戸内からは 14 世紀中頃から後半の遺物が出土した（図版 59）

井戸 229（図版 35・101- 3） 北半の南東部で検出した木枠組井戸である。掘形の平面形は方形で、南北 1.4 m、東西 1.55 m とやや小型である。深さは検出面から約 1.7 m あり、底部の標高は 34.70 m である。井戸枠は方形の木枠組であるが、縦板はすべて欠損し、底部に長さ 0.7 m の横棧が残存するのみであった。枠内埋土は褐色砂泥、掘形埋土は灰黄褐色砂礫である。井戸内からは 13 世紀前半から中頃の遺物が出土した（図版 59）。

井戸 250（図版 35・102- 2） 南半の北壁際で検出した石組井戸である。北半分は調査区外に延びる。掘形の平面形は円形で直径 1.9 m ある。深さは検出面から約 1.5 m 以上あるが、安全性を配慮してこの高さで掘削を止めた。石組は内径 1.0 m で、0.2～0.3 m 大の自然石の小口面を内側に向けて、上方が開くかたちで積み上げている。石組内の埋土はにぶい黄褐色砂泥、掘形埋土は暗灰黄色砂泥であった。石組内からは 13 世紀中頃の遺物が出土し

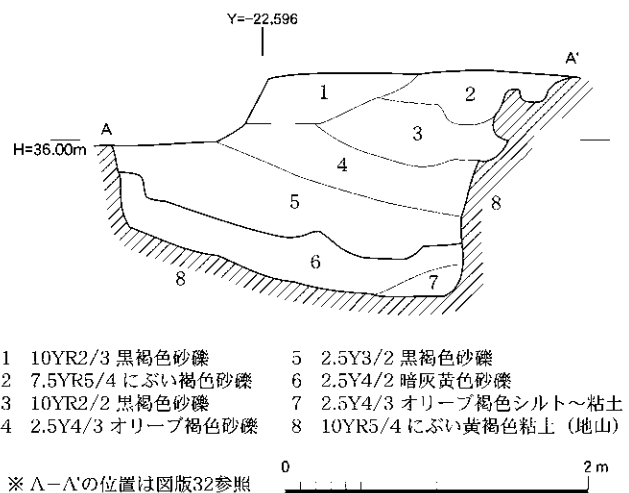
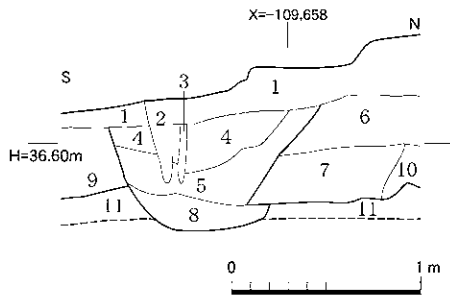


図 12 2 区流路 296 断面図（1：50）



- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 炭・小礫混
- 2 7.5YR3/1 黒褐色砂泥 (杭跡)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (板跡?)
- 4 10YR3/2 黒褐色砂泥 (溝20)
- 5 10YR3/1 黒褐色砂泥 (溝60)
- 6 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 炭・小礫混
- 7 10YR3/1 黒褐色砂泥
- 8 10YR4/1 褐灰色砂泥～泥土 (溝120)
- 9 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 10 2.5Y5/4 黄褐色砂泥 粘質・炭混
- 11 2.5Y5/4 黄褐色砂泥 (地山)

図13 2区溝20・60・120断面図
(Y=-22,580、1:40)

規模は幅0.7mで、深さは検出面から0.2mあり、溝内の堆積層はレンズ状を示す。埋土は小礫を含む褐灰色砂泥～泥土(8)で、底部付近には泥土層が堆積していた。溝内からは16世紀前半の遺物が出土した。この溝は北六門と北七門の境界線上のやや北に位置する。

土坑165 南半中央部で溝120と重複した状態で検出した。南北約4m、東西約3mで、深さは0.3mあり、16世紀前半の土師器皿が多量に投棄されていた(図版60)。

土坑178 南半の西壁際で検出した。南北1.3m、東西0.8m以上、深さ0.9mあり、西端は調査区外に延びる。埋土は灰黄褐色砂泥で、土坑内からは11世紀中頃から後半の遺物が出土した(図版59)。

土坑234 北半の中央部で検出した土取穴である。東西1.6m、南北2.0mの楕円形で、深さは0.5mある。埋土は灰黄褐色砂泥で、土坑内からは14世紀中頃の遺物と平安時代前期の須恵器、中期から後期の風字硯(図版61の1162)が出土した。

土坑285 北端の東壁際で検出した。南北0.8m、東西0.8m以上の楕円形で、深さは0.4mある。埋土は褐色シルトで、炭を含む。土坑内からは11世紀中頃から後半の遺物が出土した。

この他、土坑173からは12世紀後半、土坑222からは13世紀中頃から後半、土坑174からは16世紀前半の遺物が出土している。

(2) 第2面(図版33・103-1)

第1面を0.3mほど掘り下げて検出した遺構群である。桃山時代から江戸時代前半期に属する。東西の柱列、溝、土坑などがある。

柱列160(図版36) 東西方向の溝60の北肩に沿う柱列である。検出長21.5m、東端は攪乱のため未検出である。柱穴は直径0.3～0.6m、深さは検出面から0.3～0.45mある。底部では、柱根が残存するもの、平瓦を詰めたもの(柱穴123・154・158)、礫を詰めたもの(柱穴158・

た。石組井戸としては古い時期に属する。

井戸276(図版35・101-2) 北半の西壁際近くで検出した木枠組井戸である。北東部は江戸時代の遺構で壊されている。掘形は南北1.9m、東西2.0mで、深さは検出面から約2.1mあり、底部の標高は34.40mである。井戸枠は方形の木枠組で、木枠の一辺0.7mとやや小型である。縦板は幅0.2mで各面4枚組みとみられる。西側と南側には最下段の横棧が残存していた。枠内の埋土は上から褐色シルト、褐灰色砂礫で、掘形埋土は灰オリーブ色粘土である。井戸内からは13世紀中頃の遺物が出土した。

溝120(図13) 南半で検出した東西方向の溝で、約25mにわたり確認した。両端は調査区外に延びる。上半部には第2面の溝60、第1面の溝20が重複する。溝120の

159・182・191) がみられた。平瓦や礫を詰めるのは、柱根を固定するためとみられる。柱穴の間隔は0.9～1.1 mと不揃いである。各柱穴からは16世紀後半から17世紀前半の遺物が出土した。柱穴154からは金箔瓦(瓦68)が出土している。板塀の基礎と推定され、北六門と北七門の境界推定線からほぼ3 m北に位置する。

溝60(図13) 南半で検出した東西方向の溝であり、第3面で検出した溝120の上半に位置する。断面は逆台形で、幅約1.2 m、深さは検出面から約0.5 mある。埋土は黒褐色砂泥(5)で、炭を多く含む。溝内からは17世紀前半から中頃の遺物が出土した(図版60)。

土坑48 南半のほぼ中央で検出した。一辺1.2 mの方形を呈し、深さは検出面から0.2 mある。埋土は黒褐色砂泥で、炭、焼土を含み、土師器、陶磁器、瓦が出土した。出土遺物から16世紀末から17世紀前半とみられる。

土坑59 南半のやや西寄りで検出した。北半分は溝60に削平される。東西幅0.5 m、南北0.3 m、深さ0.2 mある。埋土は灰黄褐色砂泥である。土坑内からは17世紀前半から中頃の遺物が出土した。

土坑228(図版103-2、図14) ほぼ中央部の西壁際で検出した。大規模な土坑の東肩部とみられ、さらに調査区外へ延びる。検出面での規模は、南北約7.9 m、東西1 m以上、深さは1.1 mある。東肩は2段に傾斜する。西壁での層序をみると、中央部に4層から7層が堆積した後、北端と南端に2・3層が堆積しており、両端が窪み状となっていたようである。底部の標高は35.4～35.6 mであるが、北半には高さ0.4 mほどの高まりもみられる。土坑内からは16世紀中頃の遺物が出土した(図版60)。1区北西部で検出した船入状遺構(落込925)とは東肩の形状が類似し、底部標高も35.7 mでほぼ同じである。落込925については拡張区1において、底部に高まりがあること、東に下がる層序がみられることを確認しており、これらも類似点として指摘できる。

(3) 第1面(図版34・104)

江戸時代末期の火災整理層の下で検出した遺構群である。江戸時代中頃から末期に属する。東西の石垣・溝、その北側では小溝群、南側では焼瓦を含む火災処理土坑などを検出した。

石垣13(図版37) 南半で検出した東西方向の石垣である。上部は削平されており、基底部のみ

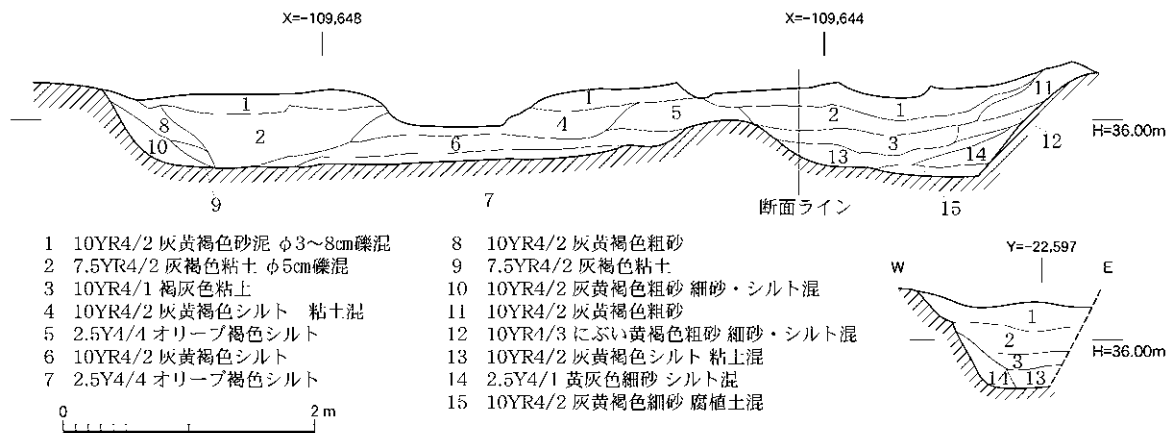


図14 2区土坑228断面図(上は西壁、右下はX=-109,644.2、1:60)

を検出した。東端は削平され、残存長は約 22 m である。残存状態も東半より西半が比較的良好であった。使用された石材は 0.2 ～ 0.5 m の自然石で、平坦面を南側に向けて 2 段以上積み上げている。石垣の裏（北）側には、幅 0.4 m で深さ 0.3 m の掘形をもつ。この石垣は、溝 20 と一体となり、敷地を南北に分ける境界施設であったとみられる。

溝 4 ～ 6 ・ 9 ～ 12 ・ 14 ・ 15 北半で検出した東西方向の小溝群である。いずれも幅 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m 程度の規模をもつ。検出長 5 ～ 7 m 以上で多くは調査区外に延びる。埋土はいずれも褐灰色砂礫で、土師器、陶磁器、瓦の小片が出土した。溝間の距離は、溝 15 ・ 14 間が 3.6 m、溝 14 ・ 10 間が 3.4 m とやや広く、溝 10 ・ 6 ・ 4 ・ 5 間はそれぞれ 2.0 m ・ 1.9 m ・ 1.7 m でほぼ等しい。耕作に伴う小溝群と推定できる。

溝 20（図版 37、図 13、写真 8）石垣 13 の南側に掘られた東西方向の溝であり、第 2 面の溝 60 上部に位置する。断面は U 字形で、溝幅は約 1 m、深さは 0.25 m ある。北肩には石垣 13 が積まれる。南肩では護岸のための杭穴を肩に沿って並んで検出した。溝の埋土は炭を多く含む黒褐色砂泥（4）で、土師器、陶磁器、瓦とともに鑄造遺物が出土した。底部標高は東端が 36.50 m、西端が 36.30 m であることから、西に向かって流れていたと判断できる。

溝 30（写真 8）Y=22,585 付近で石垣 13 ・ 溝 20 に取り付く南北方向の溝である。検出長約 2 m で、北壁に当たる。溝幅 0.4 m、深さ 0.15 m あり、東西両肩には長さ 0.3 ～ 0.4 m、幅 0.2 m の自然石が、平坦面を内側に向けて積まれ、1 段のみ残存していた。

土坑 1 南半の北壁際で検出した。隅丸方形を呈し、東西 1.5 m、南北 1 m 以上で、さらに北に延びる。深さは検出面から 0.5 m ある。埋土は黒褐色砂泥で、土師器、陶磁器、銅・鉄製品、鑄造遺物、石製品、銭貨などが出土した。出土遺物から 18 世紀後半から 19 世紀前半とみられる。

土坑 3 南半の南壁際で検出した火災処理土坑である。西側の土坑 7 と重複し、より古い遺構である。東西 1.2 m、南北 0.5 m 以上あり、深さは検出面から 0.2 m ある。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を多く含み、土師器、陶磁器、瓦、銅・鉄製品、鑄造遺物などが出土した（図版 61）。出土遺物から 18 世紀後半とみられる。

土坑 7 南半の南壁際で検出した火災処理土坑である。東側の土坑 3 の上から掘られている。東西 0.8 m、南北 1 m 以上で、深さは検出面から 0.6 m ある。埋土は黒褐色砂泥で、炭、焼土を多く含む。土師器、陶磁器、土製品、瓦、銅・鉄製品などが出土した。出土遺物から 18 世紀後半から 19 世紀前半とみられる。



写真 8 2 区溝 20 と溝 30 の交点（南東から）

土坑 16 南半で検出した火災処理土坑であるが、南半は攪乱で削平されている。東西約 3 m、南北 1.5 m 以上で、深さは検出面から 0.6 m ある。埋土は大きく 3 層に分かれ、第 1 層黒褐色砂泥、第 2 層黒褐色砂泥、第 3 層黄灰色砂泥となる。いずれの層も小礫、瓦、焼土、灰、炭を含むが、

特に第1・2層は多量であり、土師器、陶磁器、瓦とともに埴塼、鋤滓、轆羽口などの鑄造関係遺物も多くみられた（図版61）。出土遺物から17世紀中頃から後半とみられる。

土坑19 南半の西端で検出した廃棄土坑である。東半は攪乱で削平されている。南北2.3m、東西1.1m以上で、深さは0.3mある。埋土は黒褐色砂泥で、土師器、陶磁器、瓦類と鉄滓などが出土した。出土遺物から18世紀代とみられる。

土坑21 南半の東側で検出した火災処理土坑である。北東部は攪乱で削平されている。東西約2m、南北約1mで、深さは検出面から0.5mある。埋土は灰黄褐色砂泥で、炭、焼土を含み、土師器、陶磁器、瓦、銅・鉄製品、鑄造遺物が出土した。出土遺物から18世紀後半から19世紀前半とみられる。

土坑24 南半の西側で検出した火災処理土坑である。径約1mほどの円形で、深さは0.1mと浅い。埋土は黒褐色砂泥で、炭、焼土を多く含み、土師器、陶磁器、鑄造遺物が出土した。出土遺物から18世紀後半とみられる。

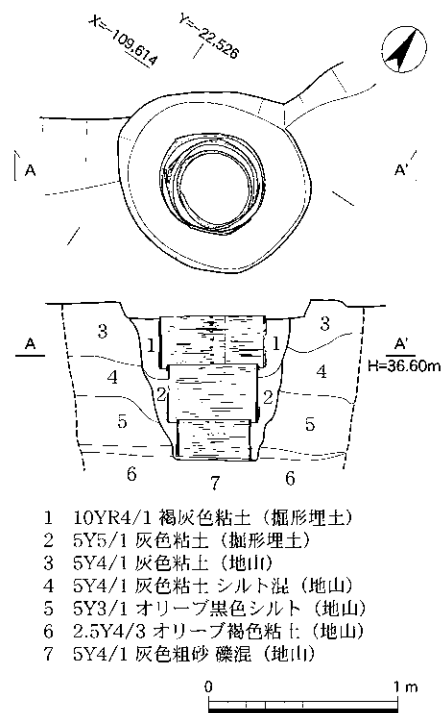
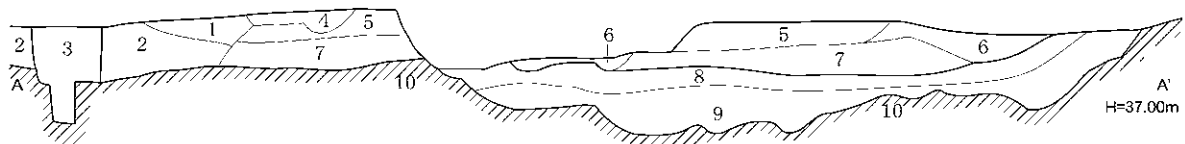


図15 3区井戸280 実測図 (1:40)



※ A-A'の位置は図版38参照

- | | |
|------------------------------|--------------------------------|
| 1 10YR5/3 にぶい黄褐色泥土 (層304) | 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭・瓦混 (層304) |
| 2 10YR2/2 黒褐色泥土 (層304) | 7 5Y3/2 オリーブ黒色泥土 小礫混 (層304) |
| 3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 (柱穴179埋土) | 8 N4/0~3/0 灰~暗灰色粘土 炭・礫混 (溝255) |
| 4 10YR3/2 黒褐色泥土~砂泥 礫混 (層304) | 9 7.5Y4/1 灰色粘土 炭・礫混 (溝255) |
| 5 10YR4/6 褐色砂泥~砂礫 小礫混 (層304) | 10 10Y4/1 灰色粘土 (地山) |



図 16 3区溝 255、整地層 304 断面図 (1:40)

4. 3区の遺構

(1) 第4面 (図版 38・105- 1)

地山上面ならびに北西部に堆積した平安時代後期の整地層 (層 306) 上で検出した遺構群である。平安時代後期に属する。井戸、溝、柱列、土坑などがある。

井戸 280 (図版 105- 2・3、図 15) 溝 255 の北西肩で検出した。掘形の平面形は円形で直径 1.0 m、深さは検出面から 0.85 mある。曲物を 3 段積んで井筒としている。曲物は上から大・中・小のものが積まれている。曲物の直径は上段が 0.54 m、中段が 0.47 m、下段が 0.38 m、高さはそれぞれ 0.27 m、0.30 m、0.21 mである。曲物内の埋土は、上から 2 段目までが暗灰色砂泥で、3 段目には直径 2~5 cmの礫が詰まっていた。井戸底は砂礫層で標高 36.05 mある。曲物内埋土と井戸掘形からは 11 世紀中頃の遺物が出土した (図版 62)。

溝 255 (図 16) 調査区の中央部で検出した。北東から南西方向の流路状の遺構であり、調査区の北壁、南壁外へ延びる。溝幅 3~5 m、深さは検出面から 0.6 mある。溝底の標高は、北端が 36.70 m前後、南端が 36.75 m前後で、傾斜はほとんどない。埋土は上層が暗灰色粘土 (8)、下層が灰色粘土 (9) で、土師器、炭、小礫を含む。埋土には細砂・微砂がみられず、南西側へ流れていたとしてもほとんど湿地状であったと判断できる。溝の底部には小規模な凹凸がみられた。埋土からは土器類 (図版 62)、瓦類とともに木製品 (折敷) が出土した。

柱列 305 溝 255 の東肩に沿うかたちで検出した柱穴列である。柱痕跡は明瞭であった。整地層 (層 304) の上から掘り込むことを確認したが (図 16)、柱穴 289・259・265・273 などからは 11 世紀後半から 12 世紀初めの遺物が出土している。柱穴間の距離は、柱穴 290・259 間が 2.06 m、柱穴 259・293 間が 2.2 m、柱穴 293・265 間が 2.2 m、柱穴 265・273 間が 2.1 mである。また柱穴 259 と柱穴 293 の中間には柱穴 258、柱穴 293 と柱穴 265 の中間には柱穴 264 がある。柱穴が規則的に配置されていること、溝 255 東肩に沿うことなどから、ここには柵状の施設があったと判断できるが、層位的には溝 255 が埋まった後に作られたとみるのが妥当といえる。

土坑 249 西端中央部で検出した。東は後世の攪乱を受ける。西側は浅くなり肩部は不明瞭となる。東西に長い窪み状の遺構で、長さ 2.5 m以上、幅約 1.2 m、深さは検出面から 0.14 mある。埋土から 11 世紀後半から末頃の遺物が出土した (図版 62)。

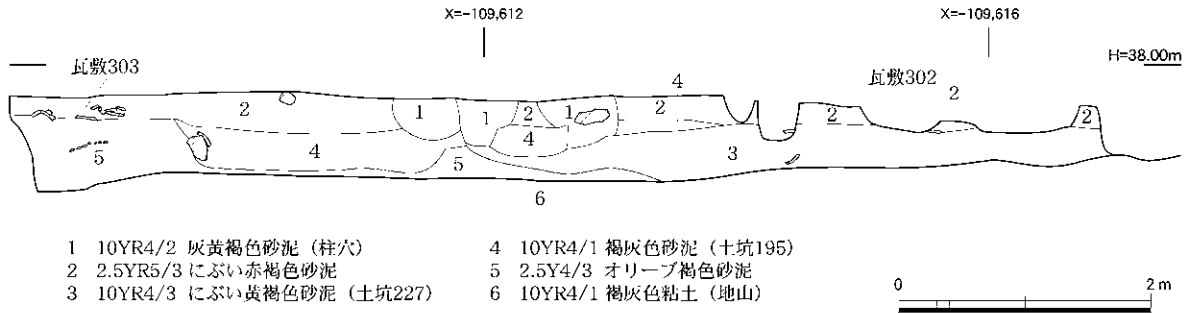


図 17 3区南北セクション断面図 (Y=-22,520、1:60)

土坑 286 東端中央部で検出した。東西方向に長い溝状の窪みで、長さ 3.5 m 以上、幅 0.5 ~ 0.9 m、深さは検出面から 0.5 ~ 0.8 m ある。埋土からは 11 世紀前半から中頃の土師器高杯、完形の須恵器壺、白色土器椀などが出土しており、これらは祭祀に使用された可能性がある (図版 62)。



写真 9 3区瓦敷 303 (南から)

この他では、北西部で柱穴 300・298・299・249・245・275 などを検出した。柱穴 300 には凝灰岩が入れられていた。また東半部においても、溝 256、小規模な土坑 241・柱穴 282・283・242 などを検出した。溝 256 は幅 0.4 m で深さ 0.1 m 程であった。

(2) 第 3 面 (図版 38・106-1)

平安時代後期から鎌倉時代の遺物を含む整地層 (層 304、図版 3 の断面 10 の 18 層など) の上面で検出した遺構群である。瓦敷面、柱穴群、土坑などがあるが、遺構数は少数にとどまった。

瓦敷 302・303 (図 17、写真 9) 南半の分布範囲を「瓦敷 302」、北壁際のを「瓦敷 303」とした。瓦敷 302 は、X=-109,614 から南約 4 m の範囲で東西に分布する。高低差は、東側が標高 37.63 m、西側が標高 37.26 m で、西側がやや低くなっているが、これは下に溝 255 などが存在したためである。瓦敷 303 は、北壁際の Y=-22,518 ~ 22,523 間に分布し、標高 37.68 m で瓦敷 302 よりやや高い。Y=-22,520 断面図 (図 17) をみると、瓦敷 302 の下には土坑 227 が、瓦敷 303 の下にも土坑があり、瓦敷 302・302 はそれらを整地するために敷かれたことがわかる。このような瓦敷面は 3 区以外では検出しておらず、3 区内においても北西部は標高が高いためこの瓦敷は及んでいない。両瓦敷から出土した軒平瓦は偏行唐草文 (瓦 103・106) が多く、1 区から出土した軒平瓦との違いは明瞭である (第 5 章の図 30 参照)。この付近に瓦葺の建物が存在していた可能性は高いといえる。

柱穴群 X=-109,616 付近には集中してみられたが、建物としてまとまるものはない。図版 38 では「柱穴群」と表示し、番号のみを示した。

土坑 195・227 (図 17) 土坑 195 は中央部の北西寄り、土坑 227 はその南で検出した。ともに深さは 0.4 m 程あり、形状から土取穴とみられる。Y=-22,520 断面図 (図 17) をみると、南側の土坑 227 が上になること、その上には瓦敷 302 が乗ることがわかる。土坑 195・227 埋土からは 11 世紀後半から 12 世紀初め頃の遺物が出土しており、瓦敷の年代を推定する手がかりとなる。

土坑 200・281 とともに北西部で検出した。土坑 200 は東西 6 m に及ぶ不定形の土坑で、西肩と東肩を確認した。土坑 281 は土坑 200 の下で検出したもので、長さ 2.2 m 以上、幅 1.5 m、深さ 0.2 m 程である。14 世紀前半から後半の遺物が出土した (図版 63)。

(3) 第 2 面 (図版 39・106- 2)

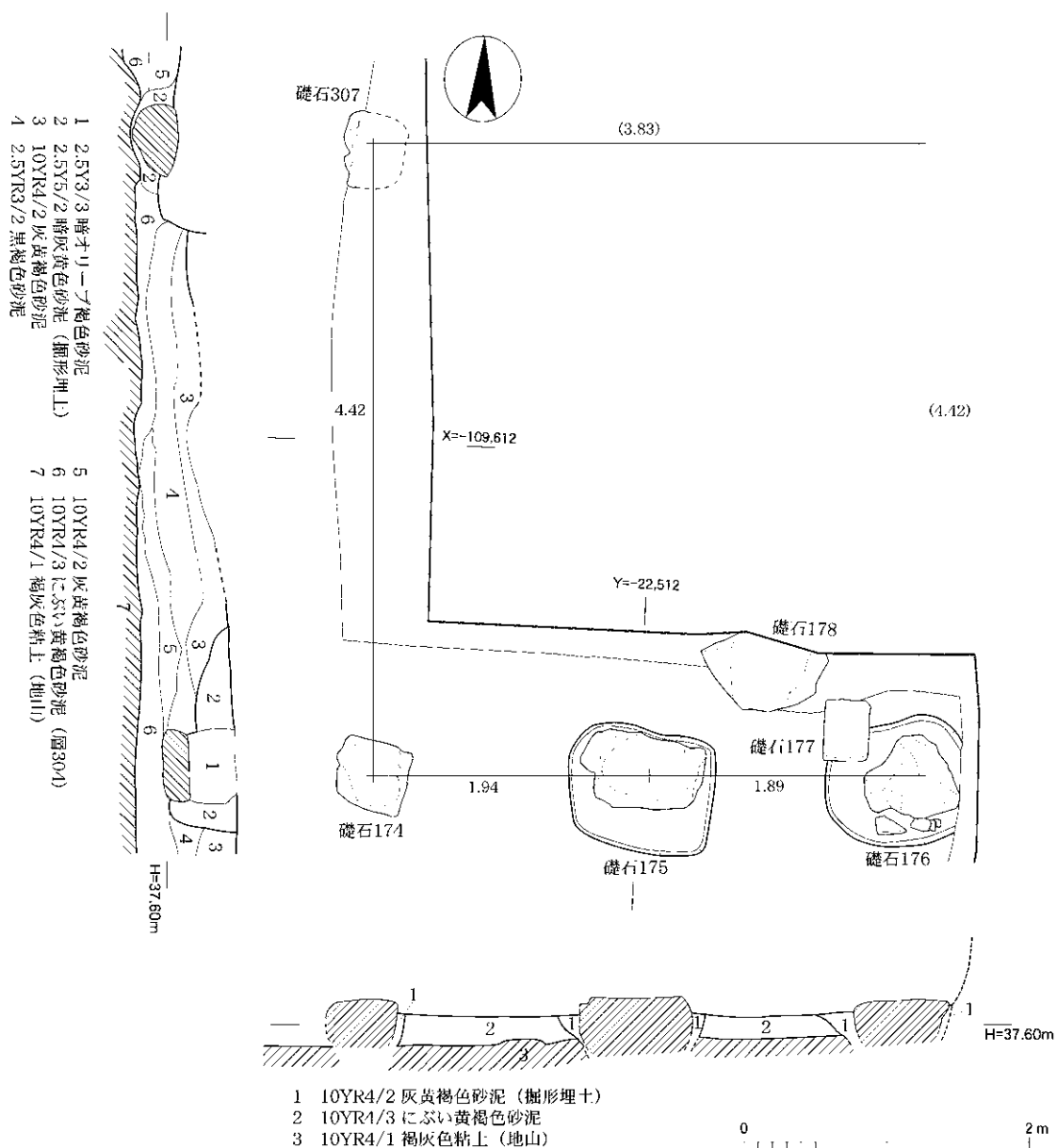


図 18 3 区門 301 実測図 (1 : 50)

現地表下 0.7 m 付近にある中世の遺物を含む整地層（図版 3 の断面 10 の 15 層）上面で検出した遺構群である。桃山時代から江戸時代前期の建物、門、井戸、溝、土坑などがある。

建物 180（図版 40） X=-109,612 付近、X=-109,614 付近、X=-109,616 付近では柱穴が東西に並ぶため、これらから東西 10 間以上で南北 2 間の掘立柱建物を想定し「建物 180」とした。柱穴は重複するものが多数あるが、建物を構成する柱穴と考えたものは、北列では西から柱穴 151・90・85・86・35・37・38・39・172、中央列では柱穴 161・160・91・92・132・130・72・125・168・171、南列では柱穴 158・159・74・97・143・190・170・108・67・66・184・154 である。柱穴の平面形は円形あるいは楕円形で、直径は 0.4 m 程度、深さも 0.4 m 程度が一般的である。柱間隔はきわめて不揃いである。狭いもので 0.8 m、広いもので 1.6 m あり、平均すれば 1.24 m である。この他、柱穴 90・85・86・35・37・39・160・158・74・143・190・108・66・184・154 内には径 0.2 m 前後の石が据えられ、柱穴 72・125 では瓦片が敷かれていた。この建物 180 については、東端は確認できたが、西端は確認できていない。また、北列、中央列、南列の各柱穴は南北方向には柱筋が通らない。しかも南列は北の 2 列と平行でなく開き気味となっており、問題点となっている。

門 301（図 18） 東壁のほぼ中央に礎石 174 を検出したため、東へ拡張したところ、礎石 175・176 を検出した。礎石間の距離は、礎石 174・175 間が 1.94 m、礎石 175・176 間が 1.89 m で、1 間（この場合の平均値は 1.91 m）で割り付けられたと推定できる。また東壁では、礎石 174 の北側に礎石 307 を検出しており、北西端の礎石と推定できた。礎石 174・307 間は 4.42 m（約 2.3 間）であった。礎石の種類は 174・176 が砂岩、175・307 が花崗岩である。礎石上面の標高は、礎石 174・175・176 が、37.78 m・37.80 m・37.78 m とほぼ水平であるが、礎石 307 は 37.68 m とやや低い。礎石 175 は長径 0.85 m と最も大きく、ここが棟筋と東西に四脚門が復元できる。土井屋敷の東門に想定できる。

井戸 89 東壁沿いで検出した。掘形は長径が 2.0 m、短径が 1.5 m の楕円形である。井筒は直径 0.7 m の円形であるが、井筒の施設は認められず、撤去したものと考えられる。底までの深さは検出面から 2.3 m ある。17 世紀前半から中頃までの遺物が出土した（図版 65）。

溝 115 南西部で検出した。南北方向の溝状の遺構である。幅 0.5 m 前後で、深さ 0.2 m ある。

土坑 7 北西部の北壁沿いで検出した。南北約 1 m あり、東は攪乱で壊される。深さは検出面から 0.6 m ある。17 世紀中頃の遺物が出土した（図版 64）。

土坑 54 南西部で南壁にかかりで検出した。東西長 0.95 m あり、深さは検出面から 0.17 m ある。16 世紀後半の遺物が出土した。

土坑 58 中央部で検出した。直径 1 m の円形で、深さは検出面から 0.72 m ある。16 世紀後半の遺物が出土した。

土坑 68 北東部で北壁にかかり検出した。長さ 3 m 以上、幅 2 m、深さ 1.3 m あり、形状から土取穴と考えられる。

土坑 83 中央部の北壁際で検出した。東西 1.6 m あり北半は調査区外に延びる。深さは検出面



写真 10 3区礎石 178 (左上、中央は手前から
礎石 175・176、西から)

から 0.66 mある。16 世紀末から 17 世紀初めの遺物が出土した (図版 64)。

土坑 88 北西寄りで北壁にかかり検出した。長さ 3.8 m、幅 1 m以上、深さ 0.5 m程で、規模、形状は土坑 68 に類似する。16 世紀末から 17 世紀初めの遺物が出土した (図版 64)。

土坑 110 北西寄りで検出した。直径 1 mの円形を呈し、深さは 0.2 mある。形状は土坑 58 に類似するがそれよりも浅い。

土坑 186 南西部で南壁にかかり検出した。長さ 2.2 m以上、幅 0.55 m、深さ 0.15 mある。北延長にある土坑 88 と形状・規模が類似する。

(4) 第 1 面 (図版 39・107- 1)

現地地表下約 0.5 mにある江戸時代後期の整地層 (図版 3 の断面 10 の 13 層) 上面で検出した遺構群である。江戸時代後期から明治時代に属し、建物礎石、井戸、土坑などがある。遺構は全面に広がるが、密度は粗い。

礎石 178 (写真 10) 礎石 175・176 の北側、現地地表直下で検出した。砂岩製で東西長 0.9 mあり、礎石 175・176 と同規模である。門 301 を踏襲する位置にあり、幕末期の焼土層を掘り込むため、明治 5 年 (1872) 当地に小学校が移ってきた後に建てられた門の礎石と考えられる。礎石上面の標高は 38.55 mで、礎石 175・176 より 0.77 m高い。

井戸 116 東端で検出した瓦積井戸である。掘形は南東側に伸びた楕円形で、長径 1.6 m、短径 1.3 mある。井筒は、井戸枠用に製作された平瓦 9 枚を円形に組んだものを 3 段積み重ねている。井筒の内径は 0.8 m、深さは検出面から 1.89 mで底となる。19 世紀代の遺物が出土した。

井戸 134 中央部の北西寄りで検出した。掘形は円形で直径 1.8 mある。石組井戸であったとみられるが、石は持ち去られたためか残存しない。深さは検出面から 0.55 mある。18 世紀末から 19 世紀初めの遺物が出土した。

土坑 59 中央部の南寄りで検出した。東西 2.3 m、南北 1 mあり、検出面からの深さは 0.6 mある。18 世紀後半から 19 世紀前半の遺物が出土した。

土坑 12・13・33・81 北壁際で検出した。方形ないし長方形を呈するが、全体は判明しない。規模、形状から土取穴と判断できる。

この他として南西部で土坑 19・52、中央の南寄りで東西方向の溝 25、北西部から中央付近でも小規模な土坑、柱穴を検出している。

5. 拡張区の遺構

拡張区 1 (図版 41)

1区北東部の落込 925 西側の状況を調べるために設定した調査区である。最大幅 2.3 m で東西 10.55 m を調査区としたが、1区と重複する分を除くと調査面積は 9 m²となる。

拡張区においては推定通り落込 925 の延長部を検出した。ただし、北壁の Y=-22,596 付近では底が 0.5 m ほど立ち上がり、落込 925 の西延長部は底部が平坦でなかったことが判明した。また、1区の落込 925 の底には木質遺物を含むシルト（図版 1 の断面 1 の 8 層）がみられたが、拡張区ではこれに相当する 15 層が西から東に下る状況がみられた。15 層より上の 9～13 層も東下りであり、東側にかけてレンズ状に堆積することも判明した。Y=-22,596 の西には別の掘り込みがみられたが、これが南側にまで広がる遺構であったかは確認できなかった。このように、落込 925 は西壁から約 3 m までは延長するが、底部には高まりがあり、埋める際の層序も東下りであったことなどが、新知見として得られた。

拡張区 2（図版 41・107- 2・3）

池 1810 の南への延長を調べるために、1区南端中央部に設定した調査区である。幅 1.4～2.8 m で南北 11.25 m を調査区としたが、1区と重複する部分を除くと調査面積は 16.7 m²となる。X=-109,620 以南は体育館（1985 年に調査）建設・解体時の攪乱があり、攪乱底は現地表下 2.6 m に達していた。南北両端の攪乱を除くと、調査できたのは南北 4.35 m 分であった。

東壁での層序は、現地表下 0.4 m に江戸時代末期・明治時代の整地層（層 75）が厚さ 0.4 m あり、以下、5 層（厚さ 0.15 m）が堆積する。X=-109,616.5 付近では、5 層直上に胞衣壺が据えられていた。現地表下 1.0 m には池 1810 を埋めた整地層が厚さ 0.5 m ほど堆積する。整地層の層序は北下りであるが、この傾斜は 1 区の南北セクションで観察された傾斜とは反対であった。北端にある 6・7 層は土坑 1654 の埋土である。当初、7 層を溝 1600 南肩と考えたが、この箇所は土坑 1654 の埋土と判明した。しかし、西壁の状況ならびに後述する断面 3 の所見から、溝 1600 はやはり東西方向の溝であり、幅 1.6 m 前後で深さ 0.3 m あることが確実となった。

次いで、池 1810 底に堆積した粗砂（12）が南に延長することも確認した。また池に伴う施設として、X=-109,616.5 付近でチャート製の景石を 1 石検出した。景石 2013 は長径 0.5 m ほどの角礫で、頂部の標高は 37.05 m あり、池底よりやや浮いた状態で据えられていた。池 1810 底部の標高は、北端で 36.65 m、南端で 36.70 m と、若干南側が高い。溝 1600 の規模と形状が推定できたこと、池 1810 は南へ 4.4 m 以上広がること、池は南から北に埋められたことなどが新知見となった。

拡張区 3（図版 42）

1区で検出した溝 2010（当初は「池 1810b」とした）と体育館建設に伴う調査（1985 年調査）で検出した「溝状遺構」とのつながりをみるために設定した調査区である。幅 1.7～2.2 m で南北 12.2 m を調査区としたが、1区と重複する部分を除くと調査面積は 19.6 m²となる。拡張区 2 同様、X=-109,622 以南は体育館攪乱となる。南北両端の攪乱を除いた 5 m 分が調査範囲であった。

現地表下 0.25 m に堆積する 1 層は「層 75」とした層である。その下にある 6 層は焼土塊を多く含み、図版 2 の断面 8 での 9 層に当たる。5・12 層はほぼ水平に入れられた整地層である。10 層は溝 1600 埋土である。南肩は柱穴（9）で壊されていたが、この所見によって東西方向の溝であ

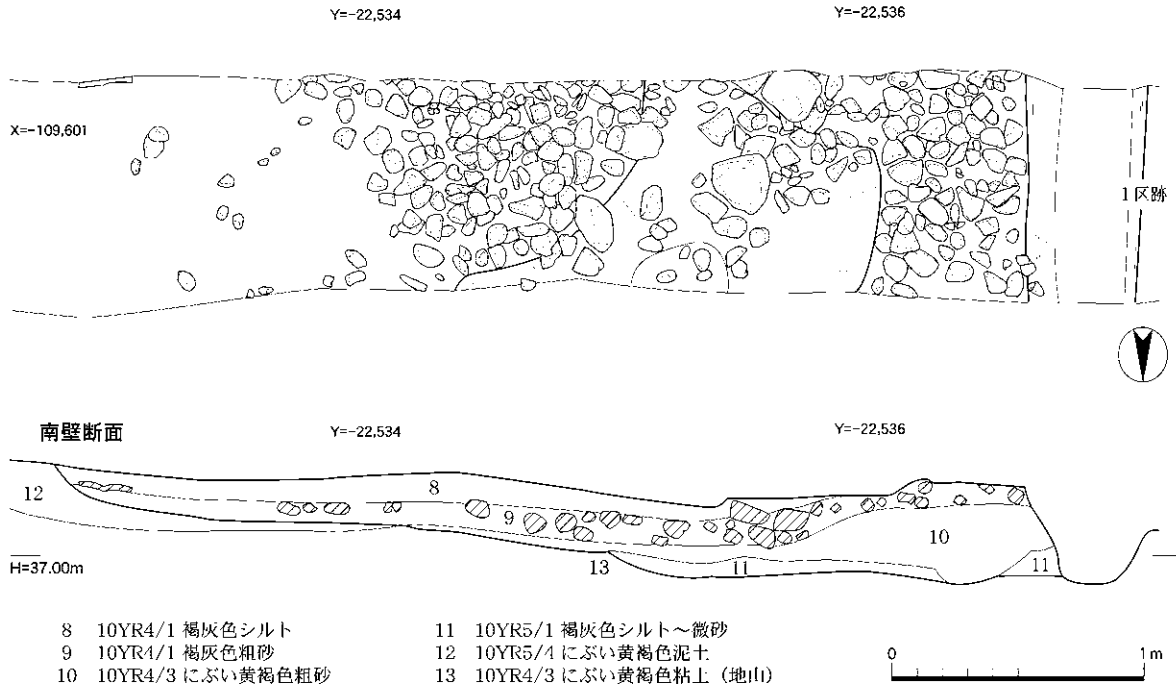


図 19 拡張区 4 洲浜実測図 (1 : 30)

ることが確実となった。15層は溝 2010 としてのもの埋土であるが、この遺構も X=-109,617.05 付近に南肩があることが判明し、1区の所見も総合すると、幅 3.3 m で深さ 0.3 m ある東西溝と考えるのが妥当となった。さらにこの遺構は、3区で検出した溝 255 の西延長に当たる可能性があり、3区から蛇行しつつ、この拡張区 3 を経由して 1985 年調査地の「溝状遺構」に至っていたとも考えられる。この溝の性格であるが、池 1810 との接点は確認できていないが、池 1810 への遣水と考えるのが妥当であろう。13層は土坑状遺構の埋土であるが底には凹凸があり、樹木による植生痕跡と考えられる。南端で検出した 3・4層は土取穴埋土である。この調査区では、「溝状遺構」は検出できなかったが、溝 2010 の性格を確定させる所見が得られた。

拡張区 4 (図版 42・107- 4、図 19)

1区の南東部で検出した砂層 1685 の東延長を調べるために設定した調査区である。幅 1.2 ~ 1.6 m で東西 6.3 m を調査区としたが、1区と重複する部分を除くと調査面積は 5.8 m²となる。

現地表下 0.25 m にある 2層は「層 75」としたもので、厚さ 0.25 m ある。その下にある 4層は、よく締まったにぶい黄褐色粘土で、平安時代後期の整地層に類似するが、層 75 直下に達する点は浅すぎて疑問が残る。5 ~ 7層は西下りの層序を呈する。12層が東肩をなしたためと判断される。8層はシルト質であり、底には礫が敷かれることから、池底に堆積したシルトと判断できる。9層上面では東西約 3 m の範囲に拳大の礫が敷かれ、洲浜が構築されていた。南壁の層序をみると、この 8層・9層は東が 12層、西が 10層を肩として、幅約 3 m の南北溝となっている。10層は粗砂で、1区で検出した砂層 1685 の東延長に当たる。1区東壁付近が 0.2 m と最も厚く、東に行くほど薄くなる。11層は地山直上に堆積したシルトである。層内にはラミナがみられ、東へ 1.3 m で消滅する。洲浜に敷かれた礫には様々な色調のものが含まれていた。礫種と色調の関係をまとめると、頁岩～

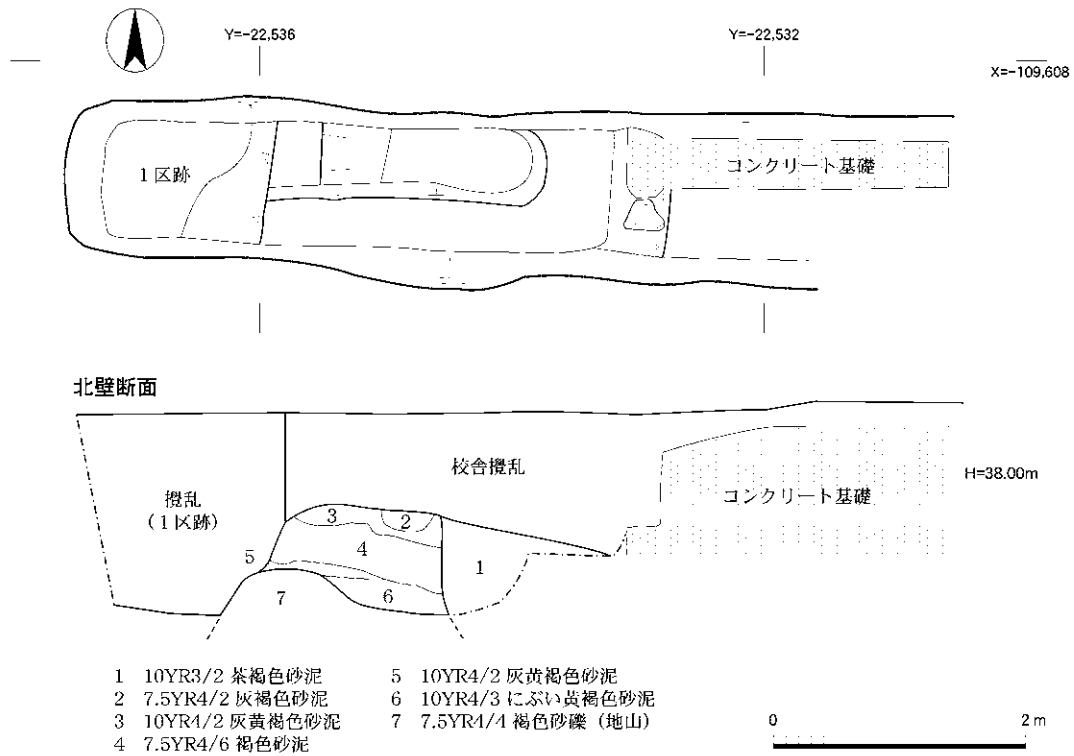


図 20 拡張区 5 実測図 (1 : 60)

粘板岩 (黒)、砂岩 (灰・緑・赤)、チャート (黒・灰・白・橙・赤) となる。

拡張区 5 (図 20)

3 区北西隅と 1 区の関係を見るために設定した調査区である。幅 1.3 m で東西 7.4 m を調査区としたが、西端は 1 区と重複するため調査面積は 8 m² である。

Y=-22,532 には南北校舎のコンクリート基礎が残存し、西側は上から 0.7 m まで攪乱が及んでいた。遺構が残存するのは、Y=-22,535 を中心とした東西 1.4 m の範囲である。1 層としたものは遺構埋土で、掘り込みが垂直であるため井戸と推定でき、井戸枠は検出できていない。17 世紀代の陶磁器類と石仏 (阿弥陀如来) が 1 体出土した。2 層は柱穴埋土、3・4 層は平安時代後期の整地層とみられる。5 層はシルト質で水平に堆積するが、西端から 1 m のみにみられた。

拡張区 6

3 区東壁に礎石が据わっていたため、東延長を調べる目的で設定した調査区であり、東に約 4 m (8 m²) 調査した。成果については 3 区で報告している。

拡張区 7

3 区東壁にみられた礎石の北延長を調べるために設定した調査区であるが、北壁から 1 m 先は攪乱であり、1 m² ほどを調査するにとどまった。

第 4 章 遺 物

1. 遺物の概要

旧石器時代から明治時代にいたる各時代の遺物が1～3区・拡張区合わせて、整理箱に1143箱出土した。出土遺物の内容は土器・陶磁器・瓦類・土製品・木製品・金属製品・骨角製品・ガラス製品・石製品・動植物遺体など多岐にわたるが、遺物の大半が土器類や瓦類である。以下のこれらの遺物について概説する。

旧石器時代の遺物は、3区の土坑68から混入遺物として有舌尖頭器が1点出土した。

縄文時代の遺物は、1区の砂礫層（流路2009A）から出土した中期の船元式の深鉢が1点ある。また2区流路296からも船元式の土器片が出土した。

平安時代前期から中期の遺物は、池や整地層などから混入遺物として出土したものがほとんどで、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・白色土器・瓦類などがあるが量は少ない。3区では包含層から緑釉軒丸瓦が1点、層1505・1195から石帯が2点出土した。前期の軒瓦は種類・量とも少ないが、中期になると軒瓦の種類・量は多くなる。

平安時代後期の遺物は、池・土坑・溝・整地層などから土師器を中心に須恵器・灰釉陶器・白色土器・瓦器・輸入陶磁器・軒瓦などが出土している。土師器は皿を中心に池1570・1810や土器溜1840などからまとめて出土した。池1570底の地業2000からは木簡や土師器皿・墨書土器が出土している。木簡2点には「方上」「岐」とあり、これは地名とみられ、池の造営に関する資料として注目される。軒瓦は池や上面の整地層の他に、桃山時代から江戸時代初前期の土取穴、3区の層304、瓦敷からも多量に出土している。その他、金属製品・木製品・石製品が少量であるが出土している。

鎌倉時代の遺物は、井戸・土坑・溝などから土師器・白色土器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器・瓦類・石製品などが出土している。特に井戸1197から土師器皿や瓦器椀が、土坑1190や井戸1640からは乙訓産の土師器皿がまとめて出土している。軒瓦は小型の剣頭文・蓮華文が多い。

室町時代の遺物は、井戸や土坑・溝などから土師器を中心に瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器・滑石製羽釜などが出土しているが、他の時代と比較すると量的に少ない。土坑1200からは土師器皿と共に瓦器鍋・羽釜が十数個体出土している。井戸1400・2区土壇174・228・溝120からは室町時代後期に属する土器類が出土している。

桃山時代から江戸時代前期にかけての遺物は、落込・土坑などから土器・陶磁器・瓦類・石製品・金属製品・木製品・铸造関係遺物などがある。土師器は皿をはじめ焙烙・焼塩壺・浅鉢などがある。国産施釉陶器は種類が増え、織部や志野などの瀬戸美濃産や唐津などの各産地のものがある。焼締陶器も丹波・備前・信楽の甕・播鉢などがある。また、それまでの磁器染付は中国などからの輸入であったが、肥前の磁器が出現するのも江戸時代前期からである。軒瓦では唐草文や三巴文の他に、金箔瓦が土坑や2区柱穴、3区では包含層から出土している。土器以外には木製品や铸造関係遺物、動植物遺体などが主に落込925から出土している。

江戸時代の中期から後期の遺物は、落込・井戸・土坑・溝などから出土している。遺物は土師器皿の出土量は少なくなり、土師質土器では焙烙・焼塩壺以外に焜炉・火入れ・火消壺など深草産の製品が増える。また人形や泥面子、箱庭道具などの土製品も多い。国内産陶磁器は、江戸時代初頭

から引き続くものに加えて産地も器種も増え、多種多様なものが見受けられる。陶器では京信楽・堺明石産、磁器では肥前の他に瀬戸美濃・京都産などが加わり、器種は椀・皿以外に鍋・土瓶・仏具・灯明具・植木鉢を含む鉢類など日常の生活用品が増える。瓦類は棧瓦以外に井戸瓦などの道具瓦が増える。石製品には硯・砥石・火打石・基石などの他に土井家の敷地の境界を示す石碑がある。その他、木製品や金属製品などが出土した。

2. 土器・陶磁器類

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
旧石器時代	石器	少量	有舌尖頭器1点		
縄文時代	土器	少量	縄文土器2点		
奈良時代	瓦		軒平瓦3点		
平安時代	土師器、白色土器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、土製品、瓦、石製品、銭貨、木製品、壁土		土師器271点、白色土器31点、黒色土器4点、須恵器15点、緑釉陶器20点、灰釉陶器(山茶椀を含む)19点、瓦器3点、輸入陶磁器20点、土製品9点、軒丸瓦41点、軒平瓦58点、刻印瓦4点、緑釉熨斗瓦2点、石製品7点、銭貨4点、木簡2点、壁土14点、植物遺存体一括		
鎌倉時代～室町時代	土師器、白色土器、須恵器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦、石製品、銭貨、木製品		土師器422点、白色土器8点、須恵器1点、灰釉陶器(山茶椀を含む)2点、瓦器57点、焼締陶器2点、国産施釉陶器1点、輸入陶磁器24点、軒丸瓦9点、軒平瓦12点、石製品11点、銭貨32点、木製品7点		
桃山時代～江戸時代前期	土師器、瓦器、国産施釉陶磁器、焼締陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦、石製品、銭貨、金属製品、木製品、鑄造、壁土		土師器129点、瓦器3点、焼締陶器13点、国産施釉陶器86点、国産磁器3点、輸入陶磁器23点、軒丸瓦8点、軒平瓦4点、棟丸瓦1点、金箔瓦3点、道具瓦1点、刻印瓦1点、石製品12点、銭貨17点、金属製品6点、木簡2点、木製品36点、鑄造3点、壁土11点、動植物遺存体一括		
江戸時代中期～後期	土師器、瓦器、国産施釉陶磁器、焼締陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦、石製品、銭貨、金属製品、木製品、鑄造、骨角製品		土師器73点、瓦器1点、焼締陶器3点、国産施釉陶器49点、軟質施釉陶器6点、国産磁器49点、土製品14点、軒丸瓦5点、軒平瓦11点、棟丸瓦1点、軒棧瓦3点、石製品80点、銭貨3点、金属製品44点、鑄造1点、骨角製品19点、ガラス製品33点		
明治時代以降	石製品、ガラス製品、土製品		石製品18点、ガラス製品12点、土製品1点		
合計		1193箱	1906点(73箱)	374箱	746箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後Aランクの遺物を抽出したため、出土時より50箱多くなっている。

出土遺物の大半を占めるのが土器類である。¹⁾ここでは各時代の主な遺構から出土した土器について、1区、2区、3区の順に概説を述べる。また、土器以外に土製品も掲載する。²⁾

(1) 1区の土器

井戸 1510 (図版 43・108) 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器があるが小片である。土器の時期はⅢ期古に属する。図示できたものに土師器、黒色土器がある。土師器には皿 A (1) がある。非常に薄く作られ、口縁は強く屈曲し、端部は小さく摘み上げる。口径 13.6 cm、高さ 1.9 cm である。黒色土器には甕 (2) がある。内面を黒色化させた A タイプで口径は 19.0 cm。ミガキはなく、内面にハケメが残る。

井戸 2007 (図版 43・108) 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などがある。土器の時期はⅢ期中に属する。灰釉陶器には美濃産の椀 (3) がある。口径 14.4 cm、高さ 6.5 cm あり完形。高台内に「大」の墨書がある。

地業 2000 (図版 43・108) 土師器、白色土器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、輸入白磁などがある。土器の時期はⅣ期中～新に属する。多種に富むが小片が多く、図示できたのは土師器皿のみである。土師器には皿 A (4)、皿 N (5～7) がある。皿 A は口径 10.0 cm、高さ 1.6 cm である。皿 N は口径 12.4 cm、高さ 1.9 cm のもの (5)、口径 15.4～16.8 cm、高さ 2.9 cm のもの (6・7) の 2 群がある。口縁部が外反し、2 段のナデ痕を残す。

地業 1800 (図版 43) 土師器、白色土器、須恵器、灰釉陶器、輸入白磁などがある。土器の時期は地業 2000 と同時期でⅣ期中～新に属する。土師器には皿 N (8) がある。口径 13.4 cm、高さ 3.1 cm である。体部は緩やかに開き、口縁部は 2 段のナデを残す。

土坑 1840 (図版 43・108・109、写真 11) 土坑 1840 は池 1810 の中に掘り込まれた土坑で、出土土器は土師器皿が 9 割以上を占める。その中でも皿 Ac に台がつくものが 3 分の 1 を占め、また他に底部に穿孔のある皿、中に舌状の土塊が入った小壺など、他の遺構では見られない特性をもった土器が多い。土師器以外は、須恵器、瓦類などの小片がごく少量あるだけである。土器の時期はⅣ期中に属する。土師器には皿 A (9～16)、皿 N (17～36)、皿 Ac (37～58)、台付き皿 (59)、小壺 (60) がある。皿 A は口径 9.6～10.4 cm、高さ 1.6～2.1 cm あり、器壁の厚いものが含まれる。皿 N には口径 9～11 cm 台の小型のもの (17～24)、口径 14 cm 台の中型のもの (25～28)、口径 15～17 cm 台の大型のもの (29～36) の 3 群がある。口縁端部は外反し、2 段ナデがある。27 は底部中央に長径 1.8 cm、短径 1.5 cm の穿孔がある。皿 Ac は口縁を内側に折り曲げたコースター形のもので、口径 9～10 cm 台のもの (37～39)、口径 11～12 cm 台のもの (40～49) の 2 群に加えて、口径 12～13 cm 台 (50～58) の台付きの 1 群がある。台は径約 7 cm 前後で、出土した個体のすべてが欠損しており、高さは不明である。これは土坑に捨てる前に、台部は破却されていたと考えられる。またコースター形の皿の色調が赤・白系の両方あるのに対して、台付きの場合はすべて白系である。これらのことから台付きコースター形皿は儀式などに使われるために一括で注文生産された可能性がある。59 は皿の台部のみが遺存している。台の径が 5.4 cm、高さ 1.7

cmと小さい。小壺は口径 4.0 cm、高さ 5.9 cm、厚さ 0.7 ~ 1.2 cmあり、大きさの割に重い。手捏ねで口縁を貼り付ける。開口部は径 1.4 cmと小指が入るくらいの大きさである。中に舌状の土塊があり、振ると土鈴のような音がする。用途は不明。

池 1810 (図版 43・109) 整理箱に約 20 箱ある。土師器、白色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器などがあるが、土坑 1840 より新しい時期の要素をもった土器が混じる。土器の時期



写真 11 土師器小壺 (土坑 1840 出土)

はIV期中～新に属する。土師器には皿 A (61 ~ 63)、皿 N (64 ~ 69) がある。皿 A は口径 9.6 ~ 10.0 cm、高さ 1.8 ~ 1.9 cm。器壁は厚い。皿 N は口径 12 cm台のもの (64)、口径 14 ~ 16 cm台のもの (65 ~ 69) の 2 群がある。口縁端部が外反し、2 段ナデがある。緑釉陶器には美濃産の椀 (70) がある。底部のみ残存している。糸切り底に貼付高台。全面に釉が掛かり、見込みと高台内に目跡が付く。輸入陶磁器には白磁椀 (71) がある。削出高台で、白濁した釉が掛かる。底部内面に目跡が付く。

溝 1735 (図版 43・109) 土師器、白色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器などがある。土器の時期はIV期中に属する。土師器には皿 A (72 ~ 74)、皿 N (75・76) がある。皿 A は口径 10.6 ~ 11.2 cm、高さ 1.7 ~ 2.2 cmある。下層から出土した 73・74 は口径が少し大きく、やや古い時期の要素をもつ。皿 N は口径 14.2 cm、高さ 2.5 cmのもの (75)、口径 15.0 cm、高さ 2.9 cmのもの (76) がある。灰釉陶器には山茶椀 (77) がある。底部のみの残存である。貼付高台で、内面には自然釉が掛かる。内面底部は磨滅し平滑になっており墨が付着する。

池 1570 (図版 44・110) 土師器を中心に白色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。遺物はそれぞれシルト 1・シルト 2・シルト 3 から出土している。シルト 3 からはIV期中～新に属する土器が、シルト 2 からはIV期新～V期古の土器が、シルト 1 からはV期古を中心とした土器が出土した。このように遺物には時期幅がある。

シルト 3 図示できたものに土師器、白色土器がある。土師器には皿 A (78・79)、皿 Ac (80 ~ 83)、皿 N (84 ~ 93) がある。皿 A は口径 10.3 cm前後、高さ 1.5 cm前後。皿 Ac は口径 10.3 cm、高さ 1.2 cmのもの (80・81)、口径 12.8 cm前後、高さ 1.4 ~ 1.8 cmのもの (82・83) の 2 群があり、後者はやや大型である。皿 N は口径 10.1 ~ 10.6 cm、高さ 1.8 ~ 2.1 cmのもの (84 ~ 87)、口径 12.5 cm、高さ 2.5 cmのもの (88)、口径 15.1 ~ 15.5 cm、高さ 2.7 ~ 3.1 cmのもの (89 ~ 93) の 3 群がある。口縁部が外反し 2 段のナデ痕を残す。白色土器には椀 (94) がある。口径 14.3 cm、高さ 5.4 cmでロクロ成形。体部は大きく直線的に開き、口縁端部は丸く収まる。底部は糸切り未調整。

シルト 2 土師器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。土師器には皿 A (95 ~ 100)、皿 Ac (101 ~ 108)、皿 N (109 ~ 120) がある。皿 A は口径 9.8 ~ 10.4 cm、高さ 1.4 ~ 1.6 cmある。皿 Ac は口径 8.9 ~ 10 cm、高さ 1.1 ~ 1.7 cmのもの (101 ~ 105)、口径 10.7 ~ 11.5 cm前後、高さ 1.0

～1.4 cmのもの(106～108)の2群がある。皿Nは口径9.9～10.7 cm、高さ1.7～2.1 cmのもの(109～112)、口径12.2 cm前後、高さ2.0 cm前後のもの(113・114)、口径14.7～15.4 cm、高さ2.7～3.1 cmのもの(115～119)の3群の他に、口径16.5 cm、高さ3.9 cmのやや古い時期にあたる大型皿(120)がある。皿Nには口縁端が内弯するもの(116)や、皿A・皿Acはシルト3出土のものより、やや小型化するなど、新しい要素が入る。117の皿には中央に穿孔がある。灰釉陶器には東海系の鉢(121)がある。口径23.4 cm、高さ8.4 cmの大型鉢で、貼付高台。内面に自然釉が掛かる。輸入陶磁器には白磁大皿(122)がある。底部のみの残存であるが、底径12.0 cmと大きい。削出高台で、内面には陰刻花文を施し、白濁した釉を掛ける。

シルト1 土師器、白色土器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがあり、土師器皿が主体をなす。土師器には皿A(123～128)、皿Ac(129～132)、皿N(135～154)がある。皿Aは口径9.5～10.3 cm、高さ1.5～1.7 cmある。皿Acは口径9.8 cm、高さ1.0 cmのもの(129・130)、口径12.9 cm前後、高さ1.2～1.6 cmのもの(131・132)があり、また前者に口径11.0 cm、高さ2.6 cmの台が付くもの(133・134)がある。皿Nは口径9.7～10.8 cm、高さ1.6～2.1 cmのもの(135～143)、口径11.5～12.8 cm、高さ2.0～2.4 cmのもの(144～148)、口径14.7～15.5 cm、高さ2.9～3.8 cmのもの(149～153)の3群の他に、口径17.6 cm、高さ3.2 cmの大型の皿(154)がある。皿Nは口縁端が内弯するものが大半を占め、V期古の要素が多くなる。白色土器には椀(155)がある。口径15.0 cm、高さ6.4 cmでロクロ成形。体部は大きく直線的に開き、端部は丸く収まる。底部は糸切り未調整で、焼き締まる。輸入陶磁器には白磁皿(156)・椀(157)がある。皿は口径10.5 cm、高さ2.6 cm。体部が大きく開き、緩やかに内弯する。底部は磨滅し平滑である。椀は底部のみ残存し、削出高台の中に判読不明の墨書がある。

層1505(図版45・111) 層1505は池1570を埋め立てた整地層である。土師器、白色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。土器の時期はV期古に属する。土師器には皿N(158～169)、台付き皿(170)がある。皿Nは口径8.8～10.7 cm、高さ1.6～2.0 cmのもの(158～163)、口径14.1～15.1 cm、高さ2.6～3.2 cmのもの(164～167)、口径16 cm台、高さ3.4 cm台のもの(168・169)の3群がある。口縁部の外反は少なくなるが2段ナデを施すものも残る。170は台付き皿の台部のみが残存したものである。白色土器には皿(171)がある。口径10.8 cm、高さ2.1 cmと小型化する。底部は糸切り未調整である。須恵器には椀(173)がある。口径15.2 cm、高さ4.3 cmあり、腰が張り口縁部は外反する。底部は糸切り未調整で、貼付高台。粗い作りである。瓦器には鉢(172)がある。口径21.0 cmを測る。底部は欠損している。体部内面にミガキを施す。

井戸73(図版45) 土師器、白色土器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。土器の時期はV期新に属する。土師器には皿Ac(174～176)、皿N(177～184)がある。皿Acは口径9.4～10.7 cm、高さ1.1～1.6 cmある。皿Nは口径9.4～10.3 cm、高さ1.6～2.0 cmのもの(177～180)、口径14.0～14.5 cm、高さ2.7～3.0 cmのもの(181～183)、口径15.5 cm、高さ2.8 cmのもの(184)の3群がある。口縁端部は立ち上がり、端面が内傾する。白色

土器には皿(185)がある。底部は欠損。口径15.0cmを測る。灰釉陶器には山茶椀(186)がある。底部の破片で貼付高台である。内面には自然釉が掛かり、高台には稻粃の跡が付く。輸入陶磁器には白磁椀(187)がある。口縁端部が玉縁状を呈する。

溝1315(図版45・111) 土師器、白色土器、灰釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。土器の時期はV期新～VI期古に属する。土師器には皿N(188～201)、皿Acに台がつくもの(202)がある。皿Nは口径9.5cm前後のもの(188～193)、口径13.0cmのもの(194～196)、口径14.5cm前後のもの(197～200)、口径16.5cmの大型もの(201)の4群がある。口縁部のナデは2段のものが少なくなっている。202は口径10.0cm、高さ2.4cmの台付き皿である。白色土器には皿(203～206)がある。203は口径9.3cm、高さ2.6cmあり、ロクロ成形の糸切り底で未調整。他は底部のみの残存で、すべて糸切り底である。瓦器には椀(207・208)がある。体部は緩やかに開き、口縁端部は丸く収める。内外面に粗いミガキを施す。207は口径13.2cm、高さ4.8cm。底部に粗雑な高台を貼り付ける。輸入陶磁器には青磁皿(209)、白磁椀(210～212)がある。青磁皿は無高台で内面底部に櫛描文を施す。同安窯系の皿である。白磁椀はいずれも削出高台の底部である。212は内面の重ね部分の釉を掻き取る。

土坑1247(図版45) 土師器、白色土器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。土器の時期はVI期新に属する。土師器には皿N(215～222)以外に皿X(213・214)がある。皿Nは口径9.0cm前後のもの(215～220)、口径13.5cmのもの(221・222)の2群ある。皿Xは口径7cm台の小型で、口縁が外反し底部は丸い。他の産地と考えられる。輸入陶磁器では黄釉褐彩陶器の盤(223)がある。口径25.8cm、高さ6.8cm。体部は内弯し口縁端部は外側に曲げて丸く収める。内面に褐釉で草文を描き黄釉を施す。

土坑1323(図版46・111) 土師器、白色土器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。土器の時期はVI期中～新に属する。図示できたのは土師器と白色土器のみである。土師器には皿Sc(224・225)、皿Ac(226～228)、皿Xc(229・230)、皿N(231～251)、皿S(252～254)、皿X(255・256)があり、この時期あたりから白色系の土師器が分化してくる。皿Scは口径7.6～8.2cmで、やや小型である。皿Acは口径8.5～8.8cm、高さ1.2～1.3cm。皿Xc(229・230)は体部が直立するタイプで他の皿Acとは胎土・形態が異なり、産地の違いが考えられる。皿Nは口径8.3～8.8cm、高さ1.0～2.2cmのもの(231～237)、口径9.5～10.0cm、高さ1.7～1.9cmのもの(238・239)、口径12.8～13.6cm、高さ2.1～2.8cmのもの(240～247)の3群がある。土師器口縁部の2段ナデはほとんど見られなくなる。また236・237は口径に対して器高が高い。この遺構では出土していないが、この時期に出現する白色系の土師器(皿S)に類似する。皿Sは口径11.5～12.2cm、高さ2.9～3.2cmのもの(252～254)の他、形態が皿Nに類似する口径8.6～10.0cm、高さ1.3～1.7cmのもの(248～251)がある。皿Xは口径7.1cm前後、高さ2.1cm前後の小型皿で、底部から体部にかけて丸く、口縁部は屈曲して外反する。皿Xcと同様京都以外で製作された皿と考えられる。白色土器には耳皿(257)、皿または椀(258～261)がある。耳皿はロクロ成形の皿の口縁端部を両側から内に押さえたもの。底部は糸切り未調整。

258～261は皿または椀の底部で底径2.5～5.0 cmある。いずれも糸切り未調整である。

井戸1640(図版46・111) 土師器、白色土器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。土器の時期はVI期中～新に属する。土師器には皿N(262～269)、皿Sc(270・271)、皿S(272～278)がある。皿Nは口径8.2～8.4 cm、高さ1.8～2.1 cmのもの(262～264)、口径12.2 cm、高さ2.2 cmのもの(265)、口径12.9～13.0 cm、高さ2.3～2.9 cmのもの(266～269)の3群がある。264～269は体部が垂直に立ち上がるものや器高が低いなどの形態の違い、粗い作りなどの特徴から、この時期にみられる乙訓形³⁾の土師器である。皿Scは口径6 cm台と小型である。皿Sは口径8.6 cm前後、高さ1.3 cm前後のもの(272・273)、口径13.0～13.7 cm、高さ2.8～3.5 cmのもの(274～278)の2群がある。272・273は皿Nの形態をもつ。274は器高が高く底部は丸い。灰釉陶器には山茶椀の小皿(279)がある。口径8.2 cm、高さ2.0 cmあり、ロクロ成形で底部は糸切り未調整。粗雑な作りである。瓦器には皿(280)、椀(281)、盤(282)がある。皿は口径9.0 cm、高さ1.7 cmある。椀は口径10.8 cm、高さ3.3 cm。外面にはヘラで5弁の輪花を施し、内面にはわずかにミガキが残る。盤は口径47.0 cmあり、底部は欠損しているが、足が付くタイプである。輸入陶磁器には青磁椀(283)がある。口径15.4 cm、高さ3.4 cm。焼成時に体部が沈み押しつぶしたように変形している。内面に櫛描文を施す。

溝1387(図版46・111) 土師器、白色土器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。土器の時期はVI期新～VII期古に属する。土師器には皿Ac(284)、皿N(285～296)、皿S(297～301)がある。皿Acは口径8.2 cm、高さ1.2 cm。皿Nは口径8.6 cm前後、高さ1.3 cm前後のもの(285～288)、口径12.1～13.2 cm前後、高さ2.0～2.3 cm前後のもの(289～296)の2群がある。時期の新しい要素として体部が外反するものが出現し始める。皿Sは口径8.0 cm、高さ2.1 cmのもの(297)、口径10.6 cm、高さ3.2 cmのもの(298)、口径13.4 cm前後、高さ3.3 cm前後のもの(299～301)の3群がある。輸入陶磁器には青白磁合子蓋(302)がある。外面は型押しで文様を施し、口縁端部以外の内外面に釉を掛ける。

井戸1197(図版47・112) 土師器、白色土器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがあり、土師器と共に瓦器椀が多量に出土した。土器の時期はVI期新に属する。土師器には皿N(303～315)、皿S(316～330)がある。皿Nは口径8.4～9.1 cm、高さ1.4～1.8 cmのもの(303～311)、口径12.0～13.0 cm、高さ2.0～2.4 cmのもの(312～315)の2群がある。313の口縁端部周囲に煤が付着する。312・315は歪みが大きい。皿Sは口径7.7～8.2 cm、高さ2.1～2.3 cmのもの(316～321)、口径11 cm台のもの(322～324)、口径13 cm台のもの(327～330)の3群の他に、口径12 cm台のもの(325・326)がある。井戸1197から出土した土師器は、赤色系の皿Nと比較すると白色系の皿Sが多い。瓦器には椀(331～338)、皿(339・340)、鉢(342)、羽釜(341)がある。椀は口径12.1～13.3 cm、高さ3.1～3.6 cmある。いずれも体部は大きく開き上部で屈曲し、口縁端部はわずかに肥厚する。底部は粗い作りの高台を貼り付ける。外面は指押さえ、内面は粗いミガキを施す。和泉産の瓦器である。皿(339)はコースター型で口径5.5 cm。340は口径8.5 cm、高さ1.6 cmあり、底部内面に粗いミガキを施す。鉢は口径20.6 cmの片口の鉢で、

内面に粗いミガキがある。羽釜は口径 12.5 cm、高さ 8.3 cm。内傾する口縁部下方に短い鏝をつける。体部外面に三足の痕跡が認められる。内面にハケメ調整。輸入陶磁器には青磁鉢 (343)・合子蓋 (344)、白磁小壺 (345)、褐釉鉢 (346) がある。青磁鉢は口径 25.0 cmあり、内外面に施釉。口縁端部は外に折り曲げ、上面を平坦に形成する。合子蓋は口径 7.5 cm、高さ 1.8 cmあり、型押しで文様をつけ、外面に釉を施す。白磁小壺は口径 2.7 cm、胴径 4.9 cm、高さ 2.9 cmとかなり小さい。外面には輪花を施し、内外面に施釉。褐釉鉢は口径約 13.5 cm、高さ約 6.0 cmである。口縁端部は丸く収まり、内外面に釉を施す。底部内外面に目跡が付く。中国南方系のものと考えられる。

土坑 1190 (図版 47・112) 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがあり、土師器は乙訓形の皿がまとまって出土している。土器の時期はVI期新～VII期古に属する。土師器には皿 N (347～370)、皿 Sc (371～375)、皿 S (376～385)、ミニチュア羽釜 (386) がある。皿 N は口径 7.9～9.0 cm、高さ 1.3～1.6 cmのもの (347～354)、口径 11 cm台、高さ 1.8～2.1 cmのもの (355・357・361～363)、口径 12 cm台、高さ 1.8～2.6 cmのもの (358・359・364～370) の3群の他に、口径 13 cm、高さ 2.3 cmのもの (360) がある。皿 N のうち 347～349・361～370 は体部が外反せずに立ち上がるもの、口縁端部の処理が雑なものなど、乙訓形の特徴をもつ。皿 Sc は口径 5 cm前後ある。皿 S は口径 8 cm台のもの (376～378)、口径 10 cm台のもの (379・380)、口径 12～13 cm台のもの (381～385) の3群がある。385 は白色系の形態をしているが、胎土は赤色系でかなり重量がある。他の産地のものと考えられる。皿は全体に口径が縮小化するなど、新しい要素が加わる。ミニチュア羽釜は口径 6.9 cmあり、内傾する口縁部下方に鏝が付く。胎土は精良で固く焼き締まる。丁寧な作りである。瓦器には椀 (387～389)、ミニチュア羽釜 (390・391)、羽釜 (392) がある。椀は口径 9.4 cm前後、高さ 2.8 cm前後の小型である。平底で内外面に粗いミガキ、底部内面に花の暗文を施す。体部外面に輪花のへら痕が認められる。ミニチュア羽釜 (390) は口径 4.2 cm、高さ 4.3 cmあり、三足が付く。391 は口径 6.2 cmで、口縁部が内傾し端部は立ち上がる。体部中程に鏝が付く。羽釜は口径 20.6 cm。内傾する口縁部に鏝が付く。内面にはハケメ調整、外面にはオサエの指痕が残る。

土坑 1430 (図版 48・113) 土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがあり、出土量は少ない。土器の時期はVI期新に属する。土師器には皿 N (393)、皿 S (394) がある。皿 N は口径 9.0 cm、高さ 1.9 cm、皿 S は口径 13.2 cm、高さ 3.3 cmある。瓦器には椀 (395)、鍋 (396)、羽釜 (397) がある。椀は口径 13.1 cm、高さ 3.4 cmあり、口縁端部内側に沈線が巡る。鍋は口径 22.5 cm、高さ 9.4 cm。やや浅く、口縁はほぼ直角に屈曲し、立ち上がる。羽釜は口径 29.2 cmあり、いずれも内面にはハケメ、外面にはオサエの指痕が残る。輸入陶磁器には青磁皿 (398) がある。口径 11.0 cm、高さ 2.6 cm。無高台で底部内面に櫛描文を施す。同安窯系。

井戸 1238 (図版 48・113) 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。土器の時期はVII期古に属する。土師器には皿 N (399～409)、皿 S (410～421) がある。皿 N は口径 8.3 cm前後のもの (399～404)、口径 12.5 cm前後のもの (405～409) の2群がある。皿 S は口径 7.6 cm前後のもの (410～415)、口径 12.6 cm前後のもの (416～420) の2群がある。瓦器には椀 (421)、

羽釜（423）がある。椀は口径 10.6 cmを測る。底部は欠損しているが、底部内面にわずかにミガキが確認できる。羽釜は口径 24.2 cmあり、内面にハケメ、外面に指痕が残る。須恵器には皿（424）、鉢（425）がある。皿は口径 7.7 cm、高さ 1.5 cmあり、底部は糸切り未調整で、粗い作り。鉢は口径 28.2 cm、高さ 11.2 cmある。直線的に開き口縁部は外反して端部は立ち上がる。東播系須恵器である。輸入陶磁器には青磁椀（422）がある。外面に片切り彫りで蓮弁を表す。龍泉窯産。

井戸 1085（図版 48・113）土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。土師器が大半を占める。出土量は少量であるが、図示できるものが多い。土器の時期はⅦ期古～中に属する。土師器には皿 Sh（426～433）、皿 S（434～441・457～468）、皿 N（442～456）、耳皿（469）がある。皿 Sh は口径 7 cm台で、底部中央を上方へ押し上げたヘソ皿である。Ⅶ期古の中にも新しい要素としてヘソ皿が出現する。皿 S は口径 7.2 cm前後のもの（434～441）、口径 10.7 cm前後のもの（457・458）、口径 12.2 cm前後のもの（459～468）の 3 群がある。皿 N は口径 8.3 cm前後のもの（442～448）、口径 11.5 cm前後のもの（449～456）の 2 群がある。耳皿（469）は白色系の皿の口縁端部を両側から内に押さえたもの。瓦器には羽釜（470）、鉢（471）がある。羽釜は小片で、外面に指オサエ痕、内面にはハケメが残る。鉢は口径 11.8 cm、高さ 3.2 cm。体部が直線的に開き、器壁は厚く内外面に指痕残り、ミガキが施される。輸入陶磁器にはミニチュアの白磁椀（472）がある。口径 3.4 cm、高さ 1.6 cm。腰が張り器高は低い。

土坑 1175（図版 49・113）土師器が主体で他に、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などが少量ある。土器の時期はⅦ期古～中に属する。土師器には皿 N（475～484）、皿 S（473・474・485～487）、皿 Sc（488）、ミニチュア羽釜（489）がある。皿 N は口径 7.7～8.6 cmのもの（475～480）、口径 11.7 cm前後のもの（481～484）の 2 群がある。皿 S は口径 7.0 cm前後のもの（473・474）、口径 11.7～12.1 cmのもの（485～487）の 2 群がある。皿 Sc は口径 4.6 cm、高さ 0.7 cm。ミニチュア羽釜は口径 8.6 cm。井戸 1085 の出土遺物のように皿 Sh はみられないが、皿は全体に小型化している。瓦器には椀（490）がある。口径 15.4 cm、高さ 4.5 cmあり、口縁部内面には 1 条の沈線が巡り、粗いミガキを施す。

土坑 1173（図版 49）土師器が主体で他に、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。土器の時期はⅦ期古～中に属する。土師器以外は小片が多く図示できたのは土師器のみである。土師器には皿 Sh（491～500）、皿 S（501～505）、皿 N（506～508）がある。皿 Sh は口径 6.1～6.9 cm、高さ 1.6～2.2 cm。皿 S は口径 6.6～7.4 cmのもの（501・502）、口径 11.1～11.5 cmのもの（503～505）の 2 群がある。皿 N は口径 10.6～11.9 cmのもの（506～508）の 1 群のみである。

土坑 1316（図版 49・114）土師器が主体で他に、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。土器の時期はⅦ期新に属する。土師器には皿 Sh（509～514）、皿 N（519～531）、皿 S（532～535）の他に、皿 X（515）、皿 Xh（516～518）がある。皿 Sh はいずれも口径 6.9 cm前後、高さ 1.9 cm前後であるが、514 は口径が 7.9 cmと他より大きい。皿 N は口径 7.8～8.3 cm、高さ 1.7 cm前後のもの（519～522）、口径 10.5～12.2 cm、高さ 2.0～2.7 cmのもの（523～531）の

2群がある。519・520は底部がヘソ皿化しつつあり、皿Nhが出現するⅧ期の要素が入る。また528は皿Sの形態をもつ。皿Sは口径11.0～11.7 cm、高さ2.9 cm前後の1群のみである。皿Xは口径4.9 cmで、口縁端部を引き出し片口にする。ミニチュアの片口鉢か。皿Xhは口径7.3 cm前後、高さ2.2 cm前後ある。皿Nの胎土で形態はヘソ皿で、口径に対してやや深い。他の産地のものと考えられる。瓦器には羽釜(536)がある。口径20.9 cmあり、内面はハケメ調整。

土坑1200(図版49・50・114) 土師器、白色土器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。特に瓦器の鍋釜が大量に出土した。土器の時期はⅦ期新～Ⅷ期古に属する。土師器には皿Sh(537～540)、皿S(541～550)、皿N(551～553・556～558)、皿Nc(554・555)、鉢(560)がある。皿Shは口径6.9 cm、高さ1.8 cm。皿Sは口径6.4～8.1 cm、高さ1.4～2.3 cmのもの(541～544)、口径11.2～12.6 cm、高さ2.8～3.4 cmのもの(545～550)の2群がある。541は他と形態が異なり、口径は6.4 cmと小さく底部が丸くなる。皿Nは口径11.9 cm前後、高さ2.2～3.0 cmのもの(551～553)、口径6.6～7.7 cm、高さ1.4～1.9 cmのもの(556～558)の2群がある。皿Ncは口径6.8 cmある。鉢は口径12.5 cmあり、底部は欠損している。粘土紐を巻き上げて成形し、内外面にナデ調整を施す。口縁部は開口し、大きく歪む。白色土器には小椀(559)、高杯(561)がある。小椀は口径7.9 cm、高さ2.7 cmあり、ロクロ成形で底部は糸切り未調整。高杯は皿部口径7.3 cm、高さ11.9 cmと小型ではほぼ完形。脚部は芯棒作りで、上下に皿を粘土で接着する粗い作りである。瓦器には椀(562)、ミニチュア羽釜(563)、小壺(564)、鍋(565～567・573～579)、羽釜(568～572)がある。椀は口径12.2 cm、高さ3.4 cmある。底部に粗雑な高台を貼り付け、内面に粗いミガキを施す。ミニチュア羽釜は口径4.3 cmある。内傾する口縁の下部に鰐が付き、3足の脚が付くタイプである。鍋は口径27.6～28.4 cm、高さ13.6～15.0 cm(575・577・579)、口径22.7～25.6 cm、高さ10.0～11.5 cm(565～567・573・574)、口径21 cm前後、高さ10 cm前後(576・578)の大中小がある。いずれも蓋受けが付くタイプ。羽釜は口径21.9～32.9 cm、高さ11.9～12.5 cmのもの(568～570)、口径25.3 cm前後、高さ13.6 cm前後のもの(571・572)がある。鍋・羽釜は、577・579以外はいずれも内面にはハケメ、外面にはオサエの指痕が残る。571・572はハケメがない。

井戸1400(図版50) 土師器、白色土器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。土器の時期はⅨ期新に属する。土師器には皿Sc(580～583)、皿Sh(584～588)、皿S(589～593)がある。ほとんどが白色系の土師器皿Sで、図示できたものの中には赤色系はない。皿Scは口径4.3 cmある。皿Shは口径6.4～7.4 cm、高さ1.5～1.9 cm。皿Sは口径9.3～10.3 cm、高さ1.9～2.3 cmのもの(590～592)、口径15.0 cm、高さ2.5 cmのもの(593)の2群がある。589は口径7.6 cmでかなり小さめの皿である。瓦器には火鉢(596)がある。直立する口縁は外面口縁端部と立ち上がり部分に凸線が巡る。外面には丁寧なミガキを施す。焼締陶器には備前播鉢(597)、信楽播鉢(598)がある。備前播鉢は播目が9本1単位で、内面は平滑である。輸入陶磁器には青磁椀(594・595)がある。594の内外面には線描文を施す。

土坑989(図版51・115) 土師器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。遺物の出土量は少量で

あるが、土師器皿の割合が多い。土器の時期はX期新に属する。土師器皿には皿 Sb (599)、皿 S (600～612)がある。皿 Sbは口径 9.5 cm、高さ 2.2 cmである。皿 Sは口径 10.3～10.7 cm、高さ 2.2～2.5 cmのもの (600～604)、口径 11.5～11.9 cm、高さ 2.2～2.4 cmのもの (605～610)、口径 12.1～12.6 cm、高さ 2.1～2.2 cmのもの (611・612) の3群がある。内面を底部近くまでナデた後、底部周辺に強くナデた痕跡を残す。輸入陶磁器には明染付皿 (613) がある。見込みに青海波を描く。

井戸 80 (図版 51・115) 土師器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器などがある。土器の時期はX期新に属する。土師器には皿 Sb (614・615)、皿 S (616～620) がある。皿 Sbは口径 8.8～9.1 cm、高さ 2.1 cmある。皿 Sは口径 9.6～10.1 cm、高さ 1.8～2.4 cmあり、出土しているのはこの1群のみで、いずれも径 3 cm前後の小さく深い圏線が巡る。国産施釉陶器には美濃天目茶椀 (621) がある。削出高台で鉄釉を施す。胎土は精良で丁寧な作りである。

土坑 641 (図版 51・115) 土師器、焼締陶器、国産施釉陶器などがある。土器の時期はXI期古に属する。土師器皿を含め出土遺物はこの時期の特徴をよく表している。土師器には内面立ち上がり部に圏線が巡る皿 S (622～629) がある。口径 10.1～10.8 cm、高さ 2.1～2.3 cmのもの (622～625)、口径 11.0 cm、高さ 2.2 cmのもの (626)、口径 12.0～12.4 cm、高さ 1.9～2.2 cmのもの (627～629) の3群がある。瓦器には鉢 (633) がある。口径は 22.8 cmあり、内面にミガキを施す。焼締陶器には丹波盤 (634) がある。底部から大きく開いて立ち上がり、口径は 40.6 cmある。器高は 4.7 cmと低い。口縁部は丸みを持ち内側に肥厚する。体部外面には指痕、内面にはトチンの代用にした陶片跡がある。国産施釉陶器には美濃灰釉折縁ソギ皿 (630)、美濃天目茶椀 (631)、唐津灰釉椀 (632) などがある。灰釉折縁ソギ皿は底部に輪トチン跡が付く。天目茶椀には透明のアメ釉を施す。

土坑 1146 (図版 51・115) 土師器、焼締陶器、国産施釉陶器などがある。土器の時期はXI期古に属する。土師器には皿 (635) がある。口径 9.5 cm、高さ 2.0 cmあり、口縁部に煤が付着する。国産施釉陶器には美濃天目茶椀 (636)、唐津椀 (637) がある。ともに削出高台で鉄釉を施す。

土坑 904 (図版 51) 土師器、焼締陶器、国産施釉陶器などがあるが、図示できるものは国産施釉陶器の2点である。土器の時期はXI期古～中に属する。美濃小皿 (638) は口径 6.4 cm、高さ 1.5 cmで、長石釉が厚く掛かる。絵唐津大皿 (639) は口径 25.2 cm、高さ 6.6 cmある。内面に鉄釉で草文を描き、灰釉を施す。削出高台で、見込みに目跡が付く。

土坑 1207 (図版 51・115) 土師器、焼締陶器、国産施釉陶器などがある。土器の時期はXI期古～中に属する。土師器には焙烙 (640) がある。口径 32 cm、高さ 10.3 cmあり、体部は台型成形で口縁部を継ぎ足す。口縁端部は内に小さく突き出す。器壁は薄い。焼締陶器には信楽挿鉢 (641) がある。口径 25.2 cm、高さ 12.8 cmあり、口縁部は強く外反し、口縁上端は平坦面をなす。挿目は5本1単位で、見込みは斜め格子状の挿目が付く。国産施釉陶器には美濃壺 (642)、志野鉢 (643)、美濃折縁大皿 (646)、唐津皿 (644)・椀 (645) がある。美濃壺は体部中程から上は欠損している。底部は糸切り未調整で、底部以外の内外面に鉄釉を施す。志野鉢は体部が立ち上がり、口縁端

部はやや外反する。底部は中央を円形に削り込む碁笥高台で、長石釉を施す。美濃折縁大皿は口径 24.5 cm、高さ 5.4 cmの大皿で、体部は上部で外に屈曲し、口縁端部は内に丸く収まる。削出高台で、全面に灰釉を施す。見込みに目痕、高台に輪トチン跡が付く。唐津皿・椀は削出高台。皿は口径 11.4 cm、高さ 5.0 cmで、光沢のある灰釉を施す。漆継の痕跡が残る。椀は口径 10.7 cm、高さ 6.4 cm。体部が垂直に立ち上がるタイプで、灰釉を施す。

落込 925 (図版 52・116) 土師器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器などがまとまって出土した。全体の量からすると土師器の出土量は少なく、美濃や唐津などの陶器類が多い。輸入陶磁器では中国(明)染付や朝鮮のものがある。遺物は落込 925 を埋め立てた整地層と下層のシルト層で出土しており、整地層からはXI期古～中の遺物が、シルト層からは出土遺物は少量であるが、やや古い時期の遺物が含まれる。土師器の時期は桃山時代から江戸時代前期(16世紀末～17世紀前期)に属し、時期に幅をもつ。土師器には粗製小皿の皿 Nr (647・648)、皿 Sb (650)、皿 S (649・651～655)、皿 X (658・659)、焼塩壺蓋 (656)、焼塩壺 (657)、羽釜 (660)、小壺 (661)、浅鉢 (662) がある。皿 Nr は口径 5.5 cm、高さ 1.2 cm (647)、口径 6.9 cm、高さ 1.4 cm (648) の大小がある。皿 Sb は口径 10.6 cm、高さ 2.5 cm。皿 S は口径 8.8 cm、高さ 1.8 cmのもの (649)、口径 10.5 cm、高さ 2.1 cm前後のもの (651～653)、口径 12.5 cm、高さ 2.1 cm前後のもの (654・655) の3群に分けられる。652・653 は灯明皿として使われた。皿 X はロクロ成形で底部は糸切りの未調整。658 は口径 7.2 cm、高さ 1.3 cm、659 は口径 8.0 cm、高さ 1.3 cmある。焼塩壺蓋の内面は布目の上からナデ調整をする。焼塩壺は芯に粘土を巻き付けて成形した円筒形で布目はない。羽釜は口縁部のみで下部が欠損しているが、鏝が付くタイプである。胎土は精良で器壁は薄く、焼き締まる。浅鉢は口径 39.6 cm、高さ 10.7 cmある大型鉢で、口縁部内面にはハケメがつき、外面はケズリとナデ調整。内面底部と壁面に炭化物が付着する。炭化物は糊状の麦や米などが焦げたものである。瓦器には蓋 (663) がある。口径 10.0 cm、高さ 1.7 cmの壺の蓋と考えられる。国産施釉陶器には美濃系のもの(664～675)と唐津系のもの(676～681)がある。美濃系のものには小杯(664・665)、椀 (666)、天目茶椀 (667・668・675)、志野皿 (669)、絵志野皿 (670)、菊皿 (671・672)、鉢 (673)、志野向付 (674) がある。小杯 (664) は灰釉で口径 5.6 cm、器高 2.6 cm。665 は口径 6.7 cm、器高 3.6 cmで、総織部釉を施す。椀は長石釉の掛かる丸椀で口径 10.6 cm、高さ 4.7 cmある。天目茶椀 (667) は口径 11.5 cm、高さ 7.6 cmで、光沢のない茶色、675 は口縁部が欠損し、黒色の鉄釉が掛かる。668 は口径 11.7 cm、高さ 7.5 cmある総織部天目茶椀である。志野皿、絵志野皿、菊皿はいずれも口径が 12 cm前後で、長石釉が掛かる。菊皿 (671) は口縁と内外面に、672 は口縁と内面のみに彫り込みが入る。鉢は口径 16.0 cm、高さ 4.4 cmある。体部が直線的に開き、途中で屈曲し、立ち上がる。口縁はわずかに外反し、長石釉が掛かる。志野向付は四方入隅の向付である。一辺 11.5 cm、高さ 6.7 cmあり、ロクロ成形後、打ち型で方形にしている。外面に草文を描く。底部は中央を円形に削り込む碁笥高台である。唐津系のものには椀 (676・677)、天目茶椀 (678)、向付 (679)、片口鉢 (680)、鉢 (681) がある。椀 (676) は鉄釉半筒椀で、口径 10.0 cm、高さ 5.6 cm。腰が張り、体部は直線的に立ち上がる。677 は灰釉椀で、口径 10.3 cm、高さ 6.0 cm。天目茶椀は

口径 10.0 cm、高さ 5.6 cmで、鉄釉を施す。向付は皿を四方に押し広げて方形にする。灰釉を施し、見込みには目跡が付く。片口鉢は口径 14.0 cm、高さ 2.4 cmの灰釉片口鉢で、口縁端部を外側に折り曲げ丸く収める。見込みに目跡が 4 箇所付く。口縁上面は重ね跡がある。鉢は三島手の鉢で口径 22.7 cm、高さ 7.4 cmある。体部は大きく開き中程で屈曲する。底部は粘土を貼り付け、高台を削り出す。内面に 4 条の沈線を巡らせ、その間に文様を押印し白土を埋め、釉を施す。外面施釉部以下高台まで鉄釉を塗っている。灰が内面に付着し、全体が白くなる。焼締陶器には信楽播鉢 (682)、備前播鉢 (683)、丹波盤 (684) がある。信楽播鉢は口径 26.6 cm、高さ 12.3 cmあり、播目は 6 本 1 単位である。備前播鉢は口径 30.4 cmで、口縁は幅広の帯状を呈し、外面に 2 条の凹線が入る。播目は 6 本 1 単位で、斜めに交差するようにつけられている。丹波盤は口径 14 cm、高さ 2.4 cmとかなり小さい。底部から粘土をつまみ上げて外反した口縁とする。端部は丸く収める。粗い作りである。輸入陶磁器には明の染付椀 (685 ~ 691・694)・皿 (692・693・695)、景德鎮白磁皿 (696)、朝鮮粉青沙器椀 (697) がある。染付椀 (686 ~ 689) は内外面に、690・691 は見込みに草花文や唐草文を描く。689 には断面に漆継の痕跡が残る。685 は高台の周囲を打ち欠いたもので、見込み中央には見事な鷺と波濤文、高台内には二重丸内に「富貴長春」の文字がある。精緻な絵付けが施されている。694 は底径 7.2 cmある大型椀で、見込みが盛り上がり、鷺と蓮の葉を描く。台には離れ砂が付着する。染付皿は見込みに草花文を描く。693 には断面に漆継の痕跡が残る。白磁皿は型押し皿で、碁笥高台。内面中央に花と結び紐、周囲に七宝文が付く。口縁部は欠損している。断面に漆継の痕跡が残る。粉青沙器椀は朝鮮王朝時代のものである。胎土は灰色の砂質の土で、全面に施釉する。削出高台で見込みに目跡が 8 箇所付く。

落込 920 (図版 53・117) 土師器、焼締陶器、国産施釉陶器などがある。土器の時期はXI期古～中に属する。土師器には皿 S (698)、焼塩壺 (699) がある。皿 S は口径 15.6 cm、高さ 2.1 cmの大型で器高は低く、圏線が巡る。焼塩壺は円筒形で、上部を少しすぼめる。焼締陶器には信楽の播鉢 (704) がある。口径 27.6 cmで、播目は 4 本 1 単位。国産施釉陶器には美濃皿 (700)、唐津鉢 (701)・椀 (702・703)・大皿 (705) がある。美濃皿は端反の皿で、口径 11.9 cm、高さ 2.9 cm。長石釉を厚く施す。見込みに目跡が 3 箇所付く。全体は磨滅して角がとれる。唐津鉢は灰釉の片口鉢である。口径は 18.0 cm。注口と底部は欠損している。体部が張り出し、口縁部が屈曲して開く。肩には鉄釉で模様を描く。椀の底部は削出高台で、見込みには左回転のロクロ目が深く残る。椀 (702) は口径 10.1 cm、高さ 6.7 cmで、灰釉を厚く施す。口縁下部がやや厚くなり端部は内傾する。703 は口径 11.4 cm、高さ 6.4 cmで、透明感のあるアメ釉を施す。大皿は灰釉を施した大型の皿の底部で見込みに目痕が付く。

土坑 1080 (図版 53・117) 土師器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器などがある。土器の時期はXI期中に属する。土師器には粗製小皿 Nr (706 ~ 710)、皿 Sb (711・712)、圏線が巡る皿 S (713 ~ 715)、焙烙 (716) がある。皿 Nr は口径が 5.1 ~ 5.9 cmと小皿の中でも小に属する。皿 Sb は口径 10.0 cm、高さ 2.2 cmのもの (711)、口径 9.6 cm、高さ 2.0 cmのもの (712) がある。皿 S は口径 10.9 cm、高さ 2.0 cmのもの (713・714)、口径 12.6 cm、高さ 2.1 cmのもの (715) の

2群がある。715は圈線を巡らせた後、圈線の上から指で押さえた痕が残り、底部が盛り上がる。焙烙は口径30.6cmあり、体部は台型成形で口縁部を継ぎ足す。口縁端部は内に小さく突き出す。国産施釉陶器には志野椀(717)、美濃天目茶椀(718・719)、織部向付(720)、唐津皿(722・723)、絵唐津皿(724)、唐津椀(725・726)、絵唐津大皿(727)、高取澁瓶(728)がある。志野椀は口径12.6cmあり、ロクロ成形。口縁部は外反し、口縁端部は丸く収める。底部は欠損しているが、貼付高台が付く。外面に鉄釉で草文を描き、長石釉を厚く掛ける。美濃天目茶椀はともに口径11.0cm、高さ6.8cm前後で、削出高台。鉄釉を施す。織部向付は鳴海織部とも呼ばれているものである。白土と赤土を繋ぎ合わせて、型押し成形したもので、内面に布目がある。底部には白土の環足が3個付く。内外面の赤土には白泥を帯状に塗り、その白泥や白土に鉄釉で線を、見込みには梅文を描く。白土には織部釉を、赤土には透明釉を掛ける。唐津皿はともに削出高台である。722は口径11.0cm、高さ3.7cmで、体部が内弯し口縁部は屈曲して立ち上がる。長石釉を施し、見込みに目痕が付く。723は口径11.2cm、高さ2.2cm。緑灰色釉を施した青唐津で、体部中程が屈曲し段をもつ。口縁部にヘラ押えで輪花を施す。底部は厚く、見込みに目跡が4箇所付く。絵唐津皿は口径11.7cm、高さ3.9cm。外面下部を面取りして腰の張りを際立たせる。口縁部に鉄絵が認められる。唐津椀いずれもは削出高台で、鉄釉を施す。内面に目跡が付く。725は口径10.6cm、高さ7.2cm。726は口径9.9cm、高さ7.9cmあり、器高が高い。絵唐津大皿は口径32cmである。体部は穏やかに内弯し、口縁部は外反する。内面に鉄絵で松を描く。見込みに目痕が付く。高取澁瓶は体部はタタキ成形、天井部となる板状の粘土を体部と貼り合わせて成形したもの。把手は欠損している。底部は盛り上がり、中央に押印がある。目跡が7箇所以上付く。器壁は薄く天井部以外の内外面に灰釉を施す。輸入陶磁器には明染付皿(721)がある。口径12.8cm、高さ3.4cmあり、体部は内弯する。削出高台で、高台は露胎。内面は釉ハギされ、内外面に草花文を描く。餉州窯系の可能性がある。

土坑1212(図版53)土師器、焼締陶器、国産施釉陶器などがあるが、図示できたものは少ない。土器の時期はXI期古～中に属する。土師器には皿Sb(729・730)がある。口径9.3cm前後、高さ1.7cm前後ある。730は灯明皿に使用され口煤が付着する。国産施釉陶器には瀬戸の灰釉丸皿(731)がある。口径9.4cm、高さ2.0cmで、腰が張り、貼付高台である。

土坑1213(図版53・118)土師器、国産施釉陶器などがあるが、出土遺物は少量である。土器の時期はXI期古～中に属する。土師器には皿S(732)、焼塩壺(733)がある。皿Sは口径10.3cm、高さ2.2cmあり、圈線が巡る。焼塩壺は芯に粘土を巻き付けて成形した円筒形で内面に布目が付く。国産施釉陶器には美濃天目茶椀(734・735)がある。734は口径10.9cm、高さ6.5cmとやや小振り、体部は緩やかに湾曲して丸味を帯びる。見込みに目痕が付く。735は口径11.6cm、高さ7.3cm。光沢・透明感のある黒釉を施す。

土坑1155(図版53・118)土師器、国産施釉陶器、輸入陶磁器などがあるが、図示できたのは天目茶椀のみである。土器の時期はXI期古～中に属する。国産施釉陶器には美濃天目茶椀(736・737)、唐津天目茶椀(738)がある。美濃天目茶椀は胎土はやや粗いが焼き締まる。736は口径

10.8 cm、高さ 6.3 cm。やや小振りで、透明感のあるアメ釉を施し、見込みと腰に厚く溜まる。唐津天目茶碗は口径 11.4 cm、高さ 7.1 cm。胎土が粗い。鉄釉には光沢がなく透明感がない。輸入陶磁器には中国産の天目茶碗（739）がある。口径 11.0 cm、高さ 6.3 cm。胎土は緻密で粘性があり固く焼き締まる。鉄釉を施す。

土坑 94（図版 54・118）土師器、国産施釉陶磁器がある。土器の時期はⅡ期新に属する。土師器には皿 Nr（740～743）、皿 Sb（744～746）、皿 S（747・748）、皿 X（749）、火入（750）がある。皿 Nr は口径 4.9～5.4 cm、高さ 1.2～1.5 cm。皿 Sb は口径 8.7 cm 前後、高さ 1.9 cm。皿 S は口径 9.6～10.1 cm、高さ 1.8～1.9 cm あり。皿 X（749）は口径 12.1 cm、高さ 1.9 cm あり、ロクロ成形した後、飛びカンナ状の模様の外型押しで作る。内面に墨で宝づくしを描き、釉は掛けない。祝い事で使用される皿で、深草産と考えられる。火入は深草産で、口径 22.0 cm、高さ 15.7 cm。口縁は内傾し水平な端部をもつ。外面はミガキが施され、底部には輪高台が付く。国産施釉陶器には信楽播鉢（751）、瀬戸・美濃の鉢（752）がある。信楽播鉢は体部が大きく開き、口径は 36.2 cm で、底径 15.4 cm と比べ倍以上ある。鉄泥を施し、播目は 7 本 1 単位で、見込みは斜め格子状に播目が付く。瀬戸・美濃の鉢は片口で、口径 16.0 cm、高さ 10.2 cm。注口は欠損している。灰釉を施す。磁器には肥前系の白磁小杯（753）、染付小碗（754）、赤絵碗（755）、染付大型碗（756）・蓋（757）がある。白磁小杯は口径 7.7 cm、高さ 5.4 cm で、端反である。口縁端部に鉄釉を施す。染付小碗は口径 8.0 cm、高さ 4.2 cm あり、外面にコンニャク印判の菊文がある。赤絵碗は口径 10.2 cm、高さ 5.9 cm。外面に刈り取られた稲穂やそれを狙う鳥と鳥脅しなどを赤や緑色の上葉で描く。染付大型碗は口径 17.9 cm、高さ 6.2 cm。内面体部と見込みに草花文、外面には簡略化された唐草文を描く。染付蓋はつまみの付くもので、口径 7.6 cm、高さ 3.0 cm。外面に花唐草文を描く。

土坑 70（図版 54）土師器、軟質施釉陶器、焼締陶器、国産施釉陶磁器などがある。土器の時期はⅡ期新に属する。土師器には皿 Nr（758～760）、皿 Sb（761・762）、小型鉢（763）、焼塩壺（764）がある。皿 Nr は口径 5.0 cm 前後、高さ 1.3 cm 前後ある。皿 Sb は口径 7.4 cm と 8.6 cm、高さ 1.7 cm で、小型化する。小型鉢は「でんぼう」とよばれる深草産のもので、口径 6.0 cm、高さ 2.7 cm。ロクロ成形、底はヘラ切り。口縁端部は厚く、丸く収まる。焼塩壺は板作成形で、口径 5.8 cm。底部は欠損する。外面体部には「泉州麻生」名が入った押印がある。1730 年代のものである。軟質施釉陶器には灯火具（765）がある。底部中央に固定するための穴が開く。国産施釉陶器には肥前の刷毛目碗（766・767）、産地不明の蓋（768）がある。刷毛目碗はともに見込みに重ね跡が残り、高台に離れ砂が付着する。766 は口径 10.4 cm、高さ 4.6 cm。内面にのみ刷毛目があり、外面は施釉が垂れる。767 は口径 10.6 cm、高さ 4.8 cm。蓋（768）は口径 8.2 cm、高さ 3.5 cm。陶胎染付で陶器の素地に白濁した釉を施す。焼締陶器には備前の灯明皿受（769）がある。口径 12.1 cm、高さ 2.1 cm あり。磁器には肥前の染付皿（770）・碗（771～774）、白磁碗（775）がある。染付皿は口径 12.8 cm、高さ 3.6 cm。内面に草文、見込みにコンニャク印判の桐文、外面は唐草文、高台には簡略化された「大明成化」の文字が記されている。碗（771～773）は口径 10.2～11.0 cm、高さ 5.0～5.7 cm あり。くらわんか手の碗で、外面に草花文を描く。771・773 は見込みに蛇の目釉ハギされ、重ね痕が残る。波

佐見窯系の椀である。774は口径9.6 cm、高さ5.2 cm。腰が張り体部は直立するタイプの椀で、外面に草花文を描く。白磁椀は口径9.4 cm、高さ6.9 cm。内型成形で作られ、口縁端部に鉄釉を施す。

土坑280(図版54) 土師器、軟質施釉陶器、国産施釉陶磁器、土製品などがある。土器の時期は期古に属する。土師器は皿のみで、皿Nr(776)、皿S(777・778)がある。皿Nrは口径5.5 cm、高さ1.2 cmある。皿Sは器壁が薄く、口径9.7～10.1 cm、高さ1.9 cm前後ある。軟質施釉陶器には灯明皿受(779)がある。ロクロ作りの皿で、見込みに受けを3箇所貼り付ける。器壁は厚く、朱泥を塗った上から透明釉を施す。国産施釉陶器には京焼の灯明皿受(780)、肥前産の椀(781・782)・鉢(783)・蓋(784)がある。灯明皿受は口径7.8 cm、高さ1.5 cmある。椀はともに刷毛目椀で見込みに重ね痕が残る。781は10.2 cm、高さ4.4 cm。小振りで器高が低く、高台に離れ砂が付着する。782は口径11.0 cm、高さ5.2 cmある。鉢は京焼風の作りで平面方形、底部は丸い。方形の四辺を波状に削り、内面に鉄釉で山水文を描く。蓋は宝珠のつまみが付く壺の蓋で、上面に鉄釉を施す。磁器には肥前の染付皿(785)・椀(786～788)・仏飯器(789)がある。皿は口径11.7 cm、高さ3.4 cmで、白濁した釉を施す。底部内面は蛇の目釉ハギされる。内面の口縁部に草文を描くが欠損しており、模様は不明である。椀(786)は口径10.0 cm、高さ5.2 cm。外面にコンニャク印判の桐文がある。787は青磁染付で口径12.1 cm、高さ6.7 cmある。外面は青磁、内面は呉須で口縁部に四方禪文、見込みに富貴の花、高台内に二重方形の渦福を描く。788は筒形椀で、口径7.8 cm、高さ6.2 cm。外面には松や草文、底部外面には簡略化された草文、内面口縁部に四方禪文、見込みにコンニャク印判の五弁花文を描く。仏飯器は口径5.7 cm、高さ5.6 cm、底径3.0 cmある。体部外面に笹文を描く。土製品には独楽(790)がある。型作りで上部に梅と唐草の模様がある。中心に軸受けの穴が開く。

土坑625(図版55・56) 土師器、国産施釉陶磁器、土製品などがある。土器の時期は期新に属する。土師器には皿Nr(791～798)、皿Sb(799～803)、皿S(804～807)、小壺(808)、小型鉢(809～811)、花塩壺(812)、焼塩壺蓋(813～815)、焼塩壺(816)、蓋(817)、灯火具(818)がある。皿Nrは口径4.6～5.4 cm、高さ1.3 cm前後。皿Sbは口径7.6～7.9 cm、高さ1.3～1.7 cmある。皿Sは口径9.3～9.8 cm、高さ1.6～1.9 cmあり、圏線が巡る。皿の中には灯明皿として使用されたものも多く、804・805以外は口縁に煤が付着する。小型鉢はロクロ成形で、口径5.0～3.9 cm、高さ3.2～3.7 cmある。底はヘラ切り。口縁端部は厚く、丸く収まる。花塩壺も同様の作りで、口径4.4 cm、高さ2.8 cm。いずれも深草産である。焼塩壺は板作成形である。焼塩壺蓋はいずれも内面に布目があり、813は京都産で外面を丸く作る。灯火具はロクロ成形の燭台または灯火具の置台で、中央には鉄釘が残る。国産施釉陶器の産地は京都、瀬戸・美濃、不明に分類される。京焼には灯明皿(819・820)、灯明皿受(821・822)、合子身(823)、蓋物(824)、蓋(825・826)、椀(827～830)、片口(831)、鍋(832)、乗燭(835)がある。灯明皿はともに内面に条線あり、819は口径9.0 cm、高さ2.0 cmで、桜の貼花が付く。820は口径10.8 cm、高さ2.2 cmで、菊の貼花が付く。灯明皿受は体部が直線的で、口径8.7 cm、高さ1.6 cm(821)、口径12.6 cm、高さ2.4 cm(822)の大小がある。蓋はいずれも土瓶の落蓋で、825は口径7.1 cm、高さ1.5 cmで灰釉を、826は口径

9.4 cm、高さ 2.2 cmで鉄釉を施す。椀 (827) は口径 9.6 cm、高さ 5.7 cm、透明釉を施した小杉椀。828 は口径 9.3 cm、高さ 5.8 cm、端反で腰が張り、内面に白泥、外面に鉄釉を掛流した上に透明釉を施す。829 は口径 11.1 cm、高さ 6.2 cm、腰から直線的に立ち上がる体部をもち、鉄釉を掛け流す。830 は口径 10.8 cm、高さ 5.8 cm、鉄絵の丸椀である。片口と鍋はともに鉄釉が施される。片口は口径 14.4 cm、高さ 9.1 cm。口縁部に注口が付くタイプで、注口は欠損している。鍋は口径 16.8 cm、高さ 9.7 cm。口縁部に把手が付く。乗燭は蠟燭型で口径 5.9 cm、高さ 7.7 cm。器高が高く、底部に深い穴を開ける。鉄釉を施す。瀬戸・美濃には椀 (833)、茶入 (834) がある。椀は口径 10.0 cm、高さ 5.2 cm。体部が直線的に開き、灰釉が施され鮮やかな黄色を呈している。茶入は口径 3.4 cm、高さ 7.5 cm、鉄釉を施し、底部は糸切底。産地不明のものには播鉢 (836) がある。口径 26.4 cm、高さ 11.2 cm。体部が直線的で口縁端部は丸く収まる。鉄釉を施す。播目は 6 本 1 単位で、底部は放射状に施す。磁器はすべて肥前染付で、小杯 (837～839)、椀 (840～850)、仏飯器 (851)、蓋 (852～854)、皿 (855・856) がある。小杯は大小があり、口径 4.8～5.4 cm、高さ 2.5～3.0 cm。837 は梅文、838 は笹文を描く。839 は欠損のため文様は不明。椀 (840・841・850) は小椀で、口径 7.3～7.8 cm、高さ 2.9～3.5 cm。841・850 は外面に草花文を、846 は見込みに五弁花文を描く。842 は口径 10.0 cm、高さ 4.6 cm、外面に草文を描く。843 は口径 9.7 cm、高さ 5.0 cm、外面の上部に輪宝文と唐子・松を、内面の上部に輪宝文を描く。844 は口径 11.2 cm、高さ 5.2 cm、松竹梅文を描く。842～844 は高台が低い。845 は口径 11.1 cm、高さ 5.3 cm、体部が直線的に開くタイプで、外面に芙蓉と宝文、見込みに宝文、高台裏に二重方形中に「春」と記される。846 は筒形椀で、口径 7.5 cm、高さ 6.0 cm。外面に菊花文、口縁部内面に四方禪文、見込みに五弁花を描く。847 は口径 11.3 cm、高さ 5.7 cm、外面に花文、口縁部内面に四方禪文、見込みに草花文を描く。848 は口径 10.1 cm、高さ 5.3 cmあり、外面と見込みに壽字文を描く。849 は口径 11.4 cm、高さ 5.9 cm、外面に輪宝文、見込みに草花文を描く。847・849 はハの字状高台が付き、腰の張りが強い。仏飯器は口径 7.5 cm、高さ 4.8 cm、外面に笹の葉文を描く。蓋 (852) は上部につまみが付くもので、口径 6.7 cm、高さ 2.8 cm、外面に草花文を描く。853・854 は椀の蓋で、853 は口径 10.1 cm、高さ 2.8 cm、外面に松、口縁部内面に四方禪文、天井部に松竹梅繫を描く。854 は口径 11.0 cm、高さ 2.9 cm、外面と天井部に壽字文を施す。皿 (855) は口径 13.9 cm、高さ 3.0 cm、口縁端部に輪花を施し、内面に草花文、見込みにコンニャク印判で五弁花、外面に唐草文、高台内に渦福を描く。856 は口径 19.8 cm、高さ 4.1 cm、内面に扇と草花文、見込みに花、外面に唐草文、高台内に二重角福を描く。土製品には灯火具 (857)、皿 (858)、鳩笛 (859)、人形 (860・861) がある。皿は型押し菊の菊皿で口径 6.8 cm、高さ 1.6 cm、内面中央に緑釉を施す。人形 (860) は中実の型押し男雛で肩に釉を掛ける。861 は甚平を着た猿である。中空で型押し成形、土玉を入れて土鈴とする。

井戸 83 (図版 56・57) 土師器、国産施釉陶磁器、土製品などが出土している。土師器の時期は期古～期新に属する。土師器には焜炉などの大型製品はあるが、皿の出土量は少量で図示できるものはない。土製品は牛・馬の人形が多量に出土した。土師器には焜炉 (862)、焙烙 (863)、灯火具蓋 (864) がある。焜炉は口径 21.6 cm、高さ 16.9 cm、深草産で平底に三足が付き、1 方に剝

りを入れる。内面には受けを3方に付けるが、2つは欠損している。外面は丁寧なミガキを施す。焙烙は口径26.8 cm、高さ5.1 cm、底部を台型成形し直立する口縁部を継ぎ足す。口縁部は丸く収められ、内面底部に煤が付着する。深草産と推定される。灯火具蓋は高さ26.5 cmで、外面ミガキ、肩部には鳶の葉形の透し穴、胴部中央にアーチ形の開口部を持つ。国産施釉陶器の産地は京都、瀬戸・美濃、磁器は肥前に分類される。京焼には椀(865～868)、灯明皿受(869)、鍋(870)、土瓶(871)がある。椀(865)は口径8.4 cm、高さ4.4 cm、呉器手で灰釉の小椀である。866は口径7.4 cm、高さ5.8 cm、筒形の染付椀で、外面に錆絵で鳶文を描く。867・868は高麗写しの椀で、高台は渦状に削り出す。867は口径9.4 cm、高さ5.7 cm、丁字のような型押し連続模様の象嵌を施しており、868は口径12.2 cm、高さ7.8 cm、御本手灰釉の大振りの椀である。灯明皿受は口径6.6 cm、高さ1.9 cm、体部が直線的に広がり、受部は高い。鍋は口径16.6 cm、高さ9.3 cm、茶褐色の鉄釉を施し、口縁部に把手が付く。土瓶は口径9.2 cm、高さ12.7 cm、肩部に条線が巡り、鉄釉を施す。軟質施釉陶器には椀(872)、水注(873)がある。椀は口径13.8 cm、高さ5.6 cmの平椀である。外面に鎬を入れ、白化粧を施して呉須で花唐草を描く。胎土は粗い。水注は口径6.0 cm、高さ5.3 cmで、型押し成形である。平面六角形で底部は丸い。上面に付く把手は欠損している。使用痕はなく、玩具・ミニチュアの可能性がある。深草産と考えられる。瀬戸・美濃には水甕(874)がある。口径29.7 cm、高さ19.8 cm、白濁釉を底部外面以外全面に施す。底には墨書で「被漳入」とある。肥前磁器には染付椀(875・876)、蓋物(877)がある。椀(875)は口径9.2 cm、高さ5.5 cmの小丸椀で、外面全面に草花文を描く。876は口径8.2 cm、高さ7.1 cm、筒形椀で外面にコンニャク版の唐子が巡る。蓋物は口径11.6 cm、高さ8.4 cmの筒形で、外面には粗い梅文を描く。土製品にはミニチュアの竈(878)、牛・馬の人形(879～883)がある。竈は2連で内部の作りは雑である。牛(879・881)、馬(882・883)は中空で型合せ成形。足は捻り出す。881の腹部は大きく開いている。作りは粗い。馬は内部に土玉を入れて土鈴とする。牛(880)は瓦質で、作りは丁寧で精巧である。足は欠損している。

土坑71(図版57) 国産施釉陶磁器、瓦質陶器がある。土器の時期は期古～新に属する。国産施釉陶器には京焼の柄杓(884)、鍋(885)がある。柄杓は口径7.6 cm、高さ5.6 cm、底に高台が付く、口縁部に把手が付く。把手の上下には棒を固定するための穴が開いている。鍋は小振りで口径9.4 cm、高さ7.7 cm。一方に把手が付く、鉄釉を施し、胴周りは飛びカンナの模様が付く。注口は欠損している。磁器には肥前の皿(886)、瀬戸・美濃の染付椀(887・888)、産地不明の椀(889・890)がある。886は口径8.9 cm、高さ2.1 cmの丁寧な作りの四方皿である。見込みに山水人物が描かれ、一部欠損しているが、四方の内三方には「天」「水」「雨」の文字が入る。外面は草花文を描く。887・888はともに端反の小椀で、口径9.1 cm、高さ4.5～5.2 cm。外面と見込みに図案化された草花文を描く。889・890は端反椀で、889は口径9.1 cm、高さ5.6 cm、外面に梅と幾何学模様を描く。890は口径10.9 cm、高さ6.5 cm、外面一面に草文や渦巻を描く。瓦質陶器には焜炉(891)がある。口径21.3 cm、高さ19.0 cm、六角形で下方にすぼまる。底部より少し上に目皿が付く。

石室105(図版57) 土師器、国産施釉陶磁器、焼締陶器などがある。土器の時期は期新に属す

る。焼締陶器には備前の筒形を呈する鉢（892・893）がある。口径 9.6～9.8 cm、高さ 6.0 cmあり、底部から垂直に立ち上がり端部は丸く収まる。外面下方に窯印の押印が付く。窯道具のサヤ鉢と思われるが、用途は不明である。磁器には肥前染付碗（894）がある。丸碗で口径 6.8 cm、高さ 5.6 cmある。体部外面に草文を描く。国産施釉陶器には信楽産の鉄釉の茶入（895・896）がある。895 は口径 1.7 cm、胴径 3.6 cm、高さ 5.2 cm。896 は口径 1.8 cm、胴径 3.6 cm、高さ 4.7 cm。ともに小振りである。

その他遺構（図版 58・119、写真 12、観察表 2）ここでは主に平安時代前期（9世紀代）を中心に特筆すべき土器・土製品を取り上げ、器種別に図示した。

縄文時代の遺物には、中期の船元式の深鉢（897）がある。平安時代後期の遺構検出面である砂礫層（流路 2009A）から出土している。出土地点は流路右岸の肩口にあたる。口縁部と体部上部のみの残存で、体部から続く口縁部は大きく開いて内湾するキャリパー型で、口縁端部はわずかに肥厚する。平縁である。口縁部内外面、口縁端部上面に爪形文と縄文を施す。胎土は砂を多く含み固く焼き締まる。

土師器には盤（898）の台部がある。貼付高台で、口縁端部が内に屈曲する。内外面に横ナデ調整。白色土器には碗（899）、三足盤（900・901）がある。碗は底部はケズリ、貼付高台である。体部にはミガキが認められる。三足盤（900）は脚部のみであるが、脚の形態には古い要素が入る。901 は口径 11.0 cm、高さ 3.1 cmある。ほぼ完形で器壁は厚く口縁端部は丸く収まる。胎土は粗いが丁寧な作りである。黒色土器には足付き鉢（902）がある。脚部は面取りが施され、体部内面を黒色化し、ヘラミガキを施す。須恵器には杯（903）、碗（904・905）、壺（906）がある。杯は貼付高台で、高台内に判読不能の墨書がある。碗（904）は底部が糸切り未調整。底部には墨書が認められる。905 は山城産の緑釉陶器の形状をもつ須恵器碗で、削出しの蛇の目高台。壺は双耳壺の耳部で凸帯が付くタイプ。緑釉陶器には皿（907～910）、碗（911～914・917・918）、壺（915）、香炉（916）がある。小片が多く、碗・皿では図示できるものは底部のみである。皿（907・908）は削出高台。908 は体部外面下方にヘラで輪花を施す。丁寧な作りである。909・910 は貼付高台で底部内面に陰刻花文を施す。碗（911・912）は削出高台とともに山城産。913・914 は貼付高台。913 は口径 19.0 cm、高さ 6.4 cm。丁寧な作りで、高台内に目跡が付く。914 は体部内面に稜があるタイプで高台内と底部内面に目跡が付く。917・918 は山茶碗形のものに緑釉を施したもので、他の緑釉陶器碗より時期はさがる。917 は糸切り未調整の底部に貼付高台。高台内は露胎する。918 は糸切り底にナデ調整を施し、貼付高台。高台内は露胎する。壺は肩部にあたる小片で、外面に陰刻花文を施す。内外面に釉を掛ける。香炉は台部から体部が立ち上がる部分で、台部には 2 箇所穿孔が認められる。内外面に釉を施す。灰釉陶器には皿（919）、碗（920～922）、蓋（923）、山茶碗（924）がある。皿は貼付高台で丁寧な作り。高台内・体部外面下方は露胎。碗（920）は糸切りの底部に粗雑な高台を貼り付ける。高台内には墨書があり、「上」と読める。921 は小片で、内面に草文の陰刻を施す。922 は口径 16.2 cm、高さ 5.7 cm。貼付高台。体部内面下方に焼成時の重ね痕がある。蓋は口径約 21 cmある大きなもので、口縁端部よりやや内側にカエリを

貼り付ける。カエリの付く位置より内側以外全面に施釉。山茶碗は口径 14.8 cm、高さ 4.4 cm。底部とそれに続く体部下方の器壁が非常に厚い。底部は糸切りの未調整。輸入陶磁器には磁州窯梅瓶 (925・926)、華南三彩壺 (927)、緑釉陶器盤 (928)、越州窯青磁碗 (929・930)・鉢 (931) がある。磁州窯梅瓶は胎土や色調から同一個体のもと考えられる。925 は肩部に、926 は体部にあたる。素地に白釉を掛け、草



写真 12 サイコロ状土製品

花文を掻き出し、透明釉を施している。内面にも釉を施す。華南三彩壺は外面に陰刻文を施し、緑釉と黄釉を掛け分ける。緑釉陶器盤は底部にあたり、内面に草花文の陰刻を施し緑釉を掛ける。外面は露胎。南方系の陶器である。越州窯青磁碗は削出しの蛇の目高台。鉢は平底無高台で、底部内面に目跡が付く。土製品には硯 (932～937)、サイコロ状土製品 (938) がある。硯 (932) は須恵質の円面硯の小片である。台部には透かしの切れ込みの痕跡が認められる。933・934・936 は須恵質の風字硯である。933 はやや小振り。側面はケズリ、裏面はタタキで小さな足が付く。摺り面は平滑で、焼成は軟質である。934 は底部から立ち上がる縁は外面ケズリ、内面はオサエで作りは粗い。摺り面は平滑で、焼成は焼き締まる。936 は底部に貼り付けた足の部分で、足底には階段状に段を付ける。丁寧な作りである。935 は瓦質の風字硯で縦 10.2 cm、横 7.7～8.0 cm、高さ 2.3 cm。底部に粗雑な足を 2 つ貼り付ける。安定も悪く摺り面に使用痕が見受けられない。937 は黒色土器の風字硯の小片で、内外面とも黒色化させる。摺り面は平滑。サイコロ状土製品は一辺が 1.6 cm の立方体で、表面は素地のままで角が丸い。目は認められない。

(2) 2 区の土器

土坑 178 (図版 59) 土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器があるが、ごく少量である。土器の時期はIV期中に属する。土師器には皿 A (939～941)、皿 N (942～946)、甕 (947) がある。皿 A は口径 9.5～10.5 cm ある。皿 N は口径 12.0 cm のもの (942)、口径 14.0～15.0 cm のもの (943～945)、口径 18.0 cm のもの (946) の 3 群がある。口縁部は外反し、2 段ナデを呈する。甕 (947) は口縁部のみが残存である。内面はハケメ、外面はナデとタタキを施す。輸入陶磁器には白磁碗 (948) がある。

井戸 229 (図版 59) 土師器、瓦器、陶器、輸入陶磁器がある。土器の時期はVI期中に属する。図示できた土器はいずれも小片である。土師器には皿 N (949～955) がある。皿 N は口径 7.5～10.0 cm のもの (949～954)、口径 13.0 cm のもの (955) の 2 群がある。口径が縮小化しており、VI期中でもやや新しい要素を含む。瓦器には碗 (956)、鍋 (957) がある。碗は貼付高台で、内面に粗いミガキを施す。鍋は蓋の受けが付くもので、内面には細かなハケメ調整を施す。輸入陶磁器には白磁水注 (958) がある。肩部に注口が一部残存する。

土坑 222 (図版 59・120) 土師器、瓦器、須恵器、陶器、輸入陶磁器がある。土器の時期はVI期新～VII期古に属する。土師器には皿 N (959～967)、皿 X (968～971)、皿 S (972・975)、皿 Sc (973・974)、鉢 (976) がある。皿 N は口径 8.0～8.5 cm、高さ 1.4 cm のもの (959～

962)、口径 11.0 ~ 12.0 cm、高さ 2.2 cm 前後のもの (964 ~ 967) の 2 群がある。963 は口径 10.0 cm あり、両者の中間的形態をもつ。967 はその形態から乙訓形であることがわかる。皿 S は口径 6.5 cm、高さ 2.0 cm のもの (972)、口径 12.6 cm のもの (975) の 2 群がある。皿 X (968 ~ 971) はいずれも体部が外反し、968・969 は口径に対して深く、970・971 は底部が丸い。これらの形態は他の産地と考えられる。皿 Sc は口径 5.0 cm あり。鉢 (976) は口径 16.0 cm、高さ 9.2 cm あり。粘土紐を積み上げ成形したもので、口縁部が大きく開き端部は丸く収める。底部は平底。体部内面はナデ後ハケメ調整、外面は指オサエ痕が付く。白色土器には椀 (977) がある。口径 11.0 cm、高さ 3.4 cm あり、ロクロ成形で底部は糸切り未調整。瓦器には椀 (978)、羽釜 (979・980)、鍋 (981)、ミニチュア羽釜 (982) がある。椀は口径 9.0 cm あり、外面にヘラ押しの輪花を施す。羽釜は口径 24.5 cm 前後で、980 には内面に細かいハケメ調整を施す。鍋は蓋の受けが付き、内面に細かいハケメ調整を施す。ミニチュア羽釜は口径 7.5 cm あり、脚の付く 3 足釜である。須恵器には鉢 (983) がある。底部のみの残存で、貼付高台。高台径は 10.0 cm あり。輸入陶磁器には青磁椀 (984 ~ 986) がある。984 は外面に片切彫りで蓮弁をあらわす。985・986 はともに底部は削出高台である。土坑 222 の出土遺物は 1 区の土坑 1190 から出土している遺物とほぼ同じ時期の特徴を示す。

土坑 173 (図版 59・120) 土師器、瓦器、須恵器、陶器、輸入陶磁器があるが少量である。土器の時期はⅦ期古に属する。図示できたものは土師器だけである。土師器には皿 N (987 ~ 996)、皿 S (997 ~ 999) がある。皿 N は口径 8.0 ~ 9.0 cm、高さ 1.2 ~ 2.1 cm の 1 群のみである。皿 S は口径 12.0 ~ 12.5 cm、高さ 3.0 cm 前後。

井戸 145 (図版 59・120) 土師器、瓦器、須恵器、陶器、輸入陶磁器があるが少量である。土器の時期はⅧ期古に属する。図示できたものは土師器だけである。土師器には皿 Sh (1000 ~ 1004)、皿 S (1005 ~ 1007)、皿 N (1008 ~ 1012) がある。皿 Sh は口径 6.6 ~ 7.0 cm、高さ 1.8 cm 前後あり。皿 S は口径 7.1 cm、高さ 1.7 cm のもの (1005)、口径 11.6 cm、高さ 2.2 cm 前後のもの (1007) がある。1006 は形態は皿 S、胎土は皿 N である。灯明皿に使用されたもので、口縁部に煤が付着する。皿 N は口径 10.2 ~ 11.7 cm、高さ 2.4 cm 前後のもの (1008 ~ 1011)、口径 12.5 cm、高さ 2.6 cm のもの (1012) の 2 群がある。皿 N は口径が 11 cm 台のものが多く、Ⅷ期古よりやや古い要素を含む。

土坑 165 (図版 60・120) 土師器皿が大半を占める。他に瓦器、陶器、輸入陶磁器がある。土器の時期はⅩ期古に属する。図示できたものは土師器だけである。土師器には皿 Sc (1013・1014)、皿 Sb (1015・1016)、皿 S (1017 ~ 1034) がある。皿 Sc は口径 4.8 cm 前後。皿 Sb は口径 8.8 cm、高さ 1.9 cm あり。皿 S は口径 10.2 ~ 11.0 cm、高さ 1.8 ~ 2.3 cm のもの (1017 ~ 1022)、口径 13.5 ~ 14.2 cm、高さ 2.2 ~ 2.7 cm のもの (1023 ~ 1025)、口径 16.0 ~ 16.5 cm、高さ 2.7 cm のもの (1026 ~ 1031)、口径 18.0 cm のもの (1032)、口径 19.0 cm、高さ 2.8 cm のもの (1033・1034) の 5 群がある。皿 S は立ち上がり部ナデ際の泥漿の盛り上がり確認できるものもある。

土坑 174 (図版 60・120・121) 土師器皿が大半を占める。他に瓦器、陶器、輸入陶磁器があるが少量である。土器の時期はX期古に属する。土師器には皿 Sc (1035)、皿 Sh (1036～1039) 皿 X (1040～1042)、皿 Sb (1043～1049)、皿 S (1050～1059) がある。皿 Sc は口径 4.5 cm、高さ 1.0 cm。皿 Sh は口径 6.6～7.1 cm、高さ 1.8 cm 前後。皿 Sb は口径 9.6～10.6 cm、高さ 2.2 cm 前後ある。皿 X は口径 7.5～8.1 cm、高さ 2.4 cm 前後あり、口径に対して器高が深く、他の産地が考えられる。皿 S は口径 16.0～16.5 cm、高さ 2.5 cm 前後のもの (1050・1051)、口径 17.0 cm、高さ 2.7 cm 前後のもの (1052・1053)、口径 19.0～19.5 cm、高さ 2.2～2.9 cm のもの (1054～1058)、口径 21.0 cm、高さ 3.1 cm のもの (1059) の 4 群がある。土坑 165 と同様に皿 S の出土量が多く、口径に対し器高が低くなる。皿 N はほとんど出土していない。

土坑 228 (図版 60) 土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器が少量ある。土器の時期はX期中に属する。土師器は皿 Sb (1060～1063) のみである。皿 Sb は口径 9.2 cm 前後、高さ 1.8 cm 前後のもの (1060・1061)、口径 10.2 cm 前後、高さ 2.1 cm 前後のもの (1062～1063) の 2 群がある。口縁部に沿って内面を底部近くまでナデた後、底部中央に小さくナデ痕を残す。国産施釉陶器には瀬戸の鉢 (1064) がある。口径 22.0 cm あり、体部上方から口縁部にかけての内外面に灰釉を施す。下方は露胎。

溝 60 (図版 60・121) 土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器がある。土器の時期はXI期中に属する。土師器には皿 Sb (1065)、皿 S (1066)、焙烙 (1077)、焼塩壺 (1078・1079) がある。皿 Sb は口径 11.0 cm、皿 S は口径 12.0 cm で、ともに口縁に煤が付着する。灯明皿として使用。焙烙は口径 29.0 cm あり、体部は台型成形で口縁部を継ぎ足す。焼塩壺は芯に粘土を巻き付けて成形した円筒形で、内面に布目がある。焼塩壺 (1078) は口径 6.0 cm、高さ 9.6 cm。1079 は口径 6.2 cm、高さ 8.4 cm。瓦器には火鉢 (1080) がある。口径 29.0 cm。体部は直立し、上端に蓋受けがある。国産施釉陶器には唐津椀 (1067～1071)、絵唐津皿 (1072～1074)、唐津皿 (1075)、唐津壺 (1076)、美濃皿 (1081～1083)、美濃小椀 (1084) がある。産地別では美濃より唐津の方が多い。唐津椀は灰釉を施したもの (1067・1070・1071)、鉄釉を施したものの (1068・1069) がある。いずれも削出高台で、1071 の底部内面には目跡が付く。1067 は口径 11.3 cm、高さ 7.2 cm で、腰の張ったタイプ。1068 は口径 10.3 cm、高さ 7.3 cm。丸椀である。絵唐津皿はいずれも灰釉を施し、鉄釉で草文などを描く。1072 は口径 13.7 cm、高さ 3.4 cm。1073 は口径 12.2 cm、高さ 3.5 cm あり、底部内面には目跡が付く。唐津皿は口径 10.8 cm、高さ 2.9 cm。灰釉で基筒高台。底部内面には目跡が付く。唐津壺は口径 7.0 cm。玉縁状の口縁から外面にかけて鉄釉を施す。美濃皿は、灰釉の折縁のもの (1081)、長石釉を施すもの (1082) がある。1081 は口径 11.6 cm、高さ 2.4 cm。1082 は口径 14.1 cm、高さ 2.7 cm。1083 は黄瀬戸大皿の底部である。美濃小椀は鉄釉を施す。焼締陶器には丹波播鉢 (1085)、信楽播鉢 (1086) がある。丹波播鉢は播目が単線、信楽播鉢は 6 本 1 単位である。輸入陶磁器には明染付皿 (1087) がある。内外面に花草文を施す。

土坑 16 (図版 61・121) 土師器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、輸入陶磁器がある。土器の時

期はXI期新に属する。土師器には皿 S (1088 ~ 1091)、皿 Sb (1092・1093)、皿 Nr (1094 ~ 1102)、焼塩壺 (1103・1104)、鉢 (1105)、焙烙 (1106) がある。皿 S は内面立ち上がり部に圈線が巡り、器壁は厚い。口径 10.5 ~ 11.0 cm、高さ 2.1 cm 前後ある。皿 Sb は口径 9 cm 台、高さ 2.0 cm。皿 Nr は粗雑な作りの小皿で、口径 5.3 ~ 6.0 cm、高さ 1.1 ~ 1.4 cm ある。焼塩壺 (1103) は体部上方が欠損しているが一回り大きく、体部外面には二重枠線内に「ミなど・口左工門」と文字の入った押印があり、泉州湊産とわかる。1104 は口径 6.0 cm、高さ 9.3 cm。ともに内面に布目が付く。鉢は口径 7.3 cm、高さ 3.9 cm で、丸底である。焙烙は口径 31.0 cm、高さ 7.5 cm。口径に対し浅い。台型成形で口縁部を継ぎ足す。国産施釉陶器には唐津椀 (1107)、唐津皿 (1108)、唐津火入れ (1109)、美濃小杯 (1110)、織部大皿 (1111) がある。唐津椀は口径 11.2 cm、高さ 6.7 cm あり、灰釉を施す。唐津皿は灰釉を施し、底部内面に目跡が付く。唐津火入れは口径 16.0 cm あり、口縁部内面から体部外面に褐色の釉を施す。内面と底部外面は露胎。蓋の受けが付く。美濃小杯は口径 6.5 cm あり、織部釉を施す。織部大皿は底部内面に鉄釉で草文を描く。国産磁器には肥前の染付椀 (1112・1113)、仏飯器 (1114) がある。染付椀 (1112) は高台内に「年」の文字がある。1113 は口径 11.1 cm、体部外面に藤文を描く。仏飯器はやや大振りで口径 8.2 cm、高さ 6.6 cm ある。輸入陶磁器には明の染付椀 (1115・1116) がある。1116 は口径 11.7 cm、高さ 6.0 cm で、見込みに「大明宣徳年製」が書かれる。

土坑 3 (図版 61) 土師器、軟質施釉陶器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、輸入陶磁器がある。土師器の時期は 期に属する。土師器には皿 Nr (1117 ~ 1121)、皿 Sb (1122 ~ 1124)、皿 S (1125 ~ 1136)、蓋 (1137) がある。皿 Nr は口径 5.3 ~ 5.6 cm、高さ 1.3 ~ 1.4 cm。皿 Sb は口径 8.0 cm のもの (1122・1123)、口径 9.0 cm のもの (1124) がある。皿 S は圈線の巡る皿で口径 10.0 ~ 10.8 cm、高さ 1.5 ~ 2.0 cm のもの (1125 ~ 1135)、口径 11.9 cm、高さ 2.2 cm のもの (1136) の 2 群がある。蓋 (1137) は口径 6.0 cm、高さ 3.2 cm。ロク口形成で底部はヘラ切り。落とし蓋でつまみが付く。軟質施釉陶器には灯火具 (1138・1139) がある。内面のみ透明釉を施す。国産施釉陶器には京焼の椀 (1140・1141)、小壺 (1142)、蓋物 (1143 ~ 1146)、鍋 (1147・1148) がある。椀 (1140) は口径 9.2 cm、高さ 7.0 cm。外面には色絵を施す。赤・緑・青色で唐草と花を描く。高台内に「錦光山」の押印がある。1141 は口径 9.8 cm、高さ 6.9 cm の筒茶椀である。外面に鉄釉で刷毛目を施し、中央上方に草文を描く。小壺は上部が欠損しているが、頸の両側に耳が付き、内外面に透明釉を施す。外面には幾何学模様を茶・青・金で描く。蓋物はそれぞれ一対のものである。蓋 (1143) は口径 7.4 cm で、上面に鉄釉と呉須で草文を描く。つまみは欠損している。身 (1144) は口径 8.3 cm、高さ 4.5 cm。蓋受けと高台以外の内外面に施釉。蓋 (1145) は口径 14.4 cm。身 (1146) は口径 15.1 cm、高さ 11.4 cm。ともに練り込みの生地に錆絵で銀杏文を描き白化粧や呉須を施す。凝った作りの蓋物である。鍋 (1147) は口径 13.8 cm、高さ 12.6 cm 以上ある器高の深い爛鍋で、口縁部に把手が付く。1148 は口径 12.2 cm、高さ 5.9 cm ある小型の鉄釉鍋。磁器には肥前染付椀 (1149・1150)、皿 (1151)、蓋 (1152) がある。椀 (1149) は口径 7.8 cm、高さ 5.7 cm の端反椀で器壁は薄い。外面の上部に山水文、下部に唐草文を描く。高台内には『大明年製』とある。

1150 は口径 9.5 cm、高さ 5.3 cmの小丸椀。高台は小さく低い。外面に矢羽根文を描く。皿は口径 10.4 cm、高さ 1.8 cm。内面は蛸唐草と松竹梅文、外面は唐草文を描く。蓋は口径 10.0 cm、高さ 2.9 cm、椀の蓋である。内面に四方禪文、中心には手書きの五弁花、外面に松竹梅文と四方禪文を描く。

その他遺構（図版 61、観察表 3） 2 区では平安時代前期から中期の遺物は少なく、図示できた遺物のほとんどが平安時代後期から鎌倉時代時代に属する遺物である。

縄文土器には中期船元式の爪形文がつく小片（1153）がある。胎土・焼成などからみて 1 区の深鉢と同一個体の可能性がある。

灰釉陶器には山茶椀（1154）、椀（1155）がある。山茶椀は口径 9.5 cm、高さ 2.2 cm。貼付高台の粗い作りである。底部は糸切りの後ナデ調整を施し、高台を貼り付ける。椀は底部内面は平滑である。輸入陶磁器には白磁皿（1156）、白磁椀（1157）、高麗青磁椀（1158）、青白磁水注（1159）、磁州窯梅瓶（1160・1161）がある。白磁皿は無高台で底部を削る。内面には 1 条の沈線が巡る。白磁椀は同一個体の口縁部と底部を合成、図示したもので、口径・高さは不確実である。底部は削出高台で、内面は椀の積み重ね部分の釉を掻き取る。口縁端部は折り返されて玉縁状を呈する。高麗青磁椀は口縁部の小片であるが、内外面に 2 条の線と外面には唐草と思われる文様を白象嵌で施す。丁寧な作りである。青白磁水注は型押しで、外面に釉を施す。磁州窯梅瓶は 1 区で出土したものと同一個体の可能性がある。土製品には風字硯（1162）がある。瓦質で、外面と脚はケズリ調整とミガキを施す。摺り面は平滑で、中央には仕切が付く。二連硯である。

（3） 3 区の土器

土坑 286（図版 62・122） 土師器、白色土器、黒色土器、須恵器、輸入陶磁器がある。土器の時期はⅣ期古に属する。土師器には皿 A（1163・1164）、皿 N（1165～1167）、高杯（1168）がある。皿 A は口径 10.0～10.5 cm、高さ 1.2 cm前後。皿 N は口径 14.0 cm、高さ 2.5～3.1 cmのもの（1165・1166）、口径 16.0 cmのもの（1167）の 2 群がある。口縁部は外反し、2 段のナデ痕が残る。高杯（1168）は皿部のみ残存。口径 20.0 cmある。白色土器には皿（1169）がある。口径 14.0 cm、高さ 3.7 cm。ロクロ成形で、貼付高台。底部外面に墨書があるが判読不明である。須恵器には壺（1170）がある。ほぼ完形で口径 4.6 cm、高さ 7.1 cm、底径 12.1 cm。ロクロ成形で、底部は糸切り未調整。

井戸 280（図版 62） 土師器、黒色土器、須恵器、瓦器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。土器の時期はⅣ期古～中に属する。図示できたのは土師器のみである。土師器には皿 A（1171～1173）、皿 N（1174・1175）がある。皿 A は口径 11.0～12.0 cm、高さ 1.3～1.7 cmある。器壁は厚い。皿 N はいずれも口径 17.0 cmある。

土坑 249（図版 62・122） 土師器、白色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。土器の時期はⅣ期中に属する。土師器には皿 A（1176・1177）、皿 Ac（1178）、皿 N（1179～1182）、甕（1183）、羽釜（1184）がある。皿 A は口径 10.5～11.0 cm、高さ 1.1～1.5 cm。皿 Ac は口径 11.0 cm、高さ 1.4 cmある。皿 N は口径 11.0 cm、高さ 1.5 cmのもの（1180）、口径 12.0 cm、

高さ 2.2 cm のもの (1179)、口径 15.0 ~ 15.5 cm、高さ 2.7 ~ 2.8 cm のもの (1181・1182) の 3 群がある。甕は口径 14.0 cm の小型で、体部はほぼ直立し口縁は開く。底部は欠損する。羽釜は口縁端部下方に鏝が付く。灰釉陶器には皿 (1185)、椀 (1186) がある。皿は口径 12.0 cm、高さ 2.5 cm の段皿で、体部内面に 2 条の沈線が巡る。椀は口径 15.3 cm、高さ 5.7 cm。ともに底部は貼付高台で、美濃産である。灰釉陶器には山茶椀 (1187) がある。口径 16.4 cm、高さ 5.2 cm あり、貼付高台で尾張産。輸入陶磁器には白磁椀 (1188・1189) がある。底部のみの残存である。

層 306 (図版 62) 土師器、白色土器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。土器の時期は IV 期中に属する。層 306 は溝 255 の成立面にあたる。土師器には皿 A (1190・1191)、皿 Ac (1192)、皿 X (1193)、皿 N (1194 ~ 1196)、甕 (1197 ~ 1199) がある。皿 A は口径 11.0 ~ 11.5 cm、高さ 1.2 ~ 1.4 cm あり。皿 Ac は口径 10.5 cm、高さ 0.9 cm。皿 N は口径 13.0 ~ 14.0 cm、高さ 2.1 ~ 2.4 cm のもの (1194・1195)、口径 18.0 cm、高さ 2.5 cm のもの (1196) の 2 群がある。皿 X (1193) は、他の皿が口縁部は外反し 2 段ナデ痕が残るのに対し、体部が直線的に開くという明らかに形態の違いがみられる。他の産地のものと考えられる。甕はいずれも口縁部の小片で、1197 のみが口径 15.0 cm を測る。白色土器には皿 (1200 ~ 1202) がある。底部のみの残存で、糸切り未調整。黒色土器には椀 (1203) がある。口径 15.0 cm で、口縁端部内面に 1 条の沈線が巡る。磨滅が激しく内外面のミガキがわずかに残る。灰釉陶器には椀 (1204) がある。底部は貼付高台。直接接合しない口縁部と底部から図化したため、口径・高さは不確実である。

溝 255 (図版 62・122) 土師器、白色土器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。土器の時期は IV 期中 ~ 新に属する。土師器には皿 A (1205 ~ 1212)、皿 N (1213 ~ 1228)、羽釜 (1229) がある。皿 A は口径 10.3 ~ 11.2 cm、高さ 1.3 ~ 1.7 cm あり、口径が縮小化する。皿 N は口径 10.0 ~ 11.1 cm、高さ 1.7 ~ 2.3 cm のもの (1213 ~ 1218)、口径 13.2 ~ 14.0 cm、高さ 2.6 cm 前後のもの (1219・1220)、口径 15.2 ~ 16.2 cm、高さ 2.6 ~ 3.1 cm のもの (1221 ~ 1227)、口径 17.0 cm、高さ 3.7 cm のもの (1228) の 4 群がある。1219 の内面には漆が付着している。羽釜は口縁端部のみの残存で、口径約 26.0 cm。口縁下方に鏝が付く。外面には煤が付着する。白色土器には三足盤 (1232)、皿 (1233) がある。ともにロクロ成形。三足盤は口径 11.2 cm、高さ 3.4 cm あり。皿は口径 13.6 cm、高さ 2.9 cm あり、底部は糸切り未調整。底部中央は欠損している。須恵器には壺 (1230・1231) がある。1231 は口径 12.5 cm で、口縁部は直立し端部は丸くなる。外面にはタタキを施す。1231 は壺の底部で、ロクロ成形のち外面にケズリを施す。灰釉陶器には椀 (1234) がある。口径 12.3 cm、高さ 4.3 cm で貼付高台である。輸入陶磁器には青磁壺 (1235) がある。口縁部のみの残存で、口径は 11.0 cm。

層 304 (図版 63・122) 土師器、白色土器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。土器の時期は IV 期中 ~ 新に属する。土師器には皿 A (1236 ~ 1241)、皿 N (1242 ~ 1250)、羽釜 (1251) がある。皿 A は口径 9.7 ~ 11.0 cm、高さ 1.0 ~ 1.8 cm。皿 N は口径 10.0 ~ 11.0 cm、高さ 1.5 ~ 2.1 cm のもの (1242 ~ 1244)、口径 15.0 ~ 16.0 cm、高さ 2.7 ~ 3.3 cm のもの (1245 ~ 1250) の 2 群がある。羽釜は小片で口縁下方に鏝が付く。白色土器には皿 (1252

～1256)、椀(1257～1259)、高杯(1260)がある。皿はいずれも底部が糸切り未調整。1252は口径11.5 cm、高さ2.2 cmある。椀(1257)は底部が糸切り未調整、1258・1259は貼付高台である。高杯は脚部が残存。脚部下方にのみ9面の面取りを施す、須恵器には椀(1261)、鉢(1262)がある。椀の底部は糸切り底でナデ調整を施す。鉢は口径は約22 cmある。灰釉陶器には山茶椀(1263)がある。底部は貼付高台である。輸入陶磁器には白磁椀(1264)がある。底部は削出高台で、体部立ち上がり部分にケズリを施し段をつける。土製品には瓦質の風字硯(1265)がある。裏面に脚を貼り付け、側面は面取りを施す。摺り面は使用痕がみられない。

土坑200(図版63) 土師器、白色土器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器がある。土器の時期はIV期新に属する。出土土器の量は多いが小片が多く、図示できるのは土師器と白色土器の少量である。土師器には皿A(1266～1268)、皿N(1269・1270)がある。皿Aは口径9.0～10.8 cm、高さ1.3～1.5 cm。皿Nは口径11.8 cm、高さ1.9 cmのもの(1269)、口径17.5 cm、高さ2.9 cmのもの(1270)の2群がある。白色土器には皿(1271・1272)、高杯(1273)がある。皿は底部が糸切り未調整。高杯は杯と脚の接合部で、段が付く。

土坑281(図版63・122) 土師器、白色土器、須恵器、瓦器、灰釉陶器、瓦器、国産施釉陶器、輸入陶磁器がある。土器の時期はVII期新～VIII期古に属する。土師器には皿S(1274～1278)、皿N(1279・1280)がある。皿Sは口径7.2～8.0 cm、高さ1.9 cm前後のもの(1274・1275)、口径11.0～11.7 cm、高さ2.6～3.2 cmのもの(1276～1278)の2群がある。皿Nは口径10.5～11.3 cm、高さ2.5 cm前後ある。瓦器には鍋(1281)がある。口径28.5 cmあり、蓋受けが付くタイプ。内面にはハケメ、外面にはオサエの指痕が残る。

土坑88(図版64・123) 土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器がある。土器の時期はXI期古に属する。土師器には皿Nr(1282・1283)、皿Sb(1284・1285)、皿S(1286・1287)、鉢(1288)がある。皿Nrは口径6.0 cm前後、高さ1.2 cm。皿Sbは口径9.4 cm前後、高さ2.0 cm。皿Sは圏線が巡るもので、口径10.3 cm前後、高さ2.2 cm前後ある。皿S(1287)は口縁部に煤が付着、灯明皿として使用。鉢は口径21.0 cm、高さ10.7 cmあり、体部は中程で屈曲して内弯気味に立ち上がる。底部は尖り気味で不安定な形状を呈し、全体が歪む。体部外面上半には斜めのタタキを施す。灰器と考えられる。焼締陶器には丹波挿鉢(1289)、備前茶入(1290)がある。丹波挿鉢は口径34.4 cm、高さ15.1 cmで、体部は直線的に開き口縁端部は丸くなる。挿目は単線で外面に指オサエ痕が付く。備前茶入はロクロ成形で、底部外面に「上」の窯印がつく。輸入陶磁器には染付椀(1291)がある。体部内外面に呉須で1条の線を巡らし、体部内面に釉ハギを施す。

土坑83(図版64・123) 土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器がある。土器の時期はXI期古に属する。土師器には皿Sb(1292～1294)、皿S(1295～1301)、皿Nr(1302～1309)、焙烙(1305)がある。皿Sbは口径9.1～9.5 cm前後、高さ2.1 cm。皿Sは口径12.0～12.3 cm前後、高さ1.9～2.3 cmある。皿S(1296・1297)は灯明皿で口縁部に煤が付着する。皿Nrは口径5.7～7.0 cm、高さ1.3 cmある。焙烙は口径33.8 cm。体部は台型成形で口縁部を継ぎ足し、端部はつまみ上げる。国産施釉陶器には美濃天目茶椀(1306・1307)、美濃皿(1308)、

黄瀬戸大皿（1309）、唐津壺（1310）がある。美濃天目茶椀（1306）は口径 7.0 cm の小椀、1307 は口径 12.2 cm ある。ともに鉄釉を施す。美濃皿は口径 11.5 cm、高さ 2.7 cm の灰釉皿で、高台内には輪トチン痕がある。黄瀬戸大皿は口径 27.7 cm、高さ 5.8 cm。折縁で底部内面中央に陰刻花文を施し、その周囲には目跡が付く。唐津壺は口径 17.0 cm の短頸壺で、内外面に鉄釉を施す。輸入陶磁器には白磁皿（1311）がある。底部のみの残存で、削出高台。内面と高台内は露胎する。

土坑 7（図版 64・123）土師器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、輸入陶磁器がある。土器の時期は XI 期中に属する。後述する土坑 10 と同じく出土土器には XI 期中よりやや新しい要素が含まれる。土師器には皿 Nr（1312～1315）、皿 S（1316・1317）がある。皿 Nr は口径 5.0～5.9 cm、高さ 1.3 cm。皿 S は口径 10.5 cm、高さ 2.1 cm のもの（1316）、口径 12.3 cm、高さ 2.3 cm のもの（1317）の 2 群がある。焼締陶器には備前小壺（1318）がある。底部はヘラ切りで、器壁は厚い。軟質施釉陶器には椀（1319）がある。口径 10.9 cm、高さ 6.3 cm あり、ほぼ完形。京都産である。内外面全体に黄緑釉が掛かるが鉛が抜けて白くなる。部分的に濃緑色の所があり、斑状に施釉されていた可能性がある。国産施釉陶器には美濃の白天目茶椀（1320）、唐津椀（1321・1323）、唐津壺（1322）がある。白天目茶椀は口径 11.4 cm で、口縁下部に段が巡り、長石釉が掛かる。唐津椀（1321）は口径 12.0 cm、高さ 7.9 cm のやや大振りの椀である。体部は緩やかに開きながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。青唐津と呼ばれる青灰色の灰釉を施す。1323 は底部のみの残存で灰釉を施す。唐津壺は短頸小壺。小片のため口径は不確実である。内外面に灰釉を施す。輸入陶磁器には呉須赤絵大皿（1324）がある。口径 23.0 cm、高さ 4.7 cm。白濁した白磁皿に赤絵で花草文を、緑の上に魚や櫛模様などを黒線で描く。高台には離れ砂が付着、高台内は露胎。□□州窯産である。

井戸 89（図版 65）土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器がある。土器の時期は XI 期中に属する。土師器には「つぼつぼ」とよばれる小壺（1325・1326）がある。口径 2.2～2.5 cm、高さ 2.2～2.4 cm ある。国産施釉陶器には美濃茶入（1327）、美濃天目茶椀（1328）、唐津皿（1329・1330）がある。美濃茶入は口径 4.7 cm、高さ 5.4 cm。底部は糸切り未調整で、幅 0.1 cm、長さ 2.0 cm の焼成時のキズがある。鉄釉を施す。美濃天目茶椀は口径 12.6 cm、高さ 6.1 cm あり、削出高台で鉄釉を施す。唐津皿はともに削出高台で、灰釉を施す。1329 は底部内面に目跡が付く。

土坑 10（図版 65・123）土師器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、輸入陶磁器がある。土器は XI 期中に属する。図示はできなかったが肥前染付磁器が出土しており、XI 期中よりやや新しい要素が含まれる。土師器には皿 Nr（1331）、皿 Sb（1332）、皿 S（1333～1339）、小壺（1340）、焼塩壺（1341）、焙烙（1342）がある。皿 Nr は口径 5.6 cm、高さ 1.4 cm。皿 Sb は口径 9.5 cm、高さ 2.1 cm。皿 S は口径 9.8～11.0 cm、高さ 2.0～2.4 cm のもの（1333～1337）、口径 13.2～13.5 cm、高さ 2.1 cm のもの（1338・1339）の 2 群がある。焼塩壺は口径 5.2 cm、高さ 7.9 cm あり、芯に粘土を巻き付け成形。焙烙は口径 34.0 cm。外面はヘラケズリ、口縁部外面と内面はハケメ調整を施す。焼締陶器には信楽播鉢（1343）、丹波播鉢（1344）がある。信楽播鉢は口径 31.1 cm、高さ 13.1 cm。播目は 6 本 1 単位で胎土に長石粒を多く含む。丹波播鉢は口径 35.1 cm、高さ 13.5 cm あり、体部は直線的に開き口縁端部は丸く収まる。体部外面に指オサエ痕が付く。播目は 5 本 1 単位。輸入陶磁

器には明染付椀（1345）がある。体部外面には勢いよく泳ぐ魚を描く。断面に漆継の痕跡が残る。

その他遺構（図版 65、観察表 4） 3 区では混入として 9～11 世紀前半の遺物が少量ながら出土している。ここでは平安時代前期の遺物を中心に器種別に図示した。

白色土器には高杯（1346）、鉢（1347）がある。高杯は杯部と裾部が欠損している。脚部に面取りを施し、杯の接合部には段を設ける丁寧な作りである。鉢は高台の付くタイプで貼付高台である。黒色土器には椀（1348）がある。口径 16.0 cm、高さ 4.9 cmあり、内外面にミガキを施すが磨滅して不鮮明。口縁端部内面に 1 条の沈線が巡る。貼付高台の B タイプ。須恵器には台付皿（1349）、甕（1350）、杯蓋（1351）がある。台付皿は口径 14.0 cmあり、内面には自然釉が掛かる。甕は口縁部の破片で、外面には波状文を施す。杯蓋は口径 13.5 cmで、つまみが付くタイプ。緑釉陶器には椀（1352～1358）がある。1355 は椀皿不明。1352 は体部内面に陰刻花文を施す。1357 は削出高台の全面施釉。1354 は削出高台で底部外面以外に施釉。1353・1355・1357・1358 は貼付高台の全面施釉。灰釉陶器には椀（1359・1360）がある。1359 は口径 13.0 cmで底部は欠損。1360 は口径 14.0 cm、高さ 5.8 cmあり、貼付高台である。輸入陶磁器には越州窯青磁椀（1361）がある。底部は削出しの蛇の目高台。高台外面には目跡が付く。

3. 瓦類

1～3 区で出土した平安時代以前から江戸時代の軒瓦の小破片・細片を含めた総数は 945 点である。これらの軒瓦を各々、共通する瓦当文様、造瓦技法、胎土、焼成の特徴により分類を試みた。分類にあたっては完形、もしくはそれに近いものを対象とした。対象とした軒瓦の総数は 683 点で、内訳は軒丸瓦 319 点、軒平瓦 344 点、棟丸瓦 2 点、軒棧瓦 18 点である。時期別にみると平安時代 440 点、鎌倉時代から室町時代 72 点、桃山時代から江戸時代 171 点である。軒瓦以外では緑釉熨斗瓦 11 点、道具瓦 24 点、刻印瓦 5 点、金箔瓦 3 点が出土している。以下、時代別に主要な軒瓦を中心に概述する。

（1）軒丸瓦（図版 66～69・124～127、観察表 5）

平安時代前期 全地区から出土した軒丸瓦は 13 点であった。

瓦 1 は 3 区の中世整地層から出土した栗栖野瓦窯産の緑釉単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。他に同文とみられる破片が 1 点出土している。瓦 2・3・5 は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦 2 は西賀茂瓦窯産、瓦 3 は内区に二重の圈線が巡る岸部瓦窯産である。瓦 3 は他に同文が 1 点出土している。瓦 5 は 1 区池 1810 から出土した栗栖野瓦窯産で、他に 1 区の他の遺構から同文が 3 点出土している。瓦 4・6 は西賀茂瓦窯産の単弁十六葉蓮華文軒丸瓦である。この他に前期とみられる軒丸瓦が 1 区から 2 点出土している。

平安時代中期 全地区から出土した軒丸瓦は 123 点であった。

瓦 7～12 は瓦当成形が一本造り技法による蓮華文軒丸瓦である。瓦 7 は 11 世紀末～12 世紀前半の 1 区池 1570 から出土した栗栖野瓦窯産の複弁四葉蓮華文軒丸瓦で、他に 1 区池 1570 から

は同文が3点出土している。瓦8は12世紀後半の1区井戸73から出土した栗栖野瓦窯産の複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦9は複弁六葉蓮華文軒丸瓦で、他に1区からは同文が6点出土している。瓦10は11世紀後半～12世紀前半の1区地業2000から出土した複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、他に1区から同文が6点出土している。瓦11は単弁八葉蓮華文軒丸瓦で2区土坑285から出土した。瓦12は単弁十六葉蓮華文軒丸瓦で1区から出土した。瓦13は小型の複弁四葉蓮華文軒丸瓦で、文様構成は瓦7と類似する。他に同文が1区池1570から3点、他の遺構から3点出土している。瓦14・15は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦14は11世紀中頃～後半の1区池1810から出土した丹波産とみられる軒丸瓦で、他に同文が3点出土している。瓦15は他に1区から同文が4点出土している。瓦16は単弁十六葉蓮華文軒丸瓦で1区から出土した。瓦17・18は複弁六葉蓮華文軒丸瓦である。瓦17は太い周縁に大きな珠文が12個みられ、さらに外周縁が巡る。他に同文が1区から10点、3区から1点出土している。瓦18は太い周縁に珠文がかすかにみられるが明瞭ではなく、外周縁も一部にみられる。他に同文が1区から10点出土している。瓦19～23は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。他に同文が瓦20は6点、瓦19・21～23はそれぞれ5点ずつ出土している。瓦19は弁の大きさが不揃いで、中房の蓮子が不明確である。瓦20・21は瓦19と同じ文様構成をもつが、中房に1+4の蓮子が明確なもの(瓦20)と、範傷が顕著にみられるもの(瓦21)がある。瓦22・23は瓦当面に範木目が明瞭に残る。瓦22はさらに上半部に斜め方向に範傷が明確にみられる。瓦24は外区周縁に唐草文が巡る単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房が小さく、蓮子は1+8を配す。唐草は左回りに巡る。他に同文が1区池1570や3区整地層から3点出土している。瓦25・26はいずれも外区周縁に唐草文が巡る複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦25は凸形中房で蓮子は不明確。唐草は右回りに巡る。他に同文が1区池1810や3区瓦敷面から7点出土している。瓦26も凸形中房で蓮子は不明である。唐草は右回りに巡る。瓦27は山城産とみられる単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、3区溝255から出土した。瓦28・29は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。いずれも弁間に花卉がのぞくが、瓦28の花卉は先端が尖り、瓦29は先端に丸みをもつ。他に同文が瓦28は1区から4点、瓦29は1区から9点、2・3区から1点ずつ出土している。

平安時代後期 全地区から出土した軒丸瓦は52点であった。

瓦30～34は栗栖野瓦窯産とみられる蓮華文軒丸瓦で、いずれも子葉・間弁は凸線で描かれている。瓦30は複弁六葉蓮華文軒丸瓦で、他に同文が3区から5点出土している。瓦31は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で上半の斜め方向に範傷がみられる。瓦32は複弁六葉蓮華文軒丸瓦で下半に範傷がみられる。他に同文が瓦31は3区から7点、瓦32は3区から4点出土している。瓦33は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、他に同文が1区から14点出土している。瓦34は1区池1570から出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦33・34は中房に圏線がみられない。瓦35は1区池1810から出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦36・37は播磨産の複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦36は他に1区から4点出土している。瓦37は1区池1570から出土した。瓦38～41は巴文軒丸瓦である。瓦38・39は右巻き三巴文軒丸瓦である。瓦38は尾部が互いに接して界線をなすタイプで、他に同文が1区から3点出土している。瓦39は尾部が接しないタイプで、他に1区から

2点、3区から1点出土している。瓦40は左巻きの三巴文軒丸瓦で1区から出土した。瓦41は右巻きの巴文軒丸瓦で、外区に大粒の珠文がみられる。

鎌倉時代から室町時代 全地区から出土した軒丸瓦は51点であった。

瓦42～46はいずれも凸形中房をもつ複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦42・45はいずれも中房に「卍」を配するが、瓦42は周縁が広く、外区には珠文がみられる。瓦45は周縁が欠損する。瓦45は他に同文が1区から3点出土している。瓦44は中房に「十」を配する。他に同文が1区から4点出土している。瓦46は外区の珠文が楕円形を呈する。他に同文が1区から4点出土している。瓦47～50はいずれも三巴文軒丸瓦である。瓦47・48は右巻きの三巴文で、頭部は離れ、尾部も互いに接しない。他に同文が1区から12点ずつ出土している。瓦49・50は左巻きの三巴文で、頭部は離れ、尾部は接しない。瓦49の胎土は軟質、瓦50は堅緻である。瓦50は他に同文が1区から6点、3区から1点出土している。

桃山時代から江戸時代 全地区から出土した軒丸瓦は80点であった。巴文軒丸瓦が主体を占める。その他に棟丸瓦は2点、軒棧瓦は18点、金箔瓦は3点、道具瓦は24点であった。

瓦51～60は右巻きの三巴文軒丸瓦である。いずれも頭部は離れ、尾部は互いに接しない。瓦当径により瓦51・52、瓦53～56、瓦57～60に分かれる。瓦51・52は瓦当径が13cm台で、他に同タイプのもので1区から26点と3区から1点出土している。瓦53～56は瓦当径が14cm台で、他に同タイプのもので1区から21点出土している。瓦56は瓦当部の下半分が欠損しているが、丸瓦部はほぼ残存しており、全長約28cmである。玉縁部に近接して径1cmの釘穴がみられる。瓦57～60は瓦当径が15cm台である。周縁は幅約2cmと幅広い。他に同タイプのもので1区から12点出土している。瓦61～63は左巻きの三巴文軒丸瓦である。瓦61・62は頭部が離れ、尾部も互いに接しない。瓦63は頭部が離れるが、尾部が互いに接し界線をなし、大粒の珠文が巡る。瓦62はほぼ完形である。巴文の周囲に大粒の珠文が巡り、周縁は幅2.1cmと広い。丸瓦部には径1cmの釘穴が残る。瓦61は瓦当径が13cm台で、他に同タイプのもので1区と3区から合わせて5点出土している。瓦62は瓦当径が14cm台で、他に1区から1点出土している。瓦63は瓦当径が15cm台で、他に2区から1点出土している。

瓦64・65は菊花文の棟丸瓦である。瓦64は瓦当径が約7cmで周縁幅0.8cmの単弁十六葉、瓦65は瓦当径約10cmで無周縁の単弁八葉である。瓦66・67は軒棧瓦である。いずれも丸瓦当は右巻きの三巴文で、頭部は離れ、尾部は接しない。瓦66は巴文のまわりに大粒の珠文が巡る。平瓦当は唐草文。他に瓦66は4点、瓦67は1区から12点出土している。

瓦68～70は金箔瓦である。瓦68は軒丸瓦の瓦当上端部であるが、文様は不明。周縁部に金箔が残る。瓦69は道具瓦の一部とみられる。周縁部に金箔が残る。瓦70は獅子口系棟端瓦である。有周縁の瓦当部は単弁八葉の菊花文で、中房は凸形である。瓦当部には金箔がみられる。外縁の右上半と左下の2箇所に一辺0.6cm方形の釘穴が残る。

瓦71は道具瓦の一部で、文様は大きな二葉と枝状のものがみられるが、全体文様は不明である。

(2) 軒平瓦 (図版 70 ~ 73・128 ~ 131、観察表 6)

平安時代前期 全地区で出土した軒平瓦は 38 点であった。

瓦 72・73 は重郭文軒平瓦である。瓦 72 は重郭内に弧線がみられる難波宮 7574 型式、瓦 73 は難波宮 6527 型式に属する。ともに奈良時代であるが、再利用軒瓦と考えられる。他に同文が瓦 72 は 1 区から 4 点、瓦 73 は 1 区から 2 点出土している。瓦 74 は中心に対向 C 字形を配する均整唐草文軒平瓦で、外区右下に「西」銘を横向きに配置している。他に同文が 1 区から 9 点出土している。瓦 75 は均整唐草文軒平瓦である。平城宮 6694-A 型式に属することから、瓦 72・73 と同様に再利用軒瓦とみられる。瓦 76・77・79 は中心飾りが「小」字形の均整唐草文軒平瓦である。瓦 76・77 は西賀茂角社瓦窯産、瓦 79 は摂津岸部瓦窯産とみられる。瓦 76・77 は他に同文が 1 区から 5 点ずつ出土している。瓦 78・80 ~ 82 は中心飾りが対向 C 字形の均整唐草文軒平瓦である。瓦 78 は摂津岸部瓦窯産とみられ、左側の C 字形に範傷がみられる。他に同文が 1 区から 2 点出土している。瓦 80 は瓦当幅がやや小ぶりで、珠文などに範傷がみられる。瓦 81 は C 字形の中心に紡錘形の小葉を配する上庄田瓦窯産である。瓦 82 は 1 区池 1570 から出土した。

平安時代中期 全地区で出土した軒平瓦は 136 点である。

瓦 83 は中心飾りが対向 C 字形の均整唐草文軒平瓦で、池田瓦窯産とみられる。瓦 84 は左右から中心に展開する均整唐草文軒平瓦である。瓦 85 は唐草文が波状に変形した均整唐草文軒平瓦である。瓦 86 は中心飾りが「上」字の均整唐草文軒平瓦で、河上瓦窯産である。他に同文が 1 区から 2 点出土している。瓦 87 は直線化した茎に不規則に子葉が配される唐草文軒平瓦である。他に同文が 1 区から 2 点、3 区から 4 点出土している。瓦 88 は唐草文が中心で交差し、山形の中心飾りが配される播磨産の均整唐草文軒平瓦である。他に同文が 1 区から 2 点、3 区から 3 点出土している。瓦 89 は中心飾りが背向 C 字形の均整唐草文軒平瓦で 3 区から出土した。丹波王子瓦窯産。瓦 90 は左から右行きの偏行唐草文軒平瓦で、外区の珠文は竹管状で大粒である。永承二年 (1047) の興福寺再建瓦で大和産とみられる。瓦 91 は顕著な中心飾りはみられないが、左右に唐草が緩やかに反転する均整唐草文軒平瓦である。瓦 92 ~ 95 はいずれも左右から中心に飛雲状の唐草が向かう均整唐草文軒平瓦である。瓦 92 は範全体が上方にズレている。瓦 93 は範傷が中央にみられる。瓦 94 は範ズレ・範傷が顕著で、外区の珠文は小粒である。瓦 95 は文様が平坦化し、輪郭が太い。他に同文が瓦 92 は 1 区から 16 点、3 区から 2 点、瓦 93 は 1 区から 18 点、瓦 94 は 1 区から 7 点、瓦 95 は 1 区から 6 点、3 区から 2 点出土している。瓦 96 ~ 98 は蓮弁文軒平瓦である。いずれも蓮弁を放射状に配し、蓮弁の間に間弁がみられる。瓦 96・97 は左端が単弁である。瓦 96 は蓮弁間の間弁が小さい。瓦 98 は左端も複弁である。他に同文が瓦 96 は 1 区から 4 点、瓦 97 は 1 区から 10 点、瓦 98 は 1 区から 7 点出土している。瓦 99・100 はいずれもヘラで格子状の文様が描かれた軒平瓦である。瓦 99 は斜め方向の長い平行線による蓮菱状、瓦 100 は横長の斜格子である。瓦 99 は他に同文が 2 点出土している。瓦 101 は方形状の文様が重複し、方形左下にそれぞれ点状のものがみられる。工具の隅部を押圧したようにみえる。瓦 102 は斜格子内に紡錘形を配する。瓦 103・104 は左右から唐草文が中心に展開する均整唐草文軒平瓦である。瓦 103 は中心飾りに

小葉を上下に配する。栗栖野瓦窯産。他に同文が1区から11点、2区から1点、3区から10点出土している。瓦104は森ヶ東瓦窯産とみられる。他に同文が1区から5点出土している。

平安時代後期 全地区で出土した軒平瓦は78点である。

瓦105は両側から唐草が中心に3反転する均整唐草文軒平瓦である。範傷が文様の上半に斜線状にみられる。瓦106～109はいずれも左から右に唐草が展開する栗栖野瓦窯産の偏行唐草文軒平瓦である。瓦106は右端に小葉を配する特徴をもつ。他に同文が3区から5点出土している。瓦107は瓦106と類似するが右上に小葉がみられないタイプである。他に同文が1区から5点、3区から15点出土している。瓦107は唐草の幅により瓦108の太いタイプに分かれる。瓦109は他に比べ文様の単位が大きく、瓦当にはおさまらないタイプで、1区池1570から出土した。瓦110～117は播磨産を主体とする地方産の軒平瓦である。瓦110・111は宝相華唐草文軒平瓦である。いずれも簡略化した半截花文を中心に配し、左右に唐草文が展開する。瓦110は播磨産、瓦111は備前・備中産である。瓦111は他に同文が2点出土している。瓦112は唐草が中心から左右に3反転する均整唐草文軒平瓦である。瓦113～116は播磨産の軒平瓦である。瓦113は平瓦部裏面に平行タタキが残る。他に同文が2点出土している。瓦114は半截花文を中心に配し、唐草文が左右に展開する。他に同文が2点出土している。瓦115は上向きC字形の中心飾りで、均整唐草文の中心部分である。瓦116は唐草の先端に蕾がとりつく特徴を持つ。瓦117は上下交互に花文を配する半截花文である。瓦118は両側から唐草文が中心に展開し、珠文が密に巡る栗栖野瓦窯産の軒平瓦である。瓦119～132は折曲式の技法による剣頭文系の軒平瓦である。また凹面に布目痕を残すものが多数ある。剣頭文軒平瓦は12世紀後半を中心に多く出土しており、小型で軽量なものが多い。瓦119～121は瓦当幅が2cm台と狭く、剣頭文も小さく不揃いである。瓦122～132は瓦当幅3cm台で、大部分が剣頭状に窪んだ単位文様を連ねているが、文様を放射状に配するものと垂直に配するものがある。後者の場合、瓦124～126・128・129のように単位文同士が重なりあったりする。また中央には、瓦125・130は菊花文、瓦127・129は巴文、瓦131は連珠文を配する。他に同文が瓦119は10点、瓦122は9点出土している。

鎌倉時代から室町時代 全地区で出土した軒平瓦は21点である。

瓦133～136は剣頭文軒平瓦である。瓦133は瓦当幅が4.8cmと他の3cm台に比べ広い。瓦137は中心飾りに菊花文を配し、両側に唐草文が展開する大和産の均整唐草文軒平瓦である。東福寺再建期（14世紀中～15世紀前半）のものとみられる。瓦138～140は中心から左右に唐草が展開する均整唐草文軒平瓦である。いずれも軒丸瓦42～46との組み合わせが考えられる。他に同文が瓦138は3点、瓦140は6点出土している。瓦141は内区に格子文を配する。また瓦138～141は、いずれも13世紀末～14世紀の1区井戸1238から出土しており、瓦当面は火災などの2次的被熱を受け変色している。瓦142は中心に五葉の葉文を配し、両側に唐草が展開する均整唐草文軒平瓦である。瓦143は中心に宝珠形を配し、変形化した唐草が左右に展開する。瓦144は瓦当面に「神泉」銘を陽刻した軒平瓦である。欠損部は「苑」で「神泉苑」と推定される。

江戸時代 全地区で出土した軒平瓦は71点である。唐草文が中心で14種類66点で、その他は

立浪文が5点である。中心飾りに葉形を配する均整唐草文軒平瓦が主である。瓦145～156は江戸時代前期から後期、瓦157～160は江戸時代末期である。

瓦145～156は三葉の葉形を中心に左右に唐草が2転するものが主で、3転するものには瓦152・156がある。瓦152は瓦当面の左上に「△」印がみられる。他に同文が瓦149は7点、瓦150・155・156は6点ずつ、瓦151は5点、瓦148は4点、瓦153・154は3点ずつ、瓦145は2点出土している。瓦157～160は、瓦157・159は立浪文で、いずれも瓦当表面にはキラコがみられる。瓦158は均整唐草文軒平瓦で中心飾りが葉形で、上方には珠点を配する。

瓦160は小丸はなく雀口が付く鎌軒棧瓦である。中心飾りは宝珠形で、両側は変形した唐草文が3反転する。他に同文が8点出土している。

(3) 刻印瓦・緑釉熨斗瓦 (図版73・131、観察表7)

全地区で出土した刻印瓦は5点、緑釉熨斗瓦は11点である。緑釉熨斗瓦は残存良好な2点についてのみ明示した。

瓦161～165は刻印をもつ平瓦である。瓦161は平瓦端面に、方形の圏線内に「田」印を押捺する。平安時代とみられる。瓦162は平瓦凹面に「木工」銘を押捺する。平安時代前期から中期とみられる。瓦163は平瓦凸面に「≠」印がへら描きされている。瓦164は平瓦凸面にへらで「大」印が描かれている。いずれも平安時代とみられる。瓦165は平瓦凹面に円内に縦方向で「大工」銘を押捺する。江戸時代。

瓦166・167は緑釉熨斗瓦である。小片のため熨斗瓦は平瓦を割って使用したものか、熨斗瓦として製作されたかは判断できない。瓦166は緑釉が凸面側端に幅3cmで、側面にも施釉されている。瓦167は緑釉が凸面に幅4cm以上と、側面に施釉されている。いずれも平安時代前期から中期とみられる。

4. 銭貨 (図版74・75・132・133、図21、観察表8)

200点出土した。このうち種類が判明したのは155点である。保存状態が良い123点を検討対象とし、56点を図示した(観察表8)。銭貨の内訳は、皇朝十二銭、唐銭、北宋銭、南宋銭、明銭、寛永通寶を主体とする国内銭(図21では「江戸銭」とした)、明治銭に大別できる。江戸銭が77点でちょうど半数を占め、次いで北宋銭が53点で34%を占める。

江戸銭では、寛永通寶が77点(92%)、寶永通寶が1点(1%)、文久永寶(宝)が5点(7%)ある。北宋銭については図21に示した20種類が確認できた。元豊通寶が10点で最も多く、以下、嘉祐元寶と紹聖元寶が5点、熙寧元寶と元祐通寶が4点となる。以下3～1点と少量である。

出土遺構との関係について検討する。皇朝十二銭は、観察表に示した4点はすべて平安時代より後の遺構から出土している。しかし表には出ていない淳元大寶は地業2000(11世紀後半)から出土している。軋元大寶の初鑄は天徳2年(958)であるため、遺構年代とは矛盾しない。13世紀から14世紀の遺構からは北宋銭が4点(元豊通寶・景德元寶・嘉祐元寶・聖宋元寶)出土して

いる。15世紀後半から16世紀中頃までの遺構からは同じく北宋銭が4点（天聖元寶・嘉祐通寶・元豊通寶・皇宋通寶）出土している。16世紀後半から17世紀前半までの遺構からは17点出土している。うち1点は寛永通寶（銭38）で、ここでの出土最古例である。残りは、北宋銭10点、皇朝十二銭（延喜通寶）1点、唐銭（開元通寶）4点、明銭（永樂通寶）1点である。寛永通寶の鑄造は寛永3年（1626）であるから、桃山時代から江戸時代初めまでの遺構に北宋銭が多いことは矛盾しない。17世紀から18世紀までの遺構からは13点出土している。うち北宋銭が5点、寛永通寶が7点で、寛永通寶の増加が顕著となっている。なお文久永寶（銭50）は文久3年（1863）初鑄であるため、後世に混入した可能性がある。18世紀から19世紀後半までの遺構からは45点出土している。寛永通寶が31点で最も多く、文久永寶（寶）2点を加えると国内銭は33点となる。宋銭は6点と少ないが残存する。また19世紀後半からの遺構からは明治銭が6点出土している。

寛永通寶については、古寛永銭と新寛永銭の区別は字体から判断できたため、観察表では「古寛永」のみを表示した。新寛永は寛文8年（1688）の鑄造で、裏面に「元」「文」「波」をもつものを示した。

北宋銭については、中世遺構と江戸時代遺構から同種のものが出土しており、それらを直接比較した。景德元寶では、銭3（14世紀）は手ずれしているが土坑834出土例（観察表8、18世紀初～前）は文字が判読でき、新たに鑄造された銭のようにみえる。元豊通寶のうち銭15（15世紀後～16世紀前）は外径も大きく、中心孔も正常であるが、同じ字体をもつ銭18（16世紀末～17世紀初）は外縁が狭められて中心孔も面積が拡大している。銭貨に対する材料を減らそうとする意図が読みとれ、模鑄銭の可能性が高いであろう。以上の例外は別にして、渡来銭全般については中世の遺構出土品と江戸時代の出土品との間に顕著な差は見出せない。相当量の模鑄銭が含まれていると推定されるが、理化学的な分析も実施しておらず、それらの抽出は果たせていない。

5. 金属製品（図版76・134・135、観察表9）

銅製品・鉄製品・鉛製品がある。銅製品が最も多い。銅製品では、キセル・火箸・耳搔き・簪・把手金具・引手金具・飾金具・キャップ・留金具・掛金具・切羽・はばき・筭・釘などがある。

金1～5はキセル雁首、金6～10はキセル吸口である。金1は長さ36cmに達する長大品で雁首は完存するが、吸口は残存しない。火口は折り曲げただけの簡単な構造をもつ。金2～4は同様

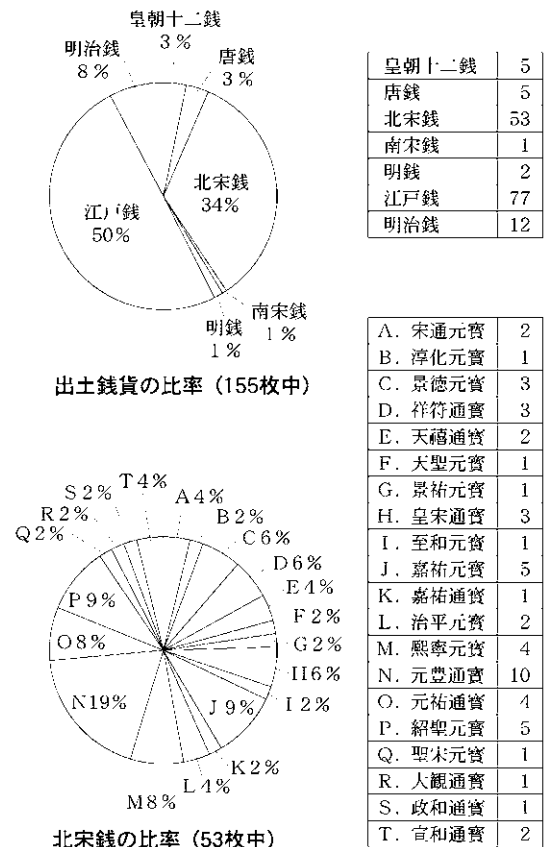


図21 銭貨の比率グラフ

の形状をもつ。金1も含めて19世紀の遺構から出土している。17世紀に属する遺構から出土したものもあるが、保存状態が悪く図示できない。キセル吸口は太さ・長さには差異がある。金6は身が細長く、表面に金メッキを施す。金9・10は身が太く短い。金7・8は両者の中間形態を持つ。金9は平行の筋目が彫られ、金10は断面が六角形を呈する。金11～14は火箸である。金12のみ直線的な形状を留めるが、残り4点は折れ曲げられている。金12の身断面は六角形を呈する。他は円形である。頭部にはつまみ状のものが付く。反対側の先端は尖っている。金14の頭部には針金の輪が巻き付く。金15・16は耳搔きとみられる製品である。金15は板状でまっすぐの形状をとどめるが、金16は折れ曲がる。ともに頭部は皿状に造られている。金17～23は簪である。金17～21は身が2股に分かれ、金22・23は身が短い。金19は身をねじり、頭を輪状に造り出す。金20・21は頭部を欠く。金22・23の頭部は耳搔き状を呈する。金24・25は把手金具である。両端には留金具が付属する。留金具には円形の金具も残存する。金26・27はふすまの引手金具の一部（円盤部分）である。楕円形を呈し、金27には細かな文様が刻まれる。金28・29は飾金具である。金28は笠松形に削りぬかれ、一面には松葉文様が彫刻される。金29は魚形に成形された鉛製品で、ふすまの引手金具のような用途が想定できる。中心は皿状に窪み、裏面には「明清」の文字が陽刻される。金30は銅製の筒形製品で、柄の先端にキャップとして付けられたものとみられる。金31は留金具で足が2股に分かれている。本来は金24・25に付けられた留金具と同じ構造とみられる。金32は掛金具で、釣針状を呈する。金33～39は刀装具である。金33～35は切羽で、銅板を刀身形に削りぬく。推定される刀身の規模は、幅2.9cm前後、厚さ0.7cm程度である。金35は刀身の削りぬき部分に段差が付けられ、縁にも刻目が残る。金33・34にも同様の装飾があったとみられる。金36・37は、はばきとされるもので、ここから推定される刀身の規模は、幅2.8cm、厚さ0.6cm程度である。この値は切羽の削りぬきより若干小さい。金38は筭である。表面に文様は彫られていない。金39～44は銅釘である。金39は身がねじられている。金40は出土した中では最も大型の釘で、頭部は半球形、身は四角形に造られている。金41～44は平坦な頭部で、身は円形を呈する。この他、銅製の針金が多数出土している。太さ・長さは様々で、輪状に巻かれたものや陶器把手に巻き付いたものもある。

鉄製品では釘・刀身・小柄・鉄砲玉がある。錆で保存状態が悪く、ここでは小柄、鉄砲玉を図示する。鉄45・46は鉄砲玉で、ともに直径1.2cm、重さ3～4gある。中央に筋があり、半分のを接着させて球形としたことがわかる。鉄47は小柄で、長さ9.8cm、幅1.2cmある。関によって刀身と茎が区別できる。

鉛製品では、金29とした魚形の飾金具以外には、円盤、方形の板状製品がある。いずれも完成品ではなく、鋳物用の原材（インゴット）とみられる。金48は細長い板状の製品で、両端は欠損し、断面形も整っていない。金49は円盤状に成形された製品である。金50も方形に成形された製品で、表面には槌の叩き痕跡が明瞭である。叩きが足りず中心は塞がっていない。

6. 鑄造関係遺物（図版 76・137、観察表 10）

鑄造に関連する遺物は全体で9箱ある。桃山時代、江戸時代の遺構から出土しており、埴塙、トリベ、吹子の羽口、鑄型、鉄滓、炉壁などがある。吹子の羽口が圧倒的に多い。トリベと鉄滓は数点、鑄型は1点にとどまった。

埴塙では、通常の形態のものと、信楽焼の陶器壺の外側にスサ入り粘土を上塗りしたものがある。いずれも19世紀の遺構から出土している。トリベは1区から1点、3区から4点出土した。1区出土のものは灰釉陶器風の小皿を利用している。3区出土のものは、トリベとして製作されたものと陶器を転用したものがあるが、どちらも小片である。吹子羽口は、図版76で鑄1から鑄4までを図示した。鑄2は長さ29cmある完形品である。4点とも炉側の部分は金属と窯壁材が付着する。この部分は磁性を帯びており、鉄の溶けたものが付着したことがわかる。鑄型は2区溝20（18世紀～19世紀前葉）から鏡鑄型の土台となる部分が1点出土している。真土の部分は欠損している。鉄滓とみられるものが土坑1222（16世紀末～17世紀初）から吹子羽口などとともに出土している。炉壁は磚状の板材を壁面として、上にスサ入り粘土で固定されたものの破片が出土している。全容は不明であるが、炉の壁面が壊れたものであろう。

遺構別では、落込925から吹子羽口が多いことが注目される。遺構を埋める際に持ち込まれたものであろう。1区南西部で検出した炉216からは、加工痕のある長方形の凝灰岩や花崗岩製の吹子が出土している。両方とも被熱によって赤変し、炉で使用されたことがわかる。

7. 石製品（図版 77～80・136～143、図 22、観察表 11）

硯（石1～26、図22）保存状態が良い26点を取り上げる。大きさから、長さ13cm、幅7.5cm前後の大型品、長さ12～13cm、幅5.5cm前後の中型品、長さ8.5cm、幅4cm前後の小型品に区分できる。形状は、長方形を呈するものが大多数であるが、楕円形を呈するもの（石3・8）も少数ある。石2は隅を丸く加工し、そこに切り込みを入れる。石2・3・8の断面形は擦面側が広いが、これは古い時期の石製硯にみられる特徴である。長方形を呈するものでは裏側を彫り窪ませたものがみられるが（石13・14・16・17・25・26）、これらは「高島硯」と呼ばれる製品に多い特徴である。石11と12、石13と14は、それぞれ同じ形状をもつ規格品である。石9は海側のみを再利用した製品である。

石材は4種類が確認できる。石2～17は頁岩～粘板岩である。特に、江戸時代に属する石5以後の硯は、湖西の高島地方で産出する石材で製作されたもので、「高島硯」と通称される。これに対して、石18～21は山口県赤間関付近で産出する石材で製作された「赤間硯」と通称されるもので、特に石19・21の裏面では「赤間関」の文字が確認できた。この石材は赤味（10YR6/2 灰黄褐色～10R4/2 灰赤色）を帯びた緻密な石質をもち、肉眼観察でも他地域の製品とは区別できる。石22～24は流紋岩とされるもので、多孔質の中には褐色の脈が走る。形態はすべて長方形の大型品である。石21と石25・26は珪質頁岩～珪質粘板岩製の硯で、石1は硬質であるが石25・26は軟質で、主に砥石として使用される石材である。

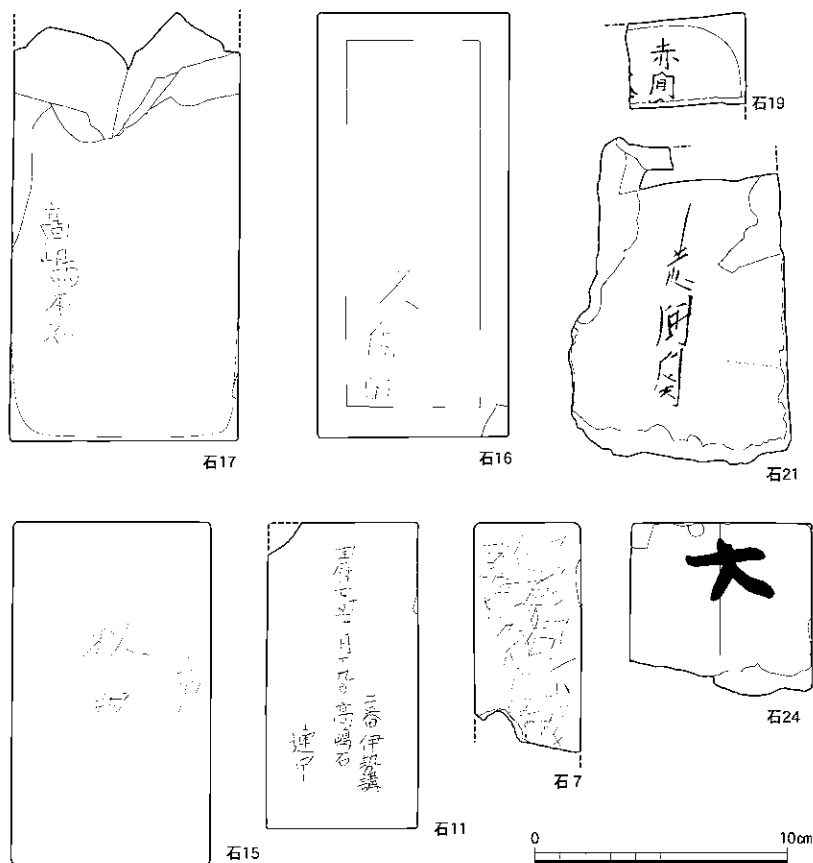


図 22 硯裏面の線刻文字・墨書（1：3）

硯の裏面には文字や記号、絵画を線刻するものが多い（図 22）。人名では「秋田 三男」（石 15）、「久保田」（石 16）、「住田」（図示していない）がある。石材名、地名では「高嶋石」（石 11）、「高嶋本石」（石 17）、「赤間関」（石 19・21）がある。石 7 にある「右」も、本来は「石」であったとみられる。石 19 の「赤間」は楷書体で彫られている。本来の銘は「赤間関住 大森大和守」であったとみられる。石 21 の「赤間関」は文字が稚拙である。石 11 は「宝

曆七 丁丑 十月十九日 高嶋石 二番 伊勢講 連中」とあり、持ち主を明記している。宝曆七年は西暦 1757 年に該当する。また流紋岩製の石 24 は裏に墨書で「大」を記す。

時期的な変遷としては、14 世紀に属する石 1 は、薄手で手前側に縁がなく、陶硯の形状を模している。15・16 世紀の良好な資料はない。硯が出土品として増加するのは 16 世紀末頃からで、楕円形の硯（石 3）、幅が広い形態の硯（石 4）があり、以後江戸時代を通じて長方形硯が主流となる。裏面に銘文をもつものは 19 世紀以後の製品にみられる。

砥石（石 27～47） 石材の種類、形態、残存状態から、石 27～47 の 21 点を選定した。形態はすべて長方形を呈する。断面形は、厚みがなく扁平なものが大半であるが、厚みがあり箱形を呈するものもみられる（石 30～32・36・43）。

石材は 5 種類が確認できる。石 27～29 と石 31・32 は流紋岩あるいは凝灰岩製の砥石である。扁平なものと箱形のものがあり、時期的にも平安時代後期から鎌倉・室町時代に属する。石 31 は上下両面に溝状の研磨跡をとどめる。石 31 と石 33～37 は砂岩（ホルンフェルス化したものを含む）製の砥石である。石 30 は風化のため凝灰岩のように見える。石 33・36・37 は表面がザラザラした粗砥ぎ用の砥石である。石 35 はホルンフェルス化した石材で、きめ細かな仕上げ用の砥石である。石 38 は頁岩～粘板岩製の「高嶋硯」の転用品である。縁を削り取り、陸部を砥石として再利用している。石 39～46 は珪質頁岩～珪質粘板岩製の砥石で、「鳴滝砥石」と通称されるものである。このうち石 39～41・46 は浅黄色（2.5Y7/4）で特に軟質である。表面はきめ細かく仕上げ砥石

として製作されたもので、出土量は最も多い。この石材の砥石は、石 43 を除くと箱形のものはみられない。幅は 3 cm 台の小型のもの（石 40・45・46）から、幅 7.6 cm ある大型品（石 44）までである。またこの石材は、大型の部品や部分的に研磨した破片があることから、調査地内で製品に加工されていたと推定される。石 47 は泥質ホルンフェルスで製作された砥石である。正方形を呈し、片面の縁は面取している。形状からみて、手持ちで研磨する砥石であったとみられる。

時期的な変遷としては、流紋岩あるいは凝灰岩製の石 27・28、砂岩製の石 33、珪質頁岩～珪質粘板岩製の石 39 は 11 世紀後半から 12 世紀に属し、流紋岩あるいは凝灰岩製の石 29～32 は平安時代末期から鎌倉・室町時代に属する。他方、砂岩製と珪質頁岩～珪質粘板岩製の砥石は江戸時代に属するものが大半である。江戸時代になると京都盆地北郊の丘陵地が砥石の産地となったためであろう。

滑石製羽釜（石 48～50） 口縁部のすぐ下に鏝を有する滑石製の羽釜であるが、残存状態は良くない。3 点を図示する。この他、鏝がなく「鍋」とすべき個体が 1 点出土している。石 48 は口径 16 cm 前後に復元でき、羽釜としては小型品である。体部は丸みを帯び、鏝の突出具合も小さい。13 世紀の遺構から出土している。石 49 は口径 22 cm に達する大型品であるが、ここでは断面形のみを図示した。石 50 は鏝が縦方向に付けられた羽釜であるが、破損した後、片面が削り込まれて再加工されている。

温石（石 51～55） 残存状態が良い 5 点を図示する。すべて滑石製品である。石 51～53 は滑石製羽釜の部位を削り込んで再利用したものである。石 51 は図の左端面、石 53 は図の上端面が羽釜の口縁部である。また石 52 は図の下端面が底部の屈曲点である。石 54・55 は同じ滑石製品であるが、板状を呈しており、当初から温石として製作されたものといえる。穿孔は石 51・54・55 で 1 孔が確認できた。石 51 は平安時代後期、石 52 は鎌倉時代、石 53～55 は江戸時代の遺構から出土している。

垢擦石（石 56～61） 軽石を垢擦り用に加工した製品で、図示した 6 点が全てである。石 58～60 は平坦面をもち、使用痕跡が顕著である。特に石 58 は図の下面が内弯し、小孔も穿たれている。石 58～60 は扁平気味であるが、石 56・57・61 は厚みがある。石 56 は 16 世紀末頃、それら以外は全て江戸時代の遺構から出土した。

石臼（石 62～67） 6 点を図示する。花崗岩製で播目の粗いものは穀物用の碾臼、砂岩製で播目が緻密な石 65 は茶臼である。また石 62～65 は上臼、石 66・67 は下臼である。上臼である石 63・64 の中心には孔が彫られる。石 63 はここに鉄芯が残存する。また石 62・64 では中心からはずれた位置に、穀物を擦り面に落とすための孔があげられる。茶臼である石 65 は中心孔に沿って落下させたようである。石 63 の側面には、上臼を回転させるための横穴が穿たれる。石 65 は横穴の周囲に 3 段の枠が装飾されている。石 66 の中心孔は上下から 2 段に穿たれている。石臼の播目は、全体を 8 等分した後、内部に 4～5 本の浅い溝を彫る。溝の間隔は 1.5～2 cm で製作時には上臼・下臼はまったく同じ配置をとる。しかし上臼が乗ると文様は反転するため、上臼を反時計方向に回転させると、擦り面で粉碎された粉は溝に沿って外に流れるように工夫されている。

境界石（石 68） 石 68 は片面に「土井大炊」、裏面に「安永二 癸巳」と線刻するが、下半は欠損する。安永二年は西暦 1773 年にあたり、この年に敷地の境界を明示するため屋敷境に設置されたものとみられる。江戸時代には調査地が土井大炊頭の屋敷地であったことを示す直接的な資料でもある。花崗岩製。1 区の北西部で土間の境界を明示する石列中にコンクリートで巻かれた状態で出土した。

石塔（石 69・70） 2 点ある。石 69 は五輪塔の先端部分とみられるが、宝珠形は呈さない。石 70 は宝篋印塔などの相輪とみられる。ともに花崗岩製である。

石材片（石 71・72） 2 点ある。断面六角形を呈する石材で、面が整うことから大型砥石のように見えるが、平坦面は自然の節理面とみられる。凝灰岩製とみられ、石質は石 22～24 の硯や、石 27～29、31・32 の砥石に類似する。それらの原石であろうか。

石仏（石 73） 阿弥陀如来坐像が刻まれた石仏である。頭部は欠損する。首にはしわ（三道）、胸にはたるみが表現される。左肩から胸にかけては、偏袒右肩と呼ばれる衲衣も表現される。右肩の彫りこみも衲衣の一部であろう。両手を膝におき、印相（上品上生印）を組む。印相左下の三角形は座禅の右足で、その右の溝は衲衣のしわであろう。台座は中心の蓮弁から左右に 2 枚ずつ配置される。右膝下の 2 枚は保存が良好であるが、左膝下は内側の 1 枚のみ認められる。下端には成形時の鑿跡が残る。右膝下の蓮弁から右肩にかけては当初の平坦面が保存されるが、左膝下は風化し、保存は良くない。光背部分に文様はみられない。花崗岩製。拡張区 5 の井戸状の遺構から出土した。

有舌尖頭器（石 74） 3 区の土坑 68（16 世紀後半～17 世紀前半）から出土した。残存長 4.5 cm あり、尖端を欠く。サヌカイト製。

石帯（石 75・76） 2 点ある。石 75 は丸鞆の完形品である。表面と側面は平滑であるが、裏面はマット状で、切断痕、剥離痕をとどめる。潜り穴は横方向に開けられる。図の左側の穴は精緻であるが、右側のはつぶれ気味で開け直している。白色でガラス質である。石 76 は巡方で、方形の溝の外側は欠損する。潜り穴は縦方向で、図の左側のは精緻であるが、右側では開け直している。表面と側面は平滑、裏面はマット状を呈する。白色であるが、丸鞆よりも赤みをもち、透明度も落ちる。

箱状製品（石 77） 長さ 4.4 cm、幅 2.3 cm ある白色の堅い石材で、長側面には文様が彫りこまれている。装飾的な意味があるとみられ、箱物のようなものの一部とみられる。

文鎮（石 78） 幅 1.6 cm の細長い板材で、一面には文様が彫刻されている。裏面は破損している。高島硯と呼ばれるものと同じ石材（頁岩～粘板岩）で製作されている。

石製円盤（石 79） 砥石と同じ石材（珪質頁岩～珪質粘板岩）を、直径 3.3 cm、厚さ 1.3 cm の円盤に加工したもので、一面には草木の文様、裏面には「大」の文字を線刻する。江戸時代に流行する泥面子と同じ形態をもつ。16 世紀末頃の遺構から出土した。

碁石（石 80～97） 図示した 18 点が全点数である。直径は、最小が石 81 の 1.7 cm、最大が石 87 の 2.7 cm である。重さは 2 g から 9 g までである。石 86・90・92・94 は真円に近い。石 80 は 11 世紀後半、石 81 は 14 世紀、石 82・96 は 16 世紀後半～末、石 83 は 17 世紀前半、それ以外

は18世紀以後の遺構から出土している。石81～83など、歪みのある製品は古い時期の遺構から出土している点は留意される。石96・97は白色碁石で、出土例は希である。

火打石（石98～111）14点を写真で示した。チャート製の剥離片で、色調は淡い青緑色を呈するものが大半であるが、黒灰色を呈するものもある。角は鋭角ながら打撃を受けたことによってかなり磨滅している。石98は16世紀前半の遺構から出土した最も古い出土例で、磨滅も進行している。石99は18世紀の遺構、それ以外はすべて19世紀の遺構から出土している。

石盤（石112～119）細片を含む11点を写真で示した。千枚岩製の薄板を方形に成形したものであるが、破損しやすく、完形品はない。明治時代に小学校で使用された、今日のノートに相当するものである。石113・114は隅部が残存し、石114は穿孔をもつ。石118・119には直線で方眼が刻まれている。文字を正しく書くために割り付けられたのであろう。石115のaとbは同一個体で、枠線内の文字は「上京」と判読できる。同様に石116は「文」、石117は「条」が判読できる。

石筆（石120～129）10点を写真で示した。石盤に対して「鉛筆」に相当するものである。石材は石120のみ羽釜や温石と同じ滑石製である。その他は蠟石とみられる。大半は長さ4～7cm程度で、棒状を呈し先端を尖らせている。石120・122は角形に加工している。石121は直径1cmあり最も太い。石122～124は白色を呈し石材もやや堅い。石124は先端と側面に穴を開け、笛のように加工している。先端の穴には別の石を埋め込む。色調はオリーブ灰色～にぶい黄橙色まで様々ある。

雲母 6地点から出土している。いずれも細片状態である。

硫黄 土坑1188(16世紀末～17世紀初頃)から1点出土している。個体は長さ6.8cmで厚さ3.5cmある。鉄砲用の火薬に調合されたか、あるいは付木に利用されたものであろう。

8. 骨角製品（図版80・143、観察表12）

骨角製品(骨1～19) 小片も含め19点(骨1～19)を図示する。櫛払や簪、棹秤の棹などがある。骨1～4は櫛払である。小穴が縦方向に3列、材の中にも縦方向に3列の穴が貫通している。この穴は毛を植え付けて芯内で固定するために穿たれた穴といえる。穴の配置は、骨1は左右の列が17個、中央の列が18個で1個多い。横方向には筋は通らない。骨2も同じ配置であるが、左右の列が18個、中央の列は19個あったとみられる。骨3・4は先端から柄の部分である。骨4の一面には◎印、裏面には縦方向の筋が彫られる。骨5・6は製品の柄であり、骨5は骨4、骨6は骨1に質感が似ている。骨6は先端付近に孔が開けられている。骨7～10は棒状の製品である。骨7・8は先端を加工しており、骨8の頭部は火箸(金11～13)の頭部に類似する。骨11は編針で、先端を鉤の手状に加工している。骨12・13はへら状の製品である。骨12は厚みがあるため、加工途中の製品の可能性がある。骨14・15は鹿角で製作された釦である。表面は光沢をもち、裏側には潜り穴が開けられている。骨16は櫛であるが、歯はすべて基部から削り取られている。骨17は、形状はキセルの雁首であるが、板状を呈する。黒漆の上に朱漆で文様・文字が表現されている。骨

18・19は棹秤である。骨18の目盛りは1列のみであるが、骨19は3列刻まれる。目盛りの寸法は、骨18は10目盛りで約1.04cmであるが、骨19はA・B面が10目盛り約0.92cmでほぼ等しく、C面のみ長く10目盛りで約1.45cmある。

9. ガラス製品（図版80・144、観察表13）

ガラス製品として282点を抽出した。出土遺構は、第1面で検出した遺構、ならびに層75などである。江戸時代後期から明治時代に属するが、個々の製品については年代判定ができないため、代表的な製品を種類ごとに解説する。図版・本文中の「ガ」は「ガラス」を略したものである。

ガラス玉（ガ1～4）4点とも直径1.2～1.4cmの球形で、中心を孔が貫く。ガ1・2は表面が風化し、ガ3・4は内部が白濁する。ガ1は比重が最も重いため鉛ガラス、その他はカリガラスとみられる。

髪飾り（ガ5～13）全形のわかるものはない。棒状の製品で、ガ6・7は先端に耳かきが付く。ガ11・13は丸板部分で、ともに花形文様で装飾する。ガ5は身が太く、捻って仕上げる。

棒状製品（ガ14～19）髪飾りの先端が破損したものとみられるが、特定できないためこの名称を用いた。身の断面は、ガ14・15が正円形、ガ18は三角状、残りは扁平である。

飾り玉（ガ20～26）球形の頭部に棒状の身が付属する製品であるが、身はすべて剥離している。ガ20・22・24・26は表面に凹凸がないためビー玉状を呈するが、ガ21・23・25は凹凸が模様となる。ガ20は銀化が著しい。それ以外は透明なガラス質である。

ポッペン（ガ27～29）器壁が薄いガラス管で3点とも銀化している。袋の部分はみられない。

小瓶（ガ30～36）小型の角瓶（ガ30～32）と丸瓶（ガ33～36）がある。ガ34・35は透明で保存も良好であるが、ガ30・32・33・36は銀化が進行している。

栓・蓋（ガ37～40）小瓶の口につく栓（ガ37～39）と蓋（ガ40）がある。ガ37はガ31と同じ藍色で保存も良い。ガ39も透明で保存は良いが、ガ38は銀化が進行している。蓋は半分が欠損し、銀化がみられる。

把手（ガ41）体部に取り付く把手であるが、剥離している。表面には白い釉薬で縦縞の文様が描かれている。

ボトル（ガ42）肩部の破片で、側面には花卉状の文様を浮き出させている。透明で保存は良い。

菊形酒杯（ガ43）体部を菊花文で装飾した杯である。

脚付小杯（ガ44・45）ともに透明で保存は良い。ガ44は脚部が完存する。ガ43は杯部の割口を研磨している。

上記以外にもガラス製品として、大型の瓶（口、底を含む）、薬瓶、コップ、タンブラー、ワインボトル、ビー玉、ランプの火屋、板ガラスなどがある。このうち、板ガラスは比重が軽く、明治以後であろう。学校に関係する製品として、メスシリンダーがある。

10. 土製品（図版80・140・141・145、写真13、観察表14）

土製碁石（土1・2） 碁石を土で製作したものである。色調は黒色～褐色を呈し、焼成良好で表面には光沢感がある。一見すると石製碁石と見分けがつかないが、直径がやや小さく、重さも2gと石製碁石よりやや軽い。

陶製オロシ金（土3） オロシ金を陶器で製作したものである。明治時代の遺物であるが、裏面に干支、年号、姓名を記すため、ここで紹介する。両側の縁は粘土紐を貼り付けて盛り上げている。全面をナデ調整した後、縁がある側を鋭利な工具で刺突してオロシ目を造り出す。このオロシ目は、背中合わせ1組で上下に11列配置されている。図の下列を1列とすると、8列と9列の間には別の刺突列があり、この部分のみ規則性が乱れている。刺突は各列横方向に21～26回施すが、厳密な規則性はみられない。図で下から上に刺突するものは、すべて右上りに施工されるが、上から下に刺突するものは、左下りになる場合（1～3・7・



写真13 陶製オロシ金(土坑132出土)

8列)と右下りの場合(5・9・10列)がある。また4列と6列は左半分が右下り、右半分が左下りで、丁度半分の位置で方向を違えている。裏面には「癸酉 明治六年六月廿一日 うゑ田為吉 持用」の文字が太い線で4行にわたり刻まれている(写真13)。明治6年(1873)に注文者が自分の氏名を入れて注文したことがわかる資料である。製品は京焼とみられる。土坑132から出土した。

学校関係の遺物では、火消し壺がある。外面に墨書で「被服室」「タイプ室」の文字が判読でき、「46 信 211」「48 信 211」の刻印も押されている。

壁土(土4～28) 平安時代後期から江戸時代までの各時代のものが出土しているが、ここでは資料的にまとまりがある平安時代後期と桃山時代から江戸時代初めの個体を紹介する。

図版145の上段で示したものは、平安時代後期の遺構から出土した壁土で、5遺構、14点ある。破片は小型のものが多く、白色の化粧土を上塗りしたものはみられない。この点では、建物の壁土とは特定できない個体ばかりである。胎土中に白土を混ぜ込んだものがみられる。

図版145の下段で示したものは、桃山時代から江戸時代初め頃の遺構から出土した壁土で、3遺構、11点ある。先に述べたものに比べると個体は大きく、硬く焼けている。胎土にはスサが含まれ、表面の白い化粧土を留めた個体もあり、裏側には木舞の痕跡も認められる。建物の壁土であることは確実といえる。

11. 木簡・木製品(図版81・82・146、図23、観察表15)

木簡(木簡1～4) 地業2000から2点(木簡1・2)、落込925から2点(木簡3・4)出土した。

地業2000は池1570の中央を南北に貫くかたちで掘り込まれた遺構である。北東隅で木簡2が、さらにその南6.75mで木簡1が、地業底に水平に置かれた状態で出土した。木簡1は、長

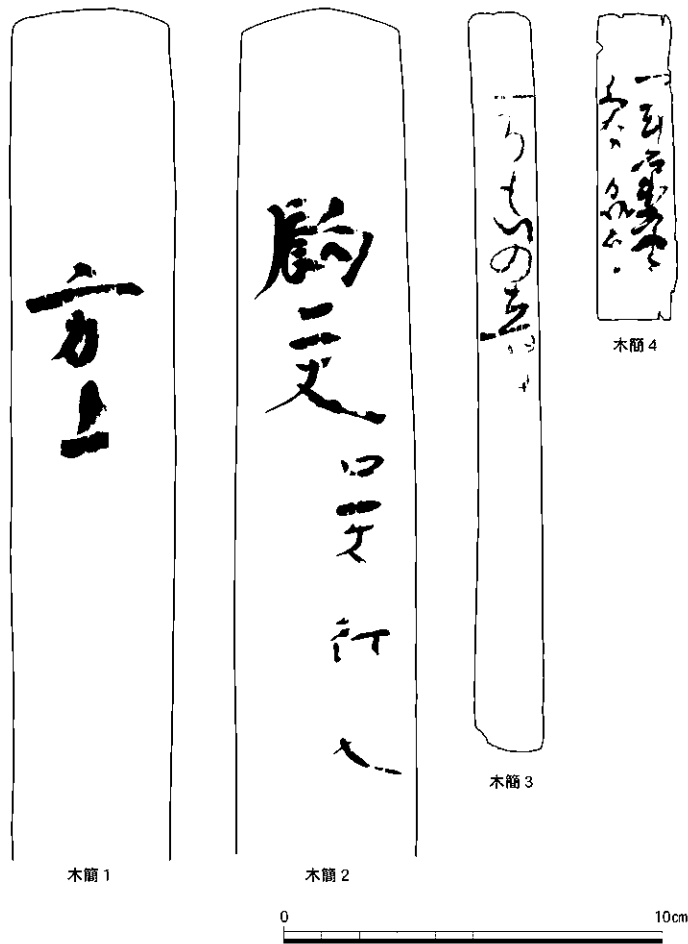


図 23 木簡墨書部分実測図 (1 : 2)

さ 50.0 cm、幅 4.2 cm、厚さ 0.5 cm である。頭部は圭頭で、先端は尖らせている。完形品であったが、出土時に先端を破損した。墨書は片面のみにあり、頭部から 7 cm の位置に「方上」の二文字が記され、それより下に墨書は認められない。「方上」は越前国今立郡片上村（福井県鯖江市付近）に所在した「方上荘」と呼ばれた荘園をさすものと考えられる。

木簡 2 は、長さ 54.9 cm、幅 4.7 cm、厚さ 0.6 cm あり、木簡 1 より若干大きい。頭部は同じく圭頭で、先端は木簡 1 よりも緩やかに尖っている。同じく片面のみに墨書があり、頭部から 5 cm の位置に「匱二丈」の三文字、さらに右半分にはやや小さ目に「口一丈口行カ口丈力」と記される。「柄」は近江国栗太郡

栗東町大字下鉤・寺内・蓮台寺・糠田井・上鉤・安養寺付近（滋賀県栗東市）にあった荘園名を

記したものと考えられる。この荘園は平安時代には「^{かづいのしょう}鉤荘」、中世には「^{まがりのみその}鉤御園」と呼ばれ、近衛家領に属した。「二丈」は何らかの単位をさし、右下にも「丈」と読めそうな文字があることから、造営時の規模が記されたものとみられるが、その意味は不明である。

木簡 3・4 は落込 925 の中央部付近から出土した。木簡 3 は長さ 19.5 cm、幅 1.6 cm、厚さ 0.6 cm の角材状を呈する。墨書は片面で、上から「□ かはいの立 □」と判読できるが、記された意味は明確にできない。木簡 4 は長さ 8.1 cm、幅 2.1 cm の短冊形で、厚さ 0.2 cm と薄い。三角形の切り込みがあるため、荷札木簡であろう。墨書は両面にある。一面には 2 列の墨書があり、右列は上から「一斗二升五合 □」と読める。左列は判読できない。

木製品は調査区の井戸や土坑などから各時期のものが出土しているが、大半は井戸枠や曲物などの井戸部材である。その他の木製品が出土したのは、主に 1 区の井戸・土坑・落込からで、建物端材・建具の一部・曲物・箸・櫛・下駄・刷毛・漆器類などがある。漆器類は椀蓋が多く、遺存状態が良好なものは少ない。木質が腐植して塗膜だけが出土したものもある。ここでは桃山時

代から江戸時代初頭に属する落込 925 や土坑から出土した遺物を中心にその一部を掲載する。

円形木製品（木 1・2） 木 1 は平面ほぼ円形で厚みがあり、中央に 1.7 cm、1.4 cm の楕円形の孔が開く。木 2 は平面円形の薄板で、中央よりやや偏った箇所径 0.5 cm の 2 孔一対の孔が開けられている。

木球（木 3） 玩具で、平面楕円形の扁平な球形を呈する。

船形（木 4） 玩具で、平面は木葉形で底部は平坦、両端部は細く削る。内部を長方形に刳り抜き、「T」字に駒を組んだ棧を取り付ける。

刷毛（木 5） 2 枚を組み合わせたもので、柄は短い。柄中央から両肩は曲線を描き、胴部は長方形となる。下端に 2 条溝があり、上溝に 4 箇所、下溝に 7 箇所の刷毛を固定する孔がある。

棒状木製品（木 6） 断面は長方形を呈する。片面に約 3 cm（一寸）間隔の刻み目があり、中心に鉄釘が打ち込まれている。部材の一部と思われる。

折敷底板（木 7） 薄板で隅を弧状に加工しており、端から 0.8 cm のところに穿孔がある。

曲物（8～11） 木 8 は円形曲物の底板の一部で、端から 3.2 cm のところに穿孔がある。木 9 は円形曲物で薄板を曲げて、樹皮で綴じる。側板の間に木の楔を 2 箇所打ち込んで底板を取り付けている。内面全面に黒漆が付着。木 10 は円形曲物の底板である。木 11 は円形曲物であるが、土圧による変形で平面形は歪み、側板も内側にすぼまる。幅 7.0 cm、厚さ 0.3 cm の薄板を曲げて樹皮で綴じ、側板に 4 箇所、木釘を打ち付け底板を取り付ける。上から 0.6 cm 程のところに幅 3.0 cm、厚さ 0.2 cm の別の薄板を曲げ樹皮で綴じる。その外面に焼印がある。

箸（木 12～18） 長さ 22～25 cm 前後のものが多数出土している。全面に面取りを施し、断面形は楕円や多角形を呈する。両端を細く削るものと削らないものがある。

櫛（木 19～21） 木 19 の棟部は断面長方形で、半円状の弧をなす。歯は 0.4 cm 間隔とかなり粗く 7 本以上を挽き出す。木 20 は横櫛で、棟部は断面厚めの長方形、緩やかな弧状である。歯は粗く 13 本以上挽き出す。木 21 は横櫛で棟部は断面厚めの長方形、緩やかな弧状である。歯は密であるが、大部分は欠損している。いずれも歯は鋸で挽き出している。

下駄（木 22～27） 木 22～24・26・27 は連歯下駄。木 22・24 は平面長方形で、木 23・25～27 は平面楕円形である。木 25 は黒漆塗り下駄で、前歯部分を半円形に刳り込む。木 24・25 はやや小振りの下駄である。

下駄の歯（木 28） 平面台形で上部に台に差し込む突起がある。歯はすり減って砂を噛んでいる。

漆器椀（木 29～40） 木 29 は鎌倉時代に属する井戸から出土したもので、体部は直線的に広がり、全体の形は緑釉陶器や灰釉陶器の椀に似る。ロクロ挽きの粗い作りの木地に黒漆を塗装。底部は漆塗装していない。土圧で口縁部が変形する。木 30 はかなり大振りの椀で体部は内弯して開く。口縁端部は欠損している。高台は低い。木 31 の体部は屈曲して開き、口縁端部は欠損している。高台は低い。木 32 の体部は屈曲して開き直立する。口縁部・高台は欠損している。外面の上方には松葉を、下には葉を固まりとして遠近をつけて描き分けている。木 33～35・38・39 の体部は屈曲して口縁部はわずかに外に開く。高台は低い。ともに外面に赤漆で模様を

描く。木 33 は体部内外面と底部内面に扇を描く。木 35 は高台が欠損している。木 36 の高台は厚く高い。体部は欠損しているが、外面に鶴が 2 羽、足元には亀を描く。木 37 は木地に下地のサビを施し、その上に漆を塗る。木 40 の体部は屈曲し立ち上がりが短く、器高は低い。

漆器蓋（木 41・42） 木 41 は土圧で変形し、つまみが欠損している。草文が描かれている。木 42 は小振りの蓋で、梅と草が黄色の漆で描かれている。草の模様は黄色の発色が良くなるように下に赤漆を塗る。

箱物部材（木 43） 表裏と上面に赤漆を塗る。両端は外側に広がるように角度を付けてあり、一辺 5.2 cm の箱物の一部と思われる。

註

- 1) 土器の年代観については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年、ならびに平尾政幸・山口 真『平安京左京四条二坊十四町』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-5（財）京都市埋蔵文化財研究所 2003 年 P 5「表 2 遺構概要表」での「土器の区分と略年代」を使用した。また他の産地と考えられる土師器皿を、「皿 X」「皿 Xc」「皿 Xh」とした。
- 2) ここでは国産施釉陶器の肥前陶器について、江戸時代前期では唐津と表記し、江戸時代中期～後期では肥前陶器とした。また京都産については信楽系も含めて京焼とした。瀬戸・美濃は桃山時代～江戸時代前期の美濃産に特定できるものには美濃と表記した。
- 3) 乙訓形の土師器皿については、丸川義広・加納敬二・他『平安京左京北辺四坊 一第 1 分冊（公家町形成前）一』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第 22 冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004 年 P164 による
- 4) 『興福寺食堂発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所学報第 7 冊 奈良国立文化財研究所 1981 年 PL21-4
- 5) 『東福寺防災施設工事発掘調査報告書』大本山東福寺 1990 年 第 12 図 72
- 6) 石材中に黒い斑紋があり、それを手がかりとした。
- 7) 岩崎仁志「考古学からみた赤間硯 ー近世の在銘資料を中心にー」『梅光学院大学 地域文化研究所紀要』第 21 号 2006 年
- 8) 石盤と石筆は明治時代から昭和初年頃の小学校で使用された教具で、今日の紙（ノート）と鉛筆に当たる。薄くはがれる性質上、破損しやすく、木製の枠で固定され使用された。京都市学校歴史博物館に保管された伝世品は、大きいもので横 28 cm、縦 18 cm、小さいもので横 21 cm、縦 14 cm 程度である。明治 8・9 年頃から使用され、大正時代まで続いた。衛生上問題が生じ、いったん筆にもどされたが、その後も使用され続けた。縦横に罫線が刻まれたものは明治 20 年代以後普及したとされる。京都市学校歴史博物館の秋山美津子氏、竹村桂子氏からご教示いただいた。
- 9) 明治 3 年に平民の姓が許され、明治 4 年には戸籍法が制定された。明治 5 年には学区制が布かれる。そうした歴史的背景もあって、明治 6 年製の本品も製作されるに至ったのではなかろうか。
- 10) 木簡 1・2 の判読については、西山良平氏、上野勝之氏より御教示いただいた。

第5章 まとめ

1. 遺構の変遷

(1) 平安時代後期 (図 24)

1区第4面、2区第3面、3区第4面が該当する。1区では調査地の南端で池 1810、北西で池 1570 を検出した。2つの池は、平安時代後期の里内裏、堀河院と時期が合致するため、里内裏・あるいは邸宅内に造られた園池であることは確実といえる。以下、池 1810・池 1570 の細部についてまとめておく。

池 1810 について

1 規模・形状 検出した北岸と東岸はともに直線的であり、北東隅は隅欠き状を呈する。岸が直線的であるため、形状は方形に近いといえる。現状での値は、東西 18 m、南北 15 m で、深さは北肩から 0.8 m 程である。

2 範囲 池の南端を確認するため拡張区 2 を設け調査したところ、池底の粗砂が南へ約 4.5 m (X=-109,620.5) 延長することを確認した。この付近での十町南北中心位置は X=-109,628.5 であるためそこまで達しないが、1985 年度調査区では池状の堆積を検出しており、池の延長が及んでいた可能性がある。「九条家本『延喜式』左京図」では、十町の南北中心に東西線が引かれており(第 2 章図 2 参照)、南北に二分されていたように判断できたが、調査所見からは南半部まで池が及んでいた可能性が高いといえる。

3 導水・排水 池 1810 が掘られた地山の西半分は砂礫層(流路 2009B)であった。この範囲が最も深く掘られており(標高 36.5 m 台)、景石もこの範囲のみに配置されていた。砂礫層の範囲は湧水が期待されたため、より深く掘られたとみられる。

3区で検出した溝 255 は池 1810 への遣水の可能性があることを想定した。この溝は溝 2010 とした東西溝につながっていた可能性があり、そうすると池 1810 への導水は、3区北東側から蛇行して池 1810 に及んでいたことになる。以上の想定は、3つの遺構のつながりを直接確認していない点で問題を残すが、可能性として指摘しておく。花粉分析結果からすると、溝 255 は糞尿が投棄された可能性があるのに対して溝 2010 ではそうした傾向は認められず、一連の遺構と考えるには否定的な結果が得られた点も付記する。

排水については、池底で溝 1816・1960・1965 を検出し、西側が深いため、これらが排水の機能を担っていたものとみられる。西延長の状況は判明しないが、等高線図(図 25)で解釈すると、最高所として 36.9 m があること、36.8 m から 36.7 m の平坦面が広がることから、西側には及んでいなかったと推定される。

4 整地 図版 18 に示した南北セクション断面によると、池を埋めた整地層は厚さ 0.7 m と非常に厚く、層序においても、X=-109,616 付近(調査区南壁に該当)を境にその北側では北から南に、南側では南から北に下がる様子が観察できた。このことは、南北両端から整地し、最後の凹みに溝

1600 が掘られたことを示している。

5 景石 池内で6石確認した。石材の種類と形状、色調は様々であった。色調のちがいを意識していたと理解でき、景石 1976 は紫色の部位が池内からみて映えるように配置されていた。拡張区4で検出した洲浜の礫も様々な色調がみられ、配色を意識したことは確かといえる。景石 1979・1980 は南北に並んで据えられていたが、景石 1980 は1段低く据えられ、その東側は階段状に成形されていたため、石を眺めるといよりも池への昇降施設として置かれた可能性がある。

6 池内の建物 池内で礎石 1971～1974・1981 を検出したことで、池内にも建物が及んでいたことが判明した。建物の規模・範囲は復元できないが、図版 16・21 に示した東西・南北の柱筋から、建物の南西隅を検出したと考えている。建物の性格であるが、建物と景石が同時期と想定した場合、この建物は景石 1979・1980 の上を覆うため、「覆屋」的な性格を想定するのが妥当となる。池の北東隅は直角に折れており、景石 1979・1980 が階段状を呈することはそれを補足するものといえる。一方、床をもつ建物が北側から池内に及んでいたと考えることも可能で、この場合は絵巻などに描かれた「釣殿」となるが、北側の高まりには「寝殿」相当の建物群は検出しておらず、また景石 1979・1980 も床下となって観望できないことになる。

7 植栽の遺構 東岸で検出した土坑 1860・1861、ならびに池内で検出した土坑 2011、拡張区3の東壁 13層とした土坑は、底に樹木の根のような痕跡が入り込む状況がみられ、木の根の痕跡ではないかと推定した。堀河院の園池に樹木が繁茂していた様子は、『中右記』嘉承二年（1107）六月二十一日条中の「皇居堀川院南山大樹折損」という記事から推測されてきた。検出した木の根状の遺構はそうした植生との関連で注目すべきものといえる。池 1810 にはシルト層がほとんど存在せず、花粉分析などの試料に供するには至らなかったが、東に位置する溝 2010 からは草本花粉とともに樹木花粉も検出されており、関連性が注目される。

8 火山灰 池 1810 の内部に掘られた土坑 1840 の南西岸に薄く分布する白色の細砂層があった。火山灰の可能性があると考え持ち帰って調べたところ、火山灰であることが確認された。池底に残されたものであるが、池内の化粧として敷かれたみるには微量すぎるため、地上に敷かれたものが池内に流れ込んだと判断できた。土坑 1840 南西岸の地山は明褐色粘土であったため、微量でも判別できたものといえる。

火山灰の種類は「ピンク火山灰」ということが科学的に同定された。約 100 万年前に噴火したもので、京都盆地の周辺では深草や向日市の丘陵地にみられるが、池が開かれていた時期に降下したものでないことは確かである。このピンク火山灰は滋賀県高島市朽木の「白土谷」でも採取される。同地域から京都にもたらされた可能性があるため、以下で史料を検討しておく。火山灰の詳しい分析は、付章 8 を参照されたい。

朽木と京都との関連を示す史料は、長保三年（1001）六月二十六日の「平惟仲の施入状案」で、平惟仲の造営した白川寺喜多院（寂楽寺、北白川仕伏町付近にあったが所在不明）に「高島郡朽木庄壺所」とある荘園が寄進されたことを記した史料に遡る。平惟仲は藤原兼家の家司として重用され、道隆、道長に仕えた。近江権守を歴任し、中納言まで登った人物である。

平安時代後期の資料をみると、朽木の荘園・柚には「子田上柚・河上荘」「朽木荘・柚」「針幡荘」「三尾柚」などが知られる。子田上柚・河上荘は、治暦四年（1068）には平等院領であり、藤原頼通の領地であった。朽木荘・柚の針幡柚（荘）は寛弘八年（1011）に尚侍殿藤原餉子（後の三条天皇中宮）に寄進されたが、康和五年（1103）には朽木荘と針幡荘の間に抗争があったことが知られる。久多・針幡・大見荘は平治元年（1159）には法成寺領であった。史料から判明することは以上であり、朽木と摂関家との関係を示す直接的な史料は見出せない。

この他として、摂関家の家司で近江守に任じられた人物に注目すると、藤原実政（藤原師実家司）、高階為家（藤原師実家司）、藤原隆宗（藤原師通家司）、平時範（藤原師通・忠実家司）、高階重仲（藤原師実の職事・忠実家司・忠通家司）などがいる。また橘俊綱（藤原頼通の男）、藤原忠綱（藤原

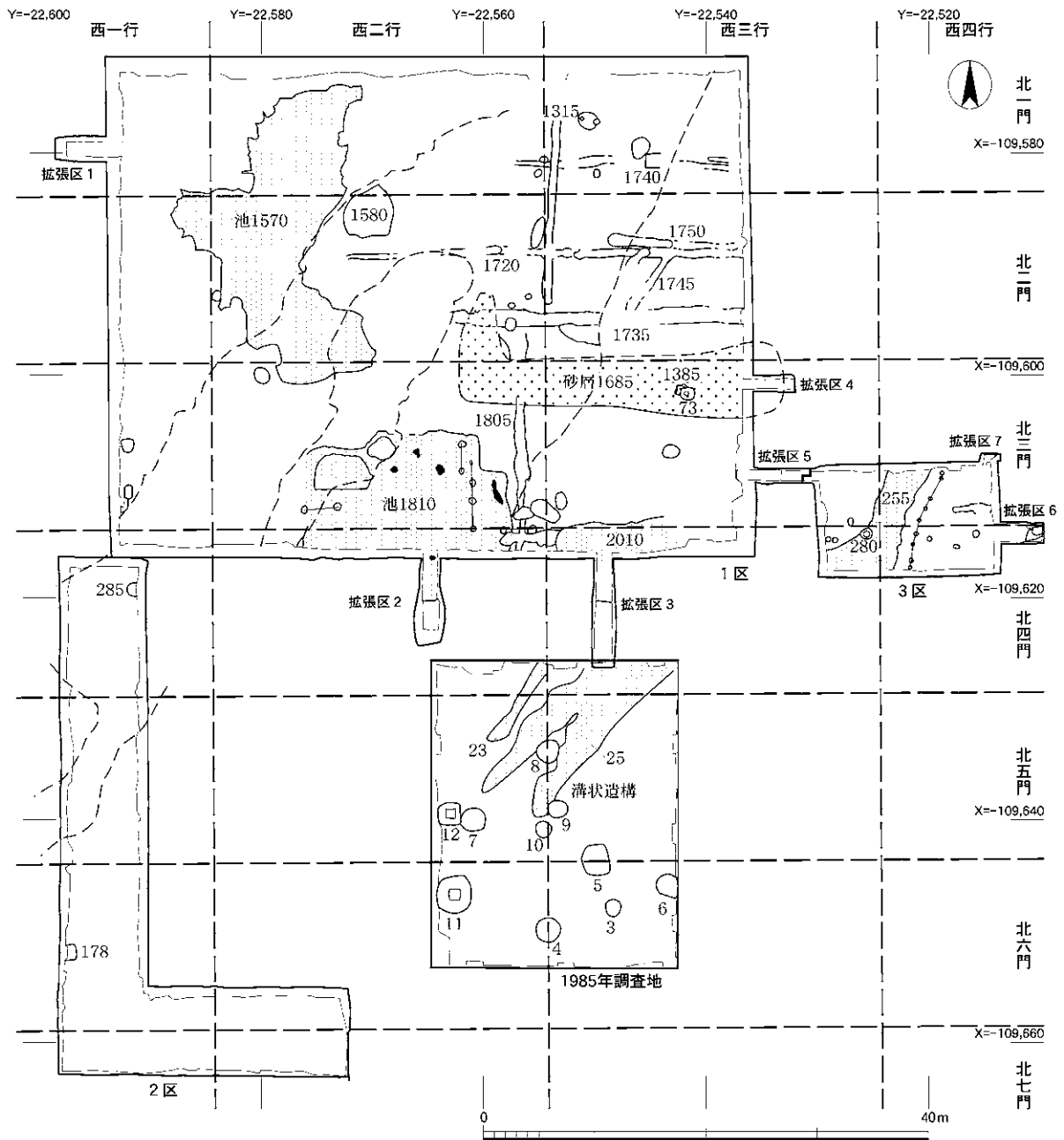


図 24 遺構配置図（平安時代後期、1 : 600）

頼通の男)も近江守に任じられている。これらの人物を通して、朽木地域が摂関家、ひいては堀河院の造営にまで関わりをもった可能性も考慮すべきである。一方の池 1570 からは、造営に関与した荘園名を記す木簡が出土しているため、この池 1810 についても、そうした背景があったことは、十分想定できるであろう。

池 1570 について

1 規模・形状 池全体を検出した。現状での規模は、東西 15 m、南北 26 m で、深さは 0.8 m ある。西側が膨らんだ三日月形を呈する。

2 範囲 池の南西部(土取穴群 2015)、北東部(土取穴群 2016)には室町後期から桃山時代の土取穴によって、池岸は破壊されていた。しかし池の中心部分はシルトが土取りの対象とならなかったため破壊を免れることとなった。そうした点からいうと、この池は当初の範囲を示していると判断できた。ただし、池の北西部には落込 925 が掘られ、池は完全に壊されていた。この部分に池が及んでいたかは判断できないが、土取穴は落込 925 底には少なく、池 1570 のシルトが及んでいたとみることできる。このことは、池 1570 の排水を考える上で重要である。

3 導水・排水 この池への導水施設は検出できていない。地形的に高い北東部から導水されたとみるのが妥当であるが、池の北東底は徐々に高くなり、ここを掘り込む遺構は検出できなかった。地形の高低差からいうなら、北側の九町で検出された池からここに導水されたとみるのが、最も妥当といえる。これとは別に、地山の砂礫層を掘り込むことで湧水を期待した可能性はあり得る。池の南東部分では砂礫層の範囲がやや深く掘られており(最低点は標高 36.25 m)、湧水を期待したためとみられる。

排水については、池底は北北西から南南東に谷筋があり、水はこの谷筋を移動したとみるのが妥当となる。北西側は落込 925 によって破壊されていたが、最低点 36.19 m を測る箇所があるため、北西側がより低かった可能性がある。そのことを図 25 の等高線図で見ると、まず池の西肩より高い地点は西側には残存せず、池の南西岸も排水施設は検出できなかった。このことからすると、池の水は、後に落込 925 が開削される北西側に排水されていたとみるのが妥当となる。あるいは池跡が後世まで残存したため、ここに落込 925 が掘られることになったのであろうか。

4 下部の地業 池の下部で地業 1800・1999・2000・2001 を検出した。すべて池 1570 の真下に重複し、池の南東隅、北東隅、西端の各部に該当すること、中央を貫くものは両岸に及ぶこと、内部に木簡を納めること、丁寧に埋ることなどが、特徴として指摘できた。遺構の性格については確かなことはわからないが、ここでは池を掘る前には地下の状態を知る必要があったということを前提に、以下の順序を想定してみた。

まず地業 1999 を南北に開けた。そして地山が粘土であることが判明し、次いで地業 2000 を南北に開け、南半に砂礫があることが判明した。そこで東への広がりを見るため地業 1800 を開け、砂礫が及ばないこと、西端をみるため地業 2001 を開け、ここも粘土であることを確認した。池の規模と範囲はあらかじめ決められていたので、この範囲内で池を開削した。湧水が期待される南東部を深く掘った。このように考えると、開削順に異同があっても結論は矛盾せず、「地下の地層

を知るために開けたテストトレンチ」とみるのが趣旨となる。そして、「池には湧水が必要だった」という条件があったことも付け加えておきたい。

こうした池下部に掘られた地業については、すでに数例が知られるので、次にそれらを紹介しておく。

左京二条二坊九・十・十五・十六町（高陽院跡） 昭和 63 年度と平成 9 年度の調査では、10 世紀に属する池岸の下で溝を検出している。溝の規模は幅 1～2 m で、ともに池岸と平行する方向に掘られている。

左京四条三坊四町 四町の南東隅で中期以前の池を検出し、その南東岸には逆 L 形の溝（幅 1.5 m、深さ 0.5 m）が掘り込まれていた。

鳥羽離宮跡 95 次調査 島の下部に布掘り状の掘り込みがある。「この島は池を掘り窪める際に布掘りを行い、その後、版築によって構築している」とする。

鳥羽離宮跡 102 次調査 池 SG 8 の底には不定形の掘り込みが 18 箇所以上ある。形状から土取穴のように判断される。

5 整地 池 1810 では砂礫層を含む土層が用いられ、両側から傾斜をつけて埋められていたのに対し、この池では黄褐色を呈する均質的な泥土が厚さ 0.3 m 程水平に入れられ、整地されていた。埋め方は単純で、顕著な特徴は指摘できない。整地層中には土器類も比較的多く含まれていた。

一方、下部地業の整地については、特徴的な埋め方がみられた。特に地業 2000 の北半部では底部付近に有機質土壌が入れられ、その上を丁寧に整地することで平坦面が形成されていた（写真 3 参照）。さらにその上は互層状に埋められ、粗い版築状の整地がみられた。こうした整地は、底部に有機質土壌が入れられたため、特に丁寧に整地したと推定される。そして整地された層の直上には池のシルトが堆積する状況がみられた。

6 木簡 池 1570 下に掘られた地業 2000 から木簡が 2 点出土した。木簡の釈文は、木簡 1 が「方上」、木簡 2 が「妍二丈 口一丈口行カ口丈カ」と判読できた。池下部に掘り込まれた地業からの木簡出土例は、平安京跡では知られていないが、京の南郊に造営された鳥羽離宮跡では、平安時代後期の庭園などから類似する木簡が 4 点出土している。これらの内容をみておく。

44・112 次調査「検非違所別当式尺口」 長 61 cm、幅 4.5 cm。近衛天皇陵を囲うようにめぐる突堤状遺構の土留め跡の一部と考えられる外側埋土から出土した。

54 次調査「苜川二丈一尺」 長 51.4 cm、幅 4.7 cm。東西方向の堀の延長部にあたる SD10 から出土した。

54 次調査「鳥羽二丈一尺」 長 (24.8 cm)、幅 4.5 cm。東西方向の堀の延長部にあたる SD10 から出土した。

138 次調査「讚口国五十 ×」 長 (39.1+8.4 cm)、幅 4.4 cm。田中殿の建物基壇の地業最下層、地山より 10 cm 上のシルトから、文字の書かれた面を下にして出土した。

今回出土した木簡 2 点とここで紹介した 4 点の木簡は、長さ、形態、墨書内容に共通点が多い。出土遺構の性格をみると、土留めや地業の底から出土しており、この点で共通性が高い。また、「鳥

羽]「芹川」は鳥羽離宮付近の地名であり、今回の「方上」 餉も地名である。さらに「二丈」という単位も今回の出土例と同じ表記である。この二丈は約6 mの規模を指すものであるが、それが何を意味するのかは明確にできない。しかし、「地名」+「二丈」の表記が平安京と鳥羽離宮の両方で見つかったことは、造成工事において一定の取り決めがあったことを示すものであり、発見できた意義は大きい。

1 区第4面の遺構面（図25）

2つの池への水の流れを理解するために、この面での等高線図を作成した。この図での最高点は南東隅にある標高37.7 m台の高まりである。ここは池1810の北東部、溝2010の北側にあたり、かつてこの場所にはもっと高い地形があり、その基部が残存したとみてよい。また景石2008が置かれた付近も37.5 m台の独立した高まりが想定でき、景石2008は装飾用として当初より配置されていたものであろう。全体を通してみれば37.4～37.3 m台の平坦面が北東から南西方向に延びており、ここでの尾根筋であったことがわかる。池1570はその北西側、池1810はその南東側に配置されており、東半部で検出した東西溝や砂層1685が東側に下がることも、この尾根の存在があったためといえる。砂層1685は、37.7 m台の高まりを南肩、37.5 m台の高まりを開始地点の北東肩としており、両高まり間に水が流れこむことで内部に粗砂（白砂）が堆積したとみることができる。この場合、粗砂は南側から流れ込んだことを確認しており（図版22の断面図を参照）、37.7 m台の高まり上には白砂が化粧用に敷かれていたことが想定できる。さらに砂層1685の始まる地点が景石2008のある高まりを回り込むように配置されたことは、ここに小山状の高まりがあり、砂層1685はその西縁から始まって東に進む遣水的な流れがあったと理解できる。池1570の南西部は乏しい残存高から復元したものであるが、両方の池からの排水を考える上で参考になるであろう。

土壌分析の成果

池1570、ならびに溝2010、3区溝255内に堆積したシルトを土壌サンプルとして抽出し、花粉分析、珪藻分析を依頼した。その成果は付章7で報告しているが、ここでは分析結果から判明した2つの池の特徴を追記しておく。

花粉分析によると、池1570はコナラ属、シイ属、マツ属、スギ、ヒノキ科の花粉が優勢で、またヤナギ属、ムクノキ、アカメガシワ、モチノキ属、ハンノキ属、アサダ、ブナ属、センダン、カエデ属、カキ属などもあり、これらは池周辺に生育していたとされる。オモダカ属、ミズアオイ属は抽水植物、ヒシ属は浮葉植物で池内に生育することから、池の水深は1～1.5 mあったことも推定できた。実際の調査では、池内のシルトは厚さ0.4 mあり、平安京で検出された池としては深い部類に属することが判明したが、この所見は花粉分析からの推定とある程度整合するものといえる。それにしても、池の深さが1 m以上に及んでいたことは調査所見からは想定できなかったことであり、分析結果との差異は今後の留意点となった。珪藻分析においては、止水性で常時水をたたえた池沼の環境が示唆された。

池1810にはシルトがほとんどなく、池の東南部にあたる溝2010のシルトを試料として提出し

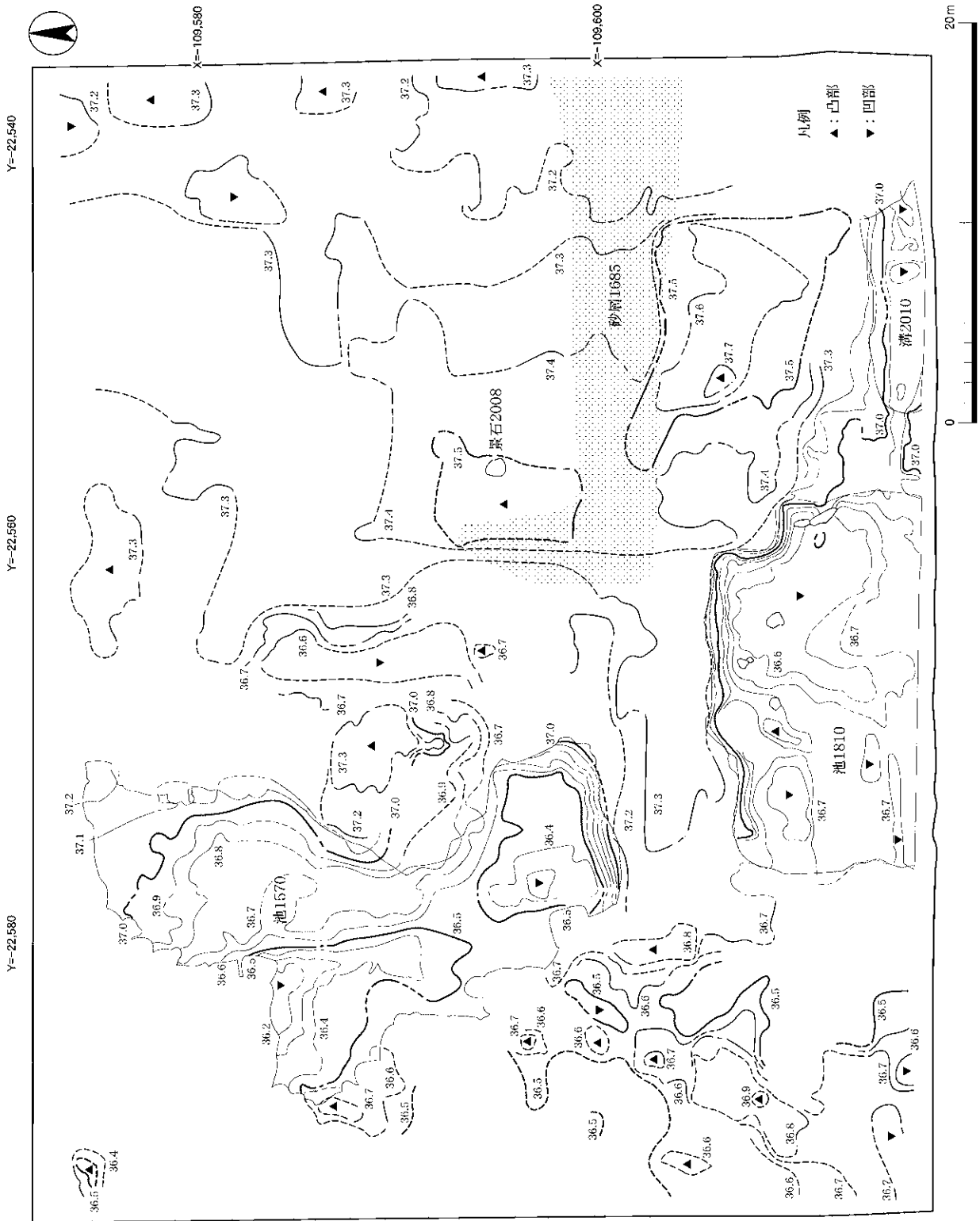


図 25 1区第4面の等高線図 (1 : 300)

た。ここでは樹木花粉も検出されているが、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科?ヒユ科、アブラナ科、ナデシコ科、チドメグサ亜科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科の草本が優勢であり、一方、珪藻分析からは流れの影響のある不安定な水域が推定された。3区溝 255 は、溝 2010 を経て池 1810 に流れ込む遣水ではないかと考えたが、花粉分析では溝 2010 と差異が大きく、むしろ

表3 池1810・1570の比較

内 容	池1810	池1570
規 模	東西18m、南北15m以上、深さ0.8m	東西15m、南北26m、深さ0.8m
導 水	湧水あるいは3区溝255から	湧水？
排 水	西へ流す。さらに南？	北々西？
下部地業	なし	西端、中央、北東、南東にあり
埋 土	砂礫層が主でシルトは少ない。厚さ0.1m	シルトが主で厚さ0.4m
整 地	砂礫層が入れられ両肩から縮状に埋める。	黄褐色泥土で水平に埋める。
景 石	6石以上あり	なし
洲 浜	化粧なし。礫が露出	化粧なし
礎 石	5石以上あり、覆屋か？	なし
底の溝	東西溝2条あり	なし
底部標高	36.5m	36.25m
木 簡	なし	下部地業から2点
土器埋納	上坑1840	なし
植栽痕跡	池内と東岸にあり	なし
埋没時期	11世紀中頃～後半	11世紀後半～12世紀初

流水の影響もあり、たえず清水が入れ替わっていた、と報告されており、ここでは寄生虫卵は報告されていない。右京三条一坊六町で検出した池（SG24、9世紀）では樹木花粉や水草の生育する環境が想定されたが、同じく寄生虫卵は報告されていない。しかし、右京五条一坊一・二町間の綾小路上の東西溝（溝22、13世紀）からは寄生虫卵が多く確認されている。わずか3例の事例であるが、時期が新しいほど寄生虫卵の出土が多いように判断でき、さらなる検討事例の増加が待たれるところである。

堀河院跡の調査（図26）

1 変遷 堀河院は左京三条二坊九・十町の東西1町、南北2町を占め、円融・白河・堀河天皇が利用した里内裏である。さらに東方には閑院、東三条殿があり、堀河院を含めた東西3町には藤原氏の主要邸宅が並んでいた。この3箇所は南北2町の細長い地割りとして江戸時代まで継承され、次第に押小路が通るところとなった。堀河院の歴史的な変遷については、すでに第2章「調査地の位置と環境」で解説している。ここでは、史料から判明する内容と調査所見の整合性を検討しておく。

調査地が史料にみえるのは、元慶七年（883）十月九日条で、藤原基経が邸宅として使用したとする記事である。今回の調査では、9世紀末に属する遺構は検出していないが、出土遺物には土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、軒瓦などが含まれる。これは後世の遺構を埋める際

ろ池1570の内容に近いことが判明した。珪藻分析においても、堆積速度が速いか珪藻の生育できない乾燥した時期のあったことが推定され、溝2010との違いが明確になった。

次に、池1570と3区溝255からは鞭虫卵、回虫卵などの寄生虫卵が多数検出されたことが注視できる。付章7によると、池1570は汚染の範囲であるが溝255は数量が多いため、糞尿が投棄された可能性があるとして示唆された。里内裏の園池といえれば絶えず清浄な状態が維持されたという印象が強いが、花粉分析によって汚染が進んだ実態が明らかにできた意義は大きい。

平安京で見つかった園池の埋土を対象に実施とした花粉分析結果をみると、まず斎宮の墨書土器が出土し、園池の全容が判明した右京三条二坊十六町の池（池1、10世紀）では樹木花粉が多く、水生植物も含まれることから、水草の多い湖沼の環境で、

にもたらされたものであり、遺構との関連性は薄いと判断される。

ついで、応和三年（963）正月二日条、天禄二年（971）条、貞元元年（976）正月十五日条などの史料にみえる。この時期は藤原兼通が伝領し、円融天皇を迎え入れたことで、ここが初の里内裏となった。里内裏として使用された期間は、同年七月二十六日から翌貞元二年（977）七月二十九日までの約1年間と、天元五年（982）十二月二十五日から寛和元年（985）九月十九日までの3年近くの、2度である。兼通邸としての堀河院は10世紀後半から末葉に該当するが、この時期の遺構もほとんどみられない。前後する時期の遺構として、井戸1510（10世紀前半）、井戸2007（10世紀中頃から後半）がある。井戸としては底が浅く、この深さで湧水があったことがわかる。柱穴と考えた遺構（柱穴1970、10世紀代）もあるが、周囲への展開は明確にできなかった。

堀河院の地は、藤原頼光に伝領され、治安二年（1021）、頼光はここで亡くなっている。その後、長元五年（1032）には藤原頼通に献上され、のち藤原師実に移った。11世紀前半から中頃は、史料そのものが少ないが、それに合致するように遺構密度も低い。

承暦元年（1077）四月二十八日、白河天皇が師実邸に行幸し、里内裏として本格的に使用された。白河・堀河両天皇の時代に、堀河院は里内裏として合計5回使用されている。

1. 承暦四年（1080）五月十一日から同年十一月十三日までの数箇月間（白河天皇）。
2. 永保二年（1082）八月三日ここに移る。しかし、たびたび六条院に行幸された（白河天皇）。
3. 応徳三年（1086）十一月二十六日、堀河天皇がここで受禅し、嘉保元年（1094）十月二十四日に火災に遭う。この間、およそ8年間（堀河天皇）。
4. 長治元年（1104）十二月五日に遷御し、翌長治二年（1105）六月八日までの数箇月間（堀河天皇）。
5. 嘉承元年（1106）十二月二十五日に遷御し、嘉承二年（1107）七月十九日の堀河崩御までの約7箇月間（堀河天皇）。

以上のように整理すると、3回目の使用が8年間と最も長く、その他は数箇月と比較的短期間であったことがわかる。

その後も堀河院は中宮篤子の御所として使用された。永久元年（1113）七月二十四日には九体阿弥陀像と観音勢至像が安置されたが、永久二年（1114）十一月一日には中宮篤子が堀河院で崩じた。保安元年（1120）四月十九日には堀河院焼亡の記事がある。

このように11世紀後半から12世紀前半にかけて堀河院がもっとも頻繁に利用されたが、調査地では、池1810・1570を始めとする多くの遺構・遺物が当該期に属しており、史料頻度と遺構密度の関係はうまく整合することがわかった。しかし調査地においては、生活関連遺構、特に井戸の出土例が少なく、この点は調査地が園池部分に該当したためと考えられる。

2 2つの池の順序 1区で検出した池1810と池1570には時期差が認められ、埋没時期には差があったことが想定できた。出土土器をみると、池1810はIV期中～古、池1570はIV期新に属し、若干の時間的経過が看過できた。また池1570下部の地業から出土した遺物はIV期新、上を覆う整地層に含まれる土器もV期古であり、後れて埋まった池1570においても、地業→池1570→整地

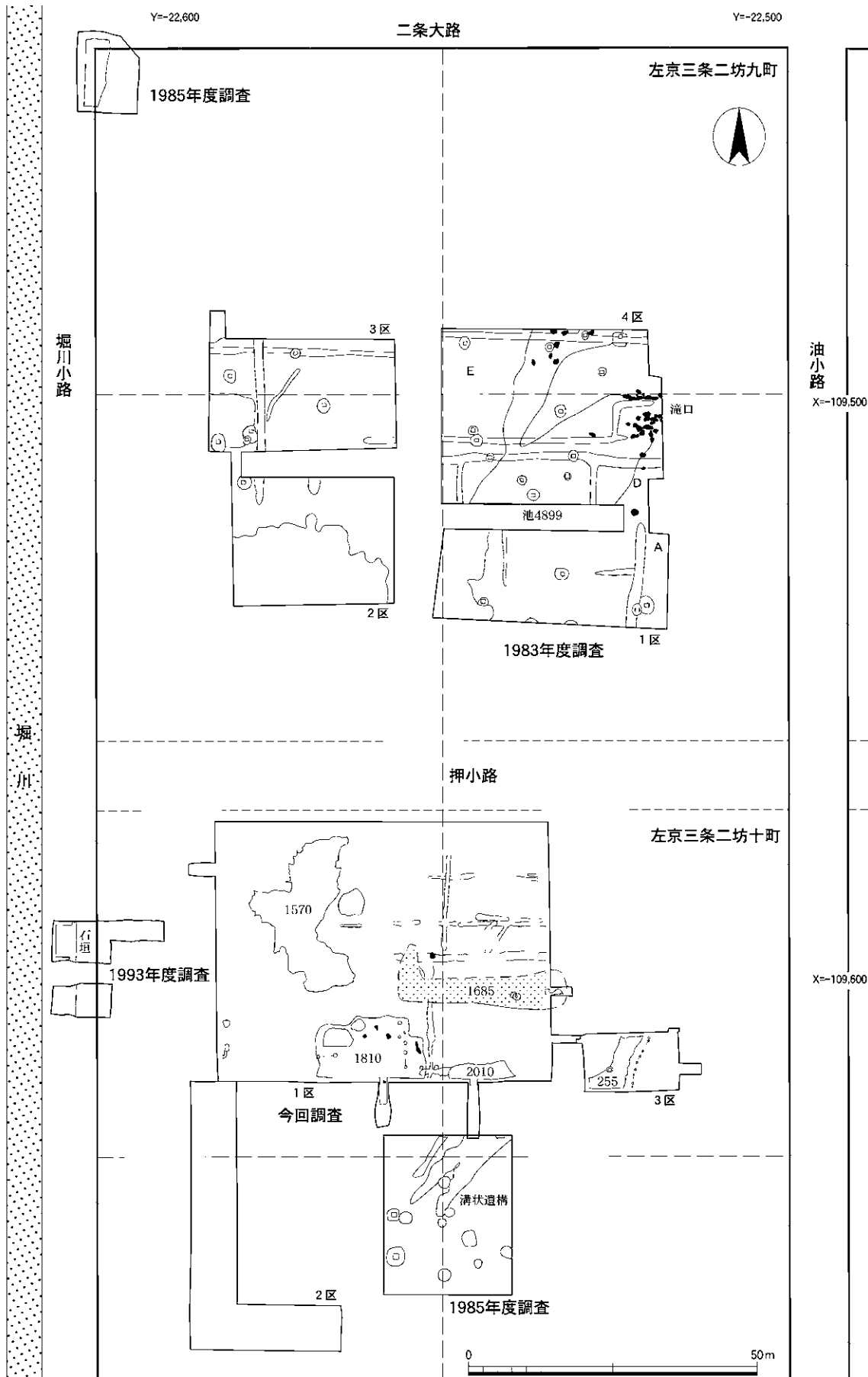


図 26 左京三条二坊九・十町（堀河院）の遺構配置図（1：1,000）

の時間的経過は比較的短期間であることがわかった。

2つの池は、整地のされ方にも違いがみられ、池 1810の方がより丹念に整地されていた。また石敷 370の存在は、2つの池のつながりを考える上で重要である。この遺構は池 1810を整地した上に構築され、構造的には雨落溝に類似するため、池 1570を南から眺める建物の一部とみるのがよいであろう。そうすると、池 1810を埋めた後、池 1570を望む位置に石敷 370をもつ建物が建てられたことになる。

史料によると、堀河院は嘉保元年（1094）に火災に遭っているが、その後再建され、長治元年（1104）には堀河天皇が移られている。この間、約 10年間の空白があるが、この間に池 1810が埋められ、新たに北側で池 1570が造られたと考えても、土器の年代観と矛盾はない。そう考えると、藤原師実邸→白河天皇の里内裏→堀河天皇前半期の里内裏は池 1810が使用され、堀河天皇後半期、中宮篤子御所では池 1570が存在した。そして保安元年（1120）の火災後に池 1570も埋められた、という変遷が提示できる。あるいは池の開削は同時でありながら上記の変遷を経る中で、池 1810→池 1570の順に埋められたとみることも可能である。

堀河院が火災で焼亡したことは、嘉保元年（1094）と保安元年（1120）の史料からわかる。2つの火災の時間差は 20 数年で、土器型式からいえばわずかである。調査では、火災の痕跡は見出せなかったが、壁土が出土したことはその傍証となりうる。出土した壁土はすべて被熱で硬化しており、火災があったことを示す物的証拠でもある。

壁土の出土量は池 1570が最も多い。池 1570出土土器はIV期新であるため、これらの壁土は 12世紀以後の火災であり、具体的には保安元年（1120）の火災が想定範囲内に収まる。一方の池 1810では、上を整地した層に壁土が含まれていた。こちらは嘉保元年（1094）の火災の可能性も考えられるので、こちらについては慎重な判断が必要である。

3 九町・十町の遺構配置 図 26として掲載した配置図をもとに、既往の調査成果と今回の成果の関係を検討しておく。1983年度には北側の九町でホテル建設に伴う調査を実施した。このときは約 8箇月間で約 4,000 m²を調査し、北東部の 4区で平安時代後期の池を検出している。池には景石が多数配置され、滝口付近であることも確認されたが、遺構の重要性に比べると報告は簡素であるため、写真図版に追加するかたちで内容を補足しておきたい。

図版 147は 1983年度調査で 1区としたもので、上は全景写真、下は南北溝とその東で南北方向に並ぶ石列の検出状態である。石列は積まれた状態で見つかり、建物基礎のようにみえる（図 26で Aと表示）。図版 148上は 2区の全景写真である。西半は色調が明るく、地形が高いことがわかる。下は 4区南東部で景石が集中する状態を撮影したものであり（図 26の B）、図版 149上は同じ範囲を南東側から撮影したものである。景石は東西方向の溝内部に落とし込まれたように見える。図版 149下は景石が入った東西方向の溝状遺構を写したもので、溝の北側には小規模な石列もみられる（図 26の C）。図版 151上は同じ溝状遺構での景石を外した状態の写真である。写真の奥では溝の北肩に小穴が並び、北側には石列も写されている。溝の南東部で色調が明るい部分は、地業跡とされる（図 26の D）。ここの地業は砂礫質で造成されたように見え、今回池 1570の底部で検出した

地業とは異なるようである。図版 150 下は 4 区北西部分の全景写真で、柱穴が密集する状態を示す（図 26 の E）。建物が何度も建て替えられたことは確かであろうが、平安時代後期の堀河院に該当するものかは判定できない。

以上の追加資料を含めて検討すると、九町の堀河院に関連する遺構には、既知の池 2 箇所以外にも図版 149・150 に示した景石が集中した範囲（B）があり、その南には地業を施した部分（D）、南北方向（A）と東西方向（C）の石列などが存在する。このことは池 4899 の南東部分には、景石が配置された溝、築山かあるいは建物の地業などが存在したことを想定させるものであり、池 4899 としたものはさらに幅が狭く、遣水となって今回検出した池 1570 に流出していたことも想定させる。

この 1983 年度調査地は、景石数が非常に多いことが特徴であり、特に北東隅で池の滝口付近が確認できた意義も大きい。またこの調査によって、九町では北東隅から水が引かれ、南西側に流されていた状況も明らかとなった。今回の十町においても 3 区で溝 255 を検出し、九町とは別に水を引いていた可能性が高くなった。溝 255 からの水は、溝 2010 を経て 1985 年調査地の「溝状遺構」か、あるいは今回の池 1810 に至っていたとみられるため、九町と十町で独自に導水していたことは、ほぼ確実といえる。

この他、九町では東西・南北方向の直線的な溝が多数検出されているが、今回の調査でもほぼ等間隔に東西溝を検出している。溝の周辺に景石が置かれる状況も、溝 1735 上に景石 2008 が乗る状況に類似する。また 4 区北西部（E）では柱穴が密集し、ここには建物が存在した可能性が高い。柱穴だけでは建物そのものは復元できないが、堀河院の主要殿舎を考える上では、やはり留意すべきであろう。

1983 年調査地の報告に掲載された池断面によると、池底の標高は 37.55 ～ 37.7 m となっている。今回の調査地は 1 区の平坦面が 37.3 m 付近、池 1570 底が 36.25 m 程、池 1810 は 36.5 m 台で、北側の池底に比べ約 1 m から 1.5 m 程深かったことになる。左京二条二坊九・十・十五・十六町の 4 町を占地した高陽院では、池底が同レベルとなる広大な池が中央にあったことが判明しつつあるが、堀河院の場合はそれ程大規模な池は形成されず、九町・十町で別の園池を設けていたことが明らかになった。高陽院は四町を有する里内裏で、利用頻度も格段に高いことから、庭園にも違いが生じたのであろう。

ついで十町での 1985 年調査地の様子を図版 151 に示す。遺構面 5 としたものが堀河院の時期に該当し、報告においても当該面の全景写真が掲載されている。今回掲載した写真は、同じ遺構面を方向を変えて撮影したものである。溝状遺構として報告されたものが今回検出した池 1810、溝 2010、あるいは 3 区溝 255 に関連する可能性がある遺構である。また写真で判断する限り、地山は粘土層であり、1 区のような砂礫の範囲は見いだせない。大規模な池も構築されておらず、建築遺構も存在しなかったと判断して大過ないであろう。

（2）鎌倉・室町時代

1区第3-2面、2区第3面、3区第3面が該当する。1区中央部では掘立柱建物を1棟分（建物2014）検出したが、小規模であり、周囲には他の建物は復元できなかった。この建物は13世紀後半に埋まった井戸1197上に構築されている。

この面では、井戸を16基（1区12基、2区4基）検出した。井戸の数が多いこと、規模が大きいこと（井戸1197・1400・1640など）、石組井戸としては古いものが含まれること（13世紀に属する井戸1085・1640・1238・2区井戸250）などが、特徴として指摘できる。また井戸には偏って掘られるような状況は見い出せなかった。こうした様相は、「敷地は分割され民家が建ち並ぶようになったらしい」とする指摘と一致する²¹⁾。

西半で検出した南北方向の柵（柱列1511）は、調査地を東西に分ける施設である。後世の面である第1面ではこの位置に石組をもつ溝160が造られており、同じ位置が踏襲された可能性がある。現在、この位置の東約5.5mには町境があり、西側が押堀町、東が押油小路町となっている。南北柵とは若干位置がずれるため、この柵が現在の町境にまで継承されたとは言い難いが、留意すべきであろう。

2区南半では東西方向の溝120（16世紀前半）を検出したが、この溝は四行八門制での北六門と北七門の境界に位置する。この溝の位置も、北が押堀町・押油小路町、南が森ノ木町の町境となっており、堀河院衰退後の敷地は三条坊門小路北築地から北に二門分北上したことを想定させる事例といえる。

堀河院の旧地は氏長者・太政大臣藤原良経から大納言源通具に譲渡されたことが指摘されてきた²²⁾。そのことを示す直接的な史料は今回検索できなかったが、間接的な史料として、承元四年（1210）四月一日条に、二条堀川の源通具家で火災があったとする記事がある²³⁾。源通具は鎌倉時代初期の公卿であり、父源通親は権勢を有し、久我の地を荘園としたことから久我家と呼ばれた²⁴⁾。そのことと関連するものとして、乙訓形土師器皿の出土が注目される²⁵⁾。これらは井戸1640、土坑1190、2区土坑222など13世紀中頃から後半の遺構から出土している。土師器皿がどのような理由でもたらされたかは判明しないが、久我家の伝承をもつ場所から実際の遺物が出土した意義は大きいといえる。出土遺物の年代観からすると、承元四年の火災記事から数十年が経過しているが、引き続き久我家の屋敷として使用されたのであろう。井戸の規模が大きく石組井戸が早くから普及したことを先に述べたが、これらも久我氏などの有力な居住者と関連するものとみられる。

（3）桃山・江戸時代前期（図27）

1区第3-1面、2区第2面、3区第2面が該当する。桃山時代には豊臣秀吉の家臣の屋敷、江戸時代初めからは徳川家家臣土井利勝（大炊頭）の屋敷となった。土井利勝が拝領する直前の元和九年（1623）三月六日には「土井利勝の堀川第に火災がある」（資勝卿記）の記載があるが、これは堀川丸太町付近にあった別邸を指すとみられる。

土取穴の時期

1区南西半部、北端、中央部、ならびに2区中央部には、聚楽土に類似した泥土を採集した「土取穴」

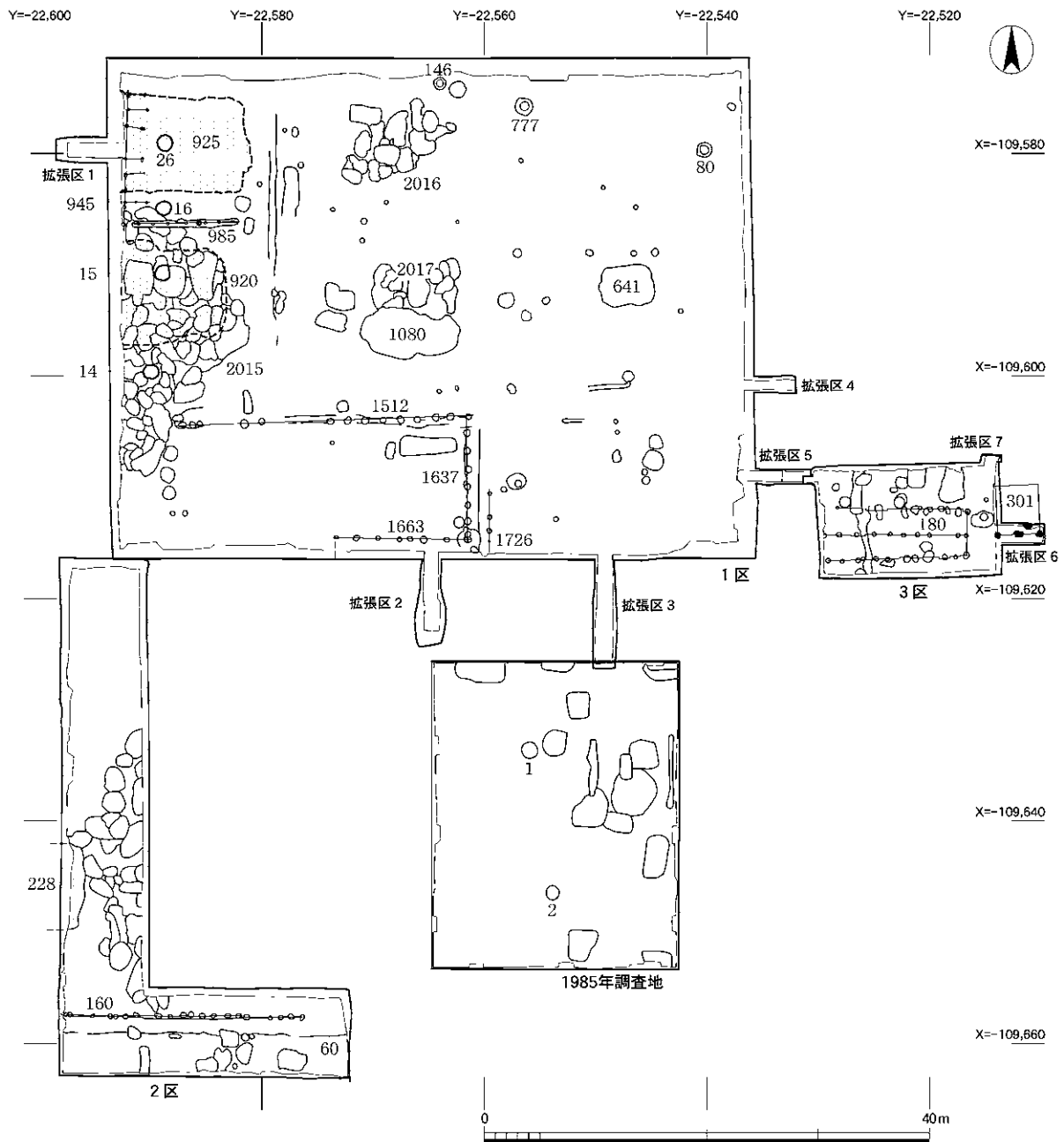


図 27 遺構配置図 (桃山・江戸時代、1 : 600)

が掘られており、埋土から室町時代後期から桃山時代の土器・瓦が出土した。この場所が土取された要因の一つとして、豊臣秀吉の京都改造が想定される。すなわち、天正十一年（1583）には東隣の町に京都支配の拠点として妙顕寺城が造営された。しかし天正十五年（1587）に聚楽第ができると秀吉はそちらに移ることになる。この頃から天正十九年（1591）にかけて、聚楽第造営にともなう城下町建設と京都の都市改造が行われており、聚楽土に類似した調査地の泥土の需要も高まったことが推定される。

落込 925 と船入の遺構

北西部で検出した落込 925 は、東西 11.5 m 以上ある堀状の遺構である。深さ 1.4 m ある底には

シルトが堆積することから、開かれた状態で機能していたことは確実であり、堀川側に開く形状から「船入」の可能性があると考えた。また上を覆う整地層には江戸時代初期の遺物が含まれ、元和九年（1623）に土井利勝が徳川家から拝領する頃に埋められたことが想定できた。そうすると、東隣の町に妙顕寺城が造営された頃、堀川の水運を利用する目的で遺構が掘られ、物資の移動に利用されたのち、元和年間になって埋められたとみるのが妥当となる。落込 925 から出土した木簡の 1 つ（木簡 4）には「一斗二升五合」の墨書があるが、これは物資の積み卸しがここで行われたこと、この調査地が妙顕寺城の外町としての機能を有していたことを想定させる資料として重視できる。また、遺構を埋めた層中には砂礫が多く含まれており、周辺で大規模な掘削が行われ、その際の土砂で落込 925（落込 920 を含めて）が埋められものと想定される。

落込 925 に類似する遺構として、1 区落込 920、2 区土坑 228 を検出した点も重要である。落込 920 は規模がやや小さく底にシルトは堆積しないが、形状は類似する。2 区土坑 228 は東肩の一部を検出したのみであるが、底に凹凸があることや、埋め方に落込 925 との類似点がみられた。また落込 925 の西延長をみるため、調査区外の西側に拡張区 1 を設定したところ、西約 3.5 m 付近で底が約 0.5 m 立ち上がり、西から東に埋められたことが確認できた。遺構底には凹凸があったことになるが、このことを含めて、遺構が堀川に達していたか慎重な判断が必要である。いずれにせよ、妙顕寺城の造営、聚楽第造営、城下町建設、さらには徳川家により二条城造営（慶長元年 1601）といった変動の中で、これら遺構群が形成されたものとみて大過ないであろう。

次に、現存する船入、ならびに発掘調査によって確認された船入遺構を以下に提示する。

1. 右京三条一坊四町 西高瀬川に設けられた船入の遺構で江戸時代末期に属する。
2. 左京五条二坊八町 濠状遺構 堀川の西側にあり平安時代末期から鎌倉時代に属する。
3. 左京三条二坊九町 池 1900 本調査地の北側で検出した池状遺構で鎌倉・室町時代に属する。
4. 高瀬川船入 現存するものとして一之船入がある。

このように整理すると、堀川東岸には今回確認した 3 基（落込 925・920・2 区土坑 228）と 1983 年調査地の 1 基（池 1900）を含め 4 基の類似遺構があり、さらに南側では西岸に掘られた遺構が存在したことがわかる。平安京造営とその後の市井の生活、ならびに近世初めにおける妙顕寺城、聚楽第、二条城造営は、堀川が存在があって可能であったわけである。江戸時代に入って高瀬川が開削されたのも、堀川の水運が衰退したことに起因するものである。

コの字形の柵

1 区の中央南半でコの字形を呈する柵を検出した（北列が柱列 1512、東列が柱列 1637、南列が柱列 1663）。柱穴はすべて深く掘られており、頑丈な柵がここにあったことは確かである。敷地内を区画した柵とみられるが、類似するものとして、『油小路屋敷図』（図版 153）には「西門」と表記された北側に方形の区画（柵）があり「御門番所」の表記がある。ただしこの屋敷図は幕末期に作成されており、遺構の時期とは一致しないため、別遺構と考えておきたい。

敷地の四周

土井家の京屋敷に関係した遺構として、1 区北西隅で西限とみられる塀跡（礎石列 945）、2 区

南半で敷地南限の柵と溝（柱列 160・溝 60）、3区東端で東門（門 301）を検出した。

西限の塀跡と考えた礎石列 945 は、落込 925 が埋没した後に構築されている。控えの礎石列が東側にあるため土井家側が建てた板塀とみてよいが、現在の町家境は西側約 7 mにあるため、江戸時代初めにここに柵があったとなると敷地の東西幅はさらに狭かったことになる。2区で検出した東西方向の柱列 160 と溝 60 は、敷地の南限施設と考えられるもので、この位置は室町時代から変化していない。3区の東端で検出した門 301 は、礎石 175 が長径 0.9 mと最も大きいことから、ここを門の棟柱筋と考え、東西両側に控柱をもつ四脚門であり、屋敷の東門にあたとみて誤りないであろう。しかし、その西側には建物 180 があり、建物の中央列が門の南列と一致すること、両建物の間隔が 2.7 mしか離れていないことなど、門と建物の間隔が狭いところに問題点を残した。

土井家の京屋敷について（図 28）

江戸時代の絵図をみると、この位置には「土井大炊殿屋敷」「土井大炊殿」「土井大炊」「土井ヤシキ」などの表記があり、ここが古河藩主土井家の京屋敷であったことがわかる。初期の代表的な作品である『寛永後万治前洛中絵図』（図 28）から、その様子を見ておく。

周囲は南北 2 町、東西 1 町の里内裏以来の町割りを踏襲している。四周をみると、堀川小路には「押小路堀川町（現押堀町）」「堀川土橋下ノ町（現土橋町）」、押小路には「二条八幡町（現矢幡町）」、油小路には「二条油小路町（現在も同じ）」「押油小路町（同）」、三条坊門小路（現御池通）には「森

ノ木町（同）」など、現在とほとんど変わりのない町名が記載される。

短冊形の南半を占めるかたちで「土井大炊殿」の表記がある。屋敷は通りに直接面することなく、四周を町家を取り巻くかたちで中央部を占地する。この状態は「町奥型屋敷」と分類され、拝領された場合の武家屋敷に多いとされる。

敷地の広さに関しては、南辺に「三十八間四尺」（1間 = 1.96 mとして 75.2 m）とある。この数値は、東限が油小路通までとみるか町家の裏側（西端）とみるか検討を要するが、現在の敷地東西幅は約 70 mあり、当時よりやや狭くなったと解釈するのが妥当となる。南北幅については同図に記載がないが、本絵図よりやや製作年代が遡る『寛永十四年洛中絵図』には東辺沿いに「五拾七間半」（約 112.7 m）の記載があり、この数値が屋敷の南北幅であったとみられる。この場合、敷地南限は、2区南半で東西方向の溝 30（下層は溝 60・溝 120）を検出しており、ここから北へ 112.7 mとると、現在の押小路通とは

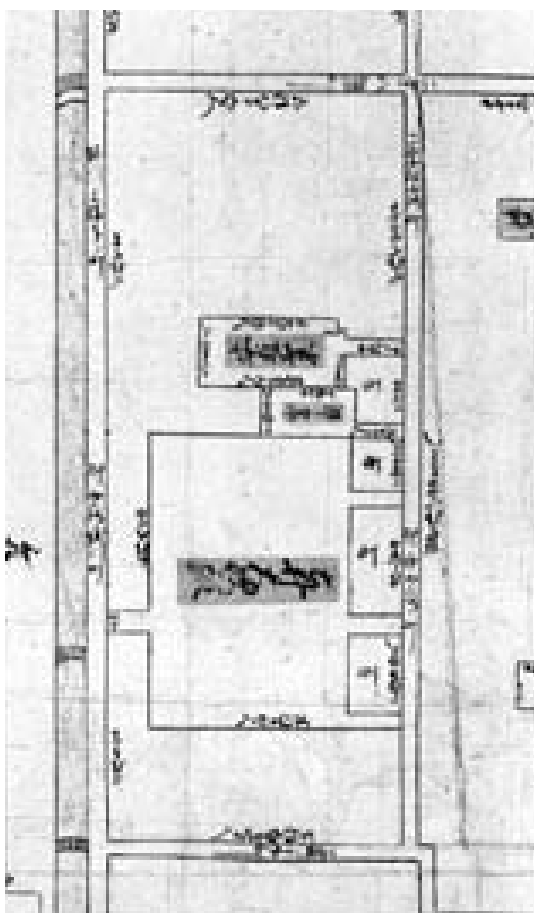


図 28 「寛永後万治前洛中絵図」（1642 年頃に成立）での調査地

一致せず、北築地のやや北側となる。

また同絵図では、西辺に1箇所、東辺に3箇所、通りへの出入り口が設けられているが、その位置は、西辺については現在ある路地がそれに該当し、東辺の3箇所は、南限境界から最初の1軒目、近年まで自治会館が置かれた地点（門301を検出している）、油小路通と押小路通の交差点南西隅から南へ17～22m付近、の3箇所が推定できる。

（4）江戸時代中期

1区第2面が該当する。2区・3区は該当期の遺構は明確にできなかった。調査地は引き続き土井家の京屋敷として利用されたと考えられるが、屋敷内の配置は明確でない。

この時期に該当する井戸は、1区で2基（井戸73・771）、3区で1基（井戸134）検出ただけで、合計3基と非常に少ない。1区の中央から北西部では土坑内に石を敷き詰めた集石遺構を検出した。これらは建物下部やその周囲に造られる排水施設とされるが、付近には建物痕跡は確認できなかった。江戸時代の建物は、小規模な礎石建ちとされるため、調査区内にあった建物もすでに削平されたと考えられる。また江戸時代の町家跡を調査すると、ゴミ処理土坑が多数検出されるが、今回はそうした状況もみられなかった。屋敷内部には空き地が多かったためと判断される。東西方向に設けられた柵（柱列2019）は西側から屋敷に入った場合に北側を区画する目的で設置された柵とみられる。柱穴の規模が大きいこと、底に礎石を敷くこと、柱間寸法が1.3m程度であることなど、第3-1面で検出したコの字形の柵（柱列1512・1637・1663）に類似する点が多い。頑丈な柵がここにあったことになるが、北側の何を区画したのか判明しない。1区南西部には土取穴が集中する部分がみられた（土取穴群2018）。この範囲に土取穴が掘られたことは、ここが空き地であり、穴を掘りやすかったためとみられる。

2区南半では、第1面で検出した石垣13と溝20が、引き続き土井家と町家の境界として機能していたと推定される。境界の南では18世紀後半～19世紀前半の火災ゴミを廃棄した土坑が多数掘られ、町家の裏庭であることを示唆していたが、2区北半と1区にはこうした火災ゴミ処理土坑は検出できなかった。火災が土井家側に及ばなかったためか、あるいは建物が少なかったためとみてよいであろう。

（5）江戸時代後期

1区第1面、2区第1面、3区第1面が該当する。幕末期までは土井家の屋敷であり、明治初期からは城巽学校の用地となった。

1区北西部では井戸がほぼ等間隔に4基、南北一列に並ぶ状況がみられた。こうした状況は、各家ごとに井戸をもつ町家の配置状況に類似する。幕末期に成立したとされる『油小路屋敷図』をみると、北西部には「仮建式番御長屋」と表記された長屋が南北に6棟並ぶ状況が描かれており、遺構の状況と一致するように見える。しかし絵図には「仮建」としており、井戸を有していたかは疑問である。

絵図との比較は別にして、1区北西部では町家の遺構を検出している。図・写真では示さなかったが、第1面とした整地層（層75）上面には土間、礎石列、漆喰槽や漆喰池が東西方向に並んでおり、町家裏側の様相を呈していた。ただしこれらの遺構には、レンガや土管が使用されており、明治以後の遺構と判断したが、4基の井戸はこれら町家に伴って掘られたものであり、西側の町家が幕末期には東側にまで及んでいたものとみられる。そして明治に入って、校地が順次西側に拡張された結果、調査地内に組み込まれることになったのであろう³⁵⁾。

同じく1区北西部で、石組をもつ南北方向の溝37・160、東西方向の溝38を検出した。3本の溝は同時に存在し、互いに連結することで水を敷地外に排していたものとみられる。この3本の溝を先述した絵図と関連させて理解するなら、溝37は「仮建弍番御長屋」の東端、溝160は東西方向に配置された「仮建壱番御長屋」の西端、溝38は北端か南端の排水溝に該当するのではないかと想定される。しかし溝37は先述した町家遺構の東端であることは確かであるため、東側にある溝160の間には町家と土井家の境界施設が必要となるが、この部分に柵や築地は存在しない。そのため、両者は一連の遺構として、絵図に描かれた「仮建壱番御長屋」「仮建弍番御長屋」の各端部とみるのが妥当となる。この場合は、南北方向の「仮建弍番御長屋」のみに水を利用する施設（井戸、漆喰槽）があったことになる。

2区南半では前代から引き続き石垣13と溝20があり、屋敷と町家の境界となった。その北側では東西の小溝群を検出した。これらは耕作に伴って掘られた溝とみられ、屋敷内の土地利用の知る上で重要である。

なお、明治初年の小学校開校に伴う遺構は明確にできなかったが、遺物には「被服室」「タイプ室」の墨書をもつ火消壺、明治六年の銘をもつ陶製オロシ金、授業で使用された石盤、石筆、ガラス製の器具や板ガラス、青銅製の器具類などが出土し、内容をうかがい知ることができた。これらは地域の拠点として生きてきたことを示す重要な遺物である。

2. 遺構の特徴

(1) 井戸底の深さ（図29）

井戸底の深さは当時の地下水位を示すものでもあるため、時代順に比較することで地下水位の変遷を知ることができる。平安京内に掘られた井戸は、時代が新しくなるほど深くなるとされてきたが、改めて検討してみる。

平安時代中期（10世紀代）とみられる2基は標高36.0m付近が底となり、浅かったことは明白である。次いで平安時代後期（11世紀から12世紀）に属する3基は36.1～35.3mで底となる。同時期に属する池1570は36.25m（36.19m）、池1810は36.5m付近が最深部であるため、池底とほぼ同じか、井戸底の方が若干低く、池底はほぼ湧水帯に達していたことを想定させるものである。平安時代末から鎌倉時代（13世紀代）の井戸8基は35.3～34.3mに底があり、前代より約1m井戸底が下がっている。室町時代前期（14世紀代）の2基もこの付近にある。戦国期にか

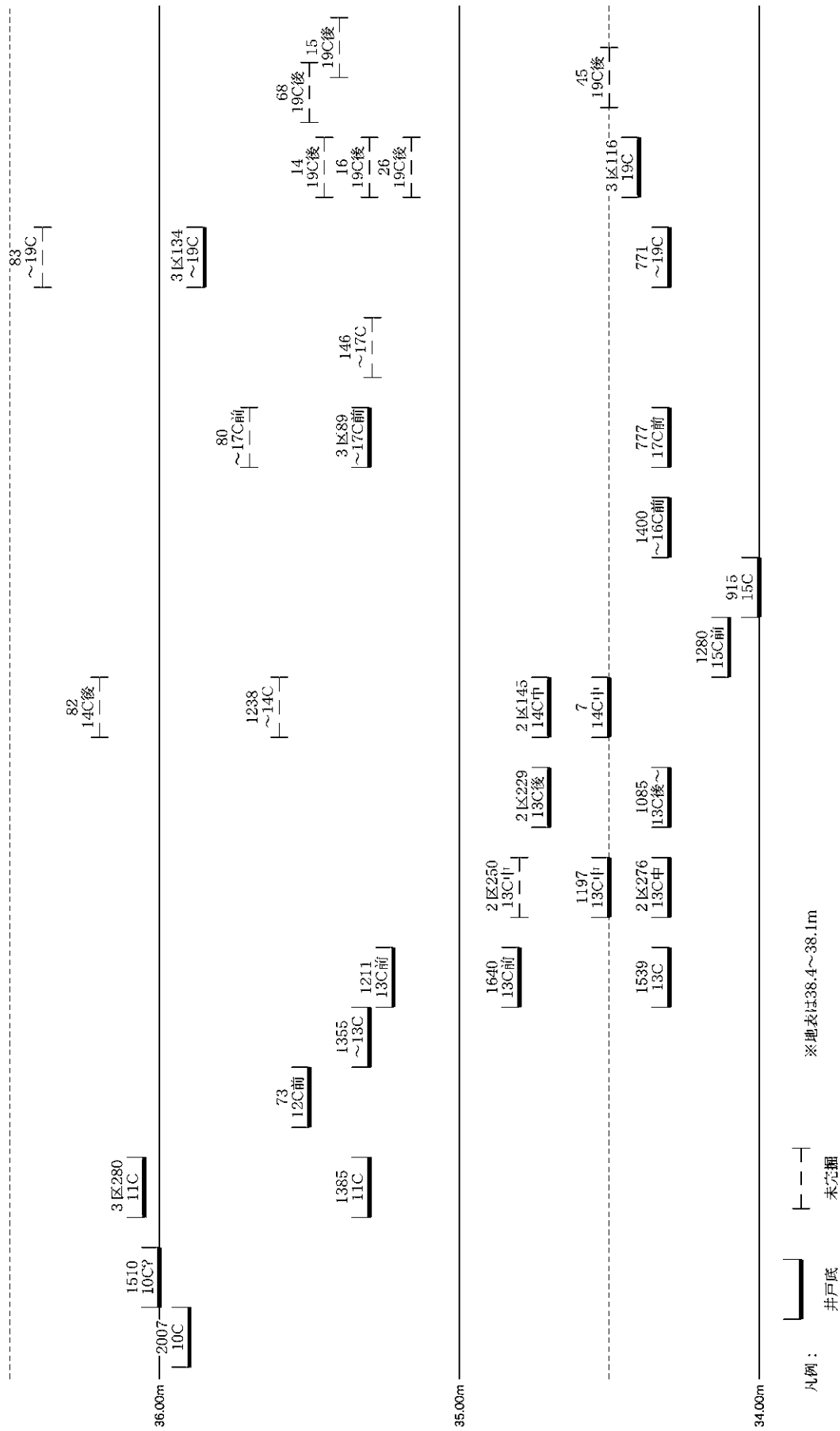


図 29 井戸底の標高比較模式図

けての15・16世紀代の井戸3基は34.3～34.0 mに底があり、水位の低下は0.3 m程度にすぎなかったようである。

それ以後の井戸については、底が判明した井戸5基のうち、1区の2基と3区の1基は34.3 m付近で前代と等しく、また3区の2基は35.8～35.3 mで底が浅い。3区の井戸は、34.4 mに底をもつ井戸も含めて全体的に底が浅く、地下水位が高かったためと理解できる。ただし、底が深すぎて確認できなかった井戸も9基あるため、ここで解説した井戸は例外的な事例とみられる。江戸時代の井戸底については、今回も深すぎて検討できなかったことを付記しておく。

以上を整理すると、平安時代でも後期以前のもものは浅い位置にあること、鎌倉時代には約1 mほど底が低下すること、その後の低下はわずかにとどまること、19世紀以後の井戸は底が確認できないほど深いものが出現すること、などが結論となる。こうした所見はすでに既往の調査でも報告されており、今回もそれを是認することとなった。既報告については、註で示してあるので参照されたい。³⁶⁾

(2) 便所の可能性があると考えた遺構について (図30)

江戸時代の遺構には、方形を呈し壁が垂直に掘り込まれた遺構がある。内部の埋土は有機質の遺物が多く含まれる。異臭はしないが、通常の土坑と異なることから、便所の可能性が高いと推定した。坑内の埋土を採集し、顕微鏡で観察したが、寄生虫卵などは検出できず、便所であるとの確証は得られなかったが、特徴ある遺構であるため、以下で整理しておく。

1 土坑内の埋土に有機質の泥土が含まれるもの(土坑70・94・114・219・495・800・806・1275・1320・1700)。このうち、土坑70・94・806の断面は図版31で紹介している。土坑114・1275・1320・1700は平面が径約1 mの円形を呈し、壁面は垂直で深さ1～2 mと比較的深い。土坑70・94・806は近接しており、周辺に掘られた土取穴に規模や形状が類似する。

2 平面は円形で、壁面にタガの痕跡がみられる土坑(土坑129・150など)がある。桶を埋め込んで固定した遺構とみられ、堆肥を溜める施設と考えられる。土坑129は内径0.8 mで、外側の掘形径は1.5 mある。深さ0.7 mあり、壁面にはタガが4条確認できた。土坑150も径1.5 m、深さ約1 mで、ほぼ同規模である。

3 井戸の中で埋土に有機質の泥土が入るもの(井戸80・777・1085など)がある。井戸として使用されたことは確実であるが、埋める際に有機質のものが入れられている。井戸777からは白色の凝固物が出土したが、これは希塩酸で激しく発泡したことから、炭酸カルシウムであることが確認できた。漆喰などがここに廃棄されたとみられる。

4 石室105は東側に1段の石組をとどめていたが、中央部は深く掘られ、内部に汚れた泥土が入っていた。

図30では遺構の配置を示した。中央部が空白であることが注意されるが、江戸時代の屋敷内部を描いた絵図においても中央部は空白の状態を描かれており、このことと対応するものであろう。主要な土坑は南東部に多く、また灰が詰まった遺構の位置も示した。これらは北西部に多いことが

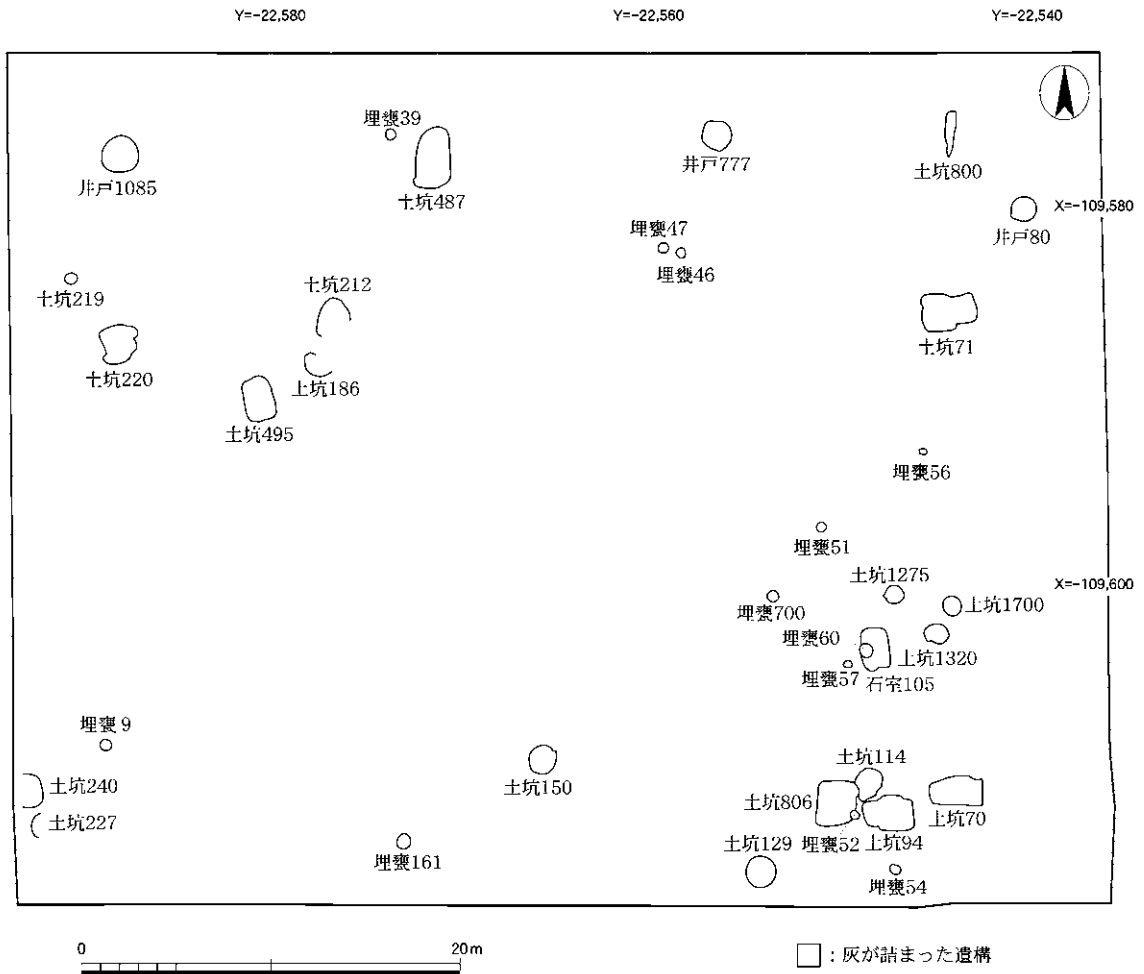


図 30 遺構配置図 (1 : 400)

わかる。

土坑の埋土を分析した成果、寄生虫卵は確認できなかったことを述べたが、種実が多く検出されている。詳細は付章6に譲るが、遺構との関係で重要視できるものについて解説しておく。

土坑 495 ではタデ科、ヒユ属、メハジキ、ツユクサ、エノコログサ属、カヤツリグサ属の種実が含まれ、特にツユクサ、カヤツリグサ属の種実が多い。土坑 806 ではザクロソウの種実が多い。土坑 1275 ではタデ科、ソバ、スベリヒユ、ザクロソウ、ハコベ属、ヒユ属などの種実が多い。土坑 1700 ではノミノフスマの種実が多い。井戸 777 ではザクロソウ、ハコベ属、ノミノフスマ、ナスなどの種実が多い。井戸 1085 ではスベリヒユ、ハコベ属、ヒユ属の種実が多い。

以上のうち、タデ科、カヤツリグサ属は湿った環境下で生育するものがあり、スベリヒユ、ハコベ属、ヒユ属は畑など耕作地に多くみられる。ナス、ソバは食用であり、その他の多くは雑草である。有機質土壌の中身には、こうした植物種実が多く含まれるため、当時の環境を想定する上で有効な資料である。

3. 出土遺物について

(1) 出土した土器類からみる調査地の変遷

1区・2区の平安京下層の流路から縄文中期の船元式の深鉢や小片が出土した。調査地は堀川御池遺跡にあたり、縄文から古墳時代の流路や溝が発見されている。また調査地の北には二条城北遺跡、北東には烏丸丸太町遺跡があり、縄文時代から弥生・飛鳥時代の遺構や遺物が出土している。今回出土した縄文土器は遺構に伴うものではないが、この近辺に遺構が存在していた可能性は高い。

平安時代では9世紀から10世紀の遺物が出土している。遺構に伴うものではなく、そのほとんどが混入として後世の遺構から出土していることから、9世紀後半から10世紀にかけてこの地に邸宅を構えていた藤原基経、兼通、顕光らの時期の遺物が、池や整地層などから出土しているとわかる。当時の遺構がほとんど検出されないのは、その当時からこの地が池だったのか、あるいは池を造り変える際に壊されたものか定かではない。

また平安時代後期の堀河院の池1810内に掘られた土坑1840から大量の土師器皿とともに、台付きコースター形土師器皿が出土した。皿の底部には台が付いていた痕跡はあるが、本来あった台部はいっさい出土していない。これより小さな台付きコースター形皿は、ここ以外に池1570でも出土しており、台部も遺存している。このことから、土坑1840から出土した台付きコースター形皿は、儀式などに使用された後、池に廃棄する際には台部は破却されていたと考えられる。またこの大きさのコースター形皿は土坑1840しか出土していない点も重視される。この他に土坑1840からは中に土塊が入った土師器小壺が出土している。土塊は舌状の形をしており、振ると土鈴のように音がするもので、やはり何らかの儀式に使われたものと考えられる。土坑1840は池の岸際に深く掘り込まれており、祭祀や儀式で使われた土器が廃棄されたのであろう。土器に時期差はほとんどなく、短い期間に行われたものといえる。文献からは、承暦四年(1080)船楽をする、応徳三年(1086)最初の徐目が東対代で行われた、寛治元年(1087)寝殿で万機旬の儀式、寛治四年(1090)南殿で新穀を祝う豊明節会、寛治七年(1093)西追で灌仏³⁷⁾を実施、などの儀式を行ったとある。土器の年代からは、これらの儀式で使用された可能性もある。

また鎌倉時代には文献に「堀川大臣」とも呼ばれたと記されていることから、源(久我)通具がこの地に住んでいたことがわかる。鎌倉時代の遺構(土坑1190・2区土坑222)から乙訓形の土師器皿がまとまって出土したことは、久我氏が居住していたことと関係するものと考えられる。この時期の遺物は井戸や土坑からかなり出土している。しかし、15世紀から16世紀中頃にかけての約150年間は、1区では遺物の出土が全くなく、室町時代前半はこの地は空閑地であったことがわかる。ところが2区では土坑165・174から16世紀前半の土器が出土していることから、この時期に1区と2区の間になんらかの境界線が存在した可能性がある。ただ、どちらも15世紀は開発されておらず、これは応仁の乱の影響と思われる。

桃山時代から江戸時代前期では、落込925・920から出土した遺物の中に同時代の磨滅の激しい焼締陶器、唐津や美濃などの施釉陶器の破片が多く見受けられた。落込を埋め立てた土層に入っていたものであるが、比較的新しい時期の遺物であるため、長時間かけて磨滅したものは考えられない。堀川に捨てられた陶器などがローリングを受け磨滅したものが、浚渫され埋め立て用の土と

一緒にこの地に運ばれてきたのではなかろうか。当時は二条城築城やこの周辺の開発がすすめられており、土井利勝がこの地を拝領した元和6年（1623）は、落込 925・920 を埋め立て整地した遺物の年代時期とほぼ一致する。しかし、土井家の敷地となっても、あまり利用された形跡はなく、土井屋敷関連の検出遺構も極めて少ない。したがって遺物も、区画の南限を示す溝や廃棄土坑などから出土しているもののやはり少量である。江戸時代も後半になると敷地内北西には町家が建てられ、土取りのための土坑も増える。これらの遺構に伴い江戸時代後期から幕末・明治の遺物が出土した。南半は耕作地として利用していたためか、遺物もまとまって出土していない。このように調査地は、左京では珍しく江戸時代の土地開発はあまり活発でなく今日に至ったようである。

（2）堀河院出土軒瓦について

はじめに

調査地は堀河院の南半に該当する。平安時代の軒瓦の多くは後世の遺構からの出土という問題はあるにせよ、出土した平安時代の軒瓦の年代観をみると、平安時代前期から後期までの各時期のものが総数 440 点あり、なかでも 11 世紀代のものが多くを占め、平安時代中期から後期が主体となっている。まさに堀河院が最も機能していた年代に合致するまとまった資料が得られた。さらに出土地点により瓦当文様の種類に偏りがあることもわかった。また平安時代全般を通じて、瓦の文様の組成は、それぞれ量的には必ずしも多くはないが、当地の沿革を示す各種・各時期のものが含まれていた。出土軒瓦の全容は第4章の（3）「瓦類」で紹介し、平安時代から江戸時代の様相と変遷を整理している。平安時代前期の出土軒瓦は堀河院造営以前の藤原基経の邸宅・堀河辺第に関わる軒瓦の可能性が高い。堀河院廃絶に近い平安時代後期に属する補修に使用されたとみられる軒瓦類には、京・近郊産が多いが、受領らの奉仕による地方産瓦も含まれており、特に播磨産のものが目立つ。鎌倉時代から室町時代の瓦類は堀河院廃絶後の藤原良経や、源（久我）通具（道元の育父）の邸宅、またそれ以降の貞和年間（1345～50）に当地に造営されたとみられる法華寺院・住本寺と関連する。江戸時代の瓦類は主に元和九年（1623）に造成された土井屋敷に使用されていたものと考えられる。ここでは 11 世紀代に属する主要な軒瓦の分布から、庭園に伴う建物の存在について検討する。

軒瓦の分布について（図 31）

平安時代中期から後期の軒瓦のなかで量的にまとまって出土した軒丸瓦 5 型式、軒平瓦 5 型式を抽出して、出土地点の分布図を作成した。ここでは分布図を基に堀河院の様相を四行八門の区画に沿って、軒瓦の分布傾向と組み合わせについても考察しておきたい。

軒丸瓦・軒平瓦の型式は、以下のとおりである。

- 軒丸瓦 軒丸 1 複弁八葉蓮華文軒丸瓦（瓦 28・29）
- 軒丸 2 複弁六葉蓮華文軒丸瓦（瓦 17・18）
- 軒丸 3 複弁八葉蓮華文軒丸瓦（瓦 19～22）
- 軒丸 4 複弁八葉蓮華文軒丸瓦（瓦 25）

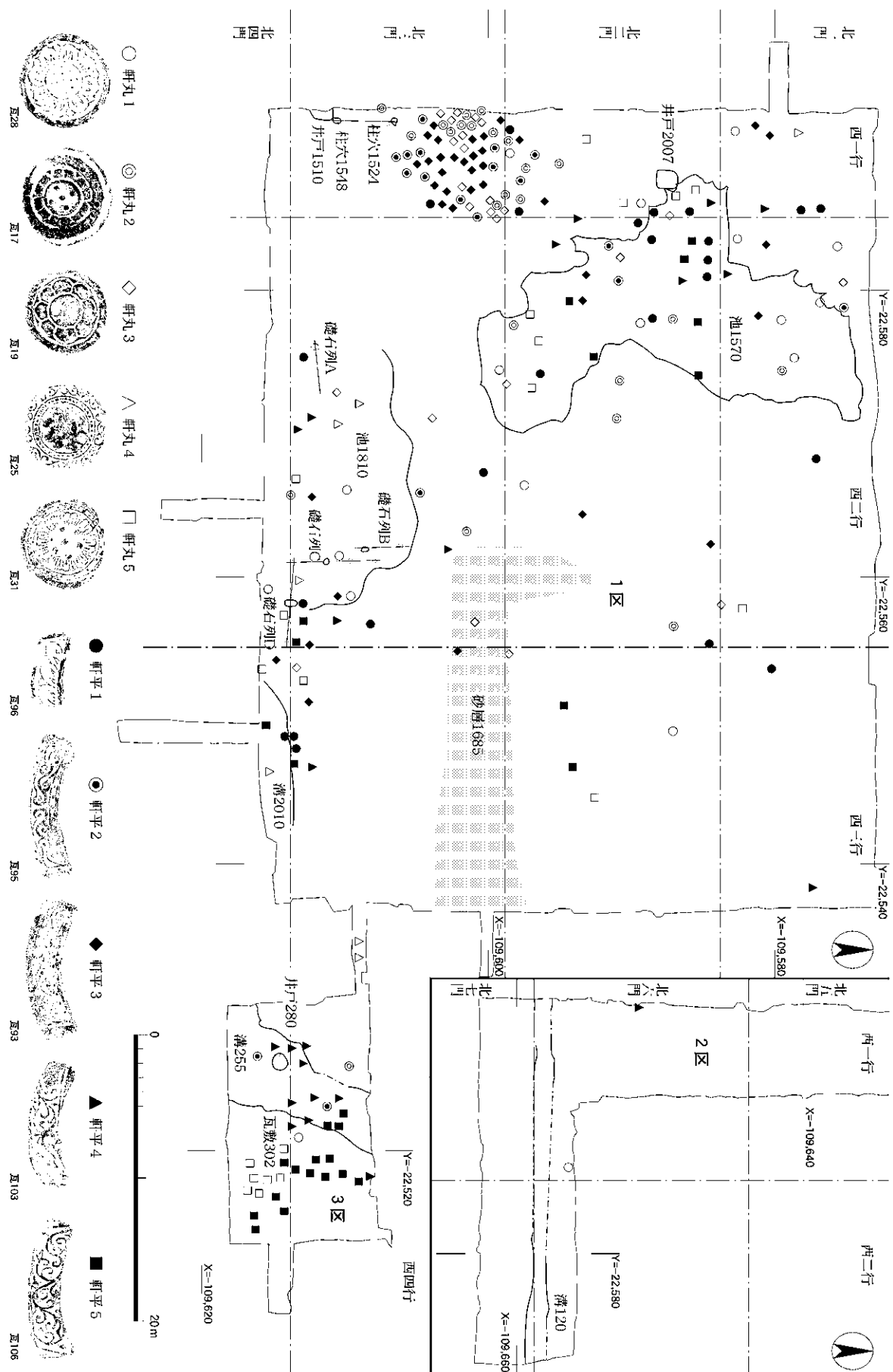


図 31 軒瓦分布図 (1 : 400)

軒丸5 複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (瓦 30 ~ 32)

軒平瓦 軒平1 蓮弁文軒平瓦 (瓦 96 ~ 98)

軒平2 均整唐草文軒平瓦 (瓦 94・95)

軒平3 均整唐草文軒平瓦 (瓦 92・93)

軒平4 均整唐草文軒平瓦 (瓦 103)

軒平5 偏行唐草文軒平瓦 (瓦 106・107)

西一・二行北一・二門 軒瓦は77点出土している。池1570が主に西二行の西半に位置する。池1570の範囲内からは軒平5をはじめ軒平1、また軒丸5など合わせて37点が出土している。池西側については、軒丸1、軒平2・3などが目立つ。全体の分布状況は池東側は西側に比べて10点と少なく、池内と池西岸から西側に多く分布する。池西岸には平安時代中期の井戸2007を検出しており、井戸に伴う建物の存在も推測できる。

西一・二行北三・四門 軒瓦は86点出土している。池1810が西二行北三門の南半に位置する。池の西側の西一行北三門は軒瓦の分布密度が極めて高く、西一行北三門の東半だけで63点出土している。これらは近世初頭の土取穴から出土したものであるが、軒瓦の種類はまとまりがみられる。軒丸2・3、軒平2・3が集中する。特に軒丸3が17点、軒平3が25点と比較的多く、両者の組み合わせが考えられる。南側では、礎板をもつ柱穴1524・1548や木枠組み井戸1510も検出しており、調査区外の西に延びる建物の存在が窺われる。軒瓦の分布もさらに調査区外の西側へ延びる様相を呈しており、建物に用いられていた軒瓦との関係が想定できる。池1810については軒丸1・4、軒平1・3・4が主に分布する。軒丸1・軒平1はセット関係にあり、池内には南北方向の礎石列A~Cもみられ、建物が存在した可能性は高い。

西三行北一・二門 軒瓦は7点出土している。攪乱部が多くを占め、西三行の半分近くが未調査であることから軒瓦の分布密度は希薄である。

西三・四行北三・四門 軒瓦は51点出土している。1区の南東隅と3区全体にあたり、西三行北三門の北半には、砂層1685を検出しており、建物の存在は溝2010と溝255が位置する南半部に推定される。溝2010付近では軒瓦が11点出土しており、中でも軒丸5、軒平1・3・5が多い。また西三行から西四行西半にかけての3区では、瓦敷302と溝255からは主に軒丸5と軒平4・5が32点出土している。

西一行北五・六門 軒瓦は2点出土している。2区南半部が該当し、北六門と北七門の境界では、中世の区画を示す溝120を検出している。軒瓦はその北側で軒丸1と軒平4が1点ずつ出土している。

1983年調査出土の軒瓦

今回の調査地の北接地で、1983年8月から1984年4月までホテル建設に伴い4,000㎡の規模で発掘調査が行われた。調査地は左京三条二坊九町の西一~四行北四~七門に該当し、調査の結果、堀河院に伴う池と遣水、滝口を確認している。この調査では平安時代から鎌倉時代の軒瓦が108点出土している。平安時代の軒瓦は94点で、その内、平安時代中期が72点、後期が22点を数える。

平安時代中期の軒瓦が主体を占めることは、今回の調査での出土傾向と類似している。また平安時代中期の瓦当文様を種類別にみると、軒丸瓦 34 点の内、軒丸 1 が 24 点、軒平瓦 38 点の内、軒平 1 が 29 点出土している。軒丸 1・軒平 1 は、今回の調査において西一・二行北一・二門から多数出土しており、九・十町合わせると軒丸 1 は 41 点、軒平 1 は 55 点を数える。両者は同じ蓮弁文様を採用し、組み合わせを意図した軒瓦で、11 世紀代に比定されることから堀河院が里内裏として整備された時に用いられた軒瓦とみられる。また今回の調査で多数出土した軒丸 2～5、軒平 2～5 がみられなかった点も留意される。平安時代後期の軒瓦 22 点の内、軒丸瓦 7 点は栗栖野産がほとんどで、軒平瓦は 15 点の内、播磨産が 7 点と多い。播磨産の多さは今回の出土例とも一致する。鎌倉時代の軒瓦は 19 点で、軒丸瓦は巴文 5 点、中房に「卍」銘を陽刻したもの 3 点、軒平瓦は剣頭文 11 点が出土している。

小結

里内裏期の堀河院については関係史料が豊富に残っており、その平面図は太田静六氏により復元されている。当初、藤原氏の邸宅であったものが里内裏として利用され、その後邸宅に戻るという繰り返しがあることや、後世の遺構との重複により、里内裏としての建物配置は確定できていない。軒瓦の出土分布は、多くが後世遺構からの出土という二次的な出土状態という問題があるにせよ、同型式の軒瓦が数的にまとまって出土していることに着目し、近接地に存在していた建物に用いられ、廃絶後まとめて投棄されたという観点から、建物に用いられた軒瓦の組み合わせと、池に伴う建物の存在について推定することができた。

軒瓦の組み合わせについては、図 31 軒瓦分布図で多数を占める型式のものから、1 区では池 1570 が位置する西一・二行北一・二門で軒丸 1・5 と軒平 1・5 が、西一行北三門では軒丸 2・3 と軒平 2・3 が、北三・四門西三・四行にあたる 3 区では軒丸 5 と軒平 4・5 の組み合わせが考えられる。それらの軒瓦が用いられた建物が、池 1570 の西側や池 1810 内の西側、あるいは遣水とみられる溝 255 東辺に存在した可能性が高い。特に池 1570 と池 1810 の西側については、『長秋記』の永久元年（1113）七月二十四日の条に「中宮（篤子）御堂を供養す。巳の刻許、布衣を着し堀河院に参る、この西対は先朝の御在所なり。南三間に螺鈿の仏壇を居し、その上に九体阿弥陀仏、ならびに観音至勢等の仏像を安置す。」すなわち中宮篤子が堀河院の中に西対を踏襲して御堂を建立したと記されていることから、池 1570・1810 西に御堂が存在したことが軒瓦の分布と関連するものと思われる。

（3）出土銭の年代的推移（図 32）

出土銭貨の概要については、第 4 章の 4 で解説したが、そこで指摘したように江戸時代の遺構からは渡来銭が多く出土しており、この点を若干補足しておきたい。

今回の調査で出土した銭貨を、年代ごとに棒グラフ（渡来銭）、折線グラフ（江戸鑄、「寛永通寶」で代表させた）を示した（図 32）。これを見ると、17 世紀代までは渡来銭が顕著であるが、18 世紀代に入ると寛永通寶が増加し、19 世紀代には寛永通寶が完全に主体を占める。しかし渡来銭も

一定量存続しており、両者が混在した状態で使用されたことがわかる。

次に、同様の調査事例として以下をみる。1つは左京六条三坊五町（下京区元尚徳中学校、現下京中学校）の出土例である⁴⁰⁾。出土総数 645 点のうち、内容が判明した 428 点を検討対象とする。江戸時代の遺構が密集していたため寛永通寶が 78% と非常に多く、渡来銭は 17% であった。年代ごとの推移では、14 世紀代では渡来銭 3 点、15 世紀代同 3 点、16 世紀代同 2 点と非常に少ないのに対し、17 世紀代に入ると渡来銭が 44 点、寛永通寶 13 点と総数が急増する。18 世紀代に入ると寛永通寶 50 点に対し渡来銭 7 点と比率が逆転し、19 世紀代では寛永通寶 142 点、渡来銭 6 点とその差が顕著となる。数量的な差違はあるものの、渡来銭が少量出土する状態から 17 世紀代に急増し、次第に寛永通寶が凌駕する傾向は、今回の出土事例と同じであることが指摘できる。

2つは左京四条二坊十四町（中京区元本能小学校）の出土例である⁴¹⁾。ここでは 279 点を検討対象とした。江戸銭は 20% と予想外に少なく、反対に渡来銭が 60% と多くを占める。皇朝十二銭も 8% と多い。年代ごとの推移であるが、渡来銭は 15・16・17 世紀代と増加し上記 2 例と同じ傾向がみられる。18 世紀代は資料がないが、これは時代設定が 18 世紀～19 世紀代としたものを 19 世紀代に属させたためである。そうした点を考慮しながら 18・19 世紀代を平均的にみると、上記 2 例に近いことがわかる。ここでは寛永通寶は少ない点が留意される。17 世紀代では上記 2 例と同じであるが、18・19 世紀代には増加はみられない。生活遺構の少なさが背景にあるものとみられる。

3つは伏見城跡（伏見区役所）の江戸時代墓地から出土した事例である⁴²⁾。銭貨は六道銭として副葬されており、付表 1 から銭貨を副葬した墓を集計すると、寛永通寶（古寛永銭、新寛永銭は不問）を入れたものが 54 例あるのに対し、渡来銭のみを副葬したものは 2 例、両者が混在したものは 3 例となり、圧倒的に寛永通寶を副葬した墓が多いことがわかる。渡来銭のみを副葬したものをみる

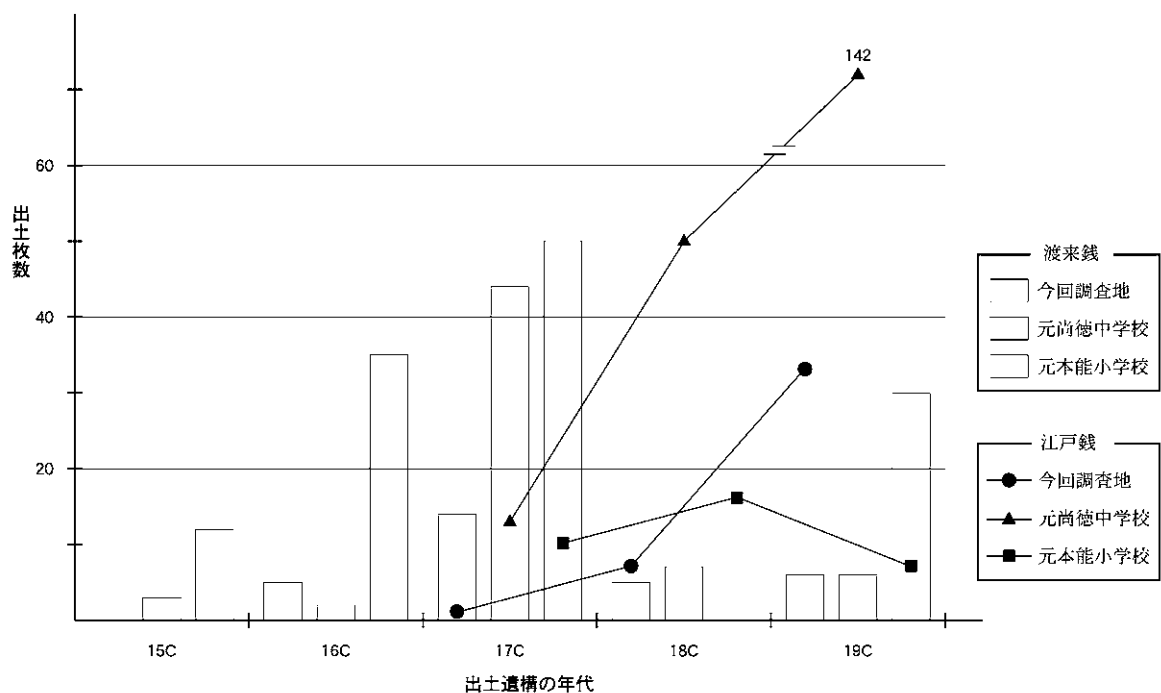


図 32 出土銭貨の年代的推移グラフ

と、1区埋葬 2275 では6点、1区埋葬 2096 では4点副葬している。寛永通寶と渡来銭の両方を副葬するものは、1区埋葬 342 が渡来銭 18点と寛永通寶 2点、1区埋葬 274 が渡来銭 1点と寛永通寶 5点、1区埋葬 237 が渡来銭 1点と寛永通寶 5点となる。全体的にみて渡来銭を副葬するものは少数派であるが、両者が混在していたことも確実である。銭の種類と副葬される墓には階層性などが関係するのであろうか。また、報告書の図 56～58 に示された渡来銭は、縁が狭く中央の方孔も円形化したものが含まれる。これらは国内模鑄銭の可能性があろう。

なお左京北辺三坊（京都和風迎賓館）の調査報告では、公家町形成前を第1分冊、公家町期を第2分冊に区分した関係で、皇朝十二銭と渡来銭は第1分冊、寛永通寶は第2分冊で報告し、総合的な検討は果たせなかった。⁴³⁾ 改めて渡来銭の年代的な推移を整理すると、15世紀代が14点、16世紀代が44点で増加し、17世紀代が92点でピークを迎え、その後18世紀代は35点、19世紀代は6点と減少する。17世紀代にピークを迎える傾向は上記3例と同じといえる。

改めて整理すると、渡来銭は江戸時代初期の遺構から多く出土し、18・19世紀代には寛永通寶が凌駕する。しかし渡来銭も出土することから、両者の混在した状態が流通の実態であったことがわかる。そして、渡来銭の中には国内で模鑄されたものが確実に含まれることなどが指摘できる。

註

- 1) 平安京調査会・原山充志・小森俊寛「平安京左京三条二坊2」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年 P8
- 2) 太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館 1987年 P417
- 3) 横山卓雄「京都盆地の自然環境」『平安京提要』角川書店 1994年。P31に柱状図があり、向日町、深草、千里山では第1海成粘土と第2海成粘土間に堆積する。
- 4) 「朽木庄」『滋賀県の地名』日本歴史地名大系 25 平凡社 P1119
- 5) 「平惟仲」『平安時代史事典』下 角川書店 1994年 P1484
- 6) 朽木の荘園については、西山良平氏より資料提供、ならびにご教示をいただいた。
- 7) 網 伸也「賀陽親王邸宅・初期高陽院」『古代庭園に関する研究会（平成19年度）資料集 一平安時代前期庭園の遺構と貴族邸宅一』奈良文化財研究所文化遺産部 2007年
- 8) 『平安京左京四条三坊四町・烏丸綾小路遺跡』株式会社日開調査設計コンサルタント文化財調査報告書 第2集 株式会社ニッセン・株式会社 日開調査設計コンサルタント 2007年
- 9) 鈴木久男「平安時代庭園の施工技术」『研究紀要』第2号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年 P119
- 10) 前田義明・鈴木久男ほか『烏羽離宮跡Ⅰ－金剛心院跡の調査－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第20冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002年 ただしP24では、「後世に粘土を採掘するために掘られたもので、池とは全く無関係である。」とする。
- 11) 44・112次調査は磯部 勝・鈴木久男「京都・烏羽離宮跡」『木簡研究』8号 木簡学会 1986年 P32。他は会下和宏「京都・烏羽離宮跡」『木簡研究』15号 木簡学会 1993年 P49による。
- 12) 網 伸也・清藤玲子ほか『平安京右京三条二坊十五・十六町 一「齊宮」の邸宅跡一』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002年 P85

- 13) 本 弥八郎・平尾政幸ほか『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年 P33
- 14) 津々池惣一・加納敬二ほか『平安京跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-18 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年 P54 南側溝(溝18、9世紀)も少量であるが確認されている。
- 15) 江戸時代の絵図で調査地周辺の変遷をみると、『元禄十四年実測大絵図』(1701)までは南北2町に描くが、『新板増補京絵図』(宝永6年、1709)からは堀河院以東を南北1町に描く。この間の宝永5年(1708)3月8日には京中を焼き尽くす「宝永の大火」があり、防火対策として押小路通りが開かれたとみられる。ちなみに、堀河院旧地に押小路が開かれるのは、明治2年(1869)から明治9年(1876)の間であったことが、同じく絵図から判明する。
- 16) 嘉保元年の火災の様子は『中右記』に詳しく、太田静六『寝殿造の研究』(吉川弘文館 1987年)P401で引用されているが、同日条に「堀河院」の表記はみえない。『増補史料大成』第九卷(中右記一)臨川書店 1960年 P191。また『百鍊抄』にも同日条に火災記事がある。「皇居堀川院焼亡、主上大炊殿に御遷す」『増補改訂国史大系 百鍊抄』吉川弘文館 1979年 P42
- 17) 保安元年の火災は『百鍊抄』四月十九日条に「堀川院焼亡、先帝崩御所」、『中右記』四月十九日条に「焼亡ある所は堀川院也、東廊渡殿、西対、寝殿が焼亡、丈六の釈迦仏並びに等身九体中2体を取り出す。先年には中宮京極御堂が焼亡し、又この堀川院御堂も今夜焼亡した。」などが記される。
- 18) 1. 菅田 薫・本 弥八郎・吉川義彦「左京三条二坊」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年 P17
 2. 菅田 薫「堀河院跡庭園遺構」『発掘庭園資料』奈良国立文化財研究所史料第48冊 奈良国立文化財研究所 1998年 P80
 3. 仲 隆裕「堀河院庭園」『京都の庭園 —遺跡にみる平安時代の庭園—』京都市文化財ボックス第5集 京都市文化観光局文化部文化財保護課 1990年 P30
- 19) 網 伸也「頼道邸高陽院の礎石建物」『リーフレット京都』No.113 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1998年
- 20) 平安京調査会・原山充志・小森俊寛「平安京左京三条二坊2」前掲1)に同じ。
- 21) 『平安京提要』角川書店 1994 P229。同書が引用する『鎌倉遺文』6431号、後院庁下文では「・佐伯康長私領押小路南油小路西同面地口南北式丈五尺奥東西拾丈之替、・」とあるため、寛文二年(1244)には押小路は開いていたことになる。
- 22) 京都国際ホテルの中庭の石碑(角田文衛氏による)にはそうして趣旨が刻まれる。
- 23) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 猪隈関白記5』岩波書店 1982年 P89 承元四年四月一日条「入夜南方有火事、二條堀川源中納言通具卿家焼亡了、」。
- 24) 村上源氏中院流。右大臣源顕房は六条中院第を邸宅とし、中院流と呼ばれた。その子、源雅実は久我山荘を譲られ、久我太政大臣と称され家系も久我家と呼ばれた。平安末期から鎌倉初めの内大臣源通親は後鳥羽院に近侍して政権を掌握した。その子源通具は大納言で新古今和歌集の撰者となる。源通具の弟に曹洞宗の開祖となった道元がいる。
- 25) 加納敬二「乙訓の土師器皿」『リーフレット京都』No.74 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2003年
- 26) 『京都の歴史10』年表・事典 学芸書林 1976年 P291による。原史料は『大日本史料』元和八

年 三月六日条の「涼源院記」に「幕府年寄下総佐倉城主土井利勝ノ京都堀川ノ亭、火災アリ」「堀川下立売の橋下二町下土井大炊殿（利勝）宅ヨリ出火、材木や四五軒火事也、」であることを、藤川昌樹氏からご教示いただいた。また『京都の歴史 10』P311 には、寛文 5 年（1665）三月十八日「堀川二条に火災。（隔溝 記）」とあるが、これも調査地の北方であろう。

- 27) 網 伸也・山口 真『平安京右京三条一坊四町』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-16（財）京都市埋蔵文化財研究所 2005 年。西高瀬川通航路は文久 3 年（1863）河村与三右衛門の設計による。検出した遺構は、幅約 10 m で深さ約 2.5 m、南北方向に 54 m 以上ある。北端は浅くなり、接岸施設が丸太で造り出されている。
- 28) 吉本健吾・竜子正彦「平安京左京五条二坊八町」『京都市内遺跡立会調査概報』平成 10 年度 京都市文化市民局 1999 年 P11。堀川の西側に掘られた濠状の遺構である。幅 8.3 m で深さ 1.9 m あり、東は堀川まで達していたと推定している。
- 29) 菅田 薫「堀河院跡庭園遺構」『発掘庭園資料』奈良国立文化財研究所史料第 48 冊 奈良国立文化財研究所 1998 年 1983 年調査地の北西部で出土した池 SG1900 は、景石、州浜を有することから池と認識されたが、幅 9 m 前後の方形を呈し深さが 1.5 m に達すること、東側に昇降用の階段が付くことなどから、落込 925 より約 5 m 短いものの、類似する遺構として注意される。
- 30) 高瀬川の船入は四条以北では 7 箇所あったが、現存するものは二条下一之船入のみである。現況は長さ約 100 m、幅約 10 m あり、江戸時代初期に竣工された。大名屋敷の背後に掘られた物資輸送用の施設である。
- 31) この門の姿を想像させるものとして、京都国際ホテルの中庭に通じる門がある。東西方向であるが、棟筋は 4.55 m で北（内）側 2.65 m に控え柱をもつ。規模はほぼ同規模で参照できる。
- 32) 川上 貢「洛中絵図 寛永後万治前 解題」『洛中絵図 寛永後 万治前』臨川書店 1974 年 本図は寛永 19 年（1642）に成立。なお同様の絵図に「寛永十四年洛中絵図」がある。こちらは寛永 14 年（1637）成立とされ、書き込みは多岐にわたる。
- 33) 藤川昌樹「徳川期京都における武家屋敷の成立 —「宿」の性格をめぐって—」『武家屋敷 —空間と社会—』山川出版社 1994 年 P51
- 34) その南「森ノ木町」の表記の北側には「七拾五間四尺」（147.8 m）の記載がある。敷地南辺と対比すると、縮尺不同か、あるいは誤記とみられる。
- 35) 敷地の東西幅について整理しておく。17 世紀前半に成立した『寛永後万治前洛中絵図』には「三八間四尺」の記載があり、東西幅は 75.2 m あったことになる。落込 925 上で検出した南北の礎石列 945 が西端の柵であったなら、約 7 m 狭い 63 m となる。第 1 面北西部では井戸、漆喰槽を検出し、町家東端は南北溝 37 と推定できたため、東西幅はさらに狭い 51 m となる。その後、小学校地は西側に拡張し、現在の東西幅約 70 m となったと考えるのが妥当となる。土井屋敷の範囲に変更があったことは、「土井大炊」「安永二 癸巳」と刻んだ石碑（石 68）が出土したことからも肯首できる。安永二年は 1773 年に当たるため、18 世紀後半に変更があり、範囲を明示するためにこの石碑が設置されたのであろう。しかし、この石碑は、第 1 面で石列に使用された状態で出土しており、幕末期には廃棄されていたようである。
- 36) 1. 丸川義広・加納敬二ほか『平安京左京北辺四坊 —第 1 分冊（公家町形成前）—』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第 22 冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004 年 P152「井戸の配置と地下水位」では、平安時代から戦国期までの井戸底は 46 ~ 47 m にあり、地下水位に大きな変化はなかつ

た、とする。

2. 平尾政幸・山口 真『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-5 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年 P136「井戸の分布と時期的変遷」では、底部の標高は概ね 31.5 ~ 32.5 mの間に収まるものが多く、時期的推移は顕著ではない、とする。

3. 丸川義広・能芝 勉ほか『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2005-8 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2005年 P112「井戸の配置について」では、「平均的な深さは標高 29.0 m前後であり、底が確認できたものでは平安時代後期から江戸時代まで差異がなく、江戸時代(17世紀代)の井戸から底が確認できないほど深い井戸が出現する。」とある。

37) 太田静六『寝殿造の研究』前掲2)などを参照した。

38) 平安京調査会・原山充志・小森俊寛「平安京左京三条二坊2」前掲1)に同じ。

39) 太田静六『寝殿造の研究』前掲2)に同じ。

40) 丸川義広・能芝 勉ほか『平安京左京六条三坊五町跡』前掲36)の3.に同じ。P82

41) 平尾政幸・山口 真『平安京左京四条二坊十四町跡』前掲36)の2.に同じ。P128

42) 山本雅和・大立目一・ほか『伏見城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-27 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年 P122・157

43) 丸川義広・加納敬二ほか『平安京左京北辺四坊 -第1分冊(公家町形成前)-』前掲36)の1.に同じ。P138

付章1 池1570 下部地業出土の木簡について

上野勝之

今回の遺構から出土した2点の木簡について釈読案を示し、その字体に関する説明及び十一世紀末から十二世紀初期の堀河院について解説を試みる。まず釈読案を示す。

① 方上

② 「食+勾または句」二丈/ロ一□→文 [丈カ] ●● [行カ] 二□ [丈カ]

(口以下は右寄せ小書、●の一文字目は表面の剥離により文字の有無は不明)

①の方上は、摂関家領の越前国今立郡方上荘（現在の鯖江市付近）を指すと思われる。②の「食+勾または句」は日本の古代・中世において用いられた字体であり、「まがり」「かれない」などと読まれる。後述のように、ここでは近江国の摂関家関係の荘園を指すと考えられる。「二」の次の文字は、横線の上に筆画は出ていないが、恐らく「丈」であろう。また右寄せ小書の3文字目及び末尾の文字は内容的には「丈」がわかりやすいが、とくに3文字目は「文」に似る。

方上荘は早く藤原忠平の日記『貞信公記』延長五年（927）十二月五日条に見える。さらに藤原道長以後には、代々の氏長者（摂関）に譲渡される殿下渡領四荘牧の一つとして伝領されたことが分かる由緒ある荘園である（橋本義彦）。

「食+勾または句」は、近江国栗太郡（現在の栗東市付近）に存在した荘園（御園）である。当初は小一条院敦明親王娘で三条天皇養子の「冷泉宮」葦子内親王の所領であったが、その没年の承徳元年（1097）頃に養女の源麗子（藤原師実妻）に譲られ、次いで永久二年（1114）の麗子死去前後に孫の藤原忠実の手に渡り、その後は摂関家（近衛家）に伝領されたという（義江彰夫、川端新）。

当荘は、従来の研究や大部分の活字史料では鈎・鉤（まがり）御園、餉（かれない）荘などと表記されてきた。しかし、建長五年（1253）成立の陽明文庫蔵「近衛家所領目録」原本（『鎌倉遺文』七六三一、京都大学文学部博物館編『荘園を読む・歩く』に原本の写真収録）では「食+勾または句」、十二世紀初頭の関白藤原忠実家の年中行事を記す『執政所抄』鷹司家本（原本1118～1121成立、鷹司家本は近世中期、『大日本史料』三ノ二十六所収本による）十二月二十八日条では「食+句」と記されている。また、京都大学附属図書館蔵『兵範記』仁安二年（1167）春巻紙背文書（『平安遺文』四七九八、京都大学附属図書館HP <http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/hyohan1/image/hh20/Hh20s090.htm>）には「(食+勾) 御園」（『平安遺文』では鈎）とある。今回の木簡の発見により、「食+勾または句」表記が十二世紀前後の摂関家周辺で用いられていたことが確実となった。後世には「鈎・鉤（まがり）」表記が一般に用いられており、下鈎・上鈎の地名が現在も残っている。

一方で当荘は、原本の表記は不明ながら、増補史料大成本『台記』別記仁平三年（1153）八月八日条では「餉御庄」、十一月十九日条では「餉」と記されている。また時代は下るが文明三年（1481）「六角氏奉行人奉書」に「餉区内延久名」が見えるという（平凡社日本歴史地名大系『滋賀県の地名』

「栗太郡下鉤村」、また角川日本地名大辞典『滋賀県』「鉤」「餉区内延久名」、ただし栗東町史編纂委員会編『栗東の歴史 資料編2』1995年、によれば「鉤図」、文書名は「六角氏奉行人連署奉書写」とする。これらによれば、中世の当荘周辺は「まがり」表記・呼称とともに餉（かれい）表記・呼称が併用されていたことになるが、使用例の少なさから本来は「まがり」であった可能性が高い。

今回の木簡の「食+勾または句」字体に関しては、『大漢和辞典』によれば「食+勾」「食+句」は同字であり、「食+句」は中国宋代の音韻字書『集韻』に掲出されているという。

日本の史料や古字書類では、まず平安末期の二巻本『色葉字類抄』や二巻本『世俗字類抄』に「糰餅（マガリ・形如藤葛）、食+勾（同、俗用之）」と、「マガリ」の俗字体として記載がある。「糰餅」とは米や麦の粉を練り揚げた菓子のことである。この菓子「マガリ」は承平年間（931～938）成立の『和名類聚抄』では「糰餅」、昌泰年間（898～901）成立の字書『新選字鏡』天治本では「飴」「餌」を「マガリ」と訓じているが、いずれも「食+勾または句」は用いられていない。また『延喜式』では、院政期から鎌倉初期の写本である九条家本『延喜式』の主税式諸寺料物条の「出雲四王寺」料中に「食+勾」があり、「マガリ」と読み仮名を添えているが（新訂増補国史大系本『延喜式』頭注による）、原本の表記は不明である。

一方、十二世紀以後のものでは、新訂増補国史大系本『朝野群載』巻七の大治二年（1127）、天承二年（1132）の御齋会加供送文に「食+句（マガリ）」、『類聚雑要抄』（川本重雄・小泉和子編『類聚雑要抄指図巻』中央公論美術出版、1998年による）巻一の保延二年（1136）東三条第大饗の菓子に「食+句」が出る。さらに鎌倉初期の字書『字鏡集』（龍大本による）では「食+句」を「カレイヒ、マガリ」、「食+句」を「マガリ、タテマツル、オクル、カレイヒ」、「餉」を「ヤシナフ、オクル、オクリモノ、カレイヒ、イヒオクル」と訓じている。また鎌倉時代改編の観智院本『類聚名義抄』では「食+句」を「タテマツル、オクル、マガリ、カレイヒ」など、「鉤・鉤」を「マガル」など、「餉」を「カレイヒオクル、一云カレイヒ」などと読む。煩雑になったが、院政期から鎌倉初期の「食+勾または句」字は、菓子「マガリ」を主たる意味として用いられ、かつ「カレイヒ、タテマツル」などの訓が与えられる字体であった。特に「カレイヒ、オクル」などの訓は「餉」と重なり、字形の類似とともに、時に両者の混同、併用の一因となったと考えられる。

次に、本木簡の出土した堀河院をめぐる状況について述べる。堀河院は左京三条二坊九・十町に所在した邸宅であり、藤原基経、円融天皇、堀河天皇らが居住したことで知られる。十一世紀には藤原顕光、藤原頼宗（道長息）、その娘の後三条女御昭子らを経て関白藤原師実が入手し、長子師通、忠実、さらに師実養女の後三条娘・堀河天皇中宮篤子内親王と伝領したとされている（野口孝子）。

師実が堀河院を入手した時期、経路については詳らかでないが、承暦三年（1079）八月に師実が堀河院の上棟（『為房卿記』同月十九日条）及び十一月に安鎮法（「安鎮法日記」大日本仏教全書『阿婆縛抄』所収）を修しており、大規模な造営を行っていたことが判明する。翌年三月には新宅移徙儀礼を行い（『類聚雑要抄』巻二）、四月に白河天皇が行幸（『帥記』同月二十三日条、二十八日条など。なお承暦元年四月二十八日に白河が師実の堀河院に行幸したとする『台記』別記久安四年（1148）七月二十日条の記事は、承暦四年の誤記の可能性が高い）、五月から十一月までは白河の里内となっ

た(『水左記』同年五月十一日条、十一月三日条など)。その後は師実居住の記事が多く見られるが(『帥記』永保元年(1081)三月十九日条など)、永保二年八月から応徳元年(1084)正月までは再び白河の御所となる(『百鍊抄』永保二年八月三日条、『公卿補任』応徳元年藤原基忠条など)。さらに師実らが利用する記事も見られるものの(『後二条師通記』応徳元年四月十一日条など)、応徳三年十一月には堀河天皇が当院にて踐祚(『後二条師通記』同月二十六日条など)、嘉保元年(1094)十月の火災まで御所となる(『中右記』同月二十四日条など)。

その後、空白期を経て長治元年(1104)四月に中宮篤子の御所として中宮職権大進・備中守藤原仲実の功により再建され(『中右記』同月十一日条など)、同十二月には堀河が遷御し、嘉承二年七月にここで崩じた(『殿暦』長治元年十二月五日条、嘉承二年七月十九日条など)。その後も篤子が住み、永久元年(1113)七月には堀河の御在所・西対を御堂とするが(『殿暦』『長秋記』同月二十四日条)、翌二年十月に篤子が死去(『殿暦』『中右記』同月一日条)、引き続き女房らが居住するものの保安元年(1120)四月に焼失した(『中右記』同月十九日条)。

以上のように当院は、当初は撰閤家が所有し、後に勅定により忠実から篤子へ譲られる(『殿暦』長治元年四月十一日条)。また御所として使用される期間が長くあった点に注意が必要である。

さて、今回出土の二点の木簡は池の地業下で発見され、荘園名及び②には数詞が記されている。類例としては鳥羽離宮田中殿跡出土の「讚(岐)国五十」と記された木簡(鳥羽離宮跡第一三八次調査、『木簡研究』十五号、1993年)、同じく東殿跡出土の「鳥羽二丈一尺」「儂川二丈一尺」木簡(鳥羽離宮跡第五四次調査、『木簡研究』十五号、1993年)が挙げられる。少なくとも田中殿の例は造営工事に関わるものと推定されており、今回の木簡も堀河院の作事における荘園の賦課を示すものと推測することができよう。上述の承暦三年、長治元年などのほか、史料に残らない修造工事の可能性も存在するであろう。

このように推測するならば、この期間の堀河院の所有・居住者と各荘園の関係、所有・居住者が荘園を利用できたか否かを考える必要がある。堀河院が天皇御所であった期間を一旦除外し、この問題について考えてみたい。

堀河院は師実、師通、忠実、篤子と伝わるとされるが、この他に師実妻麗子は夫とともに新宅移徙儀礼を行ったと考えられるなど、師実と共同関係者として捉えておきたい。荘園は①方上は師実、師通、忠実、②「まがり」は儂子、麗子、忠実と伝わっている。この中、師通の堀河院所有については必ずしも明確ではないが、仮に関白氏長者であった時期とするならば(1094～1099)、堀河天皇御所であった期間及び火災後の空白期にあたる。また忠実は、師通死去後(1099)に譲られたとすれば同じく空白期にあたり、後には篤子領となるため、いずれも今回の考察からは除外できる。問題となるのは、承暦三年から応徳三年までの間の師実・麗子、長治元年及び嘉承二年以後の篤子である。

師実・麗子の場合、その期間の「まがり」御園は儂子領であり、所課はできないかと思われる。しかし当荘は、儂子から養女麗子への相伝時期こそ明瞭ではないものの、儂子は康平四年(1061)の夫藤原信家死後は尼となっており、他の実子もなく早々に麗子が相続者に定められていたと思わ

れる。また当時の摂関家の邸宅造営に際して、承德元年（1097）師通の九条亭造営に「高倉殿（頼通養女祐子内親王）御庄」、天仁二年（1109）忠実の高陽院造営に「家庄」とともに「四条宮（頼通娘寛子）庄」に所課を宛てる事例がある（義江彰夫）。このように直接の自領以外の荘園に所課を割り当てる例もあり、「まがり」御園が儼子領であった時期においても麗子らによって堀河院造営に動員された可能性は有り得ると考えられる。

篤子は自らの所領も持ち、かつ長治元年の堀河院再建時は中宮職官人であった受領の功によって造営されている。しかし、篤子は師実・麗子の養女であり、また忠実の後見を受けていることから、それ以後の工事に彼らの支援が無かったと断定することも難しいであろう。

これらの推定が正しければ、天皇御所の期間を除いた師実・麗子の造営・居住時期、あるいは篤子御所であった期間の造営に、両荘園への所課があった可能性は残ることになる。

以上、木簡そのものの用途や内容については考察に至らなかったものの、木簡の字体及び堀河院をめぐる状況についての憶測を連ねた。今回の木簡は、平安時代の名邸堀河院の造営の一端を物語る第一次史料である。また本木簡によって、従来は「鉤・鉤」「餉」として知られた摂関家領荘園の当初の表記が明確になった。さらに、忠実によって摂関家領が再編成される直前あるいは該当時期の、摂関家の荘園経営や伝領の具体相を知る上での貴重な同時代史料であることもまた間違いのない。今後のより多角的な視野からの研究の進展を願いつつ、小稿を閉じる。

参考文献

橋本義彦「藤氏長者と渡領」（『平安貴族社会の研究』吉川弘文館、1976年）

義江彰夫「摂関家領相続の研究序説」（『史学雑誌』七六一四、1967年）

川端新「摂関家領荘園群の形成と伝領」（『荘園制成立史の研究』思文閣出版、2000年）

野口孝子「平安貴族社会の邸宅伝領」（『古代文化』五七一六、2005年）

「堀河院」項（『平安時代史事典』角川書店、1994年）

付章 2 屋敷図からみた土井家京都邸の構成

藤川昌樹

はじめに

本編中でも触れられているとおり、発掘調査地点は江戸時代には譜代大名・土井家の京都邸であった。元和9年（1623）に土井利勝が屋敷地を拝領したとの記録があり、寛永期に描かれた木版刷の地図にも「土井大炊殿宿」と記されていることから、江戸時代初期には上洛中の宿所＝「宿」として屋敷が機能していたことが分かる。この屋敷は、西側が堀川通り、東側が油小路通り、南側が御池通り、北側が二条通りという、正方形街区を南北に二つ連続させた街区内部に立地する。そして、敷地の中心部分が各周辺街路から後退した位置にあり、ここから街路へは細長い路地状のアプローチ道路により接続されるという特徴的な屋敷地形態を有している。筆者はこのような形状の屋敷をこれまで「町奥型屋敷」と称し、幕府より拝領した大名屋敷に多い形態であり、そこでは庭園や茶室を配する風流な空間が実現されたとしてきた¹⁾。しかしながら、屋敷地内部の建築構成を示す絵図については、上層町人に譲り渡された後のものを見出すことが出来たものの、大名屋敷として利用されていた時点のものを発見することができず、内部の空間構成が特異な敷地形態に如何に対応していたのかを検討することができなかった。

しかし此度、古河歴史博物館における史料調査により、3枚の土井家京都邸の屋敷図が残されていることを確認した。うち2枚は、家老・鷹見家に伝来したもので、もう1枚は土井家菩提寺である正定寺に伝来したものである。いずれも江戸時代後期の土井家京都邸の内部構成に関して貴重な情報を提供してくれる。

詳細は以下で述べるが、前者の2枚は天保8年（1837）から同9年にかけての、古河藩主・土井利位^{としつら}の京都所司代在勤に際して作成されたものであり、もう1枚は慶応4年（1868）の古河藩主・土井利与^{としとも}の上京と密接な関連を持ちつつ調製されたものであることが判明した。そこでまず、両藩主の動向について述べておきたい。

土井利位は天保8年（1837）5月16日に前職の大坂城代から京都所司代に叙任され、6月11日には江戸で将軍・家慶に暇乞いをして刀・馬・黄金・時服・羽織を拝領、同16日には拝領した縮緬の羽織を着用して京都に向けて江戸を出発した³⁾。在職中は二条城北側に位置した所司代屋敷に居住したと思われるが、在任期間は1年に満たず、同9年3月26日に京都を出発して江戸に向かい、4月11日には新たに老中に命ぜられた。翌5月4日には引き継ぎのため再び暇乞いをして上京し、6月26日に京都より江戸に戻って、28日には将軍に拝謁したことが知られる。

一方、その30年後の慶応4年（1868）3月20日、土井利与は江戸を出立し、4月6日に京都邸に着いた。前年10月21日に朝廷より上洛を命ぜられており、この時は家老・小杉監物が名代として京都に向かったが、その後の政治情勢の変化により小杉監物が決断して利与の上洛を促したという。閏4月9日には明治天皇に拝謁、10日に勤王誓約をして本領を安堵され、5月24日には京都を発って大坂に向かった⁵⁾。

以下では、『古河市史』⁶⁾に収められた文献史料や近世後期の家老・鷹見十郎左衛門忠常が残した『鷹見泉石日記』⁷⁾(以下、『日記』)、藩士の家譜⁸⁾、さらに明治4年(1871)に作成された敷地図⁹⁾を参考に、3枚の図の性格を検討すると共に、図に描かれた情報から読み取れる京都邸の構成上の特徴について述べていくこととしたい。最初に敷地についての基本的な情報を確認するところから始めることとする。

1. 敷地の沿革と規模・構成

敷地の沿革

この敷地の沿革については、次のような史料が残されている。

(元和)九年癸亥十一歳

台徳君

大納言殿 君 御上洛、利勝供奉、此度

大納言殿任征夷大將軍、

此時於二条油小路堀川賜邸、使山中泉齋、白崎作左衛門受之、於板倉周防守宗重三月營家作、此処人王七十三代堀川院嘉承二年營離宮之地也、其後歷四百餘年、豊臣秀吉在於聚樂城之日柘植大炊、稻葉右近、成田左衛門、山中山城、為居宅

比時合賜其地 七十九坪、賜江州大津之別業亦在於比時

敷地の由来など興味深いが、ここでは元和9年(1623)の徳川秀忠・家光の上洛に利勝が供奉し、その際にこの邸地を拝領したこと、当時の京都所司代・板倉宗重が作事を行ったとされていることを確認しておきたい。なお、既に利勝は堀川通り沿いに別の屋敷を持っていたことが知られ、「涼源院記」元和8年(1622)3月6日条に、「堀川下立売ノ橋より二町下土井大炊殿ヨリ火出」とある。この屋敷については他の情報を見いだせず詳細は不明であるが、同じ堀川通り沿いではあるものの、下立売通りより2町下(南)＝丸太町通り付近に位置したものとみられる。元和9年に拝領した屋敷よりは4町は北に位置していたことになるので、全く別の屋敷だったと解すべきであろう。おそらくはこの火災が契機となり、翌年に二条油小路の屋敷を下賜されたものと推測される。

敷地の構成

敷地は、先に述べたように堀川通りと油小路通りに挟まれた街区の中央に位置していた。寛永20年(1643)頃の京都を描く『寛永後万治前洛中絵図』には、堀川通りに1個所、油小路通りに3個所の細長い路地状のアプローチを持つように描かれている。絵図上の「土井大炊頭」という付箋は、堀川通り側を下にしており、堀川通り側に表門があるように貼り付けられている。本論で取り上げる江戸時代の3枚の絵図でも表門は堀川通り側に描かれているし、明治期の絵図も同様であるので、江戸時代を通じて屋敷の正面は堀川通り側にあったとみてよいだろう。

しかし、『日記』において屋敷の場所を「油小路」と呼称しているし、「慶応四年御上京一件」も「油小路屋敷」とする一方、「(京都ほり川御屋敷指図)」では「ほり川御屋敷」と呼んでいるように、

土井家でも認識に混乱があったようである。また、京都町奉行が作成した『京都御役所向大概覚書』にも、

一、油小路通御池上ル町 下総古河 土井大炊頭

表油小路通町屋裏にて五拾八間程、油小路之方江式間程通有、裏行三拾八間程、裏は堀川町屋裏二而四拾間程、

但、町屋裏三間通り故大炊頭借地之由、堀川之方四間程之通有

とあって、油小路通りが表側、堀川通り側が裏側であるかのように記している。

このような混乱が生じたのはおそらく、正式には堀川側が正面であるものの、普段は通用口（裏門）のある油小路通り側が実際上の入口として機能していたからとみられる。

このような状況は、たとえば「慶応四年御上京一件」に、

一、左之通御届書式通、於京都表弁事御役所江、去ル八日被差出候旨、同十一日同所留守居中より申越、

弁事御役所江、

御当地大炊頭屋敷、堀川通御池上ル表門往来仕候処、同人発足後メ切、油小御池上ル裏門を都而之通用口ニ仕候、此段御届申上候、以上、

土井大炊頭家来

白崎久太夫

とあることから確認できる（下線筆者）。慶応4年（1868）の状況を断片的に示すものではあるものの、藩主・利与が滞在している間だけは堀川通りの表門を使用していたが、出立後は同門を締め切って、油小路通りを通用口としていたことが分かるのである。藩主滞在時以外には、油小路通り側があたかも表であるかのように認識されたのであろう。

なお、明治4年の絵図では堀川通りには表門へ至る路地に加えてもう1本の路地があって計2本の路地が通じている。また、油小路通り側にも計4本の路地が開かれている。路地をあわせて6本になり『寛永後万治前洛中絵図』よりも2本多いことになる。江戸時代の3枚の絵図にも計5本または6本の路地が描かれている。

敷地の規模

路地の本数には変化があったようだが、敷地全体の規模についてはほとんど変化がなかったものとみられる。『寛永後万治前洛中絵図』の下図である『洛中絵図』には、敷地中央部分の東西寸法が38間2尺、南北寸法は57間半と記されており、計算上約2,203坪となる。また前掲の『京都御役所向大概覚書』では、南北約58間、東西約38間としており、これを掛け合わせると2,204坪となる。また、「(京都ほり川御屋敷指図)」には、

京ほり川御屋敷ノ坪数

東西三十八間半南北五十七間

此坪数式千百九十四坪半、是は四方二仕候へは四十四間壹尺四方

右之外

- 一、西ノ御もんど三間二十二間
- 一、同北二有之ほそ道壺間二十二間
- 一、東御もんど三間二十間
- 一、同北二有之ほそ道四尺二十間
- 一、同北ノはしノ道三間二十間
- 一、同南ノはしノ道壺間五尺二十間

と敷地規模が記されており、中央部分の面積は2,194.5坪とある。さらに、明治4年の図では北東部に張り出しがあるように描かれているが、惣坪数は2,279.9坪とあり、全体としておおむね2,200坪程度であって、敷地規模の変化はほとんどなかったと考えられる。

以上のように、敷地全体の構成は江戸時代を通じて変わらなかったため、この点から絵図年代の前後判断を行うことはできない。そこで一枚ずつ内容を確認しながら絵図を見ていくことにしたい。

2. 天保期の京都邸とその建築構成

「(土井家中京都屋敷略図)」の描く京都邸

まず、取り上げるのは、「(土井家中京都屋敷略図)」(以下、天保図A。図33・34、写真14)である。本図には年紀はないが、図中および付箋に書き込まれた家臣名から図の年代を推測することができる。

図中には、敷地の南よりに3棟の建物が描かれている。このうち東の建物①に1名、②に5名、③に8名、さらに敷地外に張り込まれた付箋に1名の家臣名が書き込まれている(表4)。このうち近藤角左衛門明儔・川崎遊右衛門茂淵・服部之保民・斎藤三左衛門貞外・時田肇国富の5名は、土井家中の家譜を集成した『古河藩系譜略』に登場するので、彼らがどのような人物であったかを知ることができる。

注目されるのは、表中に示したように、何れもが天保8年(1837)から9年にかけて京都に滞在していたことである。冒頭で述べたように藩主・土井利位は、天保8年5月16日より翌9年4月11日まで京都所司代の職にあり、上記5名を含む多数の家臣達が利位に付き従って京都に滞在していた。したがって、利位の所司代在職時の使用状況をこの絵図は示していることになる。

なお、家老・鷹見忠常自身は所司代役宅に付属して設けられていた堀川屋敷に滞在していたようである。家臣全体の滞在時の部屋割り(「宿割」)は、所司代叙任に先立つ4月20日に既に行われていたとみられる。

東側の建物 次いで1棟ずつその建築的な特徴を見ていくことにしよう。まず東側に建つ①の建物は、元来京都留守居配下の武士の住居兼オフィスとして使用された建物とみられる。この建物の北側の3室に「吉田貞五郎住居」と、また2室にわたって「此辺吉田貞五郎勝手」と墨書されており、この吉田貞五郎が当時の京都留守居・白崎久太夫の下で実務に従事した者とみられるからである。

吉田貞五郎の名は『日記』天保9年8月5日条をはじめとして、「貞五郎」「貞五郎吉田」「吉田

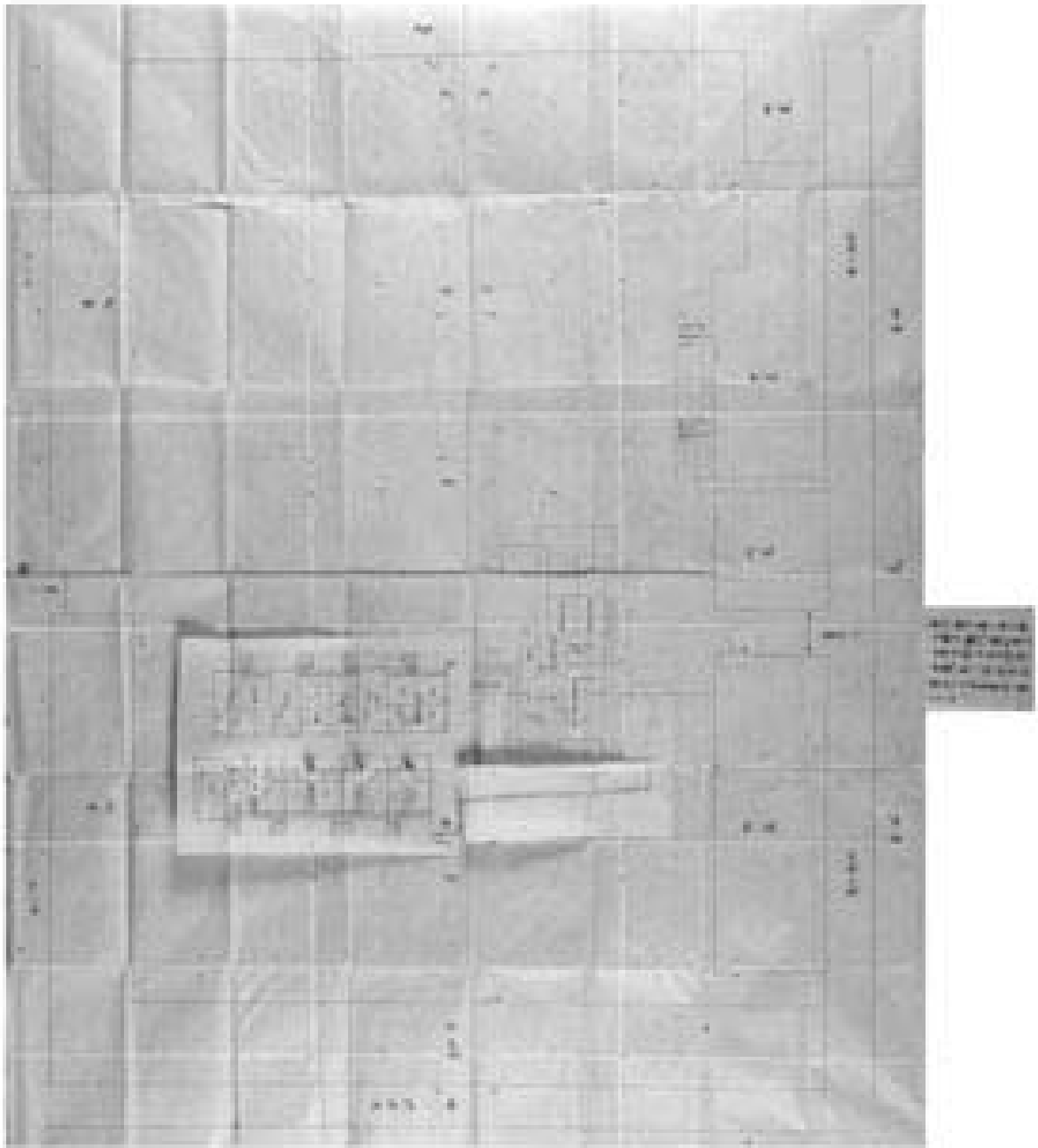


写真 14 「(土井家中京都屋敷略図)」(天保7～8年成立)

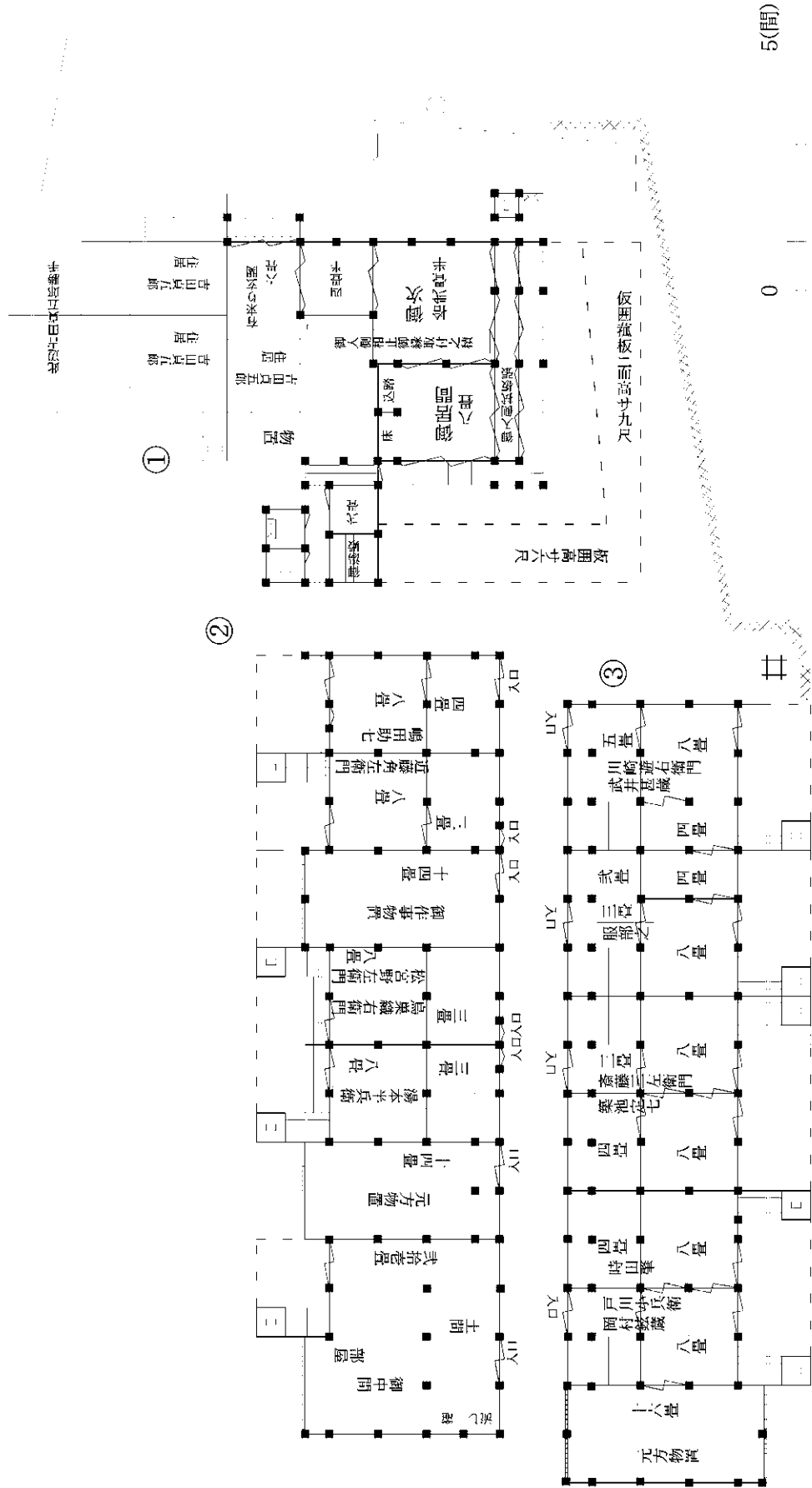


図 34 「(土井家中京都屋敷略図)」読み取り図 (部分)

貞五郎」「油小路貞五郎」という名称で度々登場する。同人が何者であるかを直接示す史料は見い
だせなかったが、若干時期の遡る「寛政分限帳」には京都詰め徒仕格の武士として吉田茂左衛門・
吉田重十郎の2名の名前が記されているから、2名の縁続きの者とみて良いだろう。

建物の中心部には同じく墨で「有来り玄関六畳」とも書き込まれているので、玄関北側の吉田貞
五郎の住居や勝手であったスペース、その西側の物置、その他北端の部屋々々が以前から存在して
いたことは確実である。そして、玄関・式台が東向きであるので、この建物は油小路側の門からの
アプローチを想定したものであったものと考えられる。

一方、建物の南側には朱線で、「床」と「蹴込」(床)の付された「御居間八畳」、「御次拾式畳半」、
「御入側拭板張」、「四畳半」、玄関前の式台、さらに「御湯殿」「式畳」と雪隠が描かれている。式台・
玄関から床付きの座敷、湯殿・雪隠に至る書院造りの一連の空間が揃っていることになるが、ここ
には「御入側相止御縁取付之積」との付箋が貼られているから、朱線部は計画案が描かれていると
みて良いだろう。また、この座敷の南側には貼り紙で、「仮囲菰板にて高サ九尺」「板囲高サ六尺」
と二重の塀が設けられ、その外側には矢来かと思われる表現でさらにもう一重の囲いも施されてい
る。都合三重の囲いで邸内の他の空間から隔離するように計画されていると判断される。

この計画が何を想定したものか、詳しくは『日記』からも不詳だが、三重にわたる囲いで「御居間」
との名称の部屋を隔離しようとしていることから考えると、利位自身または利位の家族が滞在する
ことを想定して計画されたとみるのが自然のように思われる。『日記』天保8年10月7日条には、
「一、昨日御子様方油小路にて御昼相済、神泉苑・壬生寺御出」とあり、藩主に付き従って滞京し

表4 「(土井家中京都屋敷略図)」に見える家臣名

記載 ヶ所	家臣名	『古河藩系譜略』の記載			
		有無	名	石高等	天保8/9年の動向
①	吉田貞五郎	—			
	湯本半兵衛	—			
	鳥巢織右衛門	—			
②	松宮野左衛門	—			
	近藤角左衛門	○	明儔	95石	天保8年5月23日上京先用物頭代として京都へ移動。 火消方取次を兼帯。同9年4月16日江戸へ引越。
	嶋田助七	—			
③	川崎遊右衛門	○	茂渚	10石5人扶持	天保8年4月28日京都先用として移動のため衣料一 両を拝領。同9年4月16日江戸へ移動。
	武井甚蔵	—			
	服部之	○	保民	140石	天保8年5月16日調役として京都へ移動。同9年4月 16日江戸へ移動。
	齋藤三左衛門	○	貞外	115石+35石(足高)	天保8年5月23日御所使書翰兼京都先用として京都 へ移動。同9年4月16日江戸へ移動。
	築池定七	—			
	時田肇	○	国富	15人扶持	天保8年5月23日京都先用・火消として京都へ移動。 同9年5月15日江戸へ移動。
	戸川小兵衛	—			
	岡村鉉蔵	—			
他	河井十右衛門	—			

た子供らはこの屋敷を訪れて一時を過ごしたことが知られる。おそらくこの「御居間」を使用して昼食を取ったのであろう。

2棟の長屋 一方、上記の建物の西に位置する二棟の長屋は、何れも一枚の貼り紙上に描かれている。北側の長屋(②)は梁間4間で桁行16間の規模を持つ。桁行方向に2間ごとに壁が入って6つの部屋群が東から並び、西端に土間のある桁行4間の大きな部屋が配されている。建物の北側には縁づたいに雪隠4ヶ所も設置されている。縁の付された4つの部屋群(八畳と三畳または四畳組み合わせ)に表4に示した5名の武士の氏名が付箋で記入されており、それ以外の部分には東から「御作事物置」「元方物置」「御中間部屋」と直接貼り紙に朱で書き込まれている。

南側の長屋(③)も梁間4間・桁行16間の規模であり、東から桁行3間ごとに壁が入る部屋群が2つと、2間ごとに壁が入る部屋群5つから構成されている。ただし、2間ごとに壁が入っている部分では、実際には間口4間分で一つの住居として使用されており、全体として入口は4ヶ所のみ設けられている。西端の部屋には朱で「元方物置」と記入されているが、それ以外の部分には表4に示した8名の武士の名が付箋に記入されている。建物の南側には計5ヶ所の雪隠が同様に縁づたいに設けられている。

先にも述べたように2棟の長屋は一枚の貼り紙に描かれているが、これらの建物が新設されたものか、あるいは既存の建物だったかはにはわかには判断できない。しかし、藩士や中間の滞在空間と、作事方・元方といった役所の物置がそれぞれの建物の中で混在し、元方の物置のように2ヶ所に分散している部分もあることから考えると、絵図の作成時点で新たに設計された建物ではないと考えられる。既存の建物を再利用しようとしたか、あるいは既存の長屋をどこからか運んできて新たにこの屋敷地内に建設しようとしたものとみられる。

以上の分析から、この天保図Aは利位が京都所司代として着任して間もない時期か、その直前に屋敷の急座の使用法や新築計画を検討するために作成されたものと見て良いものと思われる。

「(京都ほり川御屋敷指図)」の描く京都邸

上にみた天保図Aが利位の所司代着任前後に作成された絵図だとすると、「(京都ほり川御屋敷指図)」(以下、天保図B。図35、写真15)は一見その内容の理解が難しく思われる。同図には、「天保八西十一月」と明記されているので、利位が京都に滞在している間に描かれたことは確かだが、天保図Aとは全く異なる建築群が描かれているからである。

同図には、多数の建築物が描かれている。また、ほとんどは脱落しているが付箋も残されており、各室の広さや建築についての仕様も記入されている。一方で、家臣の名前や部屋名は見えない。

建物は、敷地中央やや左の式台と思われる突出部と、そこから北側に連なりL字状に東に折れる書院座敷、その東側に広がる台所廻りとみられる建物群、南側の長屋群、敷地西端に南北に延びる長屋、敷地北西部のコ字型の厩かとみられる建物、役所と推定される北東部の建物群からなる。式台が西向きに設けられているので、堀川通りに接して設けられた表門から至るように設計されていると理解できるだろう。この点で、天保図Aとは全く異なる配置構成を持つことになる。

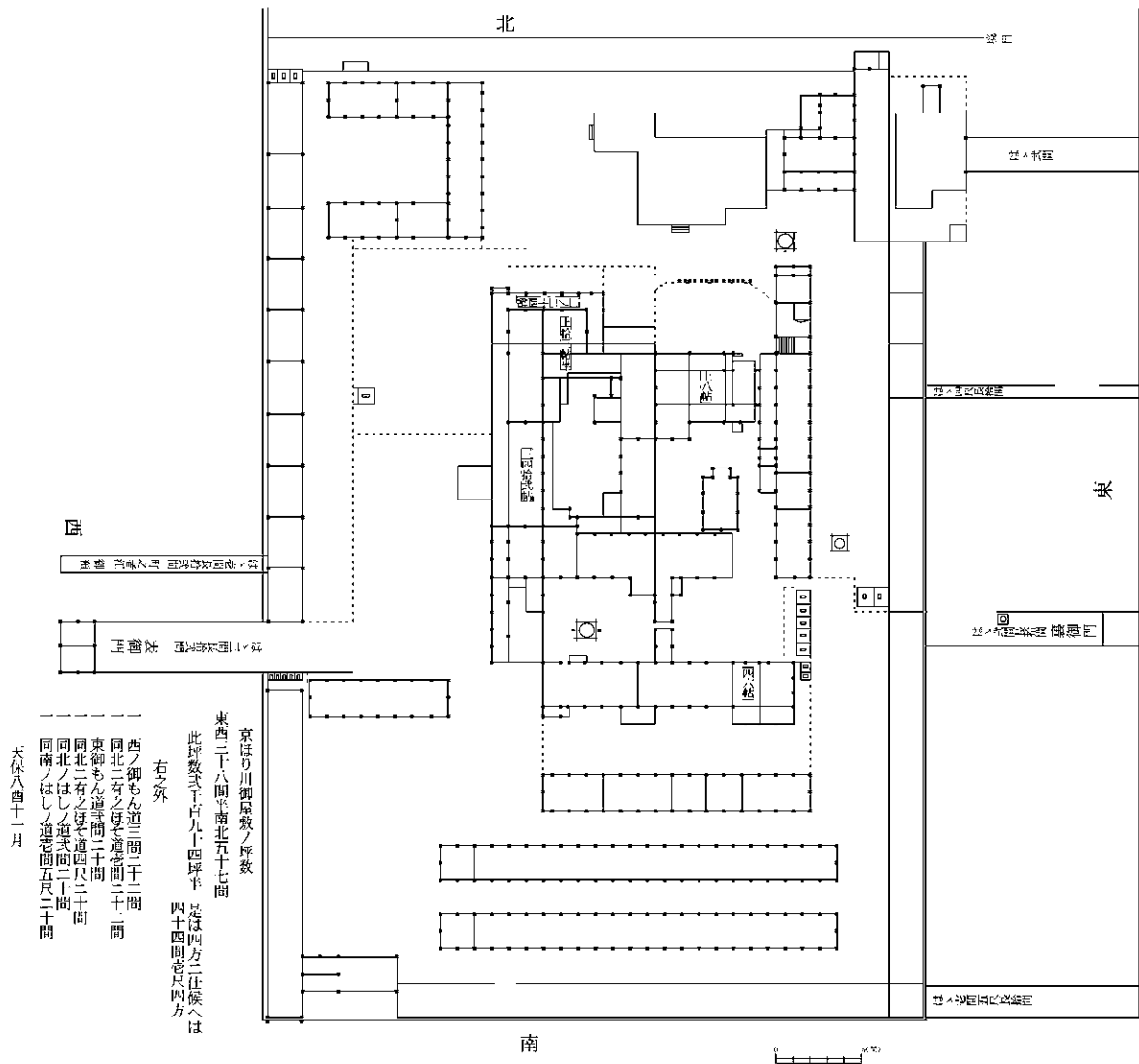


図 35 「(京都ほり川御屋敷指図)」読み取り図

表5 「(油小路屋敷図)」に見える家臣名及び部屋名・収納品等

建物名		家臣名及び部屋名・収納物品等*
① 一		「公用方役所」
		三畳敷
		座敷
② 一		石上八郎
		会計所
		槍山初太郎
③ 御門番所		仮御殿廻り板塀併諸色入
④ 新建御長屋		「当分御貸被下成嶋嘉奈衛」
⑤ 仮建沓番御長屋	沓番	吉田順三
	式番	一
	三番	山本小三郎
	四番	藪田喜七郎
	五番	野村敬三郎
	六番	田辺多兵衛
	七番	橋本仙太郎
	八番	中間部屋
⑥ 仮建式番御長屋	沓番	仮御殿 畳建具類
	式番	同 屋根廻り 御玄関諸色
	三番	同 抱御廐諸色 四分板類
	四番	御長屋 畳・障子
	五番	釜類・土瓶其外渡物品々
	六番	御廐踏板 御雪隠
⑦ 仮建三番御長屋	沓番	風呂場諸色 道筋渡り板
	式番	古板
	三番	明御長屋
⑧ 仮建四番御長屋	沓番	会計所物入
	式番	同断
	三番	同断
	四番	寺岡梅之助
	五番	宇野礼次
	六番	元御台所焚出場

* 「 」内は貼り紙

したものも存在したようだが、仕様を記した他の付箋には何れも「雑木」を用いるように指示しているので、全体を恒久的な施設にしようとはせず、簡素で経済的な建物の建設を目指していると理解することができる。

しかし、残念ながら『日記』には、この差図についての記述はもとより、京都邸における新たな建設についての記事もみられない。利位の所司代在任期間が短く終わったことを考慮すると、天保図Bの建築は計画案にとどまり、実現には至らなかったと可能性もあるとみられる。今後、関連の史料が発見されることが期待される場所である。

3. 幕末期の京都邸とその建築構成

「(油小路屋敷図)」の年代

ここにみえる邸宅は、所司代の役宅と比べれば大規模とは言えないものの、本格的な大名屋敷の構成であり、天保図Aが留守居配下の武士の執務兼住居に増築を加えたものと2棟の長屋だけからなる簡略なものであるのと対照的である。

この図は脱落した付箋の内容から次のようにその性格の推測が可能である。たとえば付箋の1枚には、「是ハ以来やふり可申候間、そさう二可然候、式間ハリ二けた、むね・はり・柱・何もざう木、土間四間しきり北ノ方向もかへ、南むき」と書かれている。したがって、現状の建物を表現した図ではなく、新たな建築を造るにあたっての指示を行うためのものと理解できるであろう。しかも、この付箋が貼られていた建物については、取り壊し（「やふり」）を前提としていたことが分かる。別の1枚には、「是ハ後迄指置可申候」とあるから中には以後も使い続けることを想定



写真 15 「(京都ほり川御屋敷指図)」

一方、「(油小路屋敷図)」(以下、幕末図。図 36、写真 16) は幕末段階の京都邸を描いているものとみられる。本図にも年紀は記されていないが、年代は次のように推定することが可能である。

図中に書き込まれた家臣名等をまとめたものが表 5 である。このうち、④新建御長屋には、「当分御貸被下成嶋嘉奈衛」との貼り紙が施されている。成嶋嘉奈衛とは幕末期に京都留守居を勤めた人物であり、②の建物に名称のみえる石上八郎は、この成嶋嘉奈衛のもとで「留守居下役」を勤めた。両名とも慶応 4 年 (1868) 段階でそれぞれの役に着いていることが確認される。両名が何時これらの役に任命されたかは定かではないが、安政 6 年 (1859) から文久 3 年 (1863) 頃の状況を記す「古河分限帳」には、京都屋敷の関係者として、

- 京都屋敷守
- 一、高百石 白崎久太夫
 - 手付
 - 一、三石式人扶持 寺岡惣次郎
 - 同所油の小路右同断
 - 一、同 吉田定次郎

と記されており、成嶋嘉奈衛・石上八郎の何れの名前も見あたらない。したがって、本図が、同分限帳の上限である安政 6 年以降に作成された幕末の絵図であることは確実であろう。

なお、成嶋嘉奈衛は「明治三年諸課役員士族等名面」では東京の「大属」身分で現米 26 石を給されている。同史料には京都詰め of 武士の名が見あたらないので、明治 3 年 (1870) には既に屋敷は閉鎖されていたものと思われる。

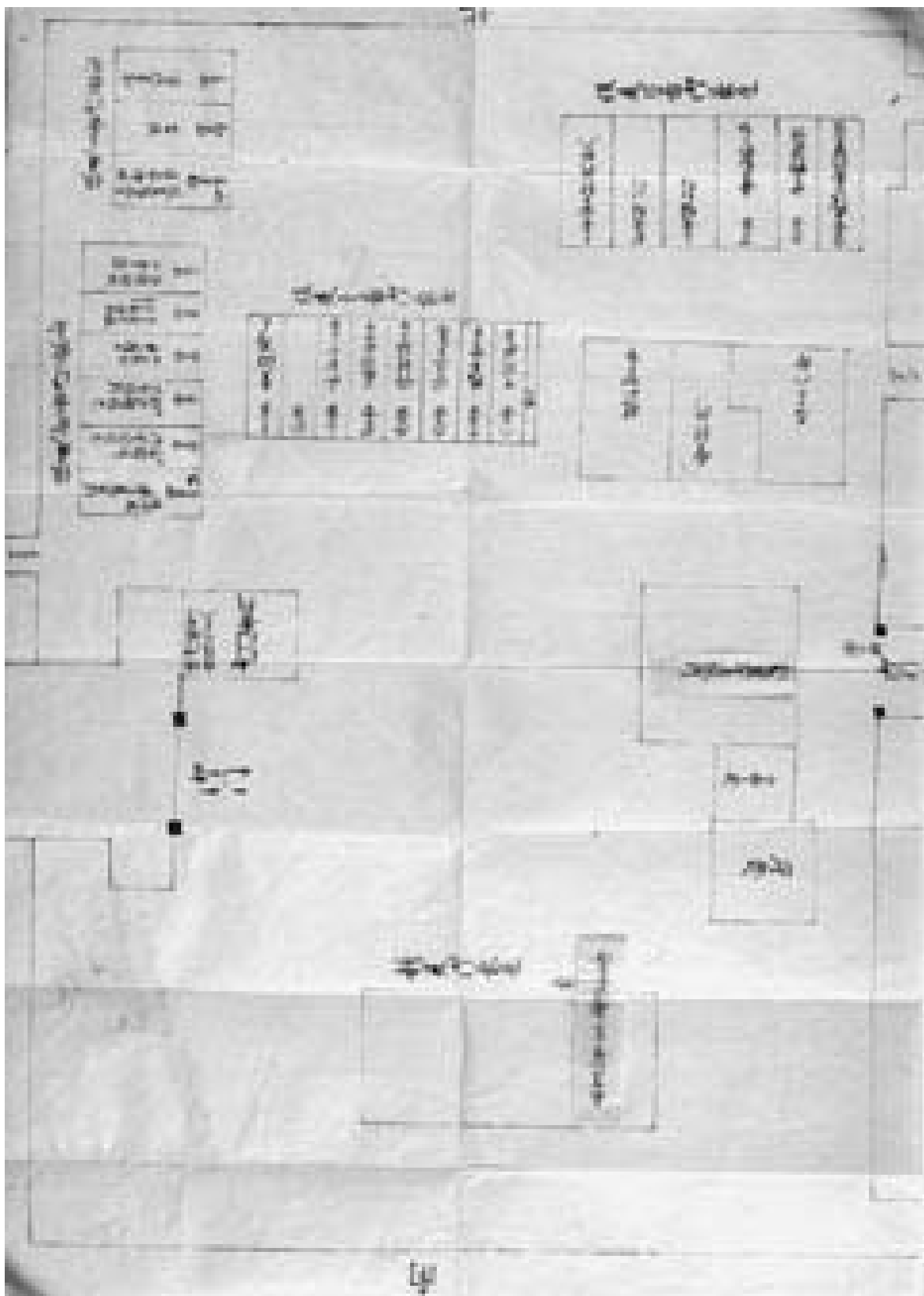


写真 16 「(油小路屋敷図)」 (幕末期成立)

北

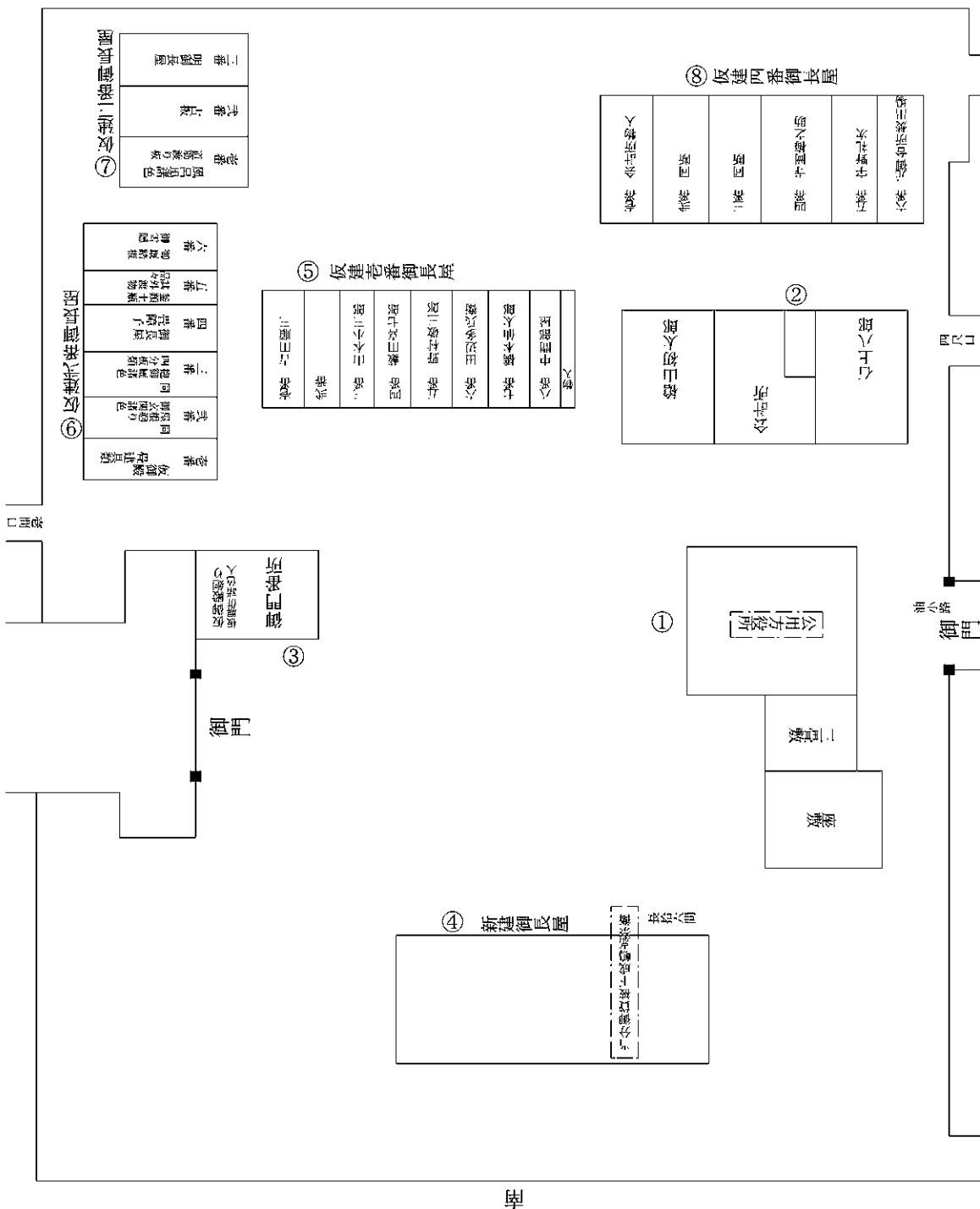


図 36 「(油小路屋敷図)」 読み取り図

表6 「御下り之節御行列張」に見える家臣名

役	名称
足輕小頭	丸山竹三郎
〃	井上治助
才領足輕	谷口駒之助
徒	島田善司
〃	浦尚次郎
〃	井上万司
〃	市川悦弥
〃	石田壯次郎
〃	西川常次郎
供目付	山崎伝助
部屋目付	野田甚七
大小姓	金田豊作
近習番	日暮安太郎
刀番・小納戸・近習番	井伊弥門
〃	不破求吾
近習番	鈴木竹之介
〃	芹沢啓次郎
〃	鷹見達三郎
〃	河井欣弥
坊主	牧野亀齋／村瀬堅齋
馬役	上岐驥
押足輕	石田倉吉
〃	青木謙司
目付	来次鑑次郎
同若党	山本（滝の助）
徒目付	得能岩之助
小納戸	千賀十右衛門
〃	菊地為之助
〃	各務直記
近習番	中村錠之助
〃	上村豊左衛門
〃	高橋重蔵
医師	片沢玄長
〃	中沢春齋
用人	鈴木登門
同若党	山口房司
用人	鷹見半左衛門
同若党	野沢銀次郎
〃	成田常吉
口付	河島次
同若党	竹川留三郎
目付	近藤榮記
同若党	石田堅之助
徒口付	石田類右衛門
祐筆	林善太夫／野村樺郎
大納戸・小納戸才領	植村庄吉
家老	(小杉) 監物
同若党	筒井鈔司
御次物書	真野有斗
〃	武井豊三郎
押	皆川湊之助

／は、前後のどちらかが選ばれたことを示す。

() 内は筆者が補ったもの。

幕末期の建築構成

幕末図には、二つの門と8棟の建物が描かれている。これらは、新たに建てられた建築(④)、新たに建てられた四棟の「仮建」の長屋(⑤～⑧)、以前から建っていたと想定されるもの(二つの門、①、②、③御門番所)に大別される。ただし、門を除くと柱の表現はなされていない。むしろ多数の建築の室ごとの用途を示すために作成された図としての性格が強いものと考えられる。以上を前提に各建物をみていこう。

まず、二つの門はいずれも門柱の親柱のみが表現されている。また、天保図A・B共に堀川通り・油小路通りの近くに門が建てられていたのに対し、表門は周辺町屋敷の最奥端部からさらに引いた位置に、裏門(「油小路御門」)は周辺町屋敷の最奥端と同じ位置に、それぞれ建てられている。門の形式は、門柱が親柱のみであるから冠木門が想定しやすいことになるが、たしかに明治4年(1871)に作成された「旧土井従五位拝領邸地」の図を見ると、表門・裏門とも冠木門の立面が図上に描かれている。また、同図でも門の位置は同様に表通りから周辺の町家よりもセットバックしたところになっている。

新築の建築④には「新建御長屋」「長拾六間」と墨書されている。先にも述べたように、ここが当時の京都留守居の住居として用いられたものと考えられる。

新たに「仮建」された4棟の建物のうち、⑤と⑧の一部には家臣の名称が書き込まれ、彼らの住居として用いられたものと推測される。一方で⑥と⑦には、建具・畳や床板をはじめとする「仮御殿」の建築関係の各種物品の名称が記され、⑧の一部は「会計所物入」と書きこまれており、いずれも収納に用いられたものと考えられる。なお、「仮御殿」なる名称の建物は、本図の中には見いだせない。

既存の建物のうち①は、天保図Aにおいて留守居配下の武士の住居兼オフィスが建てられていた場所の近くに位置している。ここには「公用方役所」との付箋、「三畳敷」「座敷」との記入がある。だが、「三畳敷」の部屋が正方形に描かれており、図の精度に疑問も残る。これが4畳半の規模だとすると座敷は8畳程度の規模になるだろうが、入側や縁側が取り付くほどの規模はなく不自然に感じられる。あるいは天保図Aの住居兼オフィスの建物がそのまま残されていたのかもしれないが、図からだけでは判断できない。

②には中央に「会計所」と記され、その両側に石上八郎、槍山初太郎の二名の名称が書き込まれている。③の門番所にも、「仮御殿廻り板塀諸色入」とあり物品の収納として利用がされていた。

絵図作成の背景

さて、それではこの図に描かれた屋敷の姿はどのような状態を示すのであろうか。

冒頭でも述べたように慶応4年（1868）の土井利与の上京の際に、油小路邸は藩主の宿所となった。しかし、上に見たように、本図に描かれているのは長屋がほとんどで、若干規模的に大きい①の建物も8畳程度の「座敷」があるのみで式台や玄関などが設えられておらず、藩主の居所として使用されるには簡略に過ぎると考えられる。

また、長屋に名前の記されている家臣達も、利与に供奉した家臣達とは異なっていたものとみられる。表6は、利与に従って京都から大坂に下向した家臣達の一覧であるが、本図の長屋の家臣達とは一名も重ならない。

したがって、本図は幕末の状況を示しているとはいえ、利与が滞在した時点のものとは考えにくい。滞在の直前または直後のどちらかの様子が描かれているとみるべきであろう。あえて、そのどちらかを推測するならば、滞在直後ではないかと思われる。長屋や門番所にみえる「仮御殿」関連の物品は、利与が滞在したはずの仮御殿を取り壊した後に収納したものではないだろうか。敷地中央部の空白部分は仮御殿が建てられていた部分に当たるのではないかと推測することも可能であろう。

おわりに

以上、限られた史料から推測を重ねる結果となったが、近世中・後期の京都藩邸の状況を理解するためのいくつかの手がかりは得られたように思う。

土井利勝が江戸時代初めに本邸を拝領した時点では、頻繁に実施される将軍の上洛に利勝自身が付き従っていたため、屋敷もしばしば使用されていたに違いない。上洛の滞在期間は1ヶ月から3ヶ月に及ぶ長いものだったから、この時点では利勝の滞在に必要な多くの建築が建てられていたであろう。したがって、この時点での京都邸は、庭園や茶室を伴った風雅な屋敷であった可能性もあったものと考えられる。

しかし、寛永11年（1634）の家光の上洛を最後に、その後将軍の上洛は幕末まで行われなかったため、若干の京都詰めの武士の執務・居住のための施設のみあれば事足りたと考えられる。天保

図Aにみえる裏門正面に建つ建物は、そのような建物であったと考えられる。²⁸⁾

ただし、譜代大名の土井家では以後、利位以外にも、^{としさと}利里（明和6年（1769）8月18日～安永6年（1777）8月14日）、^{としあつ}利厚（享和元年（1801）7月11日～同2年10月19日）が（）内の期間に京都所司代に任ぜられている。役宅が二条城の北側に用意されていたとはいえ、彼らの在任期間中にも天保図Aに示されるような簡略な増築は行われた可能性が高いし、利位の場合は実現しなかったのではないかと推測されるが、天保図Bのような本格的な邸宅が構えられた可能性もあると考えられる。ただし、天保図Aに示された既存の建物が簡略であったことを考えると、所司代の在任期間が終われば御殿の建物は遠からぬうちに撤去されたのではないかと推測される。

また、幕末には、京都が再び政治の表舞台となり、藩によっては改めて京都邸を拡充するに至っている。²⁹⁾古河藩の場合は、屋敷地の拡大までには至らなかったが、それでも長屋を増築し、また仮御殿も建てられたと推測されることは先に述べたとおりである。

本稿で検討したような京都邸の姿は、江戸の大名屋敷や大坂の蔵屋敷のあり方とは相当異なるものである。この点に留意しながら発掘調査結果を解釈すべきであろう。

謝辞

古河歴史博物館での絵図調査に際しては、同館学芸員の永用俊彦氏に種々御配慮頂くと共に、関連史料について御教示いただいた。また、絵図の浄書にあたっては筑波大学・中川文子氏の助力を得た。記して感謝の意を表したい。

付記

本稿の作成にあたっては、平成18-20年度日本学術振興会科学研究費・萌芽研究「積層パターンに着目した都市居住環境史の再構築」（研究代表者・藤川昌樹、課題番号：18656180）の助成を得た。

註

- 1) 「都記」（大塚隆編『慶長昭和京都地図集成』柏書房、1994年、所収）。
- 2) 拙著『近世武家集団と都市・建築』（中央公論美術出版、2002年）。
- 3) 『鷹見泉石日記』同日条。
- 4) 京都所司代屋敷については、大上直樹・高橋みずほ・谷直樹「中井家絵図より見た京都所司代の上屋敷、中屋敷、下屋敷の建築について」（『大阪市立大学生活科学部紀要』第49巻、2001年）を参照。
- 5) 『古河市史』（通史編、p.515-518、1988年）。
- 6) 『古河市史』（資料・近世〔藩政〕、1979年）。
- 7) 古河歴史博物館編『鷹見泉石日記』（第1～8巻、吉川弘文館、2001-2004年）。寛政9年（1796）から安政4年（1857）に断続的に残された古河藩家老・鷹見十郎左衛門忠常の日記である。利位の京都所司代在職期間は、第3・4巻に収録されている。
- 8) 『古河藩系譜略』（古河歴史博物館編・発行・所蔵、1998年）。原史料も同館蔵。同書の改題による

と、この史料は天保11年（1840）6月11日に当時の藩主・利位が藩士の親類書改を命じて作成させた「親類書」をもとに成立したものであり、同年9月時点までの系譜が収められている。

- 9) 「旧土井従五位拝領邸地」（京都府立総合資料館蔵「中井家文書」250）。
- 10) 「土井利勝年譜」（東京大学史料編纂所蔵、2044-236）。なお、前掲拙著を参照。
- 11) 『大日本史料』同日条。
- 12) 例えば『日記』天保8年8月26日条には、この屋敷に居住していた後述の近藤角左衛門が「油小路角左衛門」と称されている。
- 13) 「慶応四年御上京一件」（前掲『古河市史』資料・近世（藩政）、p.789）。
- 14) 「京都大名屋敷・拝領地并買得屋敷之事」（『京都御役所向大概覚書』1-51）。
- 15) 前掲「慶応四年御上京一件」（p.800）。
- 16) 宮内庁書陵部編『洛中絵図』（吉川弘文館、1969年）。
- 17) 「裏は堀川町屋裏二而四拾間程」とある部分の意味は不明である。
- 18) 「（土井家中京都屋敷略図）」（鷹見家歴史資料 H518）、118 cm×148 cm、書絵図。
- 19) 『日記』天保9年6月26日条に「自分長屋、堀川二相替候事」とある。
- 20) 『日記』天保9年4月20日条に「一、京御長屋割」とある。
- 21) 床框を省略した簡略な床の間。
- 22) 「（京都ほり川御屋敷指図）」（鷹見家歴史資料 H39）、料紙が剥離しているため法量不明、書絵図。
- 23) 「（油小路屋敷図）」（正定寺文書 599）、28 cm×38 cm、書絵図。
- 24) 前掲「慶応四年御上京一件」（p.741）。
- 25) 「古河分限帳」（前掲『古河市史』資料近世編（藩政）、p.741）。
- 26) 同上、p.232。
- 27) 「御下り之節御行列張」（前掲「慶応四年御上京一件」所収）。
- 28) ただし、西国の大名の場合は、参勤交代の際に京都に立ち寄ることがあったので、近世中・後期にも藩主の滞在が可能な屋敷が維持された。そのようなものとして萩藩毛利家の京都屋敷がある。拙稿「近世中期における萩藩京都邸の構成とその機能」（久留島典子編『大規模武家文書群による中・近世史料学の統合的研究：萩藩家老益田家文書を素材に』、科研費報告書、p.166-179、2008年）を参照。
- 29) 鎌田道隆『近世京都の都市と民衆』（思文閣出版、2000年）。

付章3 動物遺存体について

丸山真史・松井 章

1. 概要

今回、報告する動物遺存体は、11世紀から19世紀の遺構あるいは遺物包含層から出土したものであり、その大部分は18、19世紀の遺構から出土している（表7・10）。当調査区は、17世紀から19世紀には、土井家の屋敷地に相当する。出土した動物遺存体は、破片点数にして総数652点を数え、そのうち種類、部位を同定したのは612点にのぼる。その内訳は、貝類が最多で297点、哺乳類が176点、魚類が67点、鳥類が65点、両生類が4点、爬虫類が3点と続く（図37）。土坑1200から出土した動物遺存体は、遺構の埋土を部分的に水洗篩別して採集したものであり、それ以外は発掘中に採集したものである。

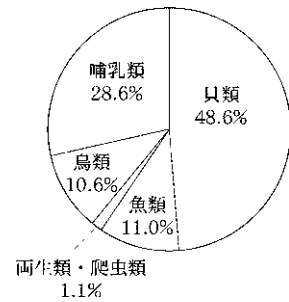


図37 動物遺存体組成 (n=612)

2. 種類別の特徴

貝類が最多の出土量を示し、淡水産（巻貝16二枚貝154）170点、海水産（巻貝13二枚貝113）126点、陸産1点が出土している。淡水産では、シジミ類が最多で154点が出土しており、モノアラガイが15点、カワニナ1点と続く。シジミ類には、琵琶湖水系に生息するセタシジミが含まれており、大きさは殻高20mm前後に集中する（図38）。モノアラガイは河川、湖沼、水田などに生息するが、遺跡からの出土は稀である。海水産では、ハマグリが最多で63点が出土しており、アカガイ48点、アカニシ8点、アワビ類4点、バイ、ハイガイ、フネガイ科が1点ずつと続く。ハマグリ大きさは、殻高40mmから45mmに集中する（図39）。陸産では、マイマイ類が1点のみ出土している。

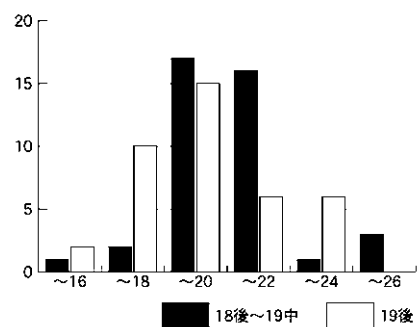


図38 シジミ類の殻高分布 (mm)

魚類は、貝類、哺乳類に次ぐ出土量を示し、淡水魚が3点、海水魚が64点出土している。淡水魚ではアユ2点、コイ1点が出土している。アユは、各部位の骨が小さく、脆弱であることから遺跡からの出土は稀であり、京都市内の遺跡では初出であろう。海水魚では、マダイが最多で31点が出土している。マダイの前頭骨は、左右真二つに切断した「兜割」が見られる。次いで、ハモ属17点、ブリ属7点、タイ科3点、ボラ科2点、サケ属、アジ科、ベラ科、マグロ属が1点ずつ出土している。ハモ属の前頭骨には切断された痕跡が見られ

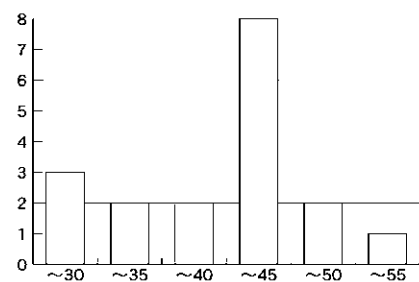


図39 ハマグリの前頭骨の殻高分布 (mm)

表7 種名表

軟体動物門 Mollusca	タイ科の一種 Sparidae gen. et sp. indet.
腹足綱 Gastropoda	サバ科 Scombridae
古腹足目 Vetigastropoda	マグロ属の一種 <i>Acanthopagrus</i> sp.
ミミガイ科 Haliotidae	ベラ科 Labroide
アウビ類 Haliotidae gen. et sp. indet.	ベラ科の一種 Labroidci, gen. et sp. indet.
基眼目 Basommatophora	両生綱 Urodela
モノアラガイ科 Lymnaeidae	無尾目 Anura
モノアラガイ <i>Radix auricularia</i>	カエル類 Anura fam., gen. et sp. indet.
新腹足目 Neogastropoda	爬虫綱 Reptilia
アッキガイ科 Muricidae	カメ目 Chlonia
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	バタグールガメ科 Bataguridae
エソバイ科 Buccinidae	バタグールガメ科の一種 Bataguridae gen. et sp. indet.
バイ <i>Balytonia japonica</i>	鳥綱 Aves
斧足綱 Bivalvia	アビ目 Gaviformes
フネガイ目 Arcoida	アビ科 Gaviidae
フネガイ科 Arcidae	アビ科の一種 Gaviidae, gen. et sp. indet.
アカガイ <i>Scapharca broughtonii</i>	カモ目 Anseriformes
フネガイ科の一種 Arcidae gen. et sp. indet.	カモ科 Anatidae
マルスダレガイ目 Veneroida	カモ科の一種 Anatidae gen. et sp. indet.
シジミ科 Corbiculidae	キジ目 Galliformes
シジミ科の一種 Corbiculidae gen. et sp. indet.	キジ科 Phasianidae
マルスダレガイ科 Veneridae	ニワトリ <i>Gallus domesticus</i>
ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	哺乳綱 Mammalia
脊椎動物門 Vertebrata	食肉目 Carnivora
硬骨魚綱 Osteichthyes	ネコ科 Felidae
ウナギ目 Anguilliformes	ネコ <i>Felis catus</i>
ハモ科 Muraenesocidae	イヌ科 Canidae
ハモ属の一種 <i>Muraenesox</i> sp.	イヌ <i>Canis familiaris</i>
サケ目 Salmoniformes	キツネ <i>Vulpes vulpes</i>
サケ科 Salmonidae	奇蹄目 Perissodactyla
サケ属の一種 <i>Oncorhynchus</i> sp.	ウマ科 Equidae
アユ <i>Plecoglossus altivelis</i>	ウマ <i>Equus caballus</i>
コイ目 Cyprinida	偶蹄目 Artiodactyla
コイ科 Cyprinidae	ウシ科 Bovidae
コイ <i>Cyprinus carpio</i>	ウシ <i>Bos Taurus</i>
ボラ目 Mugiliformes	ヤギ/ヒツジ
ボラ科 Mugilidae	イノシシ科 Suidae
ボラ科の一種 Mugilidae gen. et sp. indet.	イノシシ/ブタ <i>Sus scrofa</i>
スズキ目 Percidae	シカ科 Cervidae
アジ科 Carangiae	ニホンジカ <i>Cervus Nippon</i>
アジ科の一種 Carangiae, gen. et sp. indet.	齧歯目 Rodentia
タイ科 Sparidae	ネズミ科 Muridae
マダイ <i>Pagrus major</i>	ネズミ科の一種 Muridae gen. sp. indet.

る。ハモ属は、京都では祇園祭に欠かせない夏の食材であり、京都や大阪の近世遺跡ではしばしば出土する。ブリ属、タイ科、ボラ科、アジ科は、近世遺跡から一般的に出土する魚種であり、ブリ属の第2腹椎骨には正中方向と斜方向に切断された痕跡が見られる。サケ属はシロザケやサクラマス仲間であり、京都市内では平安京左京三条四坊十二町跡の近世の遺構から出土しているが（中村・吉本 2007）、中世では初出となる。ベラ科は、小型のベラやキュウセンなど、大型のコブダイなど多数の種が属しており、種の同定は困難である。ベラ科の前上顎骨は、最大長が 10.1 mm を測る小さな個体であり、京都市内の遺跡では中、近世を通じて初出である。マグロ属の椎骨は椎体横径 26.6 mm を測り、標準体長が 100 cm に満たない個体と推定される。

両生類は、カエル類が 4 点出土しており、現生のウシガエルの骨格標本と比較して、やや大きな個体である。爬虫類は 3 点が出土しており、いずれも日本に在来の淡水産のイシガメあるいはクサガメである。これら両生類、爬虫類は現代の食習慣では日常的な食料とは言えないが、両者とも食

用になることから、その可能性を考慮しておく必要がある。

鳥類は、カモ科が最多で46点が出土しており、ニワトリ18点、アビ科1点が続く。いずれも遺跡から一般的に出土する種類であり、ニワトリは中世以降の遺跡から出土することが多い。カモ科の大きさは、マガシ程度が8点、マガモ程度が1点、両者の中間程度が37点含まれている。土坑217から出土しているカモ科の上腕骨（左3右1）4点は、遠位端が切断されている。同じく土坑217から出土しているニワトリの足根中足骨（右）1点は、近位端が癒合していない若齢の個体であり、落込925から出土しているニワトリの橈骨、尺骨、手根中手骨は同一個体と思われる。

哺乳類は、貝類に次ぐ出土量を示し、キツネが最多で34点が出土している。キツネは井戸1400から、同一個体と思われる下顎骨、椎骨、肋骨、上腕骨などが出土している。次いで、ネズミ科33点、イノシシ32点、イヌ26点、ニホンジカ20点、ネコ15点、ヤギ/ヒツジ9点、ウシ4点、ウシ/ウマ3点が出土している。イヌは長谷部言人（1952）の分類では、小級、中小級、中級、中大級に相当する個体が出土しており、下顎骨および四肢骨の計測値から算出した体高は、最大48.9cm、最小32.9cm、平均40.0cmと推定される（表8・9）。イノシシは、文献史料や絵画史料では江戸時代の家畜化されたブタが知られており、当資料にもブタが含まれる可能性がある。しかし、出土した部位では形態によってイノシシとブタを区別することができないため、以下ではイノシシ類とする。落込925から、イノシシ類の上腕骨、橈骨、尺骨、手根骨、中手骨、指骨が、解剖学的な位置を保持した交連状態で出土しており、骨端部が癒合していない若齢の個体である。同じく落込925から、ニホンジカの肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、中手骨が交連状態で出土しており、骨端部が癒合していない若齢の個体である。このニホンジカの橈骨と尺骨には刃物による傷が見られる。また、落込925では、ニホンジカの大腿骨、脛骨、踵骨、距骨、足根骨、中足骨が出土しており、交連状態ではないが同一個体と考えられる。ネコは、遺物包含層（層75）から出土している橈骨と尺骨が同一個体であり、落込925から出土している大腿骨1点と脛骨2点は骨端部が癒合していない若齢の個体である。ヤギ/ヒツジは、19世紀後半に相当する遺物包含層から出土しており、明治時代の遺物と考えられる。ウシは土坑21と土坑82から、角芯が頭蓋骨から遊離した状態で出土しているが、明瞭な加工痕は見られない。ウシ/ウマは、落込925から脛骨の骨幹部と思われる小片が出土しており、その端部には鋸による切断痕をとどめる。

3. 平安京左京三条二坊十町跡における動物利用

a) 魚貝類の利用

貝類は、13世紀から16世紀前半では、アカシ、シジミ類、ハマグリ等の3種が少量ずつ出土している。18世紀から19世紀では、アワビ類、モノアラガイ、カワナ、バイ、アカガイが加わり、出土量も豊富になる。これらのうち、モノアラガイを除いてすべて食用になるが、カワナは出土量が少なく、食用を目的として搬入されたのか定かではない。貝類が10点以上出土した遺構では、いずれもシジミ類とハマグリが多数を占め、遺構によってはアカガイが加わり、この3種を主に利用していたことがわかる。シジミ類は最多の出土量を示すが、ハマグリやアカガイと比べて1個体

の肉量が少なく、突出した利用とは言えない。二枚貝の出土が豊富である一方、アワビ類、アカシといった巻貝の出土は低調であり、特にサザエの出土がみられないことが特徴的である。

魚類は、14世紀前半の土坑1200から、アユ、コイ、サケ属、ボラ科、アジ科、タイ科、ベラ科の出土が特筆される。15世紀中頃に成立した『尺素往来』には、「美物」が記載されており、魚類では鮎（アユ）、鯉（コイ）、鮭（サケ）、鱒（マス）、名吉（ボラ）、鱈（アジ）、赤鯛（タイ）、鱸（スズキ）、鰯（ブリ）などがあげられる（続群書類従完成会1928）。この『尺素往来』にみられる「美物」と、土坑1200から出土した魚種は、ベラ科を除いて一致する。これまで京都市内の中世の遺構では、平安京左京四条二坊十二町跡からスズキ、ブリ属が出土しており、これらも『尺素往来』の美物に含まれている。「美物」とされる魚種は、中世京都の魚食を代表するものと言え、そのほかにベラ科を含めて、多種にわたる海産物を消費していたことが明らかである。また、サケ属は大型のシロザケなどの可能性があり、日本海側からの搬入品であることが予想される。

18世紀から19世紀では、ハモ属、ブリ属、マダイ、マグロ属が出土している。マダイの前頭骨やハモ属の前上顎骨－篩骨－鋤骨板には切断された痕跡が見られ、頭部の骨を出汁として利用したと考えられる。マダイの前頭骨は、潮煮などの料理そのものに利用されたことも考えられる。また、ブリ属の第2腹椎骨の切断痕は、頭部と胴部を切り離したことを示す。マダイとブリ属は、頭部と胴部の骨が出土しているのに対して、ハモ属は頭部の骨だけが出土しており、搬入形態や調理方法を反映している可能性がある。京都市内では、マグロ属は平安京左京六条三坊五町跡から出土している（丸山・松井2005）。本例を含めて18世紀以後の遺構から出土しており、京都にける18世紀以降の魚食の嗜好変化や水産物流通の拡大などが想定される。

b) 鳥獣類の利用

鳥類は、中世では井戸1197からの出土のみで、このほかは近世、近代の遺構から出土している。アビ科、カモ科、ニワトリの3種類を同定したが、アビ科は出土量が少ない。カモ科とニワトリは18世紀から19世紀まで継続して出土する。カモ科は中世の遺構からも出土しているが、ニワトリは16世紀末以降の出土のみである。

カモ科は、18世紀から19世紀の土坑217では、胴部、翼部、脚部の骨格が出土している。ニワトリはいずれの遺構でも翼部と脚部の骨格に出土が限られる。土坑217出土のカモ科は、ほぼ全身が屋敷地に持ち込まれ、上腕骨には特定部分に切断痕がみられることから、規則的に解体が行われたと考えられる（写真18）。一方、ニワトリは解体された翼部と脚部が屋敷地に持ち込まれた可能性がある。カモ科とニワトリにみられる搬入形態の相違が、種類によって区別されたのであれば、野生のカモ科は狩猟の獲物であり、家禽のニワトリは市中の店で枝肉を購入したことが想定できる。しかし、カモ科は土坑217以外の遺構では、翼部あるいは脚部のみが出土しており、部分的に屋敷地に持ち込まれたことも考えられ、ニワトリが屋敷地内で飼育された可能性も否定されない。

哺乳類は、11世紀から12世紀前半までウシカウマのみが出土しており、14世紀前半にはネズ

ミ科が、15 世紀後半から 16 世紀前半にはキツネ、イノシシが、16 世紀末以降にはイヌ、ニホンジカ、ネコが加わる。19 世紀後半の明治時代では、ヤギ/ヒツジが出土している。

15 世紀後半から 16 世紀前半の井戸 1400 から出土したキツネは、食用や毛皮の利用が考えられる（写真 19）。16 世紀に刊行された『料理物語』では（吉井編 1978）、イヌやタヌキは取り上げられるが、キツネはみられず、毛皮の利用が主であったのかもしれない。16 世紀末から 17 世紀前半の落込 925 からイノシシ類、ニホンジカ、イヌ、ネコ、ネズミ科が出土しており、これらのうちイノシシ類とニホンジカの前肢は交連状態で出土していることから、廃棄された時には骨と筋肉を結ぶ腱、あるいは骨と骨を連結する靭帯が残っていたであろう（写真 17）。同様の出土例は、平安京左京六条三坊五町跡の井戸から出土したニホンジカの前肢と後肢がある（丸山・松井 2005）。このような出土例から、足 1 本を単位とする枝肉を屋敷地に持ち込んだことがわかる。ここで出土しているイノシシ類は、野生のニホンジカと並んで出土することから、野生のイノシシである可能性が高く、狩猟によって捕獲したニホンジカやイノシシの四肢を切り離した後に、足ごとに分配したのであろう。これらイノシシ類やニホンジカとは対照的に、イヌとネコの各部位には同一個体が含まれず、散乱状態で出土している。それぞれの骨には明瞭な解体痕はみられず、食用となったか定かではない。ネズミ科は種の同定には至らないが、大型のクマネズミ属の可能性があり、屋敷に住みついたものが駆除されたのであろう。また、上級武士の屋敷地であることを考慮すると、イヌ、ネコ、ネズミ科などは、鷹狩り用のワシ・タカ類の餌として利用されたことも考えられる。

17 世紀前半の土坑 82 と 18 世紀後半から 19 世紀前半の土坑 21 では、ウシの角芯が出土しており、明瞭な加工痕は見られないが、細工に利用されたと考えられる（写真 19）。16 世紀の堺環濠都市遺跡では、刃物によって切り込みが入れられたウシの角芯が出土しており、角芯を覆う角鞘を切り開き、鼈甲を模した「偽鼈甲」を製作していたことが明らかにされている（松井 1997）。18 世紀後半から 19 世紀初めの土坑 625 では、加工途中の鹿角 1 点が出土している。この鹿角は、角幹の両端が切断され、外面は全体的に削った痕跡が残る未成品である。また、落込 925 では、片側の端部が切断されたウシあるいはウマの骨が出土しており、骨端部を除去した痕跡と考えられ、当地において骨器を製作していたと考えられる。当調査における牛角、鹿角、牛馬骨の出土量は少なく、武家屋敷において小規模に骨や角を加工していた可能性が指摘される。

表 8 イヌ下顎骨計測値 (mm)

計測項目	計測点	齋藤No.	落込925
下顎骨全長 (1)	id-goc	1	110.8
下顎骨全長 (2)	id-cm	2	109.7
下顎枝高	kr-gov	7	45.5
下顎枝幅	Minimum	11	29.9
下顎体高 (1)	M2後部	16	21.1
下顎体高 (2)	M1中央	17	18.3
下顎体高 (3)	P4M1間	18	17.3
下顎体厚	M1中央下方	25	11.0
咬筋窩深	-	-	5.8

計測項目は茂原・松井 (1955) に準じる

表 9 イヌの計測値 (mm)

遺構	部位	左右	計測	推定体高	体格
落込925	下顎骨	右	表 8	36.0	中小
層810	上腕骨	左	GL121.1, Bp21.9, Bd24.2	37.6	中小
層810	上腕骨	右	Bd24.5	34.8	小
土坑1540	上腕骨	左	Bd31.0	44.0	中
土坑1540	上腕骨	右	GL156.3, Bp30.3, Bd32.6	48.9	中大
土坑1540	橈骨	右	GL153.7, Bp18.8, Bd23.3	48.2	中大
掘下げ	橈骨	右	DPA18.7	36.9	小
層810	脛骨	右	Bp24.9	33.7	小
層810	脛骨	左	Bp24.2	32.9	小
土坑1540	脛骨	左	GL166.2, Bd23.1	46.7	中大

推定体高は、イヌの推定体高は、西中川駿・福島晶・谷山敦ほか (2008) の計算式に準じる。

4. 小結

11世紀から12世紀までは、ウシあるいはウマのみが出土し、13世紀から19世紀では、食用、毛皮、ワシ・タカ類の餌、骨角器の素材などに利用されたと考えられる魚貝類、鳥獣類が出土している。これらのほかにも、利用方法は定かではないが、両生類と爬虫類が出土している。

特筆されるのは、土坑1200から出土した魚類であり、サケ属、アユ、コイといった淡水魚、ボラ科、アジ科、タイ科、ベラ科といった海水魚が出土しており、『尺素往来』に記載される美物と、出土魚骨の種類がほぼ合致することは興味深い。従来の京都市内の発掘調査では、中世のまとまった魚骨の出土例が少ないが、今後、資料が増加すれば、中世の具体的な魚食が明らかになるだろう。

また、落込925から出土したイノシシ類やニホンジカの四肢骨は、肉食や枝肉の搬入形態を示す。古代以来の獣肉食忌避の思想をくつがえす考古資料というだけでなく、中世および近世の狩猟や獣肉の流通を考える上で重要な資料である。さらに、落込925から出土した加工された牛馬骨、土坑82、土坑21から出土した牛角、土坑625から出土した鹿角に注目すると、武家屋敷における小規模な骨角器製作を指摘できる。

参考文献

- 続群書類従完成会 1928「尺素往来」『群書類従』第九輯 塙保己一編纂 続群書類従完成会 pp.503-520
- 茂原信生・松井章「草戸千軒町遺跡出土の中世犬骨」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 pp.289-312
- 中村敦・吉本健吾 2007「平安京左京三条四坊十二町（06HL107）」『京都市内遺跡立会調査報告』京都市文化市民局 pp.17-21
- 西中川駿・福島晶・谷山敦・池田省吾・土岐学司・小山田和央・松本光春 2008「イヌの骨計測値から骨長並びに体高の推定法」『動物考古学』第25号 動物考古学研究会 pp.1-11
- 長谷部言人 1952「犬骨」『吉胡貝塚』文化庁 pp.146-150
- 松井章 1997「堺環濠都市遺跡（SKT78地点）出土の動物遺存体」『堺市文化財調査概要報告』第61集 堺市教育委員会 pp.31-38
- 丸山真史・松井章 2005「平安京左京六条三坊五町から出土した脊椎動物遺存体」『平安京左京六条三坊五町』（財）京都市埋蔵文化財研究所 pp.126-137
- 吉井始子編 1978「料理物語」『翻刻 江戸時代料理本集成』第一巻 臨川書店 pp.3-37

表10 動物遺存体集計表

遺構/層序	大分類	小分類	部位	左	右	-	計			
11C中～後										
池1810	哺乳綱	ウシ/ウマ	遊離歯			1	1			
11C末～12C初										
池1570	哺乳綱	ウシ	遊離歯	1			1			
12C前、11C後										
土坑227	哺乳綱	ウシ/ウマ	遊離歯			1	1			
13C中										
井戸1197	腹足綱	アカニシ	殻質			2	2			
	硬骨魚綱	マダイ	前上顎骨			1	1			
	鳥綱	カモ科	上腕骨			1	1			
14C前										
土坑1200	硬骨魚綱	アジ科	椎骨			1	1			
			アユ	椎骨			2	2		
			コイ	角骨	1			1		
			サケ属	椎骨			1	1		
			タイ科	椎骨			1	1		
			ベラ科	前上顎骨			1	1		
			ボラ科	椎骨			1	1		
	哺乳綱	ネズミ科	指骨			5	5			
			尺骨	1			1			
			上腕骨			2	2			
			中手骨/中足骨			3	3			
			椎骨			3	3			
			遊離歯	1			1			
			肋骨			2	2			
			橈骨			1	1			
			脛骨	1			1			
			踵骨			1	1			
15C前										
井戸1280	斧足綱	シジミ類 ハマグリ	殻質 殻質	2	1		3			
15C後～16C初										
土坑174	哺乳綱	イノシシ類	上腕骨			1	1			
15C後～16C前										
井戸1400	腹足綱	アカニシ	殻質			2	2			
			キツネ	下顎骨	1	1		2		
	哺乳綱	キツネ	肩甲骨			1	1			
			上腕骨	1	1		2			
			橈骨			1	1			
			尺骨	1	1		2			
			大腿骨	1	1		2			
			脛骨	1	1		2			
			腓骨	1	1		2			
			中足骨	1			1			
椎骨			5	5						
肋骨	6	8		14						
16C後～17C初										
土坑78	哺乳綱	イノシシ類	下顎骨	1			1			
16C末?										
土坑1213	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	1			1			
16C末～17C初										
土坑960	哺乳綱	イノシシ類	頭蓋骨			1	1			
16C末～17C前										
落込925	腹足綱	アカニシ	殻質			1	1			
			鳥綱	アビ科	上腕骨	1		1		
			ニワトリ	尺骨			1	1		
	哺乳綱	イヌ	手根中手骨			1	1			
			橈骨			1	1			
			下顎骨	1	1		2			
			仙骨			1	1			
			椎骨			1	1			
			イノシシ類	指骨			11	11		
			尺骨			1	1			
			手根骨			5	5			
			上腕骨			1	1			
			大腿骨	1			1			
			中手骨			4	4			
			遺構/層序							
			落込925	哺乳綱	イノシシ類 ニホンジカ	橈骨			1	1
						寛骨			1	1
						基節骨			2	2
						距骨			1	1
						肩甲骨			1	1
尺骨						1	1			
上腕骨						1	1			
仙骨						1	1			
足根骨						1	1			
大腿骨						1	1			
中手骨						1	1			
中足骨						1	1			
橈骨						1	1			
脛骨						1	1			
踵骨						1	1			
ネコ	寛骨	1						1		
肩甲骨						1	1			
大腿骨	1	1					2			
中足骨						1	1			
肋骨	1	1					2			
脛骨	2	1					3			
下顎骨	2	2					4			
上腕骨	1						1			
大腿骨	1						1			
ウシ/ウマ	脛骨?						1	1		
17C前										
土坑82	哺乳綱	ウシ				角芯	1			1
17C										
厨900	哺乳綱	ウシ				遊離歯			1	1
17C～18C										
厨810	哺乳綱	イヌ				上腕骨	1	1		2
						大腿骨			2	2
						椎骨			3	3
						頭蓋骨	1			1
						脛骨	1	2		3
踵骨						1	1			
18C～19C前										
土坑429	硬骨魚綱	マダイ				神経頭骨			1	1
18C～19C										
土坑1540	哺乳綱	イヌ				上腕骨	1	1		2
			中手骨	3	1		4			
			橈骨			1	1			
			脛骨	1			1			
			殻質	1	1		2			
			歯骨	2	6		8			
			舌顎骨			2	2			
			前上顎骨-簡骨-鰓骨板			1	1			
			前頭骨			3	3			
			角骨	1			1			
	歯骨			1	1					
	主上顎骨	2	1		3					
	上後頭骨			3	3					
	神経頭骨の一部			1	1					
	前上顎骨	1			1					
	前頭骨			2	2					
	鳥口骨	2	2		4					
	胸骨			2	2					
	尺骨	1	1		2					
	手根中手骨	1	2		3					
上腕骨	5	4		9						
仙椎			1	1						
足根中足骨	1	1		2						
大腿骨	1			1						
椎骨			13	13						
癒合頰骨			1	1						
脛足根骨	1	2		3						
鳥口骨	1	1		2						
鳥綱										
土坑217	斧足綱	シジミ類	殻質	1	1		2			
			硬骨魚綱	ハモ属	歯骨	2	6	8		
マダイ										
鳥綱	カモ科	胸骨			2	2				
		尺骨	1	1		2				
		手根中手骨	1	2		3				
		上腕骨	5	4		9				
		仙椎			1	1				
		足根中足骨	1	1		2				
		大腿骨	1			1				
		椎骨			13	13				
		癒合頰骨			1	1				
		脛足根骨	1	2		3				
ニワトリ										

遺構/層序	大分類	小分類	部位	左	右	計
土坑217	鳥網	ニワトリ	足根中足骨	1	2	3
			脛足根骨	1		1
18C後～19C初						
土坑625	硬骨魚網	ハモ属	前頭骨		1	1
	哺乳網	ニホンジカ	枝角		1	1
18C後～19C前						
土坑1	硬骨魚網	マダイ	擬鎖骨	1		1
			口蓋骨		1	1
			舌顎骨		1	1
			椎骨		2	2
土坑104	斧足網	シジミ類	殻質		1	1
		ハマグリ	殻質	5	4	9
土坑21	鳥網	カモ科	脛足根骨		2	2
		ニワトリ	大腿骨	1		1
	哺乳網	ウシ	角芯		1	1
18C後～19C						
土坑220	斧足網	アカガイ	殻質	2		2
		ハマグリ	殻質	1		1
18C後～19C中						
土坑64	斧足網	シジミ類	殻質	8	13	21
	鳥網	カモ科	上腕骨	1		1
19C前						
土坑132	斧足網	アカガイ	殻質	1		1
土坑390	硬骨魚網	ハモ属	前頭骨		2	2
		マダイ	前頭骨		1	1
土坑71	腹足網	モノアラガイ	殻質		15	15
	斧足網	シジミ類	殻質	8	11	19
		ハマグリ	殻質	3	5	8
	硬骨魚網	ボラ科	椎骨		1	1
		マダイ	主上顎骨		1	1
	哺乳網	ネズミ科	指骨		2	2
			中手骨/中足骨		5	5
土坑86	斧足網	アカガイ	殻質	2		2
		シジミ類	殻質		1	1
		ハマグリ	殻質	1		1
	硬骨魚網	マダイ	上後頭骨		1	1
			前頭骨		1	1
土坑90	腹足網	アカニシ	殻質	1	1	2
埋蔵9	腹足網	バイ	殻質		1	1
	斧足網	ハマグリ	殻質	1		1
	硬骨魚網	ブリ属	椎骨		2	2
19C前、18C後						
土坑92	腹足網	アカニシ	殻質		1	1
	斧足網	アカガイ	殻質		1	1
	硬骨魚網	ブリ属	歯骨		1	1
		マダロ属	椎骨		1	1
		マダイ	上後頭骨		1	1
			前頭骨		1	1
	両生類	カエル類	上腕骨		1	1
			大腿骨	2		2
			脛骨		1	1
	哺乳網	イノシシ類	遊離歯		1	1
19C中～後						
掘下げ	硬骨魚網	マダイ	椎骨		1	1
	斧足網	ハマグリ	殻質		1	1
19C後						
掘下げ	斧足網	ハマグリ	殻質	1	1	2
	爬虫網	バタグールガメ科	腹甲板	1	2	3
	哺乳網	イヌ	尺骨		1	1
			橈骨		1	1
		ニホンジカ	指骨		1	1
		ヤギ/ヒツジ	肩甲骨	1		1
			指骨	1		1
			尺骨	1	1	2
			上腕骨	1	1	2
			中手骨	1		1
			橈骨	1	1	2

遺構/層序	大分類	小分類	部位	左	右	計
清掃中	斧足網	ハマグリ	殻質		1	1
土間	斧足網	シジミ類	殻質	3		3
掘下げ		ハマグリ	殻質		1	1
土坑170	斧足網	アカガイ	殻質		1	1
		シジミ類	殻質	9	7	17
		ハマグリ	殻質	1	1	2
	腹足網	アワビ類	殻質		1	1
		カワニナ	殻質		1	1
	硬骨魚網	マダイ	口蓋骨	1		1
土坑3	鳥網	ニワトリ	上腕骨	1		1
			大腿骨	1		1
土坑4	斧足網	アカガイ	殻質	1		1
		シジミ類	殻質	1		1
土坑40	斧足網	ハマグリ	殻質	2	4	6
土坑5	腹足網	アワビ類	殻質			3
	斧足網	アカガイ	殻質	18	20	38
		シジミ類	殻質	31	38	82
		ハイガイ	殻質	1		1
		ハマグリ	殻質	7	7	14
		フネガイ科	殻質		1	1
	硬骨魚網	タイ科	前鰓蓋骨		1	1
			椎骨		1	1
		ブリ属	椎骨		1	1
		マダイ	歯骨	1		1
			前頭骨		1	1
			椎骨		1	1
	鳥網	ニワトリ	上腕骨	2		2
			大腿骨	1		1
土坑50	鳥網	ニワトリ	大腿骨		1	1
			脛足根骨	1		1
	哺乳網	ネコ	上腕骨		1	1
			椎骨		1	1
			脛骨	1		1
19C						
掘下げ	斧足網	アカガイ	殻質		1	1
溝38の跡		シジミ類	殻質	2	1	3
		ハマグリ	殻質	1		1
	硬骨魚網	マダイ	歯骨		1	1
層75	腹足網	マイマイ類	殻質		1	1
	斧足網	アカガイ	殻質	1		1
		シジミ類	殻質		1	1
		ハマグリ	殻質	7	7	14
	鳥網	ニワトリ	上腕骨		1	1
	哺乳網	イノシシ類	脛骨	1		1
		ニホンジカ	中手骨/中足骨		1	1
		ネコ	尺骨	1		1
			橈骨	1		1
土坑43	哺乳網	イノシシ類	中手骨		1	1
			遊離歯		1	1
			橈骨	1		1
土坑69	硬骨魚網	ブリ属	主鰓蓋骨	1		1
			椎骨		1	1
			方骨	1		1
	鳥網	カモ科	手根中手骨	1		1



写真 17 落込 925 出土動物遺存体



写真 18 土坑 217 出土動物遺存体



写真19 動物遺存体 1～7 井戸1400 キツネ、8～10 落込925 イヌ、11～15 落込925 ネコ、
16 土坑82 牛角、17 土坑625 鹿角、18・19 落込925 ウシ/ウマ

付章 4 出土瓦に付着した赤色顔料に関する分析

北野信彦

1. はじめに

平安宮大内裏に近接した東南エリアに位置する平安京左京三条二坊十町（元城巽中学校）付近は、『大鏡』貞元元年（976）の条に藤原基経邸が所在したと記録するように、平安時代の早い時期から有力な貴族邸宅区域であったとされている。今回の発掘調査においても堀川院屋敷地関連と考えられる邸内池跡の一角が検出されており、当該地点が平安期における貴族屋敷関連遺跡であったことを改めて裏付けた。

さて、今回の発掘調査では上面の整地層から赤色顔料の痕跡が瓦胎部に明確に付着した軒平瓦（瓦72）が一点出土している（写真 20- 1- 2）。この軒平瓦の瓦当部には難波宮式瓦の特徴である重弧（郭）文が認められる（写真 20- 1- 1）。そのためこの瓦は、奈良時代後期頃に難波京周辺で作成され、その後長岡京を経て平安京に搬入された搬入瓦であるとされている。近年の平安京内の発掘調査では、地下鉄東西線二条南地区の押小路周辺で同様の文様を有する軒平瓦が数多く検出されており、これらが平安時代前期頃の平安宮内建造物か築地堀、もしくは周辺の有力貴族屋敷や寺院伽藍建造物の軒平瓦として使用されたものと理解されている。このような軒平瓦の瓦胎部に付着残存した赤色顔料は、この瓦と接する部材の外観塗装材料が瓦胎部にハケ塗り痕跡として付着したものであり、当時の建造物の外観塗装の状況を知る上で有効な物的証拠の一つとなりうる。今回、この赤色顔料について分析調査を行ったので、その結果を報告する。

2. 調査方法

2- 1 分析対象試料の採取

赤色顔料の付着が明確に観察される重弧文（難波宮式）軒平瓦について、まず瓦胎部表面の土壌をエタノール液を用いてクリーニングした後、残存状態が良好な部分 3箇所から粘着性があるカーボンテープを密着させて 1～2 mm角の赤色顔料の剥落片を注意深くサンプリングし、これを電子顕微鏡観察および EPMA 分析用のカーボンテープ上に固定して分析試料として供した。

2- 2 無機元素の定性分析

試料の成分分析は、あらかじめ分析用カーボンテープに固定した分析試料を（株）堀場製作所 MESA-500 型の蛍光 X線分析装置に装着し、電子線（X線）を照射して特性 X線を検出した。設定条件は以下の通り。分析設定時間は 600 秒、試料室内は真空状態、X線管電圧は 15kV および 50kV、電流は 240 μ A および 20 μ A、検出強度は 20,000cps、定量補正法はスタンダードレスである。

2- 3 赤色顔料の粒子形態の観察

赤色顔料の粒子形態の観察には、サンプリングした分析試料のなかで赤色顔料が良好に残存した部分を実体顕微鏡および金属顕微鏡で確認した後、走査型電子顕微鏡で画像（SEM 画像）観察した。各試料は、カーボン台に取り付け、まず 100 倍～ 2,500 倍の低倍率観察を走査電子顕微鏡（日立製作所製 S-415 型）にエネルギー分散型 X 線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー）（堀場製作所製 EMAX-2000 型）を連動させて、鉄（Fe）元素がマッピング検出される部分を中心に画像観察した。分析設定時間は 600 秒である。

次に、個々の顔料の粒子形態を詳細に観察するために（株）日立ハイテクノロジーズ分析センターにおいて、30,000～50,000 倍の高倍率画像観察を日立製作所製 S3000 型および S3200N 型走査電子顕微鏡を用いて行った。各試料は、先のカーボン台に取り付けた試料を、実体顕微鏡および金属顕微鏡観察で赤色顔料の集積が良好であり、かつ低倍率の電子顕微鏡観察では鉄（Fe）元素がマッピング検出された部分を中心に観察した。

2- 4 赤い色相の測色測定

赤色顔料の赤い色相の測色は、本来ならば機器分析装置である測色計などを用いて L^* 、 a^* 、 b^* で表示し、 a^*/b^* で客観的数値として算出した上で比較検討を行うべきものである。しかし、本試料の赤色顔料は出土軒平瓦に僅かに付着残存した状態で肉眼観察されている。そのため、かなり微小部径の計測を行わなければ出土瓦本体の胎土の色相を同時に測定する恐れがある。この点を考慮して、本調査では測色計計測による客観的数値の計測は行わず、新版標準土色帳のマンセル標示色見本（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・日本色彩研究所 色表監修；1991 年版）と各試料の色相を自然採光条件下で比較して基本的な赤い色相のグルーピング作業を行った。

3. 調査結果

本試料の赤色顔料を蛍光 X 線分析装置を用いて構成無機元素を分析した結果、シリカ（Si）、チタン（Ti）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）などの夾雑物も多いものの、基本的には鉄（Fe）元素の特性 X 線が強く検出された。そして水銀（Hg）や鉛（Pb）元素のピークは検出されなかった（図 40）。そのため、この試料は朱（辰砂もしくは水銀朱；HgS）や鉛丹（四酸化三鉛；Pb₃O₄）顔料ではなく、酸化鉄の赤い色相を基調としたベンガラ（酸化第二鉄；Fe₂O₃）顔料であると理解した。

この試料の性格を詳細に観察するために、まず金属顕微鏡を用いて 200～500 倍の低倍率でこのベンガラ顔料の粒子構造と色相を観察した。その結果、マンセル表示で 10R5/8（赤：red）の鮮紅色で良好な赤い色相であった。そしてこれらは、良好な赤色を呈する中空円筒状（パイプ状）の形状集合体が多数確認される部分と、それが認められない部分の少なくとも二種類のベンガラ顔料が混在していることが確認された（写真 20- 2、20- 4- 1）。

電子顕微鏡による 50,000 倍の高倍率観察で SEM 画像で個々の顔料粒子の形状と集合形態を調

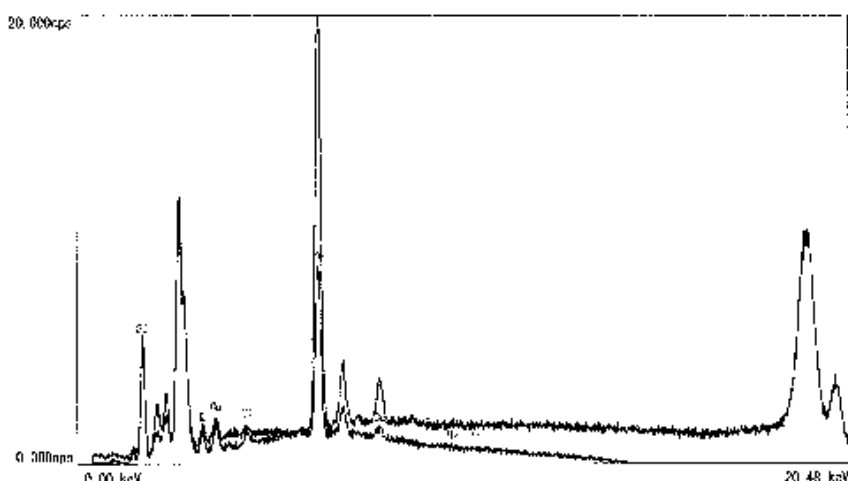


図 40 赤色顔料の蛍光X線分析結果

査した結果、前者は $0.1 \mu\text{m}$ 前後のベンガラ粒子が一定の規格性（らせん状）をもって $1 \mu\text{m}$ 程度の直径を有する中空円筒状（パイプ状）の形状を呈する集合体が明瞭に観察された（写真 20-3-1、18-3-2）。これらは、直径 $1 \mu\text{m}$ 、長さは長いもので約 $20 \mu\text{m}$ におよぶ中空円筒状の形状を有することから、通称「パイプ状ベンガラ」と呼称されるベンガラ顔料の一種である。このベンガラの特徴である中空円筒状を呈する形状は、自然界に広く分布する二価の鉄イオンを三価の鉄イオンに替える力をエネルギーとして生息する鉄バクテリア（*Leptothrix Ochraceae*）の鞘状殻の形態に由来する。鉄バクテリアは、主に停滞水が豊富な湿地の環境下で赤褐色もしくは黄褐色を呈して沈殿もしくは綿屑状に浮遊して密集生息するが、それ自体の鞘状殻には鉄酸化物の沈着物質が豊富であるため、通常、沼鉄鉱とも呼称される。このような純度の高い鉄イオンの集合体物質を回収して原材料とし、酸化促進剤（硫酸物質である強酸性の温泉水など）を添加して 700°C ほどの設定温度で加熱すると、極めて良好な赤色を呈するベンガラ顔料を獲得することが可能であることが報告者のこれまでの調査でも確認されている。しかし、鉄バクテリアの回収量自体は概して少ないため、量産化には不向きである。そのため、古い年代の赤彩土器や赤色漆、装飾古墳の使用顔料などの少量使用には対応できても、古代寺院伽藍群や宮殿建造物群などの木造建造物の外観塗装材料としては、安定的な供給が困難であるため不適であるとこれまで考えられてきた。ところが近年になって、飛鳥・白鳳期では尼寺廃寺跡塔芯礎石と北白川廃寺跡出土軒平瓦付着赤色顔料の二例、奈良時代では元興寺五重小塔創建期の各種部材、平安時代では伝世品ではあるが正倉院御物である彩絵仏像幡の幡脚塗装赤色顔料の一例とともに本試料との関連性が指摘される平安宮民部省跡出土の平城宮搬入軒平瓦（出土状況から平安時代前期～中期頃の民部省主税寮の築地塀に使用された瓦と考えられている）にその使用例が確認された。さらに同じ平安宮内建造物関連の朝堂院跡出土の平安時代前期頃に生産年代が求められる西賀茂系軒平瓦付着の赤色顔料にも、後述する天然赤鉄鉱由来の赤土ベンガラの中にこのパイプ状ベンガラの混入が明確に確認された。このことは平安宮中央

政庁建造物群の外観塗装材料として、天然赤鉄鉱を原材料とした「赤土ベンガラ」とともに「パイプ状ベンガラ」が並用された可能性を指摘するものである。

一方、後者はこれとは異なりいずれも $0.3 \sim 0.5 \mu\text{m}$ 程度で厚みは $0.05 \mu\text{m}$ 以下の扁平な微薄片の六板状型もしくは薄魚鱗状（薄板雲母状）の形態を呈する微細粉末粒子の集合体であった（写真 20-4-1、20-4-2）。これは後の時代の文献史料ではあるが江戸時代の本草書が「破レバ堅クシテ、薄クヘゲルナリ」と記述する、赤い色相が良好であり、かつ材料学的にも安定したいわゆる天然赤鉄鉱の原石鉱物を磨り潰して作成した「赤土ベンガラ」の個々の顔料粒子の形態的特徴である。この点に関連して『延喜式』は赤鉄鉱原石を原材料とした天然ベンガラに相当する「赤土ベンガラ」を示す「赤土」という固有名詞が管見される。また、『豊後風土記』は「赤湯泉（あかゆ）」の温泉沈殿物である「赤泥ベンガラ」が木造建造物の外観塗装材料として用いられたことも記載する。

古代国家成立以降には、宮殿や政庁・郡役所建造物群、中央官寺や地方の国分寺・国分尼寺の古代寺院伽藍群など、中央・地方それぞれに大規模の木造建造物の建造が盛んとなる。これらの外観塗装としてベンガラ塗装が為されたことは、出土資料に付着した赤色顔料の痕跡からも推察される。このことは、それまでの少量の使用が基本であったベンガラ顔料の生産に対しても、社会の要請としての大量需要と、それに対応するための安定供給の必要性が高まったことをも意味しよう。しかしこの点を反映したためか、実際に各地で検出される飛鳥・白鳳期から平安時代にかけての廃寺跡などの寺院関連遺跡や宮殿跡出土軒平瓦付着のベンガラ顔料の分析結果は、本試料で確認された「赤土ベンガラ」や「パイプ状ベンガラ」と比較すると、赤い色相や安定性には若干劣るものの、大規模建造物の外観塗装材料としての大量調達や大量使用に対処しうる鉄分の含有量が多い黄土を加熱して作成する廉価で量産可能な「丹土ベンガラ」が中心であった。

今回調査を行った出土軒平瓦に付着していたベンガラ顔料は、これらとは異なり、赤い色相や材料学的な安定性にも優れた天然赤鉄鉱の原石鉱物を原材料とした「赤土ベンガラ」、量産には向かないものの赤い色相は良好な「パイプ状ベンガラ」など、それぞれの起源や由来が異なる良質な二種類のベンガラ顔料が並存して確認された。この点は本試料と年代観や場所が近似している平安宮内建造物関連の朝堂院跡出土の西賀茂系軒丸瓦や民部省出土の平城宮搬入軒平瓦付着のベンガラ顔料とも類似した結果である。もちろん本試料は、当初使用されたであろう難波宮もしくはその後の長岡京関連の塗装材料である可能性も否定できない。その一方で、平安時代前期頃の建造物の外観塗装材料の在り方との類似性を考えると、両者何らかの相互関連性も指摘されよう。今後はさらに調査事例を充実させることが大切である。

なお、本調査は、科学研究費補助金 基盤研究 (C) (細目:文化財科学:課題番号 19500872) 『建築文化財における外観塗装材料の変遷と新塗料開発に関する研究』(研究代表者:北野信彦) の平成 19 年度内研究成果の一部を含む。

(引用文献)

- 荒木峻・沼田真・和田攻 編集 (1985) 『環境科学辞典』 p.540、東京化学同人
- 今堀和友・山川民夫 (1996) 『生化学辞典』 p.881-882、東京化学同人
- 岡田文男 (1997) 「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『第 14 回大会日本文化財科学会 発表要旨集』(奈良)
- 北野信彦 (2003) 「尼寺廃寺出土遺物に付着した赤色顔料に関する調査」『尼寺廃寺跡 I』香芝市教育委員
- 北野信彦 (2005) 「丹土ベンガラの製法に関する基礎的調査」『研究紀要 38-1』 p.53-69 くらしき作陽大
学
- 北野信彦 (2006) 「北白川廃寺跡出土瓦に付着した赤色顔料に関する調査」『京都市内遺跡発掘調査報告平成 17 年度』 p.36-38、京都市文化市民局
- 北野信彦 (2006) 「古代木造建造物におけるベンガラ塗装の研究 (I) - 豊後国風土記に記された「赤湯泉(あかゆ)」の温泉沈殿物に関する基礎的調査 -」『考古学と自然科学 vol.54』、p.35-52、日本文化財科学会
- 北野信彦 (2007) 「古代木造建造物におけるベンガラ塗装の研究 (II) - パイプ状ベンガラの生産と使用に関する基礎的調査 -」『考古学と自然科学 vol.56』、p.41-63、日本文化財科学会
- 北野信彦・狭川真一・窪寺茂 (2007) 「元興寺における創建期に外観塗装材料に関する調査 (I)」『日本文化財科学会第 24 回大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会 (奈良)
- 朽津信明 (2006) 「古代地方寺院の外観塗装の色について」『保存科学 第 45 号』 p.177-186、東京文化財研究所
- 国史大系編集会 (1972) 『新訂増補 国史大系 (普及版) 延喜式 後篇』吉川弘文館
- 地団研地学事典編集委員会 (1970) 『地学事典』平凡社
- 永嶋正春 (1997) 「漆と赤色顔料」『保存科学研究集会 1997 研究発表要旨集』奈良国立文化財研究所 (奈良)
- 成瀬正和 (2004) 「正倉院宝物に用いられた無機顔料」『正倉院紀要 第 26 号』宮内庁正倉院事務所
- 奈良県文化財保存事務所 (1957) 『元興寺極楽坊本堂、禅室及び東門工事報告書』
- 西山巖 (1977) 「べんがら」『改訂増補 最新顔料便覧』 p.448-451、日本顔料技術協会編、誠文堂新光社
- 山崎一雄 (1987) 『古文化財の科学』思文閣出版
- 吉木文平 (1959) 「3 酸化鉄 (Fe₂O₃, FeO)」 p.196-216、『鉱物工学』技報堂

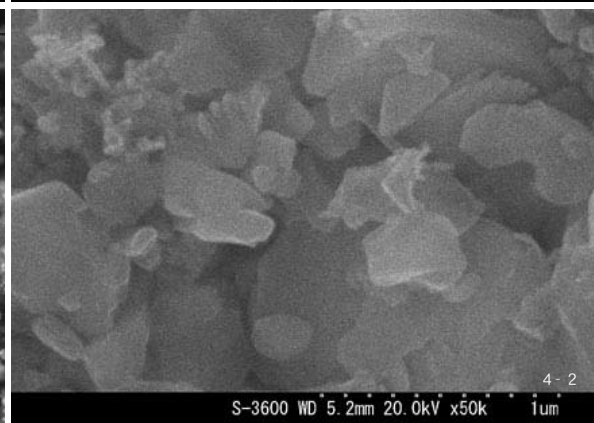
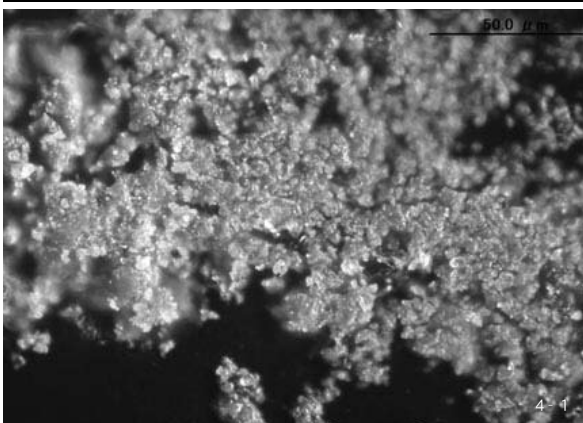
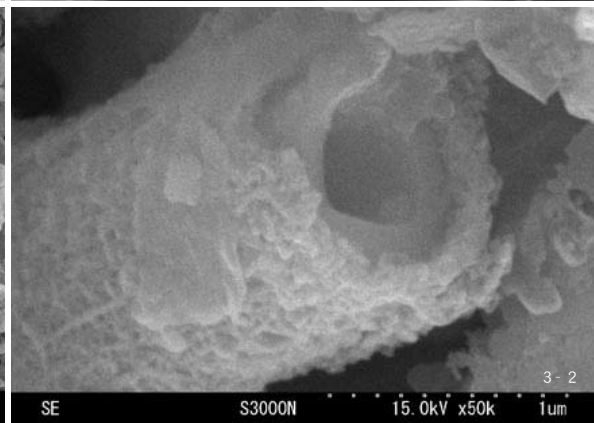
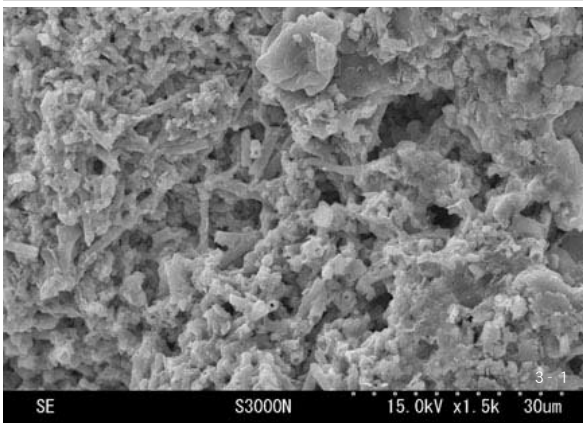
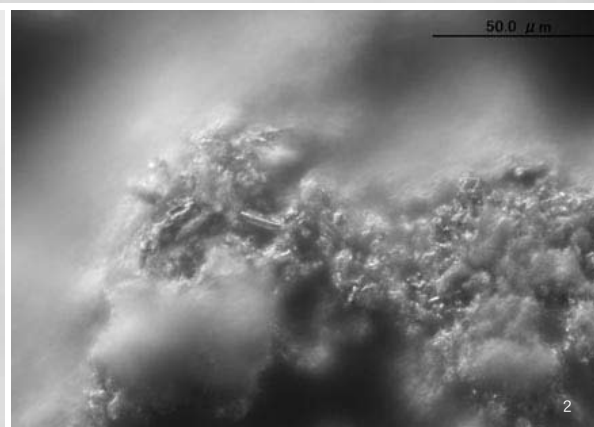


写真 20 赤色顔料の観察

付章5 出土ガラス製品の理化学的分析

北野信彦・竜子正彦

1. はじめに

本遺跡の発掘調査では、19世紀代の近世末から近代期を中心としたガラス製品も多数出土している。このなかには、長崎交易との関連性が指摘されるワインボトルの破片や、国産製と考えられる菊形杯や髪飾り、ポッペン口なども含まれている。本報では、合計282点のガラス製品の器形や色相、表面の劣化状態を肉眼観察するとともに、蛍光X線分析装置による資料非破壊の定性分析や比重測定を行ったので、その結果を報告する。この目的は、貴重な江戸期から近代前期の出土ガラス製品の素材の実体を把握して、今後の相互比較が可能となる基礎資料の作成を行うことにある。

2. 調査方法

一般にガラス製品の製作は、珪石原料とアルカリ硝石、着色材料などを溶解混合して基本的なガラス種を作成する粗煮～精煮工程と、このガラス種を（a）芯材に巻き付けて小玉成形し、表面研磨の調整を行い小玉の製品に仕上げる、もしくは（b）型吹き成形や切子カットなどを行いガラス製品に仕上げる、などの成型工程から成り立っている。

本報では、まず器形や色系統分類のためのガラス色相などを表面観察した後、（1）比重値測定、（2）原材料や着色材料などのガラス組成の定性分析、にわけた調査を行った。以下、項目別に調査方法を記す。

（1）比重値測定

本報では、近世のガラス製品を、アルカリ珪酸塩ガラス（カリガラス）と鉛珪酸塩ガラス（鉛ガラス）の二系統に大別するが、通常、鉛ガラスはカリガラスに比較して鉛が含有されるため比重地が大きい。この基本的な理論を応用して、棚橋淳二・岡泰正・土屋良雄らは、伝世の近世ガラス製品を、 $(\text{空中重量} - \text{水中重量}) / \text{空中重量} = \text{比重値}$ （カリガラスは平均比重値2.4～2.9台、鉛ガラスは平均比重値3.0～3.7台）として算定して、その軽重を相対的に比較することで、上記2つのガラスの種類を簡便に判別する方法とした。

（2）ガラス原材料や着色材料などの定性分析

ガラス製小玉の定性分析は、個々の資料を専用の分析試料セル内に装着させ、（株）堀場製作所 MESA-500 型の蛍光X線分析装置に非破壊で設置して、元素の特性X線を検出した。分析では、検出される元素のうち Al（アルミニウム）、Si（ケイ素）、リン（P）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Cr（クロム）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Co（コバルト）、Cu（銅）、Zn（亜鉛）、As（砒素）、Sn（スズ）、Pb（鉛）の二次電子線強度をカウントした。なお、分析設定時間は600秒、試料室内は真空状態、励起電圧は15kV、管電流は300 μ A、検出強度は10,000～200,000cps、

定量補正法はスタンダードレスの設定条件である。

3. 調査結果

今回調査を行った出土ガラス製品は、瓶や杯、コップ類などの容器、髪飾りなどの服飾製品、ポップペンなどの遊具類、板ガラスなどであるが、いずれも破片資料が多い。このなかには、簪やポップペン管などの棒状製品や板ガラス片など、他遺跡でも比較的数量多く検出される一般的な資料が多い。その一方で、ヨーロッパ産と推定される厚手で深緑色 (Dark Green) を呈するワインボトル破片 (30点) や菊形杯など希少なガラス製品も含まれており、この点が本資料群を特徴づけている。以下、個々の分析結果と集計結果を (表 11) に示す。

(1) 表面観察による基本的なガラス色相の色系統分類では、(a) 透明感がある無色 (Colorless) 系の資料が多いが、その他、(b) 乳白色 (White) 系、(c) 透明感のある緑色系 (Colorless Green)、(d) 深緑色 (Dark Green) 系 (これは少なくとも2～3種類に分類される)、(e) 乳濁した青色 (Blue navy) 系、(f) 透明感がある黄色 (Yellow) 系、(g) 紫色 (Purple) 系、(h) 透明感がある赤色系 (Red-Colorless) など少なくとも7～8種類に識別された。

(2) これらの蛍光X線分析によるガラス原材料の定性分析を行った結果、鉛珪酸塩ガラス (鉛ガラス) とアルカリ珪酸塩ガラス (カリガラス) の2種類に大別されたが、基本的には前者が多い。

(3) 器形分類別で見ると、ポップペン口や菊形杯、髪飾りの多くはいずれも比重値が大きく Pb (鉛) 元素の検出量が高い鉛珪酸塩ガラス (鉛ガラス) であった。その一方で透明感のある青色系 (Marine Blue もしくは Sky Blue) を呈する髪飾りである No.59・137 資料およびワインボトルの破片はいずれも比重値が小さく Pb (鉛) 元素の検出量がほとんど検出されないアルカリ珪酸塩 (カリガラス) であった。

(4) 白色もしくは乳白色 (White) 系ガラスの着色材料には、石灰；カルシウム (Ca) やスズ (Sn) が使用されるが、本資料では積極的にこれらの元素は確認されず、若干の鉄 (Fe) 元素の混入が見出された。これらは、ガラス生産過程の鉄坩堝由来と考えられる。これは、透明感がある無色 (Colorless White) 系ガラスも同様である (図 41- 1・2)。

(5) 透明感がある黄色 (Colorless Yellow) 系ガラスでは、鉄 (Fe) 元素のピークが比較的強く検出された。これは、着色材料である酸化鉄由来と考えられる。この点は、近世以降の出土ガラス製品や色ガラスの復元実験の成分分析結果でも裏付けられる (図 41- 3)。

(6) 透明感がある赤色 (Colorless Red) 系ガラスでは、鉄 (Fe) 元素のピークとカルシウム (Ca) 元素のピークが比較的強く検出された。これは、着色材料である酸化鉄由来と考えられる。この点も、近世以降の出土ガラス製品や色ガラスの復元実験の成分分析結果でも裏付けられる (図 41- 4)。

(7) 透明感がある紫色 (Purple) 系ガラスは、コバルト (Co) 元素が特徴的に検出された (図 42- 5)。

(8) 乳濁した青色 (Blue navy) 系ガラスでは、やや強い銅 (Cu) 元素のピークに鉄 (Fe) 元素のピークが共存する特徴を有する。これは着色材料である酸化銅由来と考えられる (図 42- 6)。

(9) 深緑色 (Dark Green) 系のワインボトル破片は、厚い器壁を有する。この資料群の特徴は、

(3) にも記述したようにアルカリ珪酸塩ガラス（カリガラス）であるとともに、深緑色の色相はマンガン (Mn)、カルシウム (Ca) を共存する鉄 (Fe) 着色材料によると理解される (図 42- 7・8)。これまでの基礎分析調査の結果では、鉄とマンガンの共存率は京都市中出土資料群よりも出島資料群のほうが顕著であった。これは、それぞれの資料の製作年代や生産地、品質の差などが想定されるが、この点に関する調査はヨーロッパの伝世資料の調査も含め、今後の興味ある課題の一つである。

(引用文献)

- (1) 土屋良雄 (1987) 『日本のガラス』しこうしゃ
- (2) 山崎一雄 (1987) 『古文化財の科学』思文閣出版
- (3) 棚橋淳二 (1989) 「江戸時代の技法によるガラス素地の製造」『研究紀要 第 31 号』松蔭女子学院大学・松蔭女子学院短期大学 学術研究会
- (4) 二宮修治・今野春樹・中村瑞絵 (1998) 「千駄ヶ谷五丁目遺跡 2 次調査出土のガラス及び焼継ぎ材の理化学的分析について」『千駄ヶ谷五丁目遺跡 2 次調査報告書』千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会
- (5) 北野信彦 (2004) 「出土ガラス製品の定性分析と保存に関する基礎的調査」『平安京左京北辺四坊』(財)京都市埋蔵文化財研究所

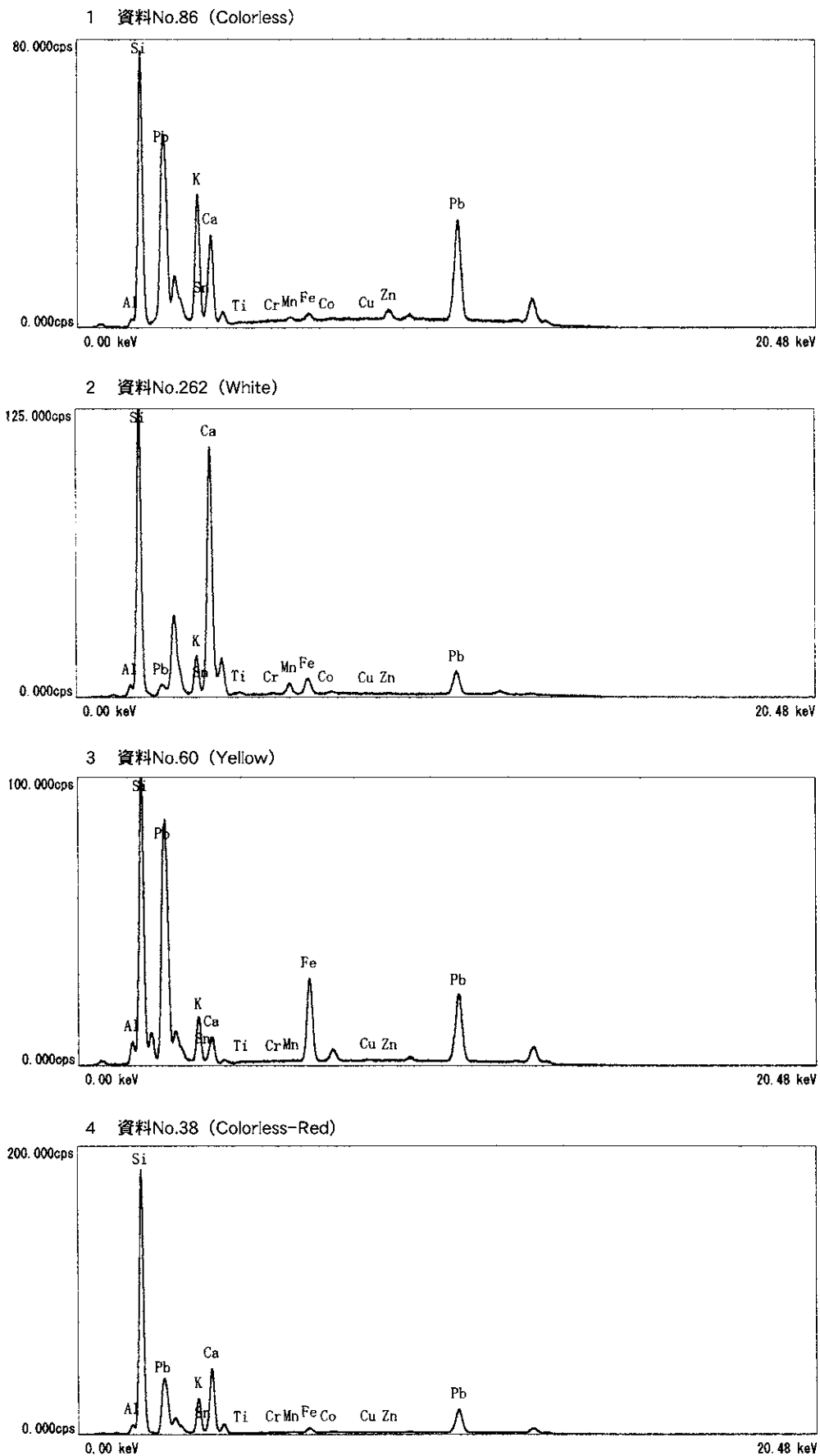
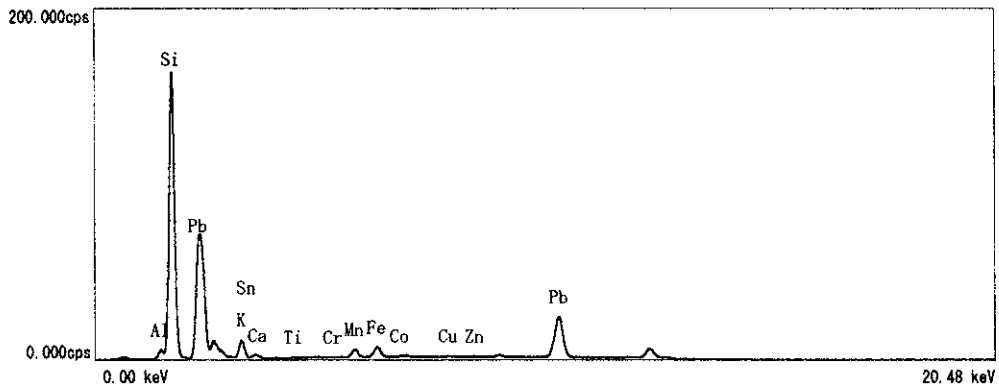
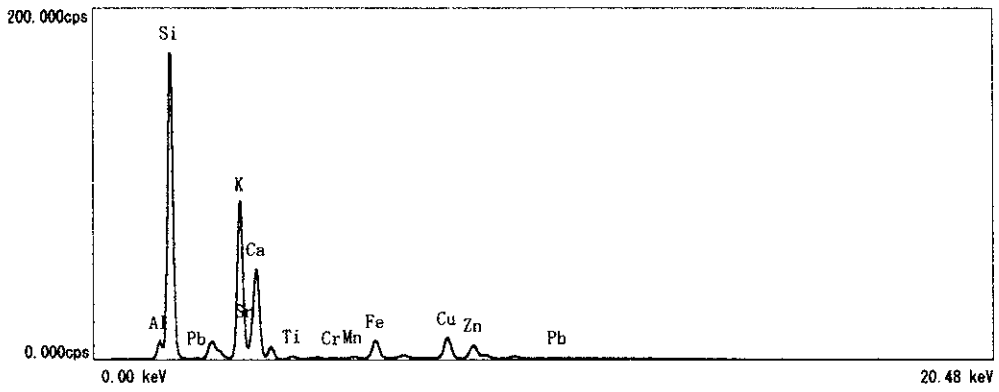


図 41 ガラス製品の蛍光X線分析結果 1

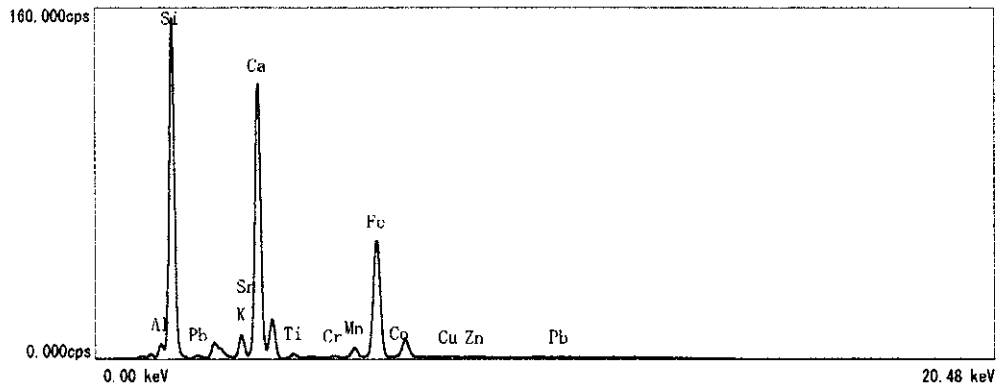
5 資料No.112 (Purple)



6 資料No.59 (Blue)



7 資料No.191 (Dark Green 1)



8 資料No.49 (Dark Green 2)

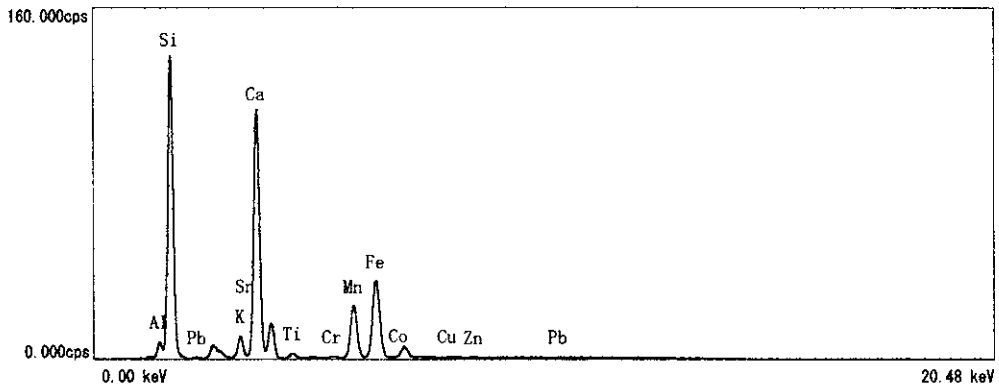


図 42 ガラス製品の蛍光X線分析結果 2

付章6 出土した種実等分析

竜子正彦

1. はじめに

土サンプル等のサンプリングは、現場で遺物として現認できるものは採取し遺物袋等に封入した。調査現場において発掘担当者が周辺の状況と異なる土壌の堆積層を確認し同定作業の必要性を認めるときは、土サンプルを遺物整理箱に入れて取り上げ、現場で1mm・2mmの篩いで選別した。その他の場合は遺物袋に封入して後日0.25mm・1mm・2mm・4mmの篩いで選別した。選別したものは実体顕微鏡で検鏡し同定した。試料は計62点あり同定後一覧表にして図示した。

2. 同定結果

各サンプル毎の内容を以下に説明する。

埋甕 39 種実はなく、貝類の殻・魚類の骨・小型哺乳類の骨。食物残渣が廃棄されていたものと思われる。

土坑 71 2層 炭化ヒサカキ属種子と淡水止水性の貝類。

土坑 71 6層 炭化ヒサカキ属種子と貝類、魚類骨・鱗。食物残渣が廃棄されていたものと思われる。

土坑 71 9層 アカメガシワ、炭化ヒサカキ属果実・種子と魚類骨・鱗。食物残渣が廃棄されていたものと思われる。土坑 71 については雑草の混入が見られず、周辺の自然環境から隔離された遺構だと思われる。

石室 105 4層 山地・野原に普通に見られるアキギリ属、踏付け雑草のオオバコと、食用のカボチャなどのウリ科・ナスが多い。その他耕地のものがわずかにみられる。食物残渣も一部廃棄されていたと考えられる。

土坑 487 4層 炭化イネ果実だけが見られるが、これは稲藁を撚った縄の炭化物が選択的に採取されたため、縄に付着していたイネが選別されたものであろう。

土坑 495 下層 雑草のツユクサ・エノコログサ属が多量に、その他にヒユ属・タデ科がやや多くみられた。食用となるバラ科の果実・サンショウ・ブドウ・カキノキも確認できた。

井戸 777 井戸枠内下層 ザクロソウ・カヤツリグサなどの耕地雑草や踏付け雑草のオヒシバがやや多く見られた。一部炭酸カルシウムの集積を認めた。

井戸 777 掘形 雑草の種実以外にナスが多く見られた。

土坑 780 木質の炭化物（ヒノキ）のみ。

土坑 806 ほとんどが耕地雑草のザクロソウであった。

落込 925 耕地・人家周辺の雑草や食用のナス・メロン類と木質の炭化物が少し見られた。

落込 1080 有機物層 雑草のなかではカヤツリグサ属がやや多く確認できた。

井戸 1085 石組内 多くは耕地・人家周辺の雑草であるが、一部薬用にも使用されるケシ科ク

サノオウ・クマツヅラ属が確認できた。

土坑 1172 道端雑草のオヒシバを含むイネ科とカヤツリグサ属が少しあり、その他に昆虫が認められた。

土坑 1188 オヒシバと昆虫が多く認められた。畑地雑草とともにアカネ科も見られた。

井戸 1197 木柵内北側 耕地・人家雑草が見られた。

井戸 1197 木柵内2層 耕地・人家雑草以外に昆虫が少し見られた。

土坑 1200 食用となる種実が多くみられた。特にメロン類（平均長 7.0 mm）が多い。

土坑 1207 種実はほとんど見られなかった。

井戸 1211 木柵内 畑・道端に多いヒユ属・エノキグサがやや多く見られた。

土坑 1247 畑などいたるところに生育するハコベ属が多く、次いで道端雑草のオオバコが見られた。わずかにゴマが確認できた。

土坑 1275 畑地植物ではヒユ属・ハコベ属が多く、湿生植物ではタカサブロウが多い。イネの炭化果実・穎も見られ、昆虫もやや多い。食用となるものではゴマが多く、その他にメロン類（平均長 6.9 mm）・ナスもある。サンショウ・ウメ・カキノキもわずかに見られる。

井戸 1355 木柵内 ヒユ属が圧倒的に多い。わずかにカラスザンショウも見られた。他に建築資材の調整に伴うと思われるスギの薄片が多量に見られた。

池 1570 砂層 食用になるヤマモモが多い。他にオニグルミ・モモ・ウメ・スモモ・メロン類がある。センダンも植栽であろう。珍しいものではモクレン属があり植栽と考えられる。

池 1570 シルト 食用になるクルミ類・モモ・ウメ・スモモ・メロン類（平均長 8.7 mm）がある。センダンは植栽が考えられる。池には浮葉植物のオニバスが咲いていたと思われる。

池 1570 シルト（上層）食用のナス、抽水植物のオモダカ属がわずかにある以外、更地などによく育つアカメガシワがやや多く見られた。

池 1570 シルト（下層）食用のブドウ、畑地雑草のアカザ属・ヒユ属・スベリヒユ、抽水植物のオモダカ属・湿生植物のカヤツリグサ属・ホタルイ属がそれぞれわずかに見られた。

土坑 1700 湿生植物のノミノフスマ・スズメノテッポウ属が多い。他にカヤツリグサ属・ミズアオイ属・シャジクモ属が確認できた。池・溝などの堆積土と思われる。

溝 1735 下層 湿生植物のタガラシが確認できた。

溝 1750 湿生植物のカヤツリグサ属・タガラシ・タカサブロウがわずかに確認できた。

池 1810 シルト（溝 2010 含む）ほとんど種実は見つからない。

土坑 1840 湿生植物のスズメノテッポウ属を少し確認した。スギの薄片を少し含む。

土坑 2000 ヒサカキ属種子がある。植栽と考えるセンダンなど耕地・人家・湿生の植物が見られる。

2区土坑 222 下層 木本ではムクノキ・クワ属・コウゾ属が植栽と考えられ、湿生と思われるタデ科が多い

3区溝 255 シルト 食用ではキイチゴ属・マタタビ属・メロン類・ナスが認められ、湿生植物

ではタガラシ・ノミノフスマ・タカサブロウ・シロネ属・オモダカ属・ホタルイ属・テンツキ属が確認できた。他にミジンコの耐久卵がやや多くあり、冬などの水温の低下、水質の悪化や乾燥など生存環境の劣悪化を示している。

参考文献

牧野富太郎「牧野 新日本植物図鑑」北隆館 1977

中山至大・井之口希秀・南谷忠志「日本植物種子図鑑」東北大学出版会 2000

林 弥栄編「日本の野草」山と溪谷社 1986

林 弥栄編「日本の樹木」山と溪谷社 1986

表 12 種実等一覧表

木本

遺構名	採集No	遺構年代	サンプル量 (cm)	イヌガヤ科	スギ科	ヒノキ科	マツ科	ヤマモモ科	クルミ科			ブナ科			ニレ科		クワ科		モクレン科	バラ科								
				ハイイヌガヤ	スギ	ヒノキ	ツガ属	ヤマモモ	オニグルミ	ヒメグルミ	堅果	コナラ	クリ	ムクノキ	クワ属	コウゾ属	モクレン属	キイチゴ属	モモ	ウメ	アンズ	スモモ						
土坑71 2層	土1-2	19C前	570																									
土坑71 6層	土1-3	19C前	720																									
土坑71 9層	土1-4	19C前	1020																									
石室105 4層	土1-5	19C	900																								核果1	
土坑487 4層	土2 2	18C~19C前	1680																									
土坑487 4層	土2-3	18C~19C前	1660																									
土坑495 下層	土2-1	18C	930																									核果1
土坑495 下層	土3	18C	1180 (注5参照)	種子1																								核果19 核果9 核果1
土坑495 下層	木7	18C	1・2・4層 の層で選別																									核果1
井戸777 井戸枠内	土4-1	17C前	1670																									
井戸777 堀形	土6-5	17C前	300																									核果1
土坑780	土6-6	13C	220																									
土坑806	土4 2	18C~	1080																									
落込925	土5-1	16C末~17C初	100																									
落込925	土5-3	16C末~17C初	100																									
落込1080	土5 6	16C末~17C初	800																									
井戸1085 石組内	土5-8	13C後~14C前	320																									
土坑1172	土5-5	14C中	730																									
土坑1188	土5-4	16C末~17C初	1170																									
井戸1197 木枠内	土6-1	13C中	190																									
井戸1197 木枠内	土5 10	13C中	360																									
土坑1200	土5-7	14C前	1010																									
土坑1207	土5-9	16C末~17C初	260																									
井戸1211 木枠内	土6 2	13C前~	360																									
土坑1247	土6-3	13C後	310																									
土坑1275	土6-4	16C後~17C初	2880																									核果1
井戸1355 木枠内	土7-4	11C	2120																									
池1570 砂層	木45-20	11C後~12C前	種実だけ採取																									
池1570 シルト	木45 6	11C後~12C前	種実だけ採取																									
池1570 シルト	木45-21	11C後~12C前	種実だけ採取																									
池1570 シルト下層	土9-1	11C後~12C前	380																									
池1570 シルト下層	土9-2	11C後~12C前	180																									
池1570 シルト下層	土9 5	11C後~12C前	990																									
池1570 シルト下層	土10-1	11C後~12C前	140																									
池1570 シルト下層	土10-3	11C後~12C前	420																									
池1570 シルト上層	土9-4	11C後~12C前	670																									
池1570 シルト上層	土10-2	11C後~12C前	1080																									
土坑1700	土7 1	11C~12C初	1310																									
土坑1700	土7-2	11C~12C初	2040																									
溝1735 下層	土7-3	11C中~12C初	470																									
溝1750	土7 5	12C末~13C初	1930																									
池1810 シルト	土8-1	11C中~後	310																									
土坑1840	土8-3	11C後	1070																									
土坑1840	土8-4	11C後	610																									
土坑2000	土8-6	11C後~12C初	970																									
溝2016	土8 5	11C中~後	280																									
2区 土坑222 下層	2区 土1-1	13C中~後	360																									
3区 溝255 シルト	3区 土1-2	11C後~末	430																									核果14

基本

ミカン科	センダングサ科	トウダイグサ科	トチノキ科	ブドウ科	サルナシ科	ツバキ科	ザクロ科	カキノキ科	クワ科	イラクサ科	タデ科				アカザ科	ヒユ科	スベリヒユ科	ツルナ科	ナデシコ科		スイレン科	キンボウゲ科		
サンシヨウ	カラスガシヨウ	アカメガシヨウ	トチノキ	ブドウ	マタタビ属	ヒサカキ属	ザクロ	カキノキ	アサ	ミズ属	タデ科(3種)	タデ科(属4種)	ギンギン属	ソバ	アカザ属	ヒユ属	スベリヒユ	ザクロソウ	ハコベ属	ツメクサ	ノミノ	オニハス	キンボウゲ属	タガラシ
						種子6																		
						種子5																		
		種子3				果実43 種子130																		
						種子46					果実1	花被1			種子1	種子3								
種子3				種子1				種子1			果実5					種子4		種子1	種子3		種子1			
種子52								種子5			果実105		果実2			種子272					種子1			
種子10				種子1				種子10			果実11				種子1	169			種子1					果実1
																種子9	種子3	種子89	種子9					
											果実3					種子5	種子1	種子17	種子25	種子7	種子18			
																	種子1	種子2440						
種子1	核果1	種子2									果実1					種子4		種子5	種子11					果実1
																								果実2
																種子2		種子2	種子7					
																種子27	種子34	種子1	種子31					果実2
																		種子1	種子1					
種子1											果実13	花被2				種子19	種子2	種子3	種子33		種子			
		種子1														種子3	種子1							
											果実1					種子6	種子8	種子9						果実7
							種子10	種子35	果実13		果実7					種子2		種子1						
											果実1					種子8								
											果実17					種子9		種子1	種子131					果実1
種子6			種子1				種子3	種子1	果実1?		果実17		果実34		種子154	種子24	種子24	種子116						果実5
	種子1	種子2									果実4	果実2			種子9	種子108		種子6		種子7				
		核果4																						
		核果9																						種子2 種子14
															種子1	種子2	種子2							
		種子1			種子1														種子3					
		核果1									果実1							種子1	種子1					
		種子10									果実1	花被1				種子13		種子2			種子443			果実3
		種子1																						
																		種子1						果実12 果実1
																種子1								
		核果5					種子3				果実8				種子14	種子3	種子18	種子15	種子5	種子1			果実1	果実2
		種子2					種子3			果実3	果実2	果実26			種子2			種子2		種子1				
						種子1					果実26				種子4	種子344	種子573	種子6	種子27		種子150			果実837

遺構名	採集No	ゲシ科 クサノ オウ	アブラナ科		バラ科		カタバミ科		トウダイグサ科		スマミレ科		セリ科		クマツヅラ科		シソ科							ナス科		ゴマ科	オオバコ科		
			アブラナ科	キジムシ科	ヘビイチゴ属	カタバミ属	エノキグサ属	スマミレ属	セリ科	チドメクマツヅラ属	シソ科	シソ属	メハジキ属	シロネ属	イヌロウジュ属	トウバナ属	ミスシロネ属	アキギリ属	ナス科	ナス	ナス	ゴマ	オオバコ						
土坑71 2層	t1-2																												
土坑71 6層	t1-3																												
土坑71 9層	t1-4																												
石室105 4層	t1-5			果実3				種子1														果実217	種子17	種子21		種子37			
土坑487 4層	t2-2																												
土坑487 4層	t2-3																												
土坑495 下層	t2-1			果実2			種子1	種子5	1						果実1	果実7													
土坑495 下層	t3							種子3							果実1	果実7	果実148							種子4					
土坑495 下層	t7						種子4	種子3	種子2	果実1					果実15	果実6													
井戸777 井戸枠内	t4-1		種子2	果実1			種子1															果実1		種子1					
井戸777 彫形	t6-5		種子1				種子5																		種子33				
土坑780	t6-6																												
土坑806	t4-2			果実1																									
落込925	t5-1							種子2							果実1										種子1	種子1			
落込925	t5-3																												
落込1080	t5-6							種子6																	種子1				
井戸1085 石組内	t5-8	種子2	種子4	果実3			種子13							果実5	果実5														
土坑1172	t5-5							種子2																					
土坑1188	t5-4			種子3			種子1	種子1							果実1	果実1													
井戸1197 木枠内	t6-1							種子1																					
井戸1197 木枠内	t5-10		種子1	果実1			種子12	種子1							果実3														
土坑1200	t5-7																								種子19	種子60			
土坑1207	t5-9																												
井戸1211 木枠内	t6-2							種子14																					
土坑1247	t6-3			果実1				種子8							果実3									種子3	種子3	種子21			
土坑1275	t6-4		種子1				種子13	種子5						果実3	果実3									種子8	種子42	種子10			
井戸1355 木枠内	t7-4																								種子3				
池1570 砂層	t45-20																												
池1570 シルト	t45-6																												
池1570 シルト	t45-21																												
池1570 シルト下層	t9-1							種子1	種子1																				
池1570 シルト下層	t9-2																												
池1570 シルト下層	t9-5																												
池1570 シルト下層	t10-1																								種子1				
池1570 シルト下層	t10-3																												
池1570 シルト上層	t9-4																								種子1				
池1570 シルト上層	t10-2																								種子1				
土坑1700	t7-1		種子1	果実2			種子6								果実3														
土坑1700	t7-2		種子1																						種子1				
溝1735 下層	t7-3																												
溝1750	t7-5													果実1															
池1810 シルト	t8-1																												
土坑1840	t8-3																												
土坑1840	t8-4													果実1															
土坑2000	t8-6			果実17			種子12	種子4	種子1					果実6											果実2	果実4	果実5	果実3	種子2
溝2016	t8-5																												
2区 土坑222 下層	2区 t1-1		種子10	果実1			果実1																				種子2		
3区 溝255 シルト	3区 t1-2		種子14				種子17							果実5											果実7	果実14	果実2	種子4	種子24

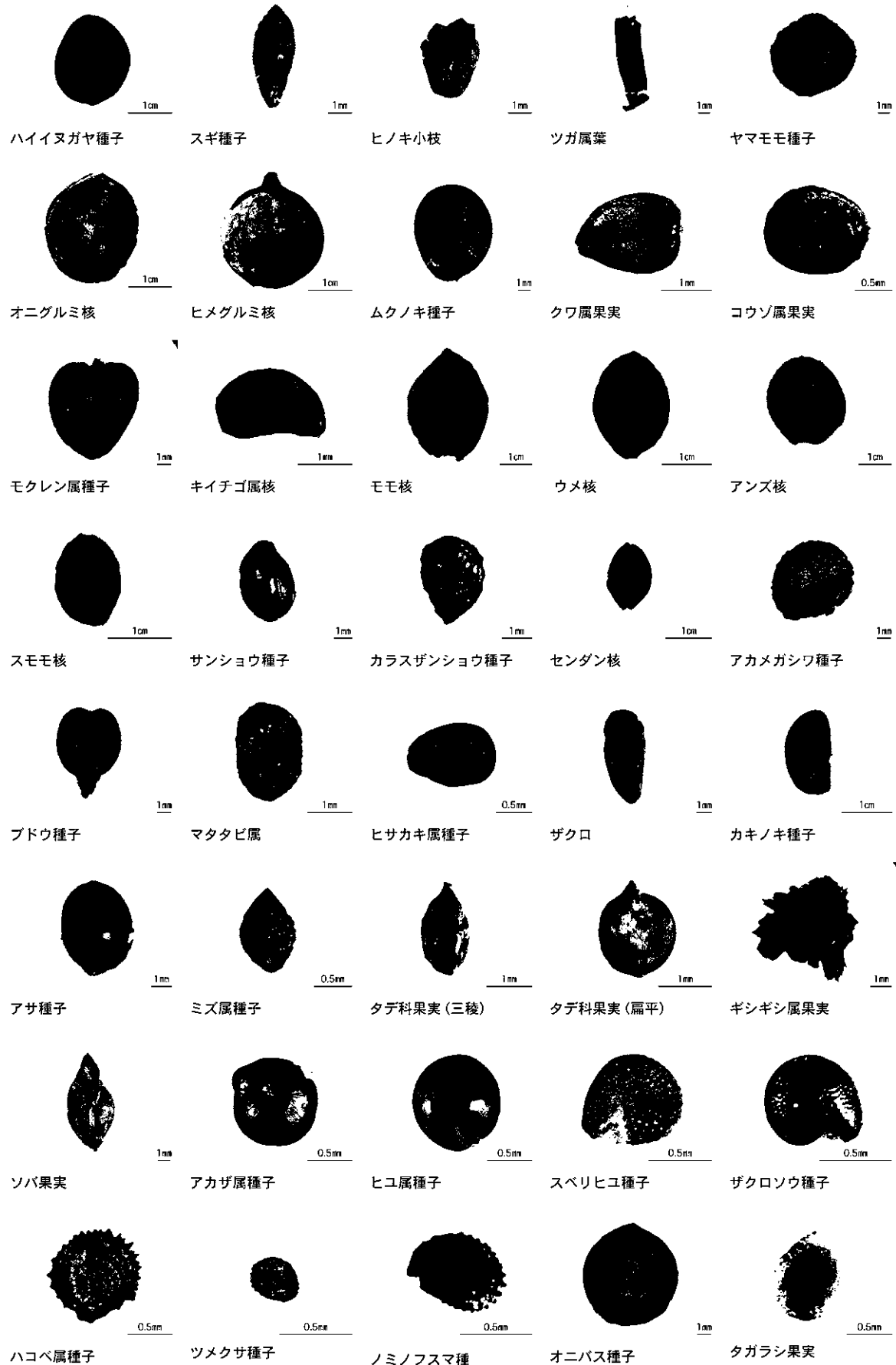


写真 21 種実等写真 1

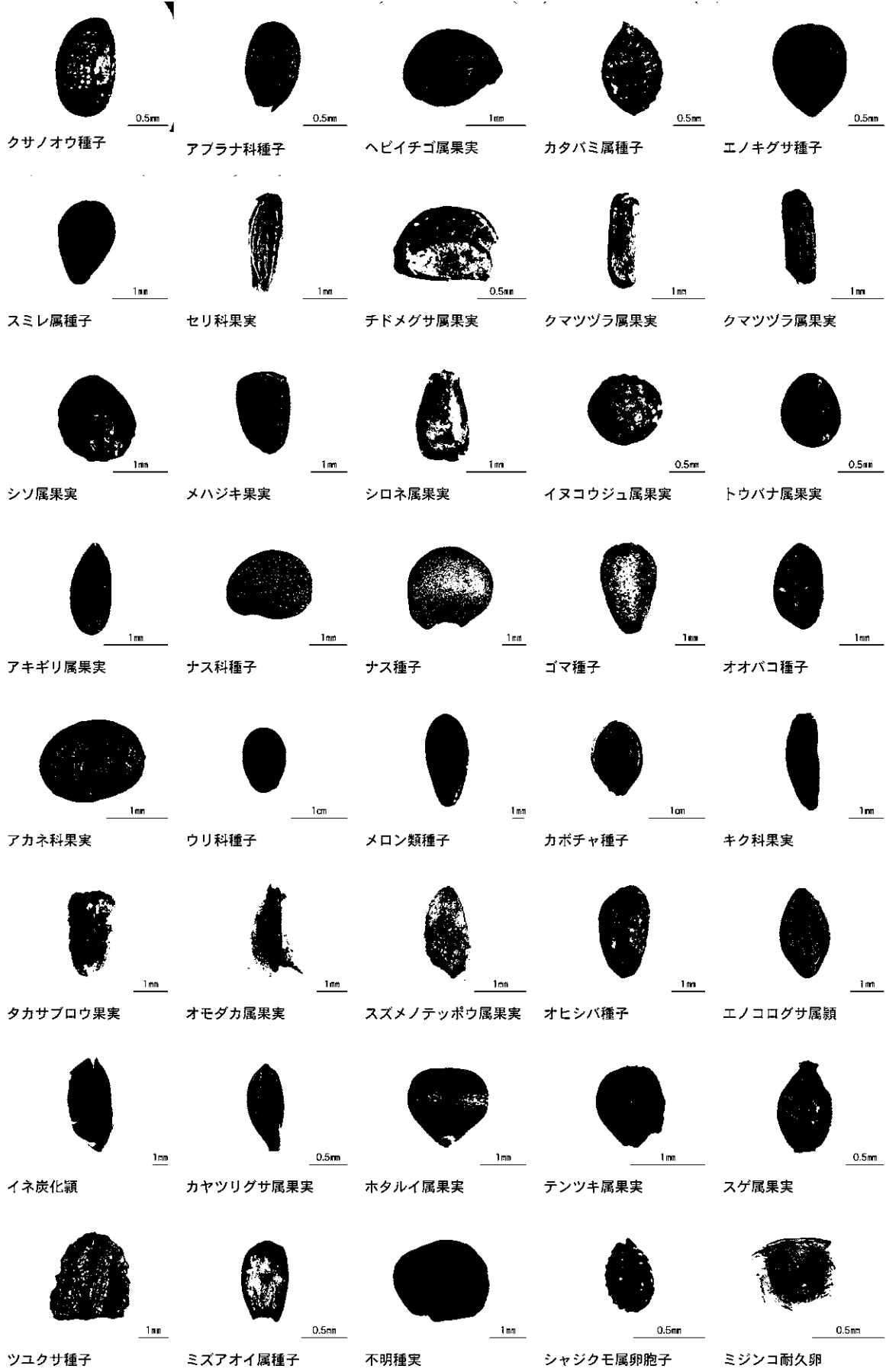


写真 22 種実等写真 2

付章7 土壌分析

株式会社 古環境研究所

I 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、池 1570 より採取された試料 1～5、溝 2010 より採取された試料 6、土坑 1840 より採取された試料 7、溝 255 より採取された試料 8・9 の計 9 点である。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から 1 cm³ を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5 mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理

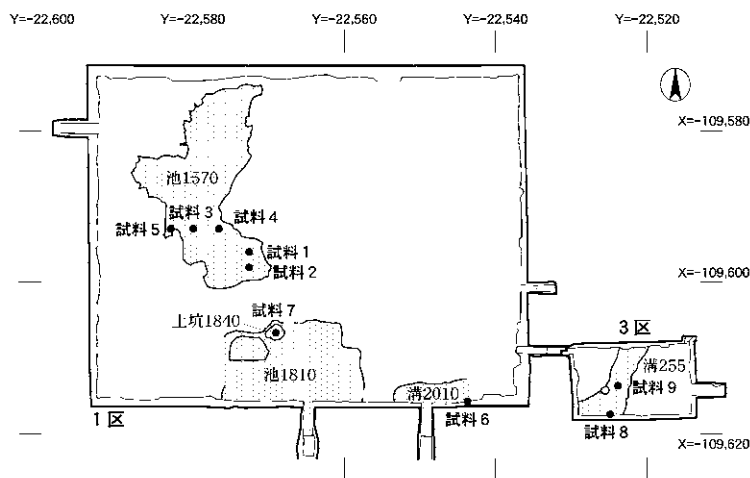


図 43 試料採集地点図（1：1,000）

7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および

種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 40、樹木花粉と草本花粉を含むもの 5、草本花粉 30、シダ植物孢子 2 形態の計 77 である。これらの学名と和名および粒数を表 13 に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図 44 に示す。主要な分類群は顕微鏡写真 (写真 23・24) に示した。また寄生虫卵についても同定した結果、6 分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、シキミ属、サクラ属、アカメガシワ、ジャケツイバラ、サンショウ属、センダン属、ウルシ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ツタ、ミズキ属、カキ属、モクセイ科、トネリコ属、ツツジ科、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、アブラナ科、ノブドウ、ヒシ属、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ナス科、オオバコ属、オミナエシ科、ゴキツル、タンポポ科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵、異形吸虫類卵、カピラリア、不明虫卵

(2) 花粉群集の特徴

1) 池 1570 (試料 1 ~ 試料 5)

池 1570 (試料 1 から試料 5) において、分析の結果花粉は類似した出現傾向を示し、樹木花粉

が55%～70%を占める。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、ヤナギ属、エノキ属—ムクノキ、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、シイ属、コナラ属コナラ亜属、アカメガシワ、モチノキ属など多様に出現する。他にハンノキ属、クマシデ属—アサダ、ブナ属、セシダン、カエデ属、カキ属は低率であるが連続して出現する。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）を主にヨモギ属、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、ナデシコ科、チドメグサ亜科、オオバコ属、タンポポ科、キク科、ゴキヅルなどが伴われ、ソバ属、ベニバナなどが出現する。寄生虫卵においては、鞭虫卵が比較的多く、回虫卵、異形吸虫類卵、カピラリアが検出された。

2) 溝 2010 (試料6)

草本花粉の占める割合がやや高く、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属を主に、カヤツリグサ科、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、ナデシコ科、チドメグサ亜科、オオバコ属、タンポポ科、キク科等が伴われ、ベニバナが出現する。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、ヤナギ属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属、アカメガシワ、セシダン、モチノキ属など多様な分類群が出現する。

3) 土坑 1840 (試料7)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属を主に、カヤツリグサ科、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、ナデシコ科、チドメグサ亜科、オオバコ属、タンポポ科、キク科等が伴われ、ベニバナが出現する。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属がやや多く、ヤナギ属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属、アカメガシワ、セシダン、モチノキ属など多様な分類群が出現する。

4) 溝 255 (試料8、試料9)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、カヤツリグサ科を主に、ナデシコ科、チドメグサ亜科、オオバコ属、タンポポ科、キク科等が伴われ、ベニバナが出現する。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属とスギがやや多く、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属、セシダン、モチノキ属など多様な分類群が出現する。寄生虫卵では、鞭虫卵、回虫卵がやや多く、不明虫卵、肝吸虫卵も検出された。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

以下、調査地点ごとに植生の推定を行う。

1) 池 1570 (試料1～試料5)

コナラ属コナラ亜属、シイ属の照葉樹、コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科の針葉樹がやや多い。いずれも風媒花植物であることから、周辺地域で優勢に分布していたとみなされる。また、池周辺に生育していた可能性もある。

ヤナギ属、エノキ属—ムクノキ、アカメガシワ、モチノキ属は、池周辺に生育していたとみなされるが、エノキ属—ムクノキ、アカメガシワは二次林種でもある。他に各試料で検出されるハンノ

キ属、クマシデ属ーアサダ、ブナ属、センダン、カエデ属、カキ属も周囲に生育していた。ブナ属はイヌブナが考えられる。ヤナギ属、センダン、カエデ属、カキ属は植栽されていたと考えられ、とくにヤナギ属が多い。

草本花粉では、風媒花植物で花粉産出量の多いイネ科、アカザ科ーヒユ科、ヨモギ属をはじめ、アブラナ科、ナデシコ科、チドメグサ亜科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ゴキツル等は雑草と呼ばれる範疇に入る草本で、これらは池周辺に生育していたと考えられる。オモダカ属、ミズアオイ属は抽水植物、ヒシ属は浮葉植物であり、池内に生育していた。これらの生育から池は水深1 m前後から約1.5 mの深さがあったと推定される。栽培植物としては、イネ属型、ソバ属、ベニバナが検出されており、近隣で栽培されていたか、利用されたものが排水とともに流れ込んだことなどが考えられる。寄生虫卵は、鞭虫卵がやや多く、回虫卵、異形吸虫類卵、カピラリアも検出されるが、汚染の範囲とみなされる。

2) 溝 2010 (試料6)

草本が多く、周辺にはイネ科、ヨモギ属を主に、カヤツリグサ科、アカザ科ーヒユ科、アブラナ科、ナデシコ科、チドメグサ亜科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科が生育していた。ミズアオイ属やオモダカ属の抽水植物は、池内の浅水域に生育していたとみられる。ベニバナは近隣で栽培されていたか、利用されたものが排水とともに流れ込んだことなどが考えられる。周辺には、コナラ属アカガシ亜属、ヤナギ属、スギ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、マツ属複雑

管束亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属、アカメガシワ、センダン、モチノキ属など多様な樹木が生育していた。ヤナギ属やセンダンは植栽と考えられる。

3) 土坑 1840 (試料7)

周辺にはイネ科、ヨモギ属を主に、カヤツリグサ科、アカザ科ーヒユ科、アブラナ科、ナデシコ科、チドメグサ亜科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科が生育していた。ミズアオイ属やオモダカ属は土坑内に生育していたとみられる。周辺にはコナラ属アカガシ亜属、ヤナギ属、スギ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、マツ属複雑管束亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属、アカメガシワ、センダン、モチノキ属など多様な樹木が生育していた。ヤナギ属やセンダンは植栽と考えられる。

4) 溝 255 (試料8、試料9)

周辺にはイネ科、ヨモギ属、アカザ科ーヒユ科、アブラナ科、カヤツリグサ科を主に、ナデシコ科、チドメグサ亜科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科が生育していた。ミズアオイ属やオモダカ属は溝内に生育していた。周辺にはコナラ属アカガシ亜属、スギを主に、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、マツ属複雑管束亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属、センダン、モチノキ属など多様な樹木が生育していた。センダンは植栽と考えられる。寄生虫卵では鞭虫卵、回虫卵の密度が高く、糞便が投棄されていた可能性も考えられる。

6. 小結

風媒花植物であるコナラ属コナラ亜属、シイ属の照葉樹、コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科の針葉樹は、周辺地域で優勢に分布していたとみなされる。ヤナギ属、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、モチノキ属は池 1570 で多く、溝 2010、土坑 1840、溝 255 では少ないため、池 1570 の周囲に生育し、とくにヤナギ属は植栽されていたと考えられる。他にハンノキ属、クマシデ属-アサダ、ブナ属、センダン、カエデ属、カキ属も周囲に生育し、カエデ属やカキ属も植栽されていたと考えられる。草本は地点間で微差があるが、各遺構の周辺にイネ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属を中心にアブラナ科、ナデシコ科、チドメグサ亜科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科が生育し、オモダカ属、ミズアオイ属の抽水植物は遺構内に生育していた。また各遺構からベニバナが検出され、近隣で栽培されていたか、利用されたものが排水とともに流れ込んだ可能性が考えられた。池 1570 と溝 255 から鞭虫卵、回虫卵などの寄生虫卵が検出され、このうち池 1570 は汚染の範囲であるが、溝 255 は糞便が投棄されていた可能性が示唆された。

参考文献

- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集, 60p.
- 中村純 (1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.
- 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第 10 号, p.21-30.
- 中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集, 91p.

II 珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

2. 試料

分析試料は、池 1570 より採取された試料 1～5、溝 2010 より採取された試料 6、土坑 1840 より採取された試料 7、溝 255 より採取された試料 8、試料 9 の計 9 点である。これらは、花粉分析に用いられたものと同一試料である。

3. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から 1 cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗 (5～6 回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 600～1500 倍で行った。計数は珪藻被殻が 200 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4. 結果

(1) 分類群

試料から出現した珪藻は、中-真塩性種 (汽-海水生種) 1 分類群、貧-中塩性種 (淡-汽水生種) 1 分類群、貧塩性種 (淡水生種) 98 分類群である。表 14 に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図 45 に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は Lowe (1974) や渡辺 (2005) 等の記載による。陸生珪藻は小杉 (1986) により、環境指標種群の淡水生種は安藤 (1990) による。主要な分類群について顕微鏡写真 (写真 25) を示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthes hungarica, *Achnanthes lanceolata*, *Amphora copulata*, *Amphora montana*, *Cyclotella meneghiniana*, *Cymbella silesiaca*, *Fragilaria capucina*, *Fragilaria*

construens, *Fragilaria pinnata*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema parvulum*, *Gyrosigma* spp., *Hantzschia amphioxys*, *Navicula capitata*, *Navicula confervacea*, *Navicula elginensis*, *Navicula mutica*, *Navicula pupula*, *Nitzschia frustulum*, *Pinnularia microstauron*

(2) 珪藻群集の特徴

1) 池 1570 (試料 1 ~ 試料 5)

各試料における珪藻の出現傾向は類似し、真・好止水性種、流水不定性種の占める割合が高い。真・好止水性種の *Fragilaria construens*, *Cyclotella meneghiniana* が優占種で、*Nitzschia frustulum*, *Fragilaria pinnata* などが伴われる。流水不定性種では *Achnanthes hungarica*, *Amphora copulata*, *Fragilaria capucina*, *Gyrosigma* spp., *Navicula pupula* などが出現する。試料 3 から試料 5 では、陸生珪藻の占める割合が増加し、*Navicula confervacea* が比較的高率に出現する。真・好流水性種では *Gomphonema parvulum*, *Navicula capitata*, 沼沢湿地付着生環境指標種群の *Navicula elginensis* などが低率に出現する。

2) 溝 2010 (試料 6)

流水不定性種、陸生珪藻が優占する。流水不定性種の *Achnanthes hungarica*, 陸生珪藻の *Navicula confervacea* が優占種であり、真・好流水性種の *Gomphonema parvulum* も比較的高率に出現する。

3) 土坑 1840 (試料 7)

陸生珪藻、真・好止水性種の占める割合が高く、珪藻密度は低い。陸生珪藻では *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea* が優占する。真・好止水性種では *Pinnularia microstauron*, *Fragilaria construens*, 沼沢湿地付着生環境指標種群の *Gomphonema gracile* が出現する。流水不定性種では *Amphora copulata*, 真・好流水性種では *Gomphonema parvulum* が低率に出現する。

4) 溝 255 (試料 8、試料 9)

流水不定性種がおよそ 50% を占め、陸生珪藻、真・好流水性種が約 20% ずつ占める。流水不定性種の *Achnanthes hungarica* が優占種であり、*Navicula pupula* などが伴われる。陸生珪藻では *Hantzschia amphioxys*, *Amphora montana*, 真・好流水性種では *Gomphonema parvulum* などが出現する。真・好止水性種では *Pinnularia microstauron* や、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Gomphonema gracile* などが低率に出現する。

5. 珪藻分析から推定される堆積環境

珪藻群集から推定される環境を地点ごとに推定する。

1) 池 1570 (試料 1 ~ 試料 5)

Fragilaria construens, *Cyclotella meneghiniana* の好止水性種が優占種で、流水不定性種が

やや多く、陸生珪藻、真・好流水性種が伴われる。こうしたことから、止水性の常時水をたたえる池沼の環境が示唆される。試料3、4、5では、陸生珪藻がやや多く、池岸等の湿った程度の環境が近接して分布していたと考えられる。

2) 溝 2010 (試料6)

流水不定性種の *Achnanthes hungarica*、陸生珪藻の *Navicula confervacea* が優占種で、好流水性種の *Gomphonema parvulum* が伴われる。こうしたことから、流れの影響のある不安定な水域が示唆され、湿った程度の箇所が近接するか湿った環境になる時期があったと推定される。

3) 土坑 1840 (試料7)

珪藻密度が低く、陸生珪藻、真・好止水性種で占められる。珪藻密度が低いことから、堆積速度が速いか、珪藻の生育できない乾燥した時期もあるような環境が推定される。水域はやや不安定な池状の止水域であり、湿った程度の箇所も多かった。

4) 溝 255 (試料8、試料9)

流水不定性種の *Achnanthes hungarica* が優占種であり、好流水性種の *Gomphonema parvulum* と陸生珪藻が伴われる。滞水してよどみながら流れる水域が示唆され、縁辺には湿った程度の部分が分布する。

参考文献

- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p. 131-506.
- Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh water diatoms. 333p., National Environmental Research Center.
- K. Kra mm er · H. Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae · 1 - 4.
- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p. 35-47.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p. 23-45.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p. 29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p. 1-20.
- 渡辺仁治 (2005) 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DAIPo, pH 耐性能. 内田老鶴圃, pp. 666.

表 13 花粉分析結果

分類群	学名	和名	池1570					溝2010 土坑1840		溝255	
			1	2	3	4	5	6	7	8	9
Arboreal pollen		樹木花粉									
	<i>Podocarpus</i>	マキ属	1							1	
	<i>Abies</i>	モミ属	3	2	2	1	3	1	1	4	3
	<i>Tsuga</i>	ツガ属	4	1	2	1	1			1	1
	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	27	37	34	36	22	17	21	16	5
	<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	17	19	39	28	21	26	14	37	43
	<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	2	3	1	1	1		3	1	
	Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	34	30	47	19	35	26	15	13	26
	<i>Salix</i>	ヤナギ属	15	67	52	84	62	30	14	4	
	<i>Juglans</i>	クルミ属		1		1	1	1			
	<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ		1			1		1		
	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	1	4	3			1	1	1
	<i>Betula</i>	カバノキ属	3	4	11	7	7	2	3	2	3
	<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1	1	3						
	<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	3	9	6	7	13	3		2	2
	<i>Castanea crenata</i>	クリ	5	6	10	6	5	10	8	10	2
	<i>Castanopsis</i>	シイ属	18	30	21	23	18	15	13	19	13
	<i>Fagus</i>	ブナ属	1	14	3	1	3	1	3	2	7
	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	15	22	15	21	29	16	15	7	6
	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	78	62	53	53	50	40	42	32	41
	<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	2	1	3	2	1	1		1	
	<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	35	38	44	27	28	3	16	4	8
	<i>Illicium</i>	シキミ属		1		1					
	<i>Prunus</i>	サクラ属		1							
	<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ	12	48	27	18	14	1	5		3
	<i>Caesalpinia japonica</i>	ジャケツイバラ									1
	<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	2		4	2	1		2		2
	<i>Melia</i>	センダン属	2	3	3	3	1	1	5	2	15
	<i>Rhus</i>	ウルシ属	1		3	2	2				
	<i>Ilex</i>	モチノキ属	19	38	19	23	29	3	1	1	5
	Celastraceae	ニシキギ科		1			1				
	<i>Acer</i>	カエデ属	1	4	4	2	1		3		1
	<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ									1
	<i>Sapindus</i>	ムクロジ属		2	1	3	3			1	1
	<i>Parthenocissus tricuspidata</i>	ツタ	1								
	<i>Cornus</i>	ミズキ属				1					
	<i>Diospyros</i>	カキ属	1	1	2		1		1		
	Oleaceae	モクセイ科			1						1
	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	2						1		
	Ericaceae	ツツジ科	1	1							1
	<i>Lonicera</i>	スイカズラ属			1				1		
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉									
	Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	10	6	7	7	4	4	5	6	4
	Rosaceae	バラ科	1	3	5	2	3	1	1		
	Leguminosae	マメ科		1		1	1	1	1		2
	Araliaceae	ウコギ科	3	1	3	1	2	1	1		1
	<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属	3							1	4
Nonarboreal pollen		草本花粉									
	<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属	2			2	1				
	<i>Alisma</i>	サジオモダカ属			1						
	<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	8	8	9	6	2	1	1	7	7
	Gramineae	イネ科	106	56	110	77	86	123	114	120	103
	<i>Oryza type</i>	イネ属型	9	2	7	2	1	6	6	4	14
	Cyperaceae	カヤツリグサ科	17	12	11	12	9	33	10	30	20
	<i>Aneilema keisak</i>	イボクサ					1	2			
	<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	2	1	6	3	1	1	2	1	3
	<i>Polygonum</i>	タデ属		4		1	1			2	1

分類群		池1570					溝2010	土坑1840	溝255	
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8	9
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1				1	3	1	2	1
<i>Rumex</i>	ギシギシ属	4	1		1	1		4	2	2
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1	1	1	2				1	1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	25	14	22	30	18	17	12	40	49
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2	1	1	1	1	1	1	1	1
<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属	1	2	1		1	2	1	11	24
Cruciferae	アブラナ科	13	14	7	3	9	16	7	37	19
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	ノブドウ		1	6	2	2	1	1		
<i>Trapa</i>	ヒシ属			1	1	1				
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウグサ属-フサモ属		1		1		1			
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	10	8	10	3	3	7	3	8	9
Apiioideae	セリ亜科	3	3	1	1	2	6	3	2	3
Solanaceae	ナス科									1
<i>Plantago</i>	オオバコ属	3	1	3	1	2	3	11	3	6
Valerianaceae	オミナエシ科	2								
<i>Actinostemma lobatum</i>	ゴキツル	1	1	1	1	1				
Lactuoidae	タンポポ科	2	3	2	1	1	1	1	3	1
Asteroidae	キク亜科	3	1	5	3	3	8	3	7	5
<i>Xanthium</i>	オナモミ属	2	1							
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	49	28	39	26	24	66	38	56	68
<i>Carthamus tinctorius</i>	ヘニバナ	1	1	1	1	1	1	1	3	10
Fern spore	シダ植物胞子									
Monolatc type spore	単条溝胞子	4	3		3	2	4	3	5	3
Trilate type spore	二条溝胞子	2	5	4	4	5	3	7	8	7
Arboreal pollen	樹木花粉	307	449	415	376	354	197	189	162	191
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	17	11	15	11	10	7	8	7	11
Nonarboreal pollen	草本花粉	267	165	245	181	173	299	220	340	348
Total pollen	花粉総数	591	625	675	568	537	503	417	509	550
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	5.9	4.9	8.8	6.2	7.5	2.0	2.0	2.7	8.7
		×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴
Unknown pollen	未同定花粉	15	17	12	11	13	11	12	6	12
Fern spore	シダ植物胞子	6	8	4	7	7	7	10	13	10
Helminth eggs	寄生虫卵									
<i>Ascaris(lumbricoides)</i>	回虫卵	2	2	1	3	5			47	5
<i>Trichuris(trichiura)</i>	鞭虫卵	15	1	28	1	19			68	21
<i>Clonorchis sinensis</i>	肝吸虫卵								1	
<i>Metagonimus-Heterophyes</i>	異形吸虫類卵	2								
<i>Capillaria</i> sp.	カピラリア					1				
Unknown eggs	不明虫卵								2	
Total	計	19	3	29	4	25	0	0	118	26
Helminth eggs frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度	1.3	2.4	2.9	2.8	2.3	0.0	0.0	1.3	2.6
		×10 ²	×10	×10 ²	×10	×10 ²			×10 ³	×10 ²
Digestion remains	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(-)	(+)	(+)	(+)	(+)	(-)	(+)

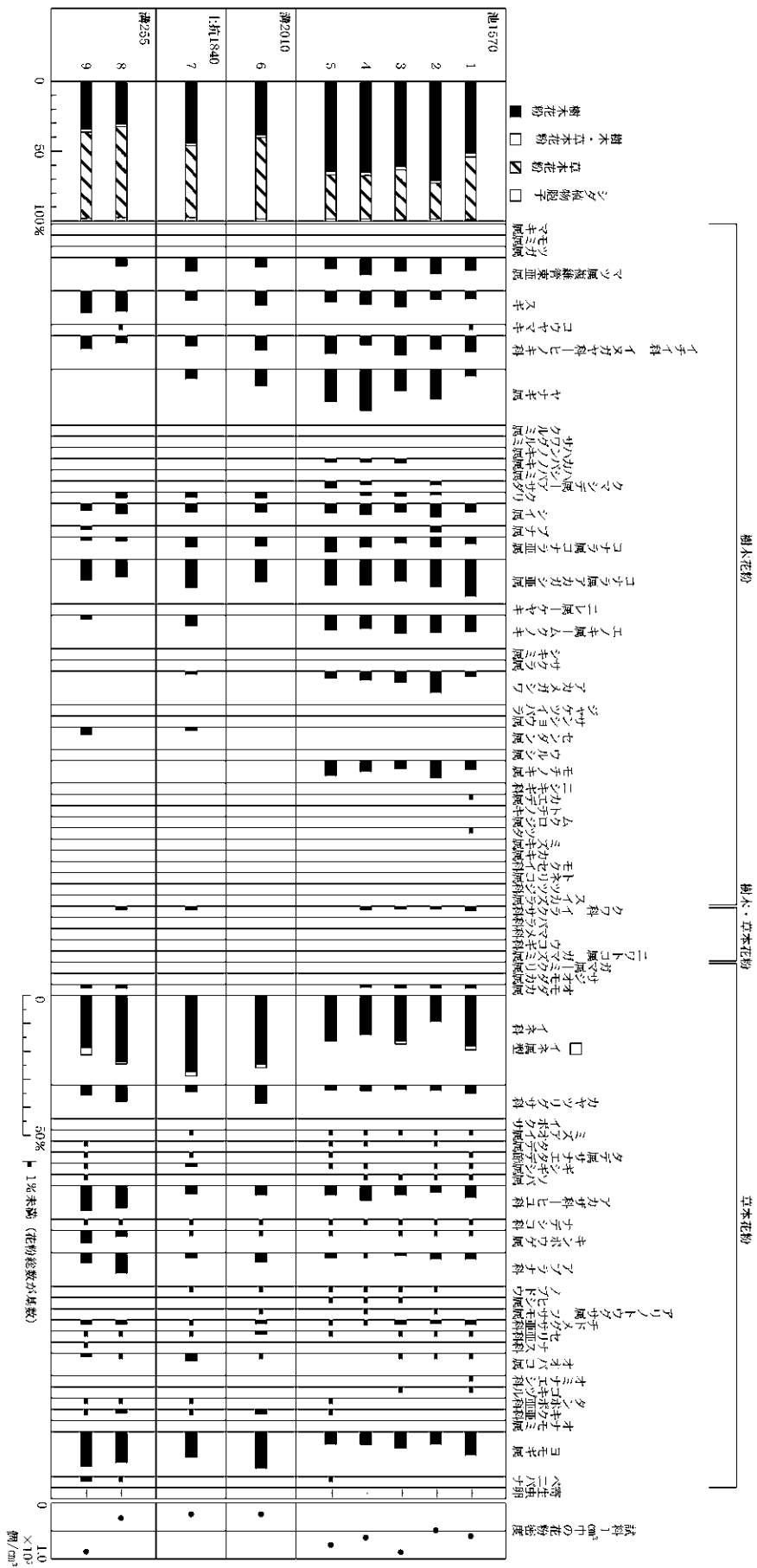


図44 花粉ダイアグラム

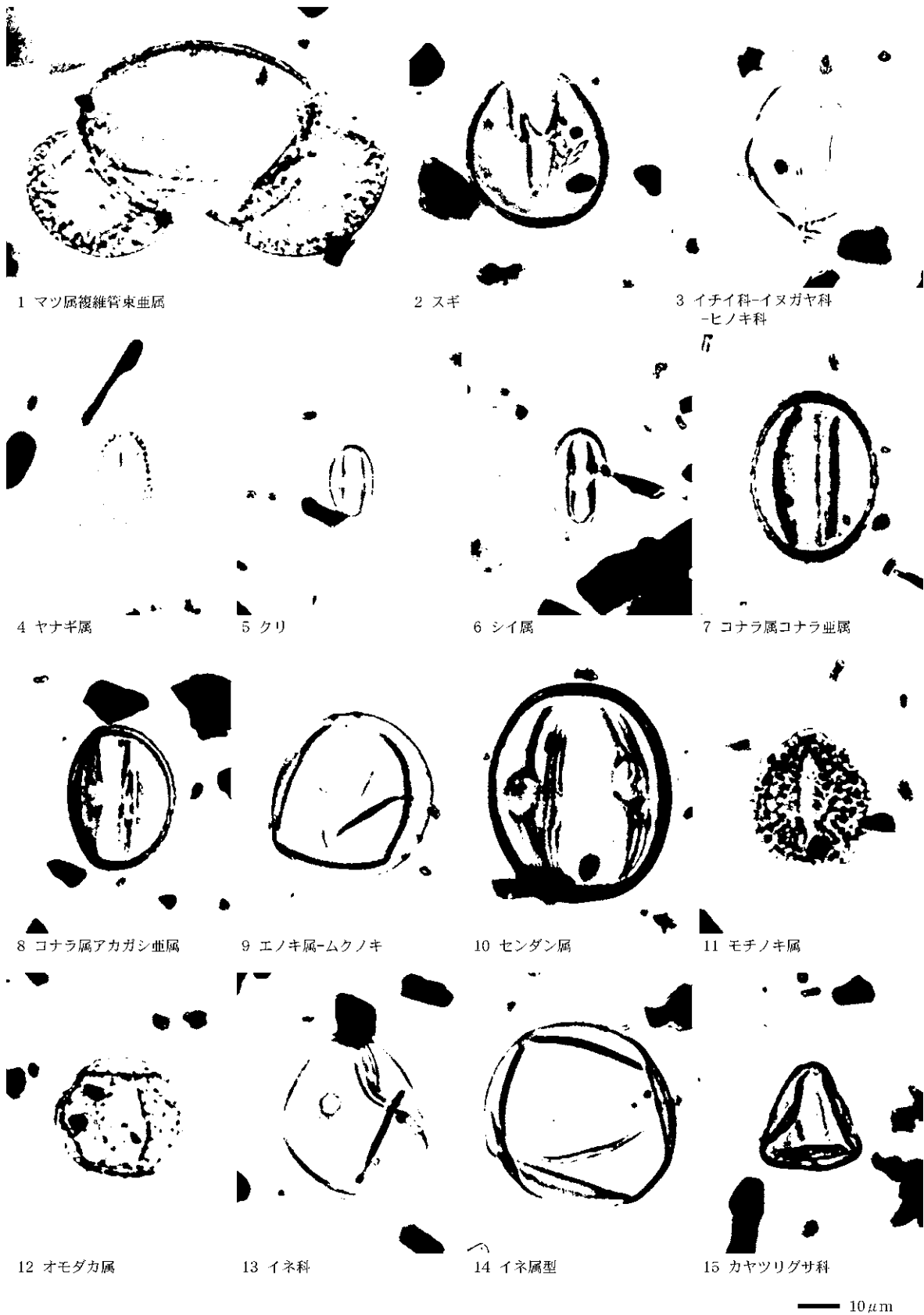
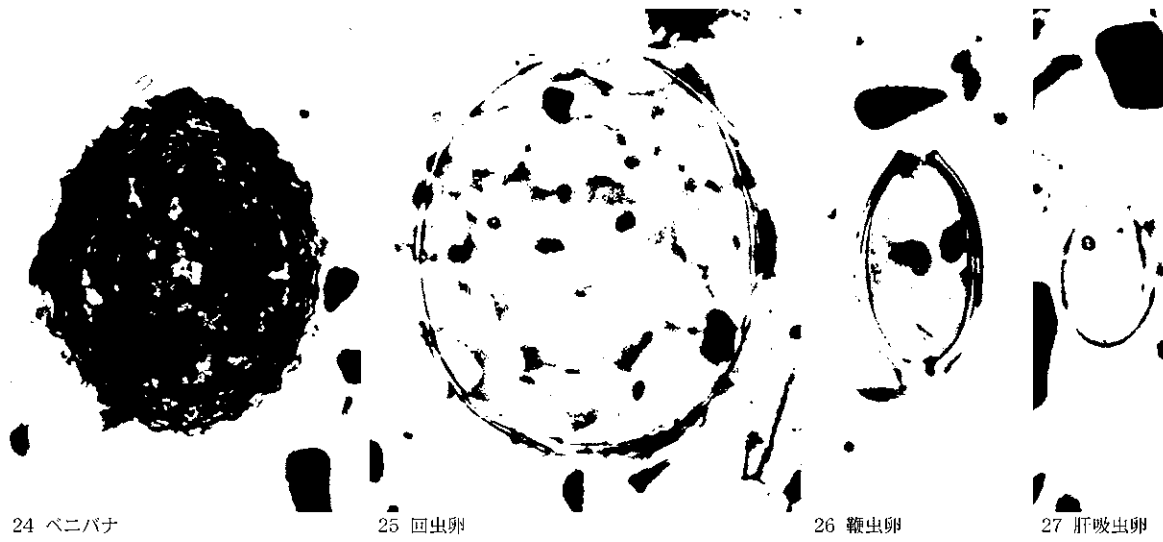
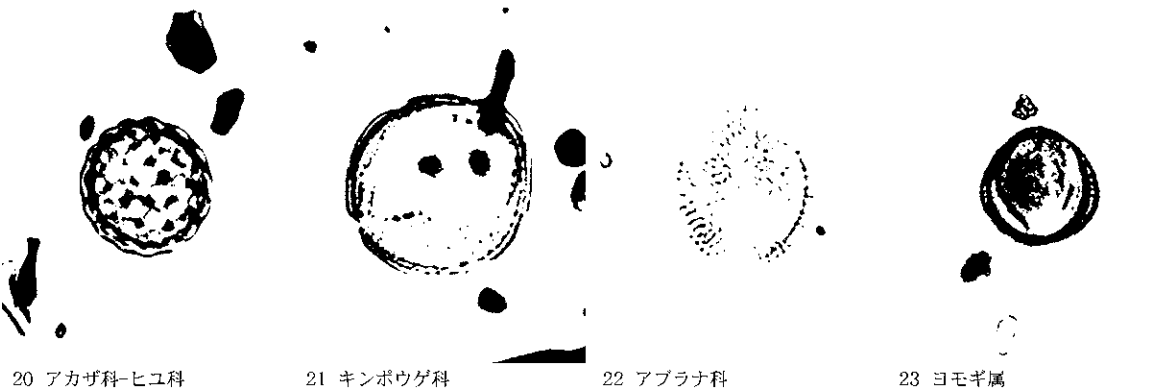
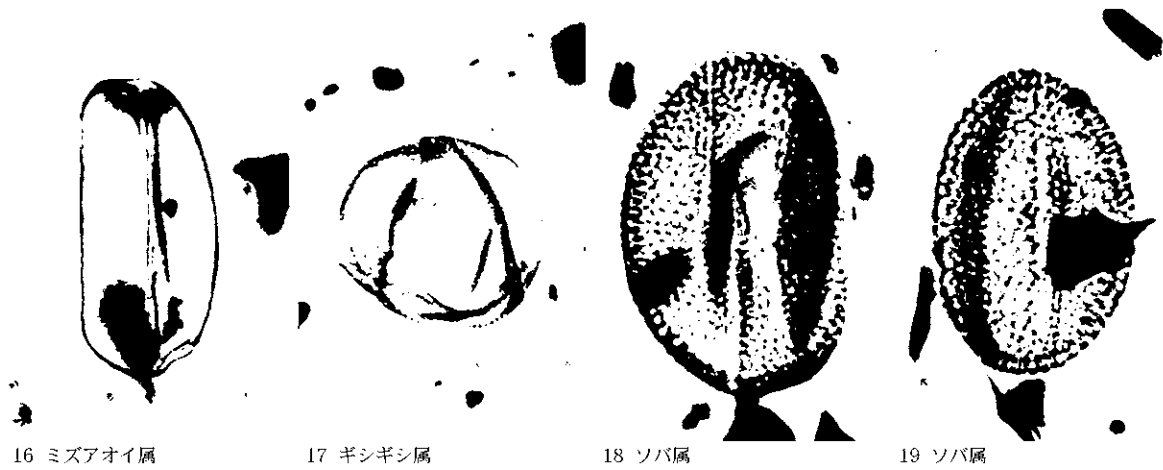


写真 23 花粉・寄生虫卵 1



— 10 μm

写真 24 花粉・寄生虫卵 2

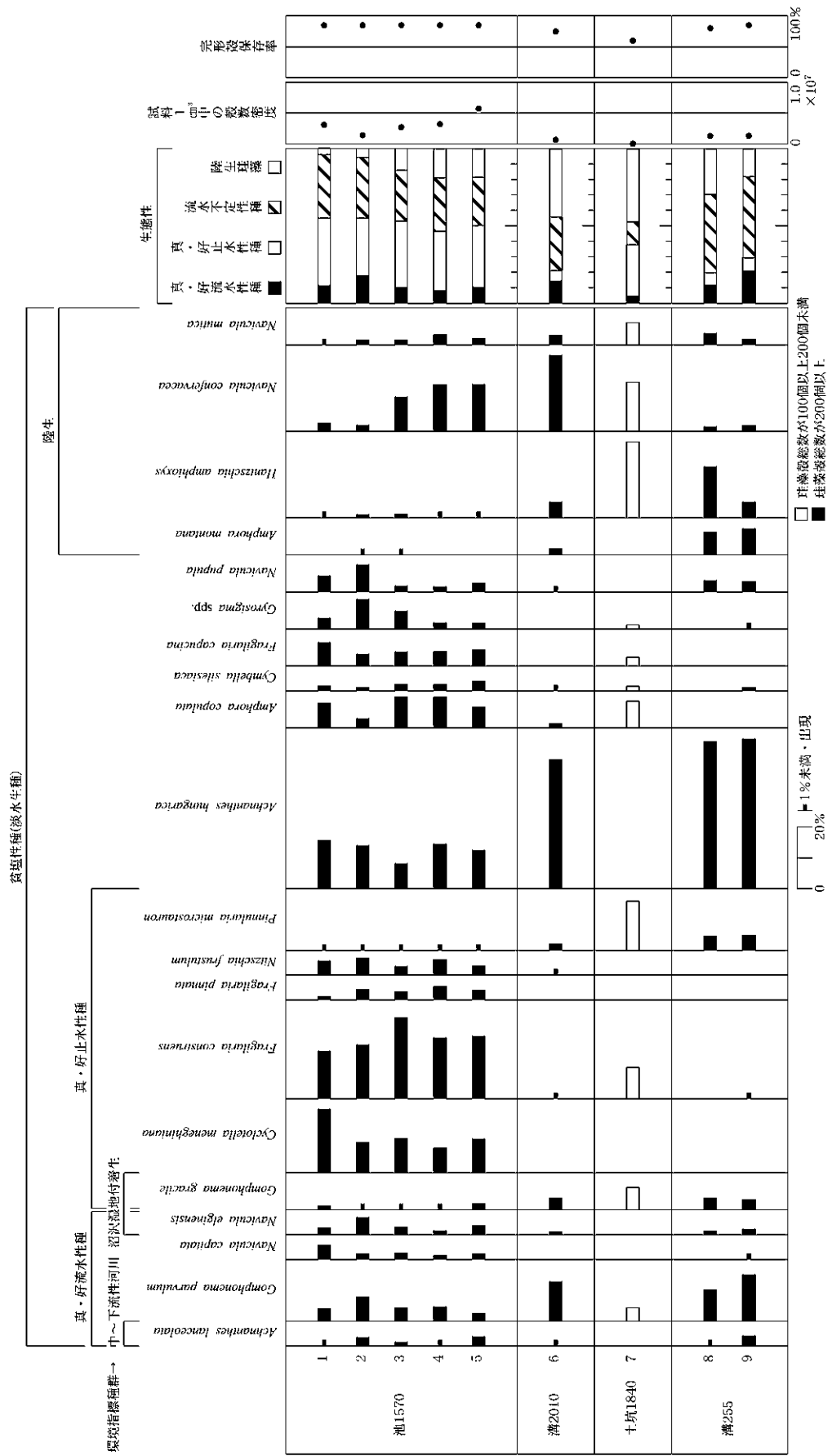


図 45 主要珪藻ダイアグラム

表 14 珪藻分析結果

分類群	池1570					溝2010	土坑1840	溝255	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
貧鹽性種 (淡水生種)									
<i>Achnanthes exigua</i>		2							
<i>Achnanthes hungarica</i>	72	55	35	43	49	124		156	132
<i>Achnanthes lanceolata</i>	3	11	5	2	12	2		1	9
<i>Amphora copulata</i>	37	12	43	30	26	4	6		
<i>Amphora montana</i>		1	3			6		24	23
<i>Amphora</i> spp.			4						
<i>Aulacoseira ambigua</i>	3		2		1				1
<i>Aulacoseira</i> spp.			4	2	4				
<i>Caloneis bacillum</i>	4	1	4	2	6				1
<i>Caloneis silicula</i>	2	1	13	9	9	1			2
<i>Caloneis</i> spp.		1			1				
<i>Cocconeis placentula</i>		1	1						
<i>Cyclotella meneghiniana</i>	95	39	48	24	43				
<i>Cymbella gracilis</i>				1					
<i>Cymbella lanceolata</i>			1						
<i>Cymbella naviculiformis</i>			1	2	2				
<i>Cymbella silesiaca</i>	7	4	9	6	12	2	1		3
<i>Cymbella tumida</i>	11		8	2	7	1	1		
<i>Cymbella turgidula</i>	1								
<i>Diatoma ehrenbergii</i>	1	1							
<i>Eunotia minor</i>	4	1	6	8	5		4	1	
<i>Eunotia monodon</i>					2				
<i>Eunotia soleirolii</i>			4	3	2	3	1		
<i>Eunotia</i> spp.	1	1	5	2					
<i>Fragilaria brevistriata</i>			1						
<i>Fragilaria capucina</i>	35	15	20	14	21		2		
<i>Fragilaria construens</i>	71	69	113	59	80	1	7		1
<i>Fragilaria construens</i> v. <i>binodis</i>	2	1	8	2	2		1		
<i>Fragilaria construens</i> v. <i>venter</i>	6	3	3	5	2		4		1
<i>Fragilaria exigua</i>	8	7	3	1	7		2		
<i>Fragilaria pinnata</i>	5	13	11	13	12				
<i>Frustulia vulgaris</i>					2			3	3
<i>Gomphonema acuminatum</i>	1				1		4		
<i>Gomphonema affine</i>						4			
<i>Gomphonema angustatum</i>									1
<i>Gomphonema augur</i>				5				1	
<i>Gomphonema augur</i> v. <i>turris</i>	9	2	2	7	5				
<i>Gomphonema clavatum</i>	1								
<i>Gomphonema clevei</i>			1	2					
<i>Gomphonema gracile</i>	6	2	1	2	8	11	5	12	9
<i>Gomphonema minutum</i>						2	1		1
<i>Gomphonema parvulum</i>	19	31	18	14	10	38	3	33	41
<i>Gomphonema</i> spp.			3	2		2	1	1	3
<i>Gomphonema truncatum</i>	1		6	3			2		
<i>Gyrosigma</i> spp.	16	38	25	6	7		1		1
<i>Hantzschia amphioxys</i>	3	4	5	1	3	15	17	54	14
<i>Melosira varians</i>								1	
<i>Navicula americana</i>			1						
<i>Navicula angusta</i>									1
<i>Navicula bacillum</i>			3	2	2				2
<i>Navicula capitata</i>	21	7	9	4	7				2
<i>Navicula confervacea</i>	12	8	48	45	60	73	11	5	5
<i>Navicula contenta</i>	3	2	1			1		5	3
<i>Navicula cryptocephala</i>									2
<i>Navicula cryptotenella</i>		1						2	1
<i>Navicula cuspidata</i>	4	3		2	2	5		2	2

分類群	池1570					溝2010	土坑1840	溝255	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
貧塩性種（淡水生種）									
<i>Navicula elginensis</i>	10	22	11	4	12	3		4	5
<i>Navicula gallica</i> v. <i>laevis</i>			3		6				1
<i>Navicula goeppertiana</i>									5
<i>Navicula hambergii</i>		1							
<i>Navicula kotschyi</i>					1	1		1	4
<i>Navicula laevis</i>			1	1	4				
<i>Navicula mutica</i>	2	6	7	10	8	9	5	12	5
<i>Navicula mutica</i> v. <i>ventricosa</i>		1						2	
<i>Navicula pupula</i>	24	35	8	5	11	2		12	9
<i>Navicula radiosa</i>									1
<i>Navicula</i> spp.		5				2		3	4
<i>Navicula veneta</i>								3	12
<i>Navicula viridula</i> v. <i>rostellata</i>	7			2	2			5	16
<i>Neidium affine</i>				1					1
<i>Neidium ampliatum</i>	2		1		5			3	7
<i>Neidium dubium</i>				1					
<i>Neidium</i> spp.		1			1				1
<i>Nitzschia brevissima</i>								1	
<i>Nitzschia frustulum</i>	21	22	12	15	12	1			
<i>Nitzschia palea</i>	2	1	1	1				4	5
<i>Nitzschia</i> spp.					1				
<i>Nitzschia umbonata</i>			2					3	5
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>			1			3		1	
<i>Pinnularia appendiculata</i>							1	2	
<i>Pinnularia borealis</i>	1		1	1			5		2
<i>Pinnularia braunii</i>					1				
<i>Pinnularia gibba</i>	4	1	1	2	4	5		4	15
<i>Pinnularia major</i>			1			1			
<i>Pinnularia microstauron</i>	2	3	1	2	3	6	11	15	13
<i>Pinnularia</i> spp.	2		1	2	1	3	1		3
<i>Pinnularia subcapitata</i>	2		1		1	5		12	5
<i>Pinnularia viridis</i>			1	3		3			3
<i>Rhopalodia gibba</i>			1						
<i>Stauroneis anceps</i>				2					
<i>Stauroneis lauenburgiana</i>									1
<i>Stauroneis nobilis</i>	1		1		1	2		1	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>			1			4	1	4	2
<i>Stauroneis smithii</i>						1			
<i>Surirella angusta</i>	1							6	5
<i>Surirella ovata</i>								3	4
<i>Synedra ulna</i>	8		5	3		1	6		3
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>	1	1	2	2	2				
貧-中塩性種（淡-汽水生種）									
<i>Navicula cincta</i>								1	1
中-真塩性種（汽-海水生種）									
<i>Cocconeis scutellum</i>							1	1	
合計	554	436	542	382	488	347	105	404	402
未同定	7	5	16	8	8	7	4	3	3
破片	97	83	97	80	76	111	75	96	64
試料 1 ml 中の殻数密度	3.1	1.4	2.7	3.2	5.7	6.5	3.1	1.3	1.3
	$\times 10^6$	$\times 10^6$	$\times 10^6$	$\times 10^6$	$\times 10^6$	$\times 10^5$	$\times 10^4$	$\times 10^6$	$\times 10^6$
完形殻保存率 (%)	85.3	84.2	85.2	83.0	86.7	76.1	59.2	80.9	86.4



1-17 ——— 10 μm
 18 ——— 10 μm

1. *Cyclotella meneghiniana* 2. *Achnanthes hungarica* 3. *Fragilaria construens* 4. *Fragilaria pinnata*
 5. *Fragilaria capucina* 6. *Pinnularia microstauron* 7. *Navicula elginensis* 8. *Navicula confervacea*
 9. *Navicula mutica* 10. *Navicula capitata* 11. *Navicula pupula* 12. *Gomphonema parvulum* 13. *Cymbella silesiaca*
 14. *Amphora copulata* 15. *Amphora montana* 16. *Nitzschia frustulum* 17. *Hantzschia amphioxys* 18. *Gyrosigma* spp.

付章8 池 1810 出土火山灰の分析

竜子正彦

1. はじめに

火山灰は平安時代後期に作庭された池 1800 の底部から出土した。池の北岸近く狭い範囲に 1 cm 以下の厚さで確認された。火山灰がこの時代に降灰したか、あるいは 2 次堆積したか、または人為的な集積かを判別する資料にするために分析を行った。

2. 火山灰分析

分析は(株)京都フィッシュン・トラックにおいて全鉱物分析、重鉱物分析、火山ガラス形態分類、火山ガラス・斜方輝石・角閃石の屈折率測定をした¹⁾。その報告により述べる。

火山灰は火山ガラスが 83% を占め、ガラスは軽石型が主で亀ノ甲型ガラスと色付ガラスを微量含んでいた。ガラス表面の水による変質であるハイドレイションは完全に飽和し、ガラス内にある真空状態の閉じた気泡に水が満ちていくスーパーハイドレイションが約 20% みられた。火山ガラスの屈折率は 1.4988 ~ 1.5009、斜方輝石の屈折率は 1.706 ~ 1.709、角閃石の屈折率は 1.672 ~ 1.692 であった。

この結果、スーパーハイドレイション現象からこの火山灰は、数 10 万年より古い大阪層群あたりの火山灰と考えられ、屈折率から相当するものは大阪層群の鍵火山灰層である約 102 万年前のピンク火山灰と確認された²⁾。

3. 小結

市街地にあたる京都盆地北部は約 80 万年以降の堆積物しか見られない³⁾。したがってピンク火山灰が池 1810 に自然堆積することは考えられない。盆地中央の平安時代後期の池底部に 2 次堆積することも考えにくく、人的営為が想定される。火山灰は均質な細かさと同程度の堅さを持つことから「磨き砂」としての利用法、あるいは火山灰が目立つ白さもつことによる儀式的または庭園内の化粧などの使用法が考えられる。



写真 26 池 1810 内土坑 1840 (北西から)
×印付近が火山灰の出土地点



写真 27 池 1810 出土の火山灰



写真 28 高島市朽木白土谷採集の火山灰

付記

文献から藤原北家との関係性がうかがえる朽木村には、火山灰が採取できる場所があり、近年まで地元の人が採取し「磨き粉」として利用していた⁴⁾。火山灰を採取する谷は白土谷と呼称されている。その白土谷の火山灰を採取し分析したところ、ピンク火山灰であった。

註

- 1) 『火山灰分析結果報告書 城巽中学内 池 1810 底部』(株)京都フィッション・トラック 2008 年
- 2) 町田 洋・新井房夫(2003)『新編火山灰アトラス』
- 3) (財)古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店 1993 年
- 4) 京都産業大学の鈴木久男氏、高島市朽木村史編さん室の石田 敏氏より御教示いただいた。

参考文献

伊藤康人・檀原 徹「更新統古琵琶湖層群中の白土谷火山灰層のテフラ年代学的・古地磁気学および岩石磁気学的特性」『第四紀研究 vol.47 No.5』日本第四紀学会 2008 年

表 15 テフラ分析結果表

分析資料名：火山灰層（池1810の底部）

全鉱物組成

火山軽 ガラス 鉱物	重 鉱物	岩片	その 他	合計	備考
166 22	3	9	—	200	火山gl：珧長質pm>bw型主。大阪層群相当テフラと判断される。 軽鉱物：pl,Qz。 重鉱物：GHb,Opq,Bt,Cpx主。Opx。 岩片：gl質・結晶質混在。 その他：—。
83.0 11.0	1.5	4.5	0.0	100.0	

bw：バブルウォール、pm：軽石、sco：スコリア、pl：斜長石、Qz：石英、af：アルカリ長石、chal：カルセドニー、Po：プラント・オパール

重鉱物分析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
—	1	4	—	79	20	—	—	6	—	110	
0.0	0.9	3.6	0.0	71.8	18.2	0.0	0.0	5.5	0.0	100.0	

ol：カンラン石、Opx,Cpx：斜方、単斜輝石、BHb,GHb：緑色・褐色角閃石、Opq：不透明鉱物、Cum：カミングトン閃石、Zr：ジルコン、Bt：黒雲母、Ap：アパタイト

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備考
17	49	39	14	11	70	—	200	+	珧長石pm>bw型。水和は完全に飽和。 色付gl,亀ノ甲glを微量含む。 Superhydration≒10~30%→数10万年より古いかな。
8.5	24.5	19.5	7.0	5.5	35.0	0.0	100.0		

H：扁平、C：中間型、T：多孔質、It：不規則型、incl：インクルージョン、devl：失透化、RI：屈折率

火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測定 個体数 (個)	屈折率最頻度 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
最小	最大				
1.4988	1.5009	1.5000	67	1.500	T,H,C

火山ガラス屈折率測定（参考資料）

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測定 個体数 (個)	屈折率最頻度 (mode)	鉱物の種類
最小	最大				
1.706	1.709	1.707	20	1.707	ハイパーシン
1.672	1.692	1.677	61	1.675	緑色ホルンブレンド

斜方輝石：劈開片上での最大屈折率 $n_2 \approx \gamma$ 、 $n_2 (\beta < n_2 < \gamma)$ 、斜長石：劈開片上での最小屈折率 $n_1 (\alpha < n_1 < \beta)$

観察表1 井戸一覧表

()は現状値、単位はm

No	名称	掘形	井筒	木枠・横棧・側板	底の施設	位置	底部標高	時期	備考
1	井戸7	円形 径2.1	石組 内径1.1		横板を方形に組む。 内法0.82、幅0.27、 厚さ0.03。	X=-109,613 Y=-22,577	34.52	14C前	
2	井戸14	円形 径1.26	瓦積?			X=-109,600 Y=-22,590	(35.44)	19C後～	
3	井戸15	円形 径1.1	瓦積?			X=-109,591 Y=-22,589	(35.43)	19C後～	
4	井戸16	円形 径1.25	瓦積 内径0.76			X=-109,585 Y=-22,589	(35.35)	19C後～	井戸枠に歪みあり、瓦は 幅0.26、0.29、厚さ0.03。 土管出土。
5	井戸26	円形 径1.25	瓦積 内径0.8			X=-109,579 Y=-22,589	(35.16)	19C後～	瓦は幅0.26、高0.29、厚 さ0.03。井筒内にレンガ、 土管、漆喰入る。
6	井戸45	円形 径3.3 ～3.4	石組 上半は漆喰 を塗る。 内径1.2			X=-109,611 Y=-22,563	(34.55)	19C後～	
7	井戸68	円形 径1.6 ～1.88	石組の上に 漆喰を塗る。 内径1.0			X=-109,604 Y=-22,543	(35.57)	19C後～ 20C	井筒に鉄パイプが刺さる。
8	井戸73	隅丸方形 南北1.1	木枠組 北・南辺に 各1枚 内法0.64		曲物を置く。 径0.4、深さ0.3。	X=-109,602 Y=-22,542	35.50	12C中～ 後	掘形径は小さい。
9	井戸80	円形 径0.94 ～1.06	縦板組(痕 跡のみ) 内径1.0			X=-109,579 Y=-22,541	(35.71)	16C後	掘形一杯に木枠を入れる。
10	井戸82	円形 径0.9	縦板組(痕 跡のみ) 内径0.8			X=-109,606 Y=-22,537	(36.20)	14C後?	掘形一杯に木枠を入れる。
11	井戸83	円形 径1.1	縦板組 内径0.8	縦板は幅0.13～0.18で 裏にタガの痕跡あり。 桶状のものを2段以上 設置。		X=-109,583 Y=-22,537	(36.39)	18C後～ 19C前	掘形に地山の黄色粘土が 多く入る。ミニチュア土 製品が多く出土。
12	井戸146	円形 径1.1	縦板組 内径0.6	縦板は幅0.1、桶か?		X=-109,574 Y=-22,564	(35.29)	16C～ 17C	
13	井戸771	円形 径1.85	石組・縦板組 内径0.95	縦板は幅0.12～0.18、 長0.9。	なし。	X=-109,595 Y=-22,549	34.33	18C～ 19C	切石を利用。下半は縦板 組み。内部に石が落ち込む。
14	井戸777	円形 径1.45	割板組 内径0.75	割板は2重に組む。内 側は長1.57。	なし。	X=-109,576 Y=-22,556	34.33	17C前	東半分は壊される。埋土は 汚れた泥。下半は細く切り そろえた縦板の2重構造。 外側の板は上部が腐食する。 埋土は汚れた泥土が入る。
15	井戸915	隅丸方形 東西 (1.05) 南北1.3	木枠組 内径0.7	縦板は幅0.25、横棧は 最下段のみ残存、内法 0.7、幅0.06、東西♂、 南北♀。隅柱あり。	横板を2重に方形に 組む。外枠は内法 0.6、幅0.2。内枠は 内法0.4、幅0.2。	X=-109,605 Y=-22,592	34.00	15C	西壁にかかる。
16	井戸1085	円形 径1.9	石組 内径1.1 四隅は大き い石で面を とる。		横板を2重に方形に 組む。外枠は内法 0.8、幅0.36。内枠 は内法0.35で東西が 0.48と長い。	X=-109,577 Y=-22,588	34.30	13C後～ 14C前	検出面より-0.8で上器を 埋納。-0.55で大きい石を 入れる。落込925底で検 出。汚れた泥土と木片が 多く入る。
17	井戸1197	隅丸方形 東西3.7 南北3.8	木枠組 内径1.1	縦板は幅0.4。横棧は 4段まで残存、幅0.9。 組み方は2・3段目と も東西♀、南北♂。 隅柱は幅0.07、長0.28 の角材を立てる。	なし。	X=-109,583 Y=-22,575	34.50	13C中	池1570埋没後に掘られる。 検出面より-1.3で木枠が 残存。この面に上器を埋 納。木枠は西側が下がる。
18	井戸1211	方形 東西1.15	木枠組 内法0.78	縦板は4枚組み。幅 0.21で長0.6まで残存、 横棧は長0.75、幅0.05。 両端は切り込みを入れ る。下が出る。隅柱は 長0.5で北西隅のみに あり。	底部中央に曲物(痕 跡のみ)、直径0.46、 深さ0.15。	X=-109,593 Y=-22,564	35.22	13C前～	北側1/3のみ残存。

()は現状値、単位はm

No.	名称	掘形	井筒	木枠・横棧・側板	底の施設	位置	底部標高	時期	備考
19	井戸1238	円形	石組 内径0.84 ~1.7			X=-109,614 Y=-22,548	(35.60)	13C後	西壁は部分的に崩れている。
20	井戸1280	円形	石組 内径0.9~1.0		横板を4重に組む、 上3段は内法0.8m 以上、幅0.15程、最 下段は内法0.59、幅 0.11で枅を作る。	X=-109,591 Y=-22,560	34.14	15C前	底は重機で確認。
21	井戸1355	隅丸方形	木枠組 内法0.85	縦板は長1.0、幅0.23 ~0.8。横棧は内法 0.85、幅0.07。東西 ♂、南北が♀。	横板を方形に組む。 内法0.8、幅0.2。東 西♀、南北♂。南 辺に長0.3、幅0.12 の板を縦に据える。	X=-109,599 Y=-22,540	35.30	12C~ 13C	東側の木枠が内側に崩れる。
22	井戸1385	隅丸方形	木枠組 内法0.72	横棧は長0.73、北と西 のみ残存し、北が♀、 西が♂。	なし。	X=-109,601 Y=-22,542	36.34	11C	
23	井戸1400	円形	石組 内径1.8		横板を3重に組む、 外枠は内法1.33、幅 0.25。中枠は内法 1.13、幅0.25。北と 東は残存しない。内 枠は内法0.88、幅は 上段0.25、下段0.13 で東は崩れる。	X=-109,592 Y=-22,541	34.30	15C後	
24	井戸1510	方形	木枠組 一辺0.9	縦板は幅0.1、横棧は 幅0.1。	なし。	X=-109,611 Y=-22,593	35.97	10C前	西壁にかかり、底は浅い。
25	井戸1539	隅丸方形	木枠組 一辺0.7	縦板は幅0.26、一辺3 枚で組まれる。横棧は 4段まで残存。内法 0.72、幅は0.06、東西 ♂、南北♀。隅柱長 0.33。	なし。	X=-109,609 Y=-22,592	34.30	13C	
26	井戸1640	円形	石組 内径1.3~1.5		なし。	X=-109,600 Y=-22,556	34.86	13C前~ 中	掘形は方形気味で、規模 は大きい。石組としては 古い。底は重機で確認。
27	井戸2007	方形	木枠組 一辺1.05	横棧内法0.95、幅0.07、 東西♀、南北♂。	なし。	X=-109,587 Y=-22,588	35.94	10C中~ 後	池1570下で検出。底部の 横棧のみ残る。
28	2区 井戸145	楕円形	木枠組 一辺1.0	縦板、幅は不明、高 0.8まで残存。	なし。	X=-109,629 Y=-22,591	34.70	14C中	東壁にかかる。断面で縦 板の痕跡を確認。
29	2区 井戸229	隅丸方形	木枠組 一辺1.0	横棧内法0.7、幅0.06。		X=-109,647 Y=-22,592	34.70	13C後	縦板は腐朽する。
30	2区 井戸250	円形	石組 内径1.0		なし。	X=-109,657 Y=-22,587	(34.80)	13C中~ 後	東は内側に落ち込む。北 壁にかかる。
31	2区 井戸276	方形	木枠組 一辺0.7	縦板は幅0.2。西は4 枚で高0.6まで残存。 横棧幅0.14。	なし。	X=-109,632 Y=-22,596	34.40	13C中	
32	3区 井戸89	楕円形	なし。		なし。	X=-109,613 Y=-22,515	35.30	16C後~ 17C前	素掘り状。
33	3区 井戸116	円形	瓦積 内径0.8		なし。	X=-109,610 Y=-22,516	34.40	19C後~	
34	3区 井戸134	円形	なし。		なし。	X=-109,611 Y=-22,524	35.85	18C中~ 19C前	素掘り状。
35	3区 井戸280	円形	曲物組 内径0.54		曲物を3段に組む。 外は内径0.54、中は 内径0.47、内は内径 0.38。	X=-109,614 Y=-22,526	36.05	11C中	溝255の北西肩に掘られ る。

観察表2 1区その他遺構出土遺物一覧表(図版58・119、写真12)

番号	器種	器形	出土遺構	遺構年代	遺物の時期	備考
897	縄文土器	深鉢	砂礫層		縄文中期	船元式瓜形文。
898	土師器	台付盤	落込925	16C後～17C前	9C後	
899	白色土器	椀	地業2000	11C後	9C	
900	白色土器	三足盤の足	土坑1598	14C前	9C	
901	白色土器	三足盤	土坑1598	14C前	11C後	
902	黒色土器	鉢の足	落込925	16C後～17C前	9C後	
903	須恵器	杯	地業2000	11C後	9C	底部外側に墨書。
904	須恵器	椀	地業2000	11C後	9C	墨書の痕跡あり。
905	須恵器	椀	池1810	11C後	9C後	緑釉型須恵器椀。山城産。
906	須恵器	壺	地業2000	11C後	10C	播磨産。
907	緑釉陶器	皿	地業2000	11C後	9C	
908	緑釉陶器	皿	落込925	16C後～17C前	9C中～後	輪花あり。
909	緑釉陶器	皿	層75	19C後	9C	陰刻花文あり。猿投産。
910	緑釉陶器	皿	上坑1598	14C前	9C	陰刻花文あり。猿投産。
911	緑釉陶器	椀	落込925	16C後～17C前	9C	山城産。
912	緑釉陶器	椀	落込925	16C後～17C前	9C	山城産。
913	緑釉陶器	椀	落込925	16C後～17C前	9C	山城産。
914	緑釉陶器	椀	落込925	16C後～17C前	9C後	猿投産。
915	緑釉陶器	壺	溝1720	12C末～13C初	9C	猿投産。
916	緑釉陶器	香炉	池1570シルト1	12C前	9C	猿投産。
917	緑釉陶器	椀	土坑919	13C～14C	11C後～12C	猿投産。
918	緑釉陶器	椀	落込925	16C後～17C前	11C後～12C	美濃産。
919	灰釉陶器	皿	地業1999	11C後	9C中～後	猿投産。
920	灰釉陶器	椀	井戸1197	13C中	11C後	高台内に墨書。
921	灰釉陶器	椀	地業2000	11C後	9C後	美濃産。
922	灰釉陶器	椀	上坑1080	17C前	11C後	
923	灰釉陶器	蓋	上坑1597	不明	9C～10C	東海系。
924	山茶椀	椀	上坑991	13C	13C	
925	輸入陶磁器	梅瓶	土坑1530	不明	13C	磁州窯。
926	輸入陶磁器	梅瓶	層810	17C～18C	13C	磁州窯。
927	輸入陶磁器	壺	層810	17C～18C	14C以降	華南三彩。
928	輸入陶磁器	鉢	土坑1173	14C前	13C後～14C前	南方系三彩。
929	輸入青磁	椀	地業1999	11C後	9C中～	越州窯。
930	輸入青磁	椀	地業2000	11C後	10C	越州窯。
931	輸入青磁	鉢	池1810	11C後	10C	越州窯。
932	土製品	円形硯	層810	17C～18C	9～10C	須恵質。
933	土製品	風字硯	土坑904	16C末～17C前	9～10C	須恵質。
934	土製品	風字硯	池1570シルト1	12C前	9～10C	須恵質。
935	土製品	風字硯	土坑1232	13C～14C	12C前以降	瓦質。
936	土製品	風字硯	溝1680	16C後	9～10C	須恵質。足部のみ。
937	土製品	風字硯	層1195	11C～13C	9～10C	黒色。
938	土製品	サイコロ状立方体	柱穴1885	11C後	11C後	サイコロ？

観察表 3 2区その他遺構出土遺物一覧表 (図版61)

番号	器種	器形	出土遺構	遺構年代	遺物の時期	備考
1153	縄文土器	深鉢	流路296		縄文中期	胎元式瓜形文。
1154	山茶碗	碗	井戸145	14C後	12C	
1155	灰釉陶器	碗	土坑222	13C後	12C	
1156	輸入白磁	皿	井戸145	14C後	12C	
1157	輸入白磁	碗	井戸145	14C後	12C	
1158	輸入青磁	碗	小穴61	不明	13C	高麗青磁象嵌。
1159	輸入青白磁	水注	土坑141	不明	13C	
1160	輸入陶磁器	梅瓶	第1面掘下げ	18C～19C	12C後～13C	磁州窯。
1161	輸入陶磁器	梅瓶	第1面掘下げ	18C～19C	12C後～13C	磁州窯。
1162	土製品	風字硯	土坑234	14C中頃	11C～12C	瓦質。

観察表 4 3区その他遺構出土遺物一覧表 (図版65)


番号	器種	器形	出土遺構	遺構年代	遺物の時期	備考
1346	白色土器	高杯	溝255	11C後	9C中～後	脚部。
1347	白色土器	台付鉢	土坑88	11C後～12C前	9～10C	台部。
1348	黒色土器	碗	層304	11C後	10C	
1349	須恵器	台付皿	土坑200	11C末～12C前	9C	東海系。
1350	須恵器	甕	土坑200	11C末～12C前	9C後～	東海系。
1351	須恵器	杯蓋	東西セクションA		9C前	つまみが付くタイプ。
1352	緑釉陶器	碗	層304	11C後	9C後	猿投産。
1353	緑釉陶器	碗	層306	11C中～後	11C前	近江系。
1354	緑釉陶器	碗	層304	11C後	10C前	篠産。
1355	緑釉陶器	碗か皿	層304	11C後	10C中～後	近江系。
1356	緑釉陶器	碗	層306	11C中～後	11C中	近江系。
1357	緑釉陶器	碗	土坑200	11C末～12C前	9C中～後	山城系。
1358	緑釉陶器	碗	層304	11C後	10C中～後	近江系。
1359	灰釉陶器	碗	層306	11C中～後	10C	
1360	灰釉陶器	碗	層306	11C中～後	10C	美濃産。
1361	輸入青磁	碗	層304	11C後	9C後～10C前	越州窯。



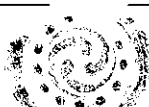




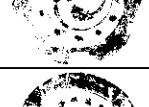



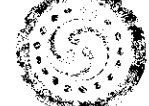

観察表 5 軒丸瓦一覧表 (図版66~69・124~127)

No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遺構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦1		緑釉単弁八葉蓮華文 子葉は盛り上がり二重に圏線が巡る。	瓦当部裏面オサエ。緑釉は裏面にも一部かかる。	軟質。 N8/ 灰白色	3区 層304 11C後～ 末	1	山城 栗柄野	平安前	
瓦2		複弁八葉蓮華文 中房は圏線が巡る。蓮子は1+5とみられる。複弁で子葉は盛り上がる。間弁はY字形。外区には珠文が粗く巡る。	瓦当部凹面タテケズリ。側面タテケズリ。裏面タテナデ。	堅緻。 N4/ 灰色	土坑1213 16C末～ 17C前		山城 西賀茂	平安前	
瓦3		複弁八葉蓮華文 中房は段状に突出する大粒の蓮子1+6。内外区の界線は二重。	瓦当部凹面タテナデ。側面タテナデ。裏面タテナデ。	軟質。 2.5Y8/2 灰白色	土坑1145 16C末～ 17C初	1	摂津 岸部	平安前	
瓦4		単弁十六葉蓮華文 中房は花弁より低く蓮子は1+4か? 珠文は大粒。	全体に磨滅著しい。	軟質。 N5/ 灰色	溝1100 16C末		山城 西賀茂	平安前	
瓦5		複弁八葉蓮華文 中房には圏線が巡る。弁間文は撥形。珠文は大粒。	瓦当部凹面タテケズリ。	軟質。 N3/ 暗灰色	池1810 11C後	3	山城 栗柄野	平安前	
瓦6		単弁十六葉蓮華文 中房が段状に突出し、蓮子は1+8とみられる。	瓦当部側面ヨコナデ。裏面タテナデ。	堅緻。 N6/ 灰色	層810 17C～ 18C		山城 西賀茂	平安前	
瓦7		複弁四葉蓮華文 中房は圏線が巡り蓮子は1+5。間弁は撥形。界線は弁端に対応してくぼむ。外区は珠文が巡る。	瓦当部凹面タテケズリ。瓦当部側面ヨコケズリ。裏面布目。一本造り技法。	堅緻。 5Y7/1 灰白色	池1570 11C末～ 12C前	3	山城 栗柄野	平安中	
瓦8		複弁八葉蓮華文 中房の蓮子は1+6。内区の文様は范が潰れているため不明。	頸部凸面ヨコケズリ。瓦当部裏面粗い布目痕を残す。一本造り技法。	軟質。 N6/ 灰色	井戸73 12C中～ 後		山城 栗柄野	平安中	
瓦9		複弁六葉蓮華文 複弁の子葉は2つ盛り上がる。間弁は三角形。外区は小粒の珠文が巡る。	瓦当部凹面ナデ。裏面布目。一本造り技法。	軟質。 N6/ 灰色	掘下げ	6	山城	平安中	
瓦10		複弁八葉蓮華文 中房の径は界線で区切る。蓮子数は1+5。花弁は長円形の弁子を2つ並べ、輪郭線で囲む。	瓦当部凹面タテナデ。裏面に粗い布目痕。一本造り技法。	軟質。 2.5Y8/2 灰白色	地業2000 11C後	6	山城	平安中	
瓦11		単弁八葉蓮華文 中房はくぼみ、1+4の蓮子。子葉はなく、外区に大粒の珠文が巡る。	全体に磨滅。瓦当部裏面布目。一本造り技法。	軟質。 10YR8/2 灰白色	2区 土坑285 11C前		山城	平安中	
瓦12		単弁十六葉蓮華文 中房に蓮子1+6。蓮弁は互いに接し子葉あり。	瓦当部側面指オサエ。瓦当部裏面布目痕。一本造り技法。	軟質。 10YR7/3 にぶい 黄橙色	層1195 11C～ 13C		山城	平安中	
瓦13		複弁四葉蓮華文 間弁は撥形。界線は弁端に対応してくぼむ。外区は珠文が巡る。	瓦当部凹面ナデ。	堅緻。 2.5Y8/2 灰白色	土坑1252 13C	6	山城 栗柄野	平安中	

No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遺構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦14		単弁八葉蓮華文 中房との境に界線。蓮子数は不明。幅広い突出した花弁で中央に細い稜線。珠文は密に配される。	全体に磨滅著しい。	軟質。 10YR8/3 浅黄橙色	池1810 11C後	3	丹波	平安中	
瓦15		単弁八葉蓮華文 中房は平坦で周りに界線を配す。内外区の界線は二重で外周には珠文が密に巡る。	瓦当部凹面ケズリ。丸瓦部凹面オサエ。顎部凸面ケズリ。裏面ナデ。接合式。	堅緻。 2.5Y5/1 黄灰色	落込925 16C末～ 17C前	4	山城 栗栖野	平安中	
瓦16		単弁十六葉蓮華文 2本の圏線内に密に珠文を配置。	瓦当部側面ヨコナデ。裏面ヨコナデ。	軟質。 N3/ 暗灰色	土坑911 16C後～ 17C			平安中	
瓦17		複弁六葉蓮華文 隆起した平坦な中房で蓮子は1+4。団子状の弁中央にくぼみを付し複弁としている。周縁は太い突帯状で珠文が巡る。	瓦当部凹面タテナデ。平瓦部凹面縄タタキをナデで消す。顎部凸面指オサエ。裏面ナデ。	軟質。 N5/ 灰色	土坑932 13C～ 14C	11	山城	平安中	
瓦18		複弁六葉蓮華文 隆起した平坦な中房で蓮子は1+4。団子状の弁の中央にくぼみを付し、開弁状の切れ込みをつける。	瓦当部凹面タテナデ。平瓦部凹面縄タタキ。顎部凸面指オサエ。裏面ナデ。	堅緻。 N5/ 灰色	土坑919 13C～ 14C	10	山城	平安中	
瓦19		複弁八葉蓮華文 弁の大きさは不揃い。凸形中房。蓮子は不明。	瓦当部凹面ナデ。丸瓦部凹面ナデ。顎部凸面ヨコナデ。裏面指オサエ、ナデ、布目痕。	軟質。 N4/ 灰色	土坑899 16C後～ 17C	5	山城	平安中	
瓦20		複弁八葉蓮華文 中房は凸形。弁は互いに接し、子葉はやや盛り上がる。	瓦当部凹面ナデ。顎部凸面ヨコナデ。裏面指オサエ、ナデ、布目痕。	軟質。 N4/ 灰色	土坑888 16C後～ 17C	6	山城	平安中	
瓦21		複弁八葉蓮華文 中房は凸形で蓮子はみられない。団子状に膨らんだ弁の中央にくぼみを付し複弁としている。	顎部凸面指オサエ。瓦当部側面指オサエ。	軟質。 N5/ 灰色	池1570 11C末～ 12C前	5	山城	平安中	
瓦22		複弁八葉蓮華文 中房は凸形で蓮子1+8。団子状に膨らんだ弁の中央にくぼみを付し複弁としている。瓦当面に范の木目、范傷あり。	瓦当部凹面タテナデ。平瓦部凹面オサエ。顎部凸面指オサエ。裏面布目痕。一本造り技法。	軟質。 N5/ 灰色	土坑932 13C～ 14C	5	山城	平安中	
瓦23		複弁八葉蓮華文 中房は凸形で蓮子はみられない。団子状の弁の中央にくぼみを付し複弁としている。瓦当面に范の木目がみられる。	瓦当部凹面タテナデ。側面指オサエ。顎部凸面指オサエ。裏面ナデ。	軟質。 5Y8/1 灰白色	土坑932 13C～ 14C	5	山城	平安中	
瓦24		単弁八葉蓮華文 中房は平坦で蓮子は1+8。蓮弁は互いに接し、弁端は界線に接する。外区の珠文周りに唐草が左回りに巡る。	顎部凸面ヨコケズリ。瓦当部裏面指オサエ、ナデ。裏面上端部に丸瓦との接合面あり。	軟質。 2.5Y5/1 黄灰色	3区 厨304 11C後～ 末	3	山城	平安中	
瓦25		複弁八葉蓮華文。 中房は凸形で蓮子数は不明。蓮弁は互いに接する。外区は小粒の珠文の周りに唐草文が右回りに巡る。	瓦当部凹面タテナデ。顎部凸面指オサエ。裏面タテナデ。	軟質。 N4/ 灰色	3区 北西拡張 区	7	山城	平安中	
瓦26		複弁八葉蓮華文。 中房は凸形で蓮子数は不明。蓮弁は互いに接する。外区は小粒の珠文の周りに唐草文が右回りに巡る。	瓦当部凹面タテナデ。平瓦部凹面縄タタキ。顎部凸面ナデ、指オサエ。裏面布目痕。一本造り技法。	堅緻。 N5/ 灰色	Y=22.560 南北セク ション		山城 森ヶ東	平安中	




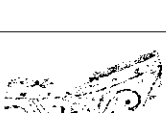

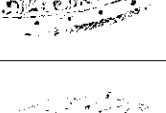
No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遊構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦27		単弁八葉蓮華文 中房は平坦で圏線が巡り、蓮子は1個。内区は一段高く、蓮弁は凹む。外区は珠文が密に巡る。	顎部凸面指ナデ、オサエ。	軟質。 5Y5/1 灰色	3区 溝255 11C後～ 末		山城 栗柄野	平安中	
瓦28		複弁八葉蓮華文 八葉の間には小さく尖ったのぞき花弁を配す。大きい平坦な中房に1+12の蓮子が二重に巡る。	瓦当部凹面ヨコナデ。顎部凸面ヨコナデ。裏面オサエ、ナデ。	堅緻。 10YR8/2 灰白色	土坑1080 17C前	4		平安中	
瓦29		複弁八葉蓮華文 八葉の間にはのぞき花弁は瓦28に比べ小さくやや丸みをもつ。中房は大きく蓮子は二重に巡る。	瓦当部凹面ヨコナデ。裏面ヨコナデ。	堅緻。 10YR8/2 灰白色	層1505 12C前	11		平安中	
瓦30		複弁六葉蓮華文 中房は平坦で蓮子は1+6。蓮弁・間弁は凸線。外区は珠文が粗く巡る。瓦当部范ズレ。	瓦当部凹面ヨコケズリ。	軟質。 N8/ 灰白色	3区 X=614 東西セク ション	5	山城 栗柄野	平安後	
瓦31		複弁八葉蓮華文 中房は平坦で蓮子は1+6。子葉は細長い。蓮弁・間弁は凸線。外区は珠文が粗く巡る。瓦当面上半に斜め方向の範傷。	瓦当部凹面ヨコケズリ。平瓦部凹面タテナデ。顎部凸面ヨコケズリ。裏面オサエ。	堅緻。 N5/ 灰色	3区 第3面 瓦溜り	7	山城 栗柄野	平安後	
瓦32		複弁六葉蓮華文 子葉は丸みを帯びる。中房は平坦で蓮子は1+6。蓮弁・間弁は凸線。瓦当部下半に斜め方向に範傷。	瓦当部凹面ヨコケズリ、タテナデ、瓦当部凸面に「十」刻印あり。瓦当部側面ヨコケズリ。裏面ナデ。	堅緻。 N8/ 灰白色	3区 柱穴251 12C初	4	山城 栗柄野	平安後	
瓦33		複弁八葉蓮華文 中房は平坦で蓮子は1+6。蓮弁・子葉は凸線。外区は大粒の珠文が密に巡る。瓦当面は楕円形。	全体に磨滅している。瓦当部裏面オサエ。裏面上部に丸瓦を当て接合。	軟質。 5Y8/1 灰白色	土坑935 16C後～ 17C	14	山城 栗柄野	平安後	
瓦34		単弁八葉蓮華文 中房はやや盛り上がり、蓮子は1+6。蓮弁は方形で子葉あり。間弁は凸線。	顎部凸面ナデ。裏面オサエ。	堅緻。 N7/ 灰白色	池1570 11C末～ 12C前		山城 栗柄野	平安後	
瓦35		単弁八葉蓮華文 中房は凹形。蓮子は十字状に細長い。間弁は三角形。	瓦当部凹面ケズリ。顎部凸面ケズリ。裏面オサエ。	軟質。 N4/ 灰色	池1810 11C後			平安後	
瓦36		複弁八葉蓮華文 中房は中央が盛り上がり圏線が巡る。蓮子は1+8、複弁は互いに接する。	瓦当部凹面、ヨコケズリ。丸瓦部凹面ヨコナデ。顎部凸面ヨコケズリ。裏面指オサエ、ナデ。	堅緻。 N5/1 灰色	層810 17C～ 18C	4	播磨	平安後	
瓦37		複弁八葉蓮華文 凹形の中房で蓮子は1+8。子葉はわずかに盛り上がる。	瓦当部凹面ケズリ。顎部凸面ケズリ。裏面オサエ。	堅緻。 N5/ 灰色	池1570 11C末～ 12C前		播磨	平安後	
瓦38		三巴文 右巻き。頭部は離れ、尾部は互いに接し界線となる。	瓦当部凹面ケズリ。顎部凸面ケズリ。瓦当部裏面オサエ。	軟質。 N6/ 灰色	層905	3	山城	平安後	
瓦39		三巴文 右巻き。頭部は離れ、尾部は接しない。	顎部凸面ケズリ。瓦当部裏面オサエ。	軟質。 2.5Y5/1 黄灰色	落込925 16C末～ 17C前	3	山城	平安後	


No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遺構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦40		三巴文 左巻き。頭部は離れ、尾部は互いに接しない。外区は珠文が大きく、密に巡る。	瓦当部裏面オサエ。	軟質。 5Y7/1 灰白色	屑810 17C~ 18C		山城	平安後	
瓦41		巴文 右巻き。尾部は互いに接する。	瓦当部凹面ヨコナデ。 丸瓦部凹面縄タタキ。 瓦当部裏面オサエ。	軟質。 5Y8/1 灰白色	土坑852 17C末~ 18C初		山城	平安後	
瓦42		複弁八葉蓮華文 中房は凸形で「卍」を配する。蓮弁は互いに接し子葉は盛り上がる。外区は珠文が巡る。	瓦当部凹面ナデ。裏面オサエ。	軟質。 10YR7/4 にぶい黄 橙色	土坑1080 17C前		山城	鎌倉	
瓦43		複弁八葉蓮華文 中房は凸形で蓮子の有無は不明。蓮弁は互いに接し子葉は2つに盛り上がる。外区は珠文が巡る。	顎部凸面ケズリ。裏面オサエ。	軟質。 2.5Y8/2 灰白色	土坑1146 16C末		山城	鎌倉	
瓦44		複弁八葉蓮華文 中房は凸形で「卍」字を置く。蓮弁は互いに接し子葉は2つに盛り上がる。外区は珠文が巡る。	瓦当部凹面ナデ。裏面指オサエ。	軟質。 10YR8/4 浅黄橙色	土坑1175 13C後	4	山城	鎌倉	
瓦45		複弁八葉蓮華文 中房は凸形で「卍」を配する。蓮弁は互いに接し子葉は盛り上がる。外区は珠文が密に巡る。	瓦当部裏面タテナデ。	堅緻。 7.5YR6/1 褐灰色	土坑1175 13C後	3	山城	鎌倉	
瓦46		複弁八葉蓮華文 中房は凸形で蓮子数は不明。蓮弁は互いに接し子葉は2つに盛り上がる。	瓦当部凹面ナデ。瓦当部側面ヨコナデ。瓦当部裏面指オサエ。	堅緻。 10YR7/3 にぶい黄 橙色	落込925 16C末~ 17C前	4	山城	鎌倉	
瓦47		三巴文 右巻き。頭部は離れ、尾部は接しない。	瓦当部裏面オサエ。	軟質。 2.5Y8/1 灰白色	落込925 16C末~ 17C前	12	山城	鎌倉	
瓦48		三巴文 右巻き。頭部は離れ、尾部は接しない。	顎部凸面ケズリ。瓦当部裏面オサエ、ヨコケズリ。	軟質。 7.5YR8/3 浅黄色	落込925 16C末~ 17C前	12	山城	鎌倉	
瓦49		三巴文 左巻き。頭部は離れ、尾部は接しない。	瓦当部側面ヨコナデ。顎部凸面ナデ。裏面指オサエ。	軟質。 10YR8/3 浅黄橙色	3区 井戸89 17C前~ 中		山城	鎌倉	
瓦50		三巴文 左巻き。尾部は接しない。	顎部凸面ケズリ。瓦当部裏面オサエ。	堅緻。 N5/0 灰色	土坑1530 17C?	7	山城	鎌倉	
瓦51		三巴文 右巻き。頭部は離れ、尾部は接しない。大粒の珠文が巡る。	瓦当部凹面ケズリ。瓦当部裏面ケズリ。丸瓦部凸面オサエ。	堅緻。 N4/0 灰色	土坑1080 17C前	27		江戸前	
瓦52		三巴文 右巻き。頭部は離れ、尾部は接しない。	瓦当部凹面ヨコナデ。丸瓦部凹面タテナデ。瓦当部裏面オサエ、ナデ。	堅緻。 N2/0 黒色	3区 櫻丸17			江戸前	


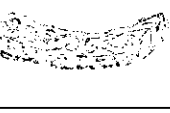











No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遺構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦53		三巴文 右巻き。頭部は離れ、尾部は互いに接し界線となる。大粒の珠文が巡る。	顎部凸線ケズリ。瓦当部裏面指ナデ。	堅緻。 N4/ 灰色	上坑1179 16C末～ 17C初	21		江戸前	
瓦54		三巴文 右巻き。頭部は離れ、尾部は接しない。珠文は密に巡る。	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面タテナデ。瓦当部裏面オサエ、ナデ。丸瓦部凸面布目痕。	軟質。 5Y2/1 黒色	井戸146 16C～ 17C			江戸前	
瓦55		三巴文 右巻き。頭部は離れ、尾部は接しない。大粒の珠文13個が巡る。	瓦当部側面ヨコナデ。裏面斜め方向のナデ。	軟質。 2.5Y8/2 灰白色	上坑130 18C末～ 19C初			江戸前	
瓦56		三巴文 右巻き。頭部は離れ、尾部は接しない。大粒の珠文が巡る。	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面タテナデ。玉縁部近くに径1.0cmの穿孔。瓦当部裏面ナデ。丸瓦部凸面布目痕。	堅緻。 N5/ 灰色	井戸146 16C～ 17C			江戸前	
瓦57		三巴文 右巻き。頭部は離れ、尾部は接しない。大粒の珠文が巡る。	瓦当部凹面ケズリ。裏面ケズリ。	軟質。 N4/ 灰色	層810 17C～ 18C	12		江戸前	
瓦58		三巴文 右巻き。頭部は離れ、尾部は接しない。珠文は16個。	外縁ナデ。瓦当部裏面ナデ。平瓦部裏面布目痕。	堅緻。 N5/ 灰色	溝1100 16C末			江戸前	
瓦59		三巴文 右巻き。頭部は離れ、尾部は接しない。珠文は11個。	瓦当部凹面ヨコナデ。丸瓦部凹面タテナデ。顎部凸面ヨコナデ。裏面ナデ。	軟質。 5Y6/1 灰色	井戸146 16C～ 17C			江戸中	
瓦60		三巴文 右巻き。頭部は離れ、尾部は接しない。珠文は16個。	瓦当部凹面ヨコナデ。顎部凸面ヨコケズリ。裏面ナデ、オサエ。	堅緻。 2.5Y8/3 淡黄色	上坑4 19C後			江戸中	
瓦61		三巴文 左巻き。頭部は離れ、尾部は接し界線となる。珠文は11個。	瓦当部凹面タテナデ。顎部凸面ヨコナデ。裏面指オサエ。	堅緻。 N4/ 灰色	上坑834 18C初～ 前	5		江戸中	
瓦62		三巴文 左巻き。頭部は離れ、尾部は接し界線となる。珠文は16個。	瓦当部凹面ヨコナデ。丸瓦部凹面タテナデ。顎部凸面ヨコナデ。裏面オサエ。	堅緻。 N4/ 灰色	井戸83 18C後～ 19C前	1		江戸中	
瓦63		三巴文 左巻き。頭部は離れ、尾部は接し界線となる。珠文は17個。	瓦当部凹面ヨコナデ。丸瓦部凹面タテナデ。顎部凸面ヨコナデ。裏面指オサエ、ナデ。	堅緻。 N3/ 暗灰色	2区 柱穴242 16C後	1		江戸	
瓦64		菊花文 有周縁。中房は粒状。単弁十六葉。一重菊。瓦当面にキラコ。	外縁はナデ。瓦当裏面ナデ、オサエ。	軟質。 N3/ 暗灰色	上坑90 19C前			江戸後	棟丸瓦
瓦65		菊花文 無周縁で菊花文を配する。中房は凸形。単弁八葉。	瓦当部凹面タテナデ。顎部凸面ヨコナデ。裏面ナデ。	軟質。 N4/ 灰色	2区 上坑16 17C中頃 ～後			江戸前	棟丸瓦

No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遺構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦66		丸瓦当は右巻きの三巴文。珠文は13個。平瓦当は凸形唐草文。	丸瓦部凹面タテナデ。顎部凸面ヨコナデ。裏面ナデ、オサエ。	堅緻。N3/0 暗灰色	3区 攪乱17	4		江戸後	軒棧瓦
瓦67		丸瓦当は右巻きの三巴文。平瓦当は凸形唐草文。	丸瓦部凹面タテナデ。顎部凸面ヨコナデ。裏面オサエ。	堅緻。N3/0 暗灰色	土坑8 20C	12		江戸後	軒棧瓦
瓦68		文様は不明。周縁部に金箔が残る。	瓦当部凹面ヨコナデ。丸瓦部凹面タテナデ。裏面指ヨコナデ、刷毛目。	軟質。N3/0 暗灰色	2区 柱穴154 16C後			桃山	金箔瓦
瓦69		文様は不明。表面に金箔が残る。	裏面ケズリ。	軟質。N5/0 灰色	土坑977 13C～ 14C?			桃山	金箔瓦
瓦70		単弁八葉菊花文。有周縁の丸瓦当で八葉菊花文。凸形中房。瓦当部に金箔を施す。	外縁ナデ。裏面オサエ、ナデ。	軟質。2.5Y4/1 黄灰色	3区 掘下げ			桃山	金箔瓦
瓦71		大きな二葉と枝状のものがみられるが、不明。	裏面ヨコケズリ。ヨコナデ。	堅緻。2.5Y7/1 灰白色。	土坑1352 16C後～ 17C初			江戸	道具瓦

観察表6 軒平瓦一覧表 (図版70～73・128～131)

No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遺構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦72		重郭文。難波宮7574型式。圈内に弧線あり。	顎部凸面ヨコナデ。平瓦部凹面に細かい布目残存。顎部凹面端部ヨコナデ。	堅緻。N7/0 灰白色	層900 17C	4		奈良	平瓦部凸面にベンガラ付着。
瓦73		重郭文。難波宮6527型式。	瓦表面は全体に磨滅している。	堅緻。2.5Y8/1 灰白色	土坑1207 16C末～ 17C前	2		奈良	
瓦74		「西」銘均整唐草文。中心飾りは対向C字形。左右に3反転する唐草。右下外区の珠文間に「西」銘を横向きに置く。	顎部凸面ヨコナデ。裏面ナデ。平瓦部凸面ナデ。	堅緻。N4/0 灰色	層810 17C～ 18C	9		平安前	
瓦75		均整唐草文。平城宮6694-A型式。	凹面ヨコケズリ、布目痕残る。顎部凸面、裏面磨滅著しい。	軟質。N5/0 灰色	池1570 11C末～ 12C前			奈良	
瓦76		均整唐草文。中心飾りは「小」字形。唐草文は左右に3反転する。珠文は小粒で巡る。	瓦当部凹面ヨコケズリ。顎部凸面ヨコケズリ。曲線顎。	軟質。5Y8/1 灰白色	井戸1510 10C前	5	山城 西賀茂	平安前	
瓦77		均整唐草文。中心飾りは「小」字形。唐草文は左右に3反転する。珠文は大粒。	磨滅著しい。	軟質。10YR7/4 にぶい黄褐色	池1810 11C中～ 後	5	山城 西賀茂	平安前	


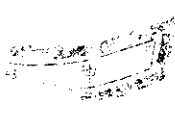





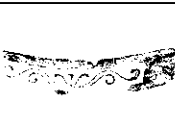
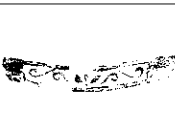

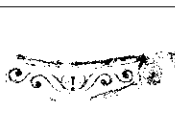

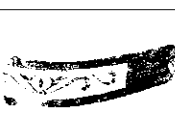
No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遊構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦78		均整唐草文 中心飾りは対向C字形。C 字左側に範傷。唐草文は両 側に2反転する。珠文は粗 く巡る。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 顎部凸面ヨコケズリ。 裏、側面タテケズリ。 曲線顎。	軟質。 7.5YR8/1 灰白色	池1570 11C末～ 12C前	2	摂津 岸部	平安前	
瓦79		均整唐草文 中心飾りは「小」字形。唐 草文は左右に3反転。	瓦当部凸凹面共にヘラ ケズリ。側面に縄目タ タキ痕残る。	軟質。 7.5YR8/3 浅黄橙色	土坑1598 14C前		摂津 岸部	平安前	
瓦80		均整唐草文 中心飾りは対向C字形。唐 草文は左右に3反転する。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 平瓦部凹面布目痕。顎 部凸面ケズリ。側面タ テナデ。曲線顎。	砂粒含み 荒い。 2.5Y8/1 灰白色	3区 土坑68 16C後～ 17C前		山城	平安前 ～中	
瓦81		均整唐草文 中心飾りは対向C字形で中 心に紡錘形の小叶を配する。 唐草文は左右に3反転する。 外区には人粒の珠文が巡る。	全体に磨滅している。 平瓦部凹面に布目痕あ り。曲線顎。	軟質。 N4/1 灰色	井戸1238 13C後		山城 上庄田	平安前 ～中	
瓦82		均整唐草文 中心飾りは対向C字形。唐 草文は左右に3反転する。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 平瓦部凹面ヨコケズリ。 顎部凸面ヨコナデ。側 面タテナデ。曲線顎。 半折り曲げ。	堅緻。 5Y7/1 灰白色	池1570 11C末～ 12C前		山城	平安前 ～中	
瓦83		均整唐草文 中心飾りは対向C字形。唐 草文は中心から左右に展開 する。	瓦当部凹面欠損。顎部 凸面ヨコナデ。曲線顎。	砂粒含み 軟質。 2.5Y7/2 灰黄色	層810 17C～ 18C		山城 池田	平安中	
瓦84		均整唐草文 左右から中心へ展開する唐 草文。	瓦当部凹面に布目痕。 顎部凸面ヨコケズリ。 曲線顎。	堅緻。 N4/ 灰色	落込925 16C末～ 17C前		山城	平安中	
瓦85		均整唐草文 唐草文は変形し、波状に表 現される。	全体に磨滅が著しい。 凹面に布目痕跡。曲線 顎。	軟質。 2.5Y8/1 灰白色	3区 層304 11C後～ 末		山城	平安中	
瓦86		均整唐草文 中心飾りは「上」字形。唐 草は中心から左右に反転す る。	瓦当部凹面ヨコケズリ とタテナデを併用する。 瓦当部裏面ヨコナデ。 顎部凸面ヨコナデ。	堅緻。 N4/ 灰色	上坑977 13C～ 14C?	2	山城 河上	平安中	
瓦87		唐草文 唐草文は直線化した茎に不 規則に支葉が配される。文 様は中心から左右に展開す る。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 凹面布目残存。顎部凸 面ヨコケズリ。裏面ヨ コナデ、オサエ。	堅緻。 N5/ 灰色	3区 瓦敷302	6	山城	平安中	
瓦88		均整唐草文 唐草文は中心で交差し、両 側に展開する。主葉は連続 して強く巻き込み、第2単 位からは波形。	瓦当部凹面、顎部凸面 は欠損。包み込み技法。	軟質。 5Y8/1 灰白色	層1195 11C～ 13C	5	播磨	平安中	
瓦89		均整唐草文 中心飾りは背向C字形。唐 草文は左右に3反転する。 外区の珠文は小粒で密。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 平瓦部凹面は布目。顎 部凸面磨滅著しい。	軟質。 10YR8/4 浅黄橙色	3区 土坑200 11C末		丹波 王子	平安中	
瓦90		偏行唐草文 唐草文は上下に反転しなが ら右行。珠文は竹管状で大 粒。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 平瓦部布目。顎部凸面 ヨコケズリ。	軟質。 2.5Y7/1 灰白色	土坑999 13C～ 14C		大和	平安中	永承2年(1047) 興福寺再建時の 瓦。

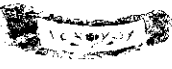




No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遺構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦91		均整唐草文 左右に唐草がゆるやかに反転する。範の痛みが激しい。外区に大粒の珠文が巡る。	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面粗い布目。顎部凸面ヨコナデ。平瓦部凸面タテナデ。	堅緻。 N4/ 灰色	溝1855 11C後		山城	平安中	
瓦92		均整唐草文 唐草文は左右から中央に向かう。唐草は飛雲文状を呈する。外区に珠文巡るが範ズレのため下側のみ。	瓦当部凹面ヨコケズリ。平瓦部凹面粗い布目。顎部凸面ヨコケズリ。裏面指オサエ。	軟質。 N8/ 灰白色	土坑918 16C後～ 17C前	18	山城	平安中	
瓦93		均整唐草文 唐草文は左右から中央に向かう。唐草は飛雲文状を呈する。外区に珠文巡る。内区中央に範傷あり。	瓦当部凹面ヨコケズリ。平瓦部凹面布目。顎部凸面ヨコケズリ。裏面指オサエ。	堅緻。 N4/ 灰色	落込925 16C末～ 17C前	18	山城	平安中	
瓦94		均整唐草文 唐草文は左右から中央に向かう。唐草は飛雲文状を呈する。外区は小粒の珠文が巡る。範傷、範ズレが顕著。	瓦当部凹面ヨコケズリ。平瓦部凹面布目。顎部凸面ヨコケズリ。裏面強い指オサエ。側面ナデ。	堅緻。 N5/ 灰色	層905	7	山城	平安中	
瓦95		均整唐草文 唐草文は左右から中央に向かう。唐草は飛雲文状を呈する。外区に珠文巡る。範ズレ、範傷あり。	瓦当部凹面ヨコケズリ。平瓦部凹面布目。顎部凸面ヨコケズリ後ナデ。裏面指オサエ。	軟質。 10YR8/2 灰白色	土坑1239 不明	8	山城	平安中	
瓦96		蓮弁文 蓮弁を放射状に配する。蓮弁は複弁。左端のみが単弁。弁は互いに接し、蓮弁間に小さな間弁がみられる。	瓦当部凹面布目。顎部凸面ヨコケズリ。	堅緻。 2.5Y8/3 淡黄色	土坑1213 16C末?	4		平安中	
瓦97		蓮弁文 蓮弁を放射状に配する。蓮弁は複弁。左端のみが単弁。弁は互いに接し、蓮弁間に丸味をもつ間弁がみられる。	瓦当部凹面布目。顎部凸面ヨコケズリ。段顎。	堅緻。 10YR8/3 浅黄橙色	層810 17C～ 18C	10		平安中	
瓦98		蓮弁文 蓮弁を放射状に配する。蓮弁は複弁。弁は互いに接し、蓮弁間に尖り気味の間弁がみられる。	瓦当部凹面布目。顎部凸面、裏面ヨコケズリ。側面タテケズリ。段顎。	堅緻。 7.5YR7/4 にぶい橙色	土坑950 16C末～ 17C初	7		平安中	
瓦99		斜格子文 へら描きで連菱状。	瓦当部凹面ヨコケズリ。平瓦部凹面布目。顎部凸面ヨコナデ。裏面オサエ。曲線顎。	軟質。 N5/ 灰色	地業2000 11C後	2	山城	平安中	
瓦100		斜格子文 へら描きで連菱状。	瓦当部凹面ヨコケズリ。平瓦部凹面布目。裏面オサエ。側面タテナデ。	軟質。 2.5Y5/1 黄灰色	土坑919 13C～ 14C		山城	平安中	
瓦101		幾何学文 方形状の文様が重複し、方形左下に点状のものがみられる。	瓦当部凹面布目。顎部凸面磨滅。裏面オサエ。側面タテナデ。	軟質。 5Y8/1 灰白色	層905 空白		山城	平安中	
瓦102		斜格子文 格子は縦長。中に紡錘形を配す。	瓦当部凹面ケズリ。平瓦部凹面布目。顎部凹面ケズリ。裏面ナデ。半折り曲げ。曲線顎。	軟質。 2.5Y8/3 淡黄色	3区 層304 11C後～ 末		山城	平安中 ～後	
瓦103		均整唐草文 唐草文は左右から中心に向かう。文様は中心に交わる。	瓦当部凹面・平瓦部凹面布目。顎部凸面ヨコケズリ。裏面ヨコナデ。指オサエ。半折り曲げ。曲線顎。	軟質。 N3/ 暗灰色	3区 層304 11C後～ 末	22	山城 栗栖野	平安中 ～後	

No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遊構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦104		均整唐草文 唐草文は左右から中央に展開し、文様は中心で交わる。主葉は3反転し支葉は巻き込む。范傷が多く見られる。	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面布目。頸部凸面ヨコケズリ。裏面ヨコナデ。曲線顎。	軟質。 5Y6/1 灰色	土坑954 16C後～ 17C初	5	山城 森ヶ東	平安中 ～後	
瓦105		均整唐草文 両側から中心に唐草が展開する。斜め方向の范傷が顕微。	瓦当部・平瓦部凹面布目。頸部凸面ヨコケズリ。裏面オサエ。半折り曲げ。曲線顎。	軟質。 5Y6/1 灰色	層1505 12C前		山城 栗栖野	平安中 ～後	
瓦106		偏行唐草文 唐草は左から右へ偏行する。主葉は連続して大きく反転し、左端界線外に范傷が見られる。	瓦当部凹面ケズリ。平瓦部凹面布目。端のマツリ痕あり。頸部凸面ケズリ。裏面はナデ。半折り曲げ。曲線顎。	堅緻。 N4/ 灰色	3区 層304 11C後～ 末	5	山城 栗栖野	平安後	
瓦107		偏行唐草文 左から右へ偏行する。主葉は連続して大きく反転。支葉は強く巻き込む。	瓦当部凹面ヨコケズリ、指オサエ。平瓦部凹面布目。頸部凸面ヨコケズリ。裏面タテナデ。「」刻印あり。	堅緻。 N4/ 灰色	3区 瓦敷302	20	山城 栗栖野	平安後	
瓦108		偏行唐草文 左から右へ偏行する。主葉は連続して大きく反転し、支葉は巻きが強い。	瓦当部凹面・平瓦部凹面布目。頸部凸面ケズリ。裏面ケズリ。半折り曲げ。	軟質。 2.5Y8/2 灰白色	池1570 11C末～ 12C前		山城 栗栖野	平安後	
瓦109		偏行唐草文 唐草文は左から右行きで、主葉は連続して大きく反転し、支葉は巻きが強い。	瓦当部凹面端部ヨコケズリ。平瓦部凹面布目。頸部凸面ヨコケズリ。裏面オサエ。	軟質。 2.5Y8/2 灰白色	池1570 11C末～ 12C前		山城 栗栖野	平安後	
瓦110		宝相華唐草文 簡略化した半截花文を中心飾りとし、先端が2つに分枝した主葉が反転。	瓦当部凹面ヨコナデ。頸部凸面ヨコナデ。包み込み技法。	堅緻。 N6/ 灰色	池1570 11C末～ 12C前		播磨	平安後	
瓦111		宝相華唐草文 中心飾りは花文。左右には唐草文が展開する。	瓦当部凹面布目。平瓦部凹面布目。頸部凸面ヨコナデ。裏面ヨコナデ。	堅緻。 7.5Y6/1 灰色	土坑1200 14C前	2	備前・ 備中系	平安後	
瓦112		均整唐草文 唐草文は中心から左右に3反転して展開する。	瓦当部凹面布目。頸部凸面ヨコナデ。裏面指オサエ。側面タテナデ。	堅緻。 N6/ 灰色	3区 層304 11C後～ 末			平安後	
瓦113		均整唐草文 主葉は緩やかに反転し、支葉は強く巻き込む。	瓦当部凹面・平瓦部凹面ナデ。頸部凸面ヨコケズリ。裏面オサエ。平瓦部凸面は平行タタキ。曲線顎。	堅緻。 N6/ 灰色	池1570 11C末～ 12C前	2	播磨	平安後	
瓦114		均整唐草文 半截花文を中心に唐草文が左右に展開する。主葉は大きく反転し、支葉は強く巻き込む。	瓦当部・平瓦部凹面ナデ。頸部凸面ヨコナデ。裏面オサエ、ナデ。側面ナデ。瓦当成形は包み込み式。	堅緻。 10YR7/1 灰白色	池1570 11C末～ 12C前	2	播磨	平安後	
瓦115		均整唐草文 唐草文は中心から両側に展開するとみられる。	瓦当部凹面は欠損。平瓦部凹面ケズリ。頸部凸面ケズリ。裏面はナデと指オサエ。曲線顎。	堅緻。 N5/ 灰色	土坑1280 15C前		播磨	平安後	
瓦116		均整唐草文 唐草文の主葉は連続して大きく反転し、支葉は巻き込み、先端は分かれ蕾が付く。	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面布目。頸部凸面、裏面ヨコナデ。	堅緻。 N4/ 灰色	池1570 11C末～ 12C前		播磨	平安後	

No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遺構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦117		半截花文 上下から交互に花文を配する。	瓦当部凹面ヨコナデ、 布目。頸部凸面、裏面 ナデ。半折り。	堅緻。 N6/ 灰色	3区 層304 11C後～ 末			平安後	
瓦118		均整唐草文 唐草文は両側から中心に展 開する。珠文は外区に密に 巡る。	瓦当部凹面ケズリ。平 瓦部凹面布目。頸部凸 面ケズリ。裏面オサエ。 曲線類。	軟質。 2.5Y8/1 灰白色	土坑94 18C前		山城 栗栖野	平安後	
瓦119		剣頭文 小型の文様を垂直に配する。	全体に磨滅している。 平瓦部凹面布目痕。	軟質。 2.5Y7/1 灰白色	落込925 16C末～ 17C前	10	山城	平安末	
瓦120		剣頭文 小型の文様を垂直に配する。	瓦当部凹面ケズリ。平 瓦部凹面布目。頸部、 裏側は磨滅が著しい。 折り曲げ。曲線類。	軟質。 2.5Y8/1 灰白色	層810 17C～ 18C		山城	平安末	
瓦121		剣頭文 文様を不揃いに配する。	瓦当部凹面ケズリ。平 瓦部凹面布目。頸部凸 面ケズリ。裏面ケズリ、 オサエ。折り曲げ。曲 線類。	軟質。 10YR8/4 浅黄橙色	井戸1238 13C後		山城	平安末	
瓦122		剣頭文 文様を不揃いに配する。	瓦当部凹面ケズリ。平 瓦部凹面布目。頸部凸 面ナデ。裏面ナデ。折 り曲げ。段類。	軟質。 10YR7/4 にぶい黄 橙色	上坑1193 14C	9	山城	平安末	
瓦123		剣頭文 小型の文様を垂直に配する。	瓦当部凹面ケズリ。平 瓦部凹面ナデ。(ヘラ 記号2条あり)頸部凸 面ナデ。折り曲げ。段 類。	軟質。 7.5YR7/6 橙色	井戸1238 13C後		山城	平安末	
瓦124		剣頭文 文様を垂直に配する。	瓦当部凹面ケズリ。平 瓦部凹面布目。頸部凸 面ヨコナデ。裏面ナデ。	堅緻。 2.5Y7/1 灰白色	集石1000 14C		山城	平安末	
瓦125		剣頭花文 中央に菊花文の文様を置く。 左右に剣頭文を配す。	瓦当部凹面ケズリ。平 瓦部凹面布目。「××」 刻印あり。頸部凸面ヨ コケズリ。裏面ヨコナ デ。半折り曲げ。曲線類。	堅緻。 2.5Y8/1 灰白色	井戸16 19C後～		山城	平安末	
瓦126		剣頭文 剣頭文は幅広く、子葉が凸 線で3本みられる。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 平瓦部凹面布目。頸部 凸面ヨコナデ。裏面指 オサエ。折り曲げ。段 類。	軟質。 2.5Y7/1 灰白色	土坑1175 13C後		山城	平安末	
瓦127		剣巴文 右巻き三巴文を中心に置く。 巴文は頭部、尾部共に離れ る。剣頭文はやや放射状に 配する。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 平瓦部凹面布目。頸部 凸面ナデ。折り曲げ。 段類。	堅緻。 2.5Y3/1 黒褐色	落込925 16C末～ 17C前		山城	平安末	
瓦128		剣頭文 文様をほぼ垂直に配す。	瓦当部凹面ナデ。平瓦 部凹面ナデ。頸部凸面、 裏面に鉄分多く付着。 段類。	堅緻。 N5/ 灰色	井戸1238 13C後		山城	平安末	
瓦129		剣巴文 巴文を中心に置く。剣頭文 を左右に垂直に配す。	瓦当部凹面・平瓦部凹 面布目痕。頸部凸面ヨ コナデ。裏面タテナデ、 オサエ。側面タテナデ。 折り曲げ成形。	軟質。 2.5Y6/1 黄灰色	3区 披張区5		山城	平安末	

No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遊構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦130		剣頭花文 中央に菊花状の文様を置き、 左右に剣頭文を放射状に配 す。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 平瓦部凹面ナデ。顎部 凸面ヨコナデ。裏面指 オサエ。	堅緻。 10YR8/4 浅黄橙色	層810 17C～ 18C		山城	平安末	
瓦131		剣連珠文 中央に連珠を置く。左右に 剣頭文を垂直に配す。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 平瓦部凹面布目、刻印 あり。顎部凸面ヨコケ ズリ。裏面指オサエ。 折り曲げ。段顎。	軟質。 10YR8/3 浅黄橙色	落込925 16C末～ 17C前		山城	平安末	
瓦132		剣連珠文 中央に連珠を置く。左右に 剣頭文を放射状に配す。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 平瓦部凹面布目、刻印 あり。顎部凸面ヨコナ デ。裏面指オサエ。折 り曲げ。段顎。	軟質。 10YR7/1 灰白色	層810 17C～ 18C		山城	平安末	
瓦133		剣頭文 大型の文様を垂直に配す。	全体に磨滅が強い。瓦 当部凹面ヨコナデ。	軟質。 2.5Y7/3 浅黄色	3区 土坑185 17C後～ 19C前		山城	鎌倉	
瓦134		剣頭文 剣頭文を6個放射状に配す。	顎部凸面ヨコナデ。裏 面タテナデ。	軟質。 2.5Y8/1 灰白色	井戸1238 13C後		山城	鎌倉	
瓦135		剣頭文 文様をほぼ垂直に配す。	全体に磨滅が強い。瓦 当部凹面布目痕。	軟質。 2.5Y8/2 灰白色	落込925 16C末～ 17C前		山城	鎌倉	
瓦136		剣頭文 文様をほぼ垂直に配す。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 平瓦部凹面布目。(へ ら記号あり)顎部凸面 ヨコケズリ。折り曲げ。 段顎。	堅緻。 N5/ 灰色	土坑1197 13C中		山城	鎌倉	
瓦137		均整唐草文 中心に菊花文を置き、両側 に唐草が展開する。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 平瓦部凹面ナデ。顎部 凸面ヨコナデ。裏面ナ デ。	軟質。 2.5Y6/1 黄灰色	落込925 16C末～ 17C前		大和	鎌倉	東福寺再建時 (14C中～15C前 半)。
瓦138		均整唐草文 唐草文は両側から中心に展 開する。主葉は連続して緩 やかに反転。外区は大粒の 珠文が巡る。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 平瓦部凹面ナデ。顎部 凸面ヨコナデ。裏面タ テナデ。段顎。	軟質。 10YR8/4 浅黄橙色	井戸1238 13C後	3	山城	鎌倉	瓦当面は2次的 比熱で変色。
瓦139		均整唐草文 唐草文は両側から中心に展 開する。主葉は連続して緩 やかに反転。外区は大粒の 珠文が巡る。	瓦当面に鉄分多量付着。 瓦当部凹面ケズリ。平 瓦部凹面ナデ。顎部凸 面ナデ。裏面ナデ。段 顎。	軟質。 5YR6/6 橙色	井戸1238 13C後		山城	鎌倉	瓦当面は2次的 比熱で変色。
瓦140		均整唐草文 唐草文の主葉は連続して左、 右に緩やかに展開。支葉は 強く巻く。外区は珠文が巡 る。	瓦当部凹面ヨコケズリ。 平瓦部凹面ナデ。顎部 凸面・裏面ヨコナデ。 半折り曲げ。段顎。	堅緻。 10YR8/4 浅黄橙色	井戸1238 13C後	6	山城	鎌倉	瓦当面は2次的 比熱で変色。
瓦141		格子文 内区に細かい斜格子文を配 する。	瓦当部凹面ケズリ。平 瓦部凹面。顎部凸面・ 裏面ナデ。平瓦部凸面 に粘土を貼り付け瓦当 部を成形。段顎。	堅緻。 N5/ 灰色	井戸1238 13C後		山城	鎌倉	
瓦142		均整唐草文 中心飾りは五葉。両側に唐 草文が3反転し展開する。	瓦当部凹面ヨコナデ。 顎部凸面・裏面ヨコナ デ。	堅緻。 5YR7/2 明褐色	溝946 16C末～ 17C初			室町	

No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遺構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦143		均整唐草文 中心に宝珠形を配す。左右に唐草が展開する。	瓦当部凹面磨滅。顎部凸面ヨコナデ。裏面ヨコナデ。	堅緻。 7.5Y3/1 オリーブ黒色	層75 19C			室町	
瓦144		「神泉苑」銘 「神泉」の文字が内区にみられる。欠損部に「苑」が推測される。	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面タテナデ。顎部凸面・裏面ヨコナデ。	堅緻。 5G6/1 緑灰色	落込920 16C末～ 17C前			室町	
瓦145		均整唐草文 中心飾りは葉形。唐草主葉は分離し2転する。	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面ヨコナデ。顎部凸面・裏面ヨコナデ。	堅緻。 N5/0 灰色	上坑1145 16C末～ 17C初	2		江戸前	
瓦146		均整唐草文 中心飾りは葉形。唐草主葉は分離し2転する。瓦当表面にはキラコが認められる。	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面タテナデ。顎部凸面・裏面ヨコナデ。	堅緻。 N3/0 暗灰色	上坑1145 16C末～ 17C初			江戸前	
瓦147		均整唐草文 中心飾りは葉形。唐草文の主葉は両側に分離し2転する。	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面欠損。顎部凸面・裏面ヨコナデ。	堅緻。 N3/0 暗灰色	落込925 16C末～ 17C前			江戸前	
瓦148		均整唐草文 中心飾りは葉形。唐草文は両側に2転し先端は巻き込む。	瓦当部凹面ヨコケズリ。平瓦部凹面ヨコナデ。顎部凸面・裏面ヨコナデ。	堅緻。 N5/0 灰色	上坑1146 16C末	4		江戸前	
瓦149		均整唐草文 中心飾りは葉形。唐草は両側に離れて展開する。范ズレがみられる。	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面タテナデ。顎部凸面・裏面タテナデ。側面タテナデ。段顎。	堅緻。 N5/0 灰色	溝1100 16C末	7		江戸中	
瓦150		均整唐草文 中心飾りは葉形。唐草文は両側に2転し先端は巻き込む。	瓦当部凹面ヨコケズリ。平瓦部凹面ヨコナデ。顎部凸面・裏面ヨコナデ。側面タテナデ。段顎。	堅緻。 2.5Y4/1 黄灰色	層84 19C前	6		江戸中	
瓦151		均整唐草文 中心飾りは葉形。唐草主葉は両側に分離し2転する。	瓦当部凹面タテナデ。平瓦部凹面ヨコナデ。顎部凸面ヨコナデ。裏面タテナデ。側面タテナデ。段顎。	堅緻。 N3/0 暗灰色	井戸146 16C～ 17C	5		江戸中	
瓦152		均整唐草文 中心飾りは葉形。主葉は両側に3反転し先端は巻き込む。瓦当面左上に「△」印あり。	瓦当部凹面・平瓦部凹面ヨコナデ。顎部凸面・裏面型オサエ痕。段顎。	堅緻。 N5/0 灰色	上坑608 18C～ 19C			江戸中	
瓦153		均整唐草文 中心飾りは剣菱状と下には斑点が配される。主葉は両側に2転し先端は丸く収める。瓦当面にはキラコが認められる。	瓦当部凹面・平瓦部凹面ヨコナデ。顎部凸面・裏面ヨコナデ。側面タテナデ。段顎。	堅緻。 N3/0 暗灰色	井戸16 19C後～	3		江戸中	
瓦154		均整唐草文 唐草文。主葉は個別に2転する。中心飾りは剣菱状の葉文か？	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面ヨコナデ。顎部ヨコナデ。オサエ。	堅緻。 N4/0 灰色	上坑959 16C末～ 17C初	3		江戸中	
瓦155		均整唐草文 中心飾りは紡錘形の葉。両側に唐草文の主葉が分離して2転する。支葉は先端で2つに分かれる。	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面タテナデ。顎部凸面ヨコナデ。裏面オサエ。	堅緻。 N3/0 暗灰色	3区 攪乱17	6		江戸中	

No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遺構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦156		均整唐草文 中心飾りは葉形。両側に唐草文。瓦当面にキラコが認められる。	瓦当部凹面・顎部凸面・裏面ヨコナデ。	堅緻。 N4/ 灰色	2区 遺構検出 中	6		江戸後	
瓦157		立浪文 瓦当面にキラコが認められる。	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面ヨコナデ。顎部凸面ヨコナデ。裏面オサエ。	軟質。 N3/ 暗灰色	3区 北東隅 近世井戸	3		江戸末	
瓦158		均整唐草文 中心飾りは葉形。上方に珠点を配する。両側に唐草文が2転。瓦当面にはキラコが認められる。	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面ヨコナデ。顎部凸面ヨコナデ。裏面ヨコナデ。段頸。	堅緻。 N5/ 灰色	上坑182 19C	2		江戸末	18C中～後半
瓦159		立浪文 瓦当面にキラコが認められる。	瓦当部凹面ヨコナデ。平瓦部凹面ヨコナデ。裏面ナデ。凹型台の圧痕がみられる。段頸。	堅緻。 N4/ 灰色	上坑182 19C			江戸末	天明大火以降 (18C後半以降)
瓦160		均整唐草文 中心飾りは宝珠形。両側は雲状を呈するの唐草文が3反転。瓦当面にはキラコが認められる。	瓦当部凹面型オサエ。顎部凸面、裏面ヨコナデ。段頸。	堅緻。 N4/ 灰色	上坑217 18C～ 19C	8		江戸末	鎌軒棧瓦

観察表7 刻印瓦・緑釉熨斗瓦一覧表 (図版73・131)

No	拓影	文様の特徴	手法の特徴	胎土色調	出土地点 遺構年代	同文 点数	産地 瓦窯	時代	備考
瓦161		刻印平瓦 平瓦端部側縁に方形の圏線内に「田」を表す文字印。	平瓦凹面布目、ケズリ。平瓦凸面ナデ。	堅緻。 10YR6/1 褐灰色	土坑1598 14C前			平安	
瓦162		刻印平瓦 平瓦部凹面に縦書きで「木工」銘を押捺する。	平瓦凹面布目。凸面縄タタキ。側面ケズリ。	堅緻。 10YR8/1 灰白色	層1195 11C～ 13C		山城	平安前 ～中	
瓦163		刻印平瓦 凸面にヘラ記号「≠」あり。	平瓦凸面ナデ。凹面布目。	堅緻。 N6/0 灰色	3区 第2面 掘下げ			平安	
瓦164		刻印平瓦 凸面にヘラ記号「大」あり。	平瓦凹面縄タタキ。凸面布目。	堅緻。 N7/0 灰白色	地業1800 11C後			平安	
瓦165		刻印平瓦 凹面に縦書きで「大上」を押捺する。	平瓦凸面ナデ。凹面は指オサエ、ナデ。	堅緻。 N4/0 灰色	2区 柱穴158 16C後			江戸	
瓦166		緑釉熨斗瓦 凸面側端に緑釉。側面にも釉はかかる。	凸面ナデ。凹面布目。	軟質。 2.5Y8/1 灰白色	落込925 16C末～ 17C前		山城	平安前 ～中	
瓦167		緑釉熨斗瓦 凸面側端に緑釉。側面にも釉はかかる。	凸面縄日タタキ。凹面布目。	軟質。 7.5YR8/6 浅黄橙色	層1505 12C前		山城	平安前 ～中	

観察表 8 銭貨一覧表 (図版74・75・132・133)

番号	種類	出土遺構・層	外径	穿孔径	重量	初鑄年	年号	遺構年代	備考
銭1	開元通寶	落込920	2.46	0.685	2.933	621	唐、武徳4年	16C末~17C前	
銭2	宋通元寶	検出中	2.49	0.605	2.437	960	北宋、建隆元年		
銭3	景德元寶	2区土坑176	2.39	0.59	2.741	1004	北宋、景德元年	14C	
銭4	祥符通寶	2区溝63	2.41	0.59	3.227	1009	北宋、大中祥符2年	16C後~17C前	
銭5	天禧通寶	2区溝20	2.39	0.635	3.054	1017~	北宋、天禧年間	18C~19C前	
銭6	天聖元寶	井戸1400 木枠内	2.47	0.71	3.551	1023	北宋、天聖元年	15C後~16C前	
銭7	皇宋通寶	2区溝120 底部	2.42	0.63	3.083	1039	北宋、宝元2年	16C前~中	
銭8	至和元寶	落込920	2.39	0.72	2.952	1054	北宋、至和元年	16C末~17C前	
銭9	嘉祐元寶	土坑1176	2.5	0.635	1.992	1056	北宋、嘉祐年間	14C	
銭10	嘉祐元寶	層75	2.345	0.62	2.277	1056	北宋、嘉祐年間	19C	
銭11	嘉祐通寶	井戸1400 木枠内	2.49	0.77	3.536	1056	北宋、嘉祐年間	15C後~16C前	
銭12	治平元寶	層900	2.44	0.635	3.219	1064	北宋、治平年間	17C前	
銭13	治平元寶	2区第2面	2.43	0.63	2.595	1064	北宋、治平年間		
銭14	熙寧元寶	落込925	2.465	0.655	2.827	1068	北宋、熙寧元年	16C末~17C前	
銭15	元豐通寶	井戸1400 木枠内	2.83	0.62	6.332	1078	北宋、元豐元年	15C後~16C前	大きい
銭16	元豐通寶	東壁面	2.48	0.65	3.941	1078	北宋、元豐元年		
銭17	元豐通寶	土坑977	2.45	0.685	2.814	1078	北宋、元豐元年	13C~14C?	
銭18	元豐通寶	柱穴1189	2.06	0.65	1.457	1078	北宋、元豐元年	16C末~17C初	小さい
銭19	元祐通寶	トレンチ西壁 清掃中	2.49	0.645	3.479	1086	北宋、元祐元年		
銭20	元祐通寶	層810	2.41	0.68	2.428	1086	北宋、元祐元年	17C~18C	
銭21	紹聖元寶	2区第2面	2.375	0.66	2.97	1094	北宋、紹聖元年		
銭22	紹聖元寶	井戸80	2.46	0.67	3.497	1094	北宋、紹聖元年	16C後~末	
銭23	紹聖元寶	土坑641	2.44	0.65	3.532	1094	北宋、紹聖元年	16C末~17C?	
銭24	聖宋元寶	2区上坑232	2.465	0.6	2.522	1101	北宋、建中靖国元年	14C中	
銭25	大觀通寶	層75	2.415	0.63	3.033	1107	北宋、大觀元年	19C	
銭26	政和通寶	層810	2.48	0.61	3.229	1111	北宋、政和元年	17C~18C	
銭27	宣和通寶	2区溝12	2.46	0.67	3.671	1119	北宋、宣和元年	18C後~19C前	
銭28	洪武通寶	2区土坑8	2.23	0.56	2.903	1368	明、洪武元年	19C前	穿孔あり
銭29	永楽通寶	土坑909	2.41	0.575	2.206	1408	明、永楽6年	17C前	
銭30	開元通寶	落込920	2.4	0.68	2.71	621	唐、武徳4年	16C末~17C前	
銭31	宋通元寶	検出中	2.27	0.56	2.15	960	北宋、建隆元年		穿孔あり
銭32	淳熙元寶	2区第2面	1.75	0.63	1.08	1174	南宋、淳熙元年		
銭33	延喜通寶	土坑909	1.96	0.525	3.129	907	平安、延喜7年	17C前	
銭34	延喜通寶	3区第3面	1.94	0.51	2.462	907	平安、延喜7年		
銭35	貞元大寶	土坑1598	1.99	0.435	3.437	958	平安、大徳2年	14C前	
銭36	貞元大寶	3区東西セクション	1.97	0.54	2.236	958	平安、大徳2年		
銭37	寛永通寶	清掃中	2.43	0.615	3.12				古寛永
銭38	寛永通寶	3区井戸89	2.45	0.55	3.411			16C後~17C前	古寛永
銭39	寛永通寶	溝795	2.56	0.6	3.458			18C後~19C前	古寛永
銭40	寛永通寶	土坑5	2.28	0.685	2.692			19C後	
銭41	寛永通寶	2区土坑7	2.345	0.62	2.345			18C後~19C前	

番号	種類	出土遺構・層	外径	穿孔径	重量	初鑄年	年号	遺構年代	備考
銭42	寛永通寶	検出中	2.4	0.585	2.686				
銭43	寛永通寶	攪乱	2.47	0.62	2.945				
銭44	寛永通寶	検出中	2.4	0.63	2.754				
銭45	寛永通寶	土坑495 下層	2.465	0.63	2.79			18C	
銭46	寛永通寶	層75	2.325	0.64	2.578			19C	
銭47	寛永通寶	検出中	2.21	0.7	2.172				
銭48	寶永通寶	3区井戸134	3.81	0.9	9.31			18C後～19C前	「永久世用」
銭49	文久永宝	土坑5	2.7	0.66	3.079	1863	江戸、文久3年	19C	「11波」
銭50	文久永寶	土坑324	2.68	0.655	3.648	1863	江戸、文久3年		「11波」
銭51	寛永通寶	土坑5	2.84	0.6	5.114			19C	「11波」
銭52	寛永通寶	土坑132	2.535	0.575	4.038			19C	「文」
銭53	寛永通寶	土間	2.545	0.59	3.226				「文」
銭54	寛永通寶	攪乱	2.505	0.6	2.778				「文」
銭55	寛永通寶	層810	2.27	0.62	2.053			17C～18C	「元」
銭56	寛永通寶	南北セクション	2.16	0.56	2.157				「元」
—	開元通寶	落込920	2.54	0.68	3.787	621	唐、武徳4年	16C末～17C前	
—	開元通寶	2区第1面	2.38	0.675	2.44	621	唐、武徳4年		
—	開元通寶	3区井戸89	2.3	0.57	2.516	621	唐、武徳4年	16C後～17C前	
—	景德元寶	土坑834	2.49	0.58	2.775	1004	北宋、景德元年	18C初～前半	
—	景德元寶	2区攪乱	2.44	0.62	1.989	1004	北宋、景德元年		
—	天禧通寶	2区攪乱	2.57	0.61	3.253	1017～	北宋、天禧年間		
—	皇宋通寶	2区検出中	2.2	0.63	1.997	1039	北宋、宝元2年		
—	嘉祐元寶	層75	2.33	0.64	3.22	1056	北宋、嘉祐年間	19C	
—	嘉祐元寶	2区攪乱	2.35	0.62	2.895	1056	北宋、嘉祐年間		
—	元豊通寶	落込920	2.455	0.68	2.661	1078	北宋、元豊元年	16C末～17C前	
—	元豊通寶	落込920	2.4	0.67	2.195	1078	北宋、元豊元年	16C末～17C前	
—	元豊通寶	落込925	2.33	0.76	2.382	1078	北宋、元豊元年	16C末～17C前	
—	元豊通寶	地菜	2.4	0.66	3.077	1078	北宋、元豊元年		
—	元豊通寶	3区第3面	2.45	0.77	3.458	1078	北宋、元豊元年		
—	元祐通寶	溝873	2.51	0.635	2.913	1086	北宋、元祐元年	18C～	
—	紹聖元寶?	層810	2.415	0.67	3.255	1094	北宋、紹聖元年	17C～18C	
—	寛永通寶	土坑70	2.5	0.645	3.19			18C前	古寛永
—	寛永通寶	層75	2.41	0.595	3.32			19C	古寛永
—	寛永通寶	土坑851	2.42	0.515	4.194			18C	古寛永
—	寛永通寶	清掃中	2.36	0.55	2.858				古寛永
—	寛永通寶	検出中	2.53	0.63	3.342				古寛永
—	寛永通寶	検出中	2.41	0.52	2.98				古寛永
—	寛永通寶	盛土中	2.425	0.58	3.344				古寛永
—	寛永通寶	盛土中	2.46	0.535	3.296				古寛永
—	寛永通寶	層75	2.525	0.66	3.814			19C	「文」
—	寛永通寶	攪乱	2.51	0.55	3.588				「文」

番号	種 類	出土遺構・層	外径	穿孔径	重量	初鑄年	年 号	遺構年代	備 考
-	寛永通寶	土坑324	2.26	0.63	2.209			18C	「元」
-	寛永通寶	土坑4	2.265	0.615	2.212			19C	
-	寛永通寶	土坑5	2.52	0.66	2.999			19C	
-	寛永通寶	土坑5	2.44	0.6	3.048			19C	
-	寛永通寶	土坑5	2.17	0.71	2.113			19C	
-	寛永通寶	土坑5	2.305	0.64	2.418			19C	
-	寛永通寶	土坑5	2.405	0.61	2.792			19C	
-	寛永通寶	層75	2.31	0.66	2.223			19C	
-	寛永通寶	層75	2.5	0.61	2.909			19C	
-	寛永通寶	層75	2.27	0.625	2.31			19C	
-	寛永通寶	土坑86	2.2	0.665	1.702			19C前	
-	寛永通寶	土坑103	2.535	0.57	4.146			18C	
-	寛永通寶	土坑140	2.42	0.55	3.865			18C	
-	寛永通寶	小穴180	2.43	0.59	3.132			19C前	
-	寛永通寶	土坑186	2.32	0.61	2.597			19C	
-	寛永通寶	土坑186	2.405	0.64	2.865			19C	
-	寛永通寶	土坑187	2.3	0.615	2.143			18C後～19C	
-	寛永通寶	小穴196	2.45	0.585	2.927			19C	
-	寛永通寶	土坑205	2.36	0.64	3.214			18C後～19C	
-	寛永通寶	土坑300	2.45	0.645	1.96			19C前	
-	寛永通寶	土坑300	2.44	0.66	2.936			19C前	
-	寛永通寶	土坑630	2.25	0.61	2.082				
-	寛永通寶	土坑757	2.44	0.61	2.625			19C～	
-	寛永通寶	土坑897	2.305	0.6	1.49			19C後	
-	寛永通寶	層1195上面検出中	2.365	0.65	2.634				
-	寛永通寶	検出中	2.43	0.6	2.137				
-	寛永通寶	検出中	2.47	0.63	3.063				
-	寛永通寶	検出中	2.44	0.54	3.13				
-	寛永通寶	検出中	2.365	0.615	2.283				
-	寛永通寶	3区攪乱29	2.32	0.635	2.324			18C後～19C前	
-	寛永通寶	3区柱穴28	2.31	0.605	2.622			18C後～19C前	
-	文久永寶	土坑50	2.7	0.7	2.785	1863	江戸、文久3年	19C	「11 波」
-	文久永寶	検出中	2.69	0.72	4.004	1863	江戸、文久3年		「11 波」?
-	二銭銅貨	土坑183	3.26	-	14.202	1873	明治6年	19C後～20C初	
-	一銭	井戸16	2.77	-	6.13	1873	明治6年	19C後～	
-	半銭	漆喰2	2.23	-	3.58	1873	明治6年	19C	「明治九年」銘
-	半銭	土坑5	2.25	-	3.437	1873	明治6年	19C後	「明治13年」銘
-	半銭	井戸16	2.22	-	3.182	1873	明治6年	19C後～	
-	半銭	層75	2.24	-	3.686	1873	明治6年	19C	「明治11」銘
-	半銭	検出中	2.21	-	3.399	1873	明治6年		
-	半銭	盛土中	2.22	-	3.314	1873	明治6年		「明治八年」銘

観察表9 金属製品一覧表(図版76・134・135)

()は残存値、単位はcm

No	種類	出土遺構・層	計測値				材質	遺構年代	備考
			長さ	幅	厚さ	重量(g)			
金1	キセル雁首	層75	36.2	火口径1.2	径0.8	70	銅	19C	長大形。
金2	キセル雁首	土坑90	5.8	火口径1.5	径0.9	11.6	銅	19C前	
金3	キセル雁首	土坑90	5.46	火口径1.4	径0.8	6.2	銅	19C前	
金4	キセル雁首	3区攪乱27	4.5	火口径1.4		8.5	銅		
金5	キセル雁首	検出中	5.4	火口径1.3	径0.9	9.1	銅		
金6	キセル吸口	落込925	12.1		径0.5	6.6	銅	16C末～17C前	細形。金メッキが残る。
金7	キセル吸口	土坑625	9.3		径0.9	10.0	銅	18C後	
金8	キセル吸口	溝795	6.11		径0.8	6.0	銅	18C後～19C前	
金9	キセル吸口	X=109,592 東西セクション	5.3		径1.1	10.2	銅		
金10	キセル吸口	土坑495	4.3		1.3	6.9	銅	18C	断面六角形。
金11	火箸	土坑853	(9.1)		径0.3	3.9	銅	18C	
金12	火箸	土坑280	13.5		径0.3	4.6	銅	18C中	断面は六角形。
金13	火箸	土坑104	(9.6)		径0.2	6.0	銅	18C後～19C前	折れ曲がる。
金14	火箸	土坑625	(9.3)		径0.2	3.8	銅	18C後	折れ曲がる。頭部に針金の輪が付く。
金15	耳搔き	土坑630	10.7	頭0.8 幅0.5	0.1	3.3	銅		折れ曲がる。板状。
金16	耳搔き	小穴373	(10.4)	0.4	0.1	3.7	銅		折れ曲がる。頭部は皿状。
金17	簪	土坑90	18.7	0.6	径0.1	4.5	銅	19C前	
金18	簪	埋裏9	11.6	頭5.4	径0.3	6.5	銅	19C前	
金19	簪	土坑143	(12.5)	頭1.7	径0.1	3.7	銅	19C後	身はねじられる。
金20	簪	掘下げ	(10.2)		径0.2	5.5	銅		折れ曲がる。
金21	簪	土坑486	(10.6)		径0.2	2.3	銅	19C後	折れ曲がる。
金22	簪	溝160	3.7	頭1.3 身0.2		2.4	銅	19C後	
金23	簪	カマド27	2.7	頭0.7 身0.2		0.8	銅	19C	
金24	把手	層75	7.9	2.7	0.2	7.5	銅	19C	両端に金具が付く。
金25	把手	溝222	6.9	2.2	0.5	10.3	銅	19C	両端に金具が付く。
金26	引手金具	土坑607	長径5.3	短径4.3	0.1	8.3	銅	18C後～19C前	
金27	引手金具	層75	長径3.9	短径3.4	0.1	5.1	銅	19C	片面に文様を彫る。
金28	飾金具(松笠)	土坑300	横6.1	縦3.2	0.1	5.9	銅	19C前	
金29	飾金具(魚)	土坑55	8.6	縦6.1	0.8	38.6	鉛	19C後～	
金30	銅キャップ	井戸80	5.2		径0.9	4.8	銅	16C後	
金31	留金具	3区土坑68	3.6	頭1.1 幅0.6		3.8	銅	16C後～17C前	
金32	掛針	2区検出中	(長2.6)	(1.6)	径0.2	0.8	銅		
金33	切羽	土坑143	長径3.91	短径2.4	0.1	4.0	銅	19C後	刀身は幅3.14、厚さ0.75。縁に刻目あり。
金34	切羽	3区土坑59	長径4.1	短径2.5	0.1	3.1	銅	18C中～19C前	刀身は幅2.9、厚さ0.85。
金35	切羽	土坑92	長径3.7	短径2.21	0.1	4.4	銅	19C前、18C後	刀身は幅2.86、厚さ0.73。縁に刻目あり。
金36	はばき	3区第2面	1.8	3.0	0.8	9.0	銅		刀身は幅2.83、厚さ0.6。
金37	はばき	土坑280	長2.2	幅3.2	0.8	9.8	銅	18C中	刀身は幅2.85、厚さ0.6。

()は残存値、単位はcm

No	種類	出土遺構・層	計測値				材質	遺構年代	備考
			長さ	幅	厚さ	重量(g)			
金38	筭	層75	11.2	0.6	0.2	8.9	銅	19C	
金39	銅釘	土坑157	(5.8)	頭径0.4	身径0.1	1.2	銅	18C後～19C前	折れ曲がる。身はねじれる。
金40	銅釘	土坑94	6.4	頭径1.2	身径0.5	7.0	銅	18C前	身は四角形、大型品。
金41	銅釘	土坑495	4.0	頭径0.9	身径0.2	1.2	銅	18C	
金42	銅釘	土坑213	3.5	頭径0.9	身径0.3	1.4	銅	19C	
金43	銅釘	土坑495	3.0	頭径0.8	身径0.2	1.0	銅	18C	
金44	銅釘	層75	2.9	頭径0.9	身径0.2	1.0	銅	19C	
金45	鉄砲玉	柱穴1105	径1.2 ×1.1			3.7	鉄	13C～14C	球形。
金46	鉄砲玉	落込925	径1.2			3.0	鉄	16C末～17C前	球形。
金47	刀子	3区土坑59	9.8	1.2	0.3	7.8	鉄	18C中～19C前	
金48	棒状	土坑1155	(9.1)	1.0	0.5	24.8	鉛	16C末～17C前	細長い板状の製品。
金49	円盤	3区第2面	長径2.5	短径2.3	0.2	12.0	鉛		円盤状の製品。
金50	方形板状	土坑130	6.6	6.5	0.5	106	鉛	18C末～19C初	方形の板状製品。中心に狭間があく。

観察表10 鑄造関係遺物一覧表(図版76・137)

()は残存値、単位はcm

No	種類	出土遺構・層	計測値				材質	遺構年代	備考
			長さ	幅	厚さ	重量(g)			
鑄1	吹子羽口	落込925	(11.5)	径8.8	2.6～3.2	758	土製品	16C末～17C前	孔径2.5。
鑄2	吹子羽口	2区土坑70	(29.4)	径9.4	1.4～2.1	2,000	土製品	17C	孔径5.6。完存。
鑄3	吹子羽口	土坑1137	11.0	径8.6	2.2～3.2	724	土製品	17C～19C	孔径2.8。
鑄4	吹子羽口	2区土坑16	(14.6)	径8.6	2.2～2.8	780	土製品	17C中～後	孔径3.4。

観察表11 石製品一覧表(図版77～80・136～143)

()は残存値、単位はcm

No	種類	出土遺構・層	計測値				材質	遺構年代	備考
			長さ	幅	厚さ	重量(g)			
石1	硯	土坑1316	(6.3)	(5.7)	0.5	37	珪質頁岩～珪質粘板岩	14C中	縁高0.65。
石2	硯	土坑1286	(10.6)	8.4	1.3	237	頁岩～粘板岩	14C～15C前	陸側に方形の線刻あり。縁高1.5。
石3	硯	土坑641	12.0	9.2	2.3	324	頁岩～粘板岩	16C末～17C初	楕円形。
石4	硯	土坑1322	(12.2)	10.6	1.8	388	頁岩～粘板岩	16C後～17C初	幅が広い。縁高2.2。
石5	硯	土坑162	7.4	2.2	0.7	28	頁岩～粘板岩	19C後	陸海がない。縁高0.9。
石6	硯	土坑641	7.6	3.9	0.7	44	頁岩～粘板岩	16C末～17C初	縁高1.1。
石7	硯	土坑4	(9.2)	4.3	(0.6)	36	頁岩～粘板岩	19C後	裏面に線刻。「右」「右」が判読。
石8	硯	層75	6.5	3.9	1.5	68	頁岩～粘板岩	19C	楕円形。縁高1.7。
石9	硯	清掃中	6.3	6.2	1.5	109	頁岩～粘板岩		陸側を切断・再加工。縁高1.3。
石10	硯	2区土坑7	11.9	5.6	1.0	171	頁岩～粘板岩	18C後～19C前	縁高1.5
石11	硯	土坑90	12.1	6.0	1.2	175	頁岩～粘板岩	19C前	裏に線刻「宝曆七丁丑十月十九日高島石二番伊勢講連中」。縁高1.6。
石12	硯	土坑625	12.8	6.2	1.2	222	頁岩～粘板岩	18C後	中央が擦り減り窪む。海が浅い。縁高1.4。
石13	硯	層75	14.9	5.9	1.8	351	頁岩～粘板岩	19C	縁高2.1。
石14	硯	重機掘削	15.3	5.9	1.9	360	頁岩～粘板岩		縁高2.1。

()は残存値、単位はcm

No	種類	出土遺構・層	計測値				材質	遺構年代	備考
			長さ	幅	厚さ	重量(g)			
石15	硯	遺構検出中	13.7	7.9	1.8	474	頁岩～粘板岩	裏に線刻「秋田」「三男」。縁高2.0。	
石16	硯	土坑8	16.8	7.6	1.8	632	頁岩～粘板岩	20C 裏に線刻「久保田」。縁高2.5。	
石17	硯	攪乱	17.0	9.0	2.7	734	頁岩～粘板岩	裏に線刻「高島本石」。	
石18	硯	落込925	(6.0)	10.4	1.4	143	頁岩～粘板岩	16C末～17C前 幅が広い。	
石19	硯	土坑245	(3.6)	(4.8)	(1.35)	49	頁岩～粘板岩	19C前 裏に線刻「赤間 関カ」。縁高1.9。	
石20	硯	土坑474	(4.1)	(5.2)	1.5	75	頁岩～粘板岩	19C中～後 縁高1.9。石19と同じ？	
石21	硯	石組67	13.0	8.9	1.5	313	頁岩～粘板岩 と砂岩の互層	19C後 裏面に線刻「赤間関」。周囲は粗加工のまま。縁高1.9。	
石22	硯	攪乱	(13.8)	7.0	2.1	446	流紋岩？	縁高2.8	
石23	硯	土坑5	(6.0)	7.7	1.5	118	流紋岩？	19C後 縁高2.9	
石24	硯	土坑49	(6.9)	7.2	2.3	232	流紋岩？	19C後 縁高2.8	
石25	硯	検出中	(15.6)	7.4	2.0	411	珪質頁岩～ 珪質粘板岩	砥石用の石材を用いる。縁高2.8	
石26	硯	柱穴422	16.8	6.3	1.9	324	珪質頁岩～ 珪質粘板岩	18C 砥石用の石材を用いる。縁高2.3	
石27	砥石	溝2010	5.6	3.5	1.8	53	流紋岩か 凝灰岩	11C中～後	
石28	砥石	土坑1700	5.5	4.0	1.9	41	流紋岩か 凝灰岩	11C～12C初	
石29	砥石	溝1720	6.2	7.0	1.5	79	流紋岩？	12C末～13C初	
石30	砥石	土坑1215	12.6	4.6	4.2	388	砂岩	13C後～14C前	
石31	砥石	土坑1098	7.1	5.6	5	296	流紋岩か 凝灰岩	13C～14C 上下面に溝。	
石32	砥石	土坑932	10.0	3.7	3.6	156	流紋岩か 凝灰岩	13C～14C	
石33	砥石	層1505	14.6	8.5	3.9	578	砂岩	12C前 大型品。	
石34	砥石	土坑44	18.5	7.5	4.8	1014	砂岩	19C後～20C 大型品。	
石35	砥石	層75	6.4	3.3	1.9	79	ホルンフェルス	19C	
石36	砥石	土坑765	9.2	3.8	3.4	174	砂岩	18C～19C	
石37	砥石	土坑182	10.0	6.1	3.6	256	砂岩	19C	
石38	砥石	井戸45	12.2	4.5	1.0	115	頁岩～粘板岩	19C後 「高島硯」を転用	
石39	砥石	池1570	7.7	4.3	1.2	78	珪質頁岩～ 珪質粘板岩	11C末～12C前	
石40	砥石	層810	9.4	3.2	1.5	90	珪質頁岩～ 珪質粘板岩	17C～18C	
石41	砥石	層810	13.5	5.5	2.0	167	珪質頁岩～ 珪質粘板岩	17C～18C	
石42	砥石	土坑495	11.6	6.2	1.4	182	珪質頁岩～ 珪質粘板岩	18C	
石43	砥石	土坑168	11.3	3.3	2.3	174	珪質頁岩～ 珪質粘板岩	19C	
石44	砥石	層75	21.1	7.6	1.4	474	珪質頁岩～ 珪質粘板岩	19C 大型品。	
石45	砥石	層75	5.7	3.5	1.0	44	珪質頁岩～ 珪質粘板岩	19C	
石46	砥石	土坑132	7.2	3.2	1.0	37	珪質頁岩～ 珪質粘板岩	19C後	
石47	砥石	層75	5.5	5.3	1.7	96	泥質ホルン フェルス	19C	

()は残存値、単位はcm

No	種 類	出土遺構・層	計 測 値				材 質	遺構年代	備 考
			長さ	幅	厚さ	重量(g)			
石48	羽釜	土坑780	口径16.0 高さ(8.0)		1.15	276	滑石	13C	
石49	羽釜	X-109,592 東西セクション	縦(7.0)	横(10.0)	1.4	198	滑石		復元口径22cm。
石50	羽釜	土坑960	縦(8.4)	横(5.3)	1.95	150	滑石	16C末～17C初	鏝は縦につく。
石51	温石	池1570	8.9	5.9	1.3	112	滑石	11C末～12C前	滑石製羽釜を転用。
石52	温石	層75	8.8	6.8	1.3	165	滑石	19C	滑石製羽釜を転用。
石53	温石	土坑1238	8.9	8.1	1.8	288	滑石	13C後	滑石製羽釜を転用。
石54	温石	溝795	9.4	6.1	1.2	151	滑石	18C後～19C前	板状製品。
石55	温石	層810	9.8	6.6	2.0	219	滑石	17C～18C	板状製品。
石56	垢擦石	落込920	7.4	4.0	4.0	13	軽石	16C末～17C前	丸味おびる。
石57	垢擦石	層810	5.1	5.4	3.8	24	軽石	17C～18C	丸味おびる。
石58	垢擦石	2区土坑7	9.5	6.6	1.7	32	軽石	18C後～19C前	扁平で内弯する。平坦面小孔あり。
石59	垢擦石	土坑71	6.5	5.4	1.9	18	軽石	19C前	平坦面あり。刻み目つける。
石60	垢擦石	層75	7.2	5.5	2.7	23	軽石	19C	平坦面あり。
石61	垢擦石	掘下げ	7.5	9.5	6.0	105	軽石		丸味おびる。
石62	石臼	土坑217	(20.8)	(12.4)	高さ6.4	1,911	花崗岩	18C～19C	礪臼の上臼。復元径約28。
石63	石臼	攪乱 掘下げ	(22.6)	(15.0)	高さ10.1	4,482	花崗岩		礪臼の上臼。復元径24.4。
石64	石臼	溝38 北肩	(22.0)	(18.0)	高さ12.2	6,600	花崗岩	19C	礪臼の上臼。復元径約26。
石65	石臼	土坑5	径19.0		高さ12.5	4,813	砂岩	19C後	茶臼の上臼。
石66	石臼	攪乱 掘下げ	(18.0)	(14.5)	高さ10.0	3,189	花崗岩		礪臼の下臼。
石67	石臼	土坑187	(32.5)	(28.0)	高さ14.0	14,300	花崗岩	18C後～19C	礪臼の下臼。播面の周囲に受け部をもつ。播面径約25、外周径約47。
石68	境界石	土間上面	(19.8)	12.4	9.0	4,538	花崗岩	19C後	「十井大炊・」「安水・ 癸巳・」を線刻
石69	石塔	土坑77	長径9.8	短径7.4		598	花崗岩	18C後～19C初	五輪塔の先端か？
石70	石塔	井戸83	(12.4)	径8.6		1,244	花崗岩	18C後～19C前	石塔先端の相輪。
石71	石材片	落込925 北肩	(13.1)	12.6	8.5	2,146	凝灰岩	16C末～17C前	六角形。自然の節理とみられる。
石72	石材片	土坑70	(14.0)	8.5	7.1	1,350	凝灰岩	18C前	六角形。自然の節理とみられる。
石73	石仏	拡張区5	高さ(51.8)	48	24.5	111,650	花崗岩		阿弥陀如来座像、頭部欠損。蓮華座にのる。
石74	有舌尖頭器	3区土坑68	(4.5)	2.2	0.6	8.1	サヌカイト	16C後～17C前	先端を欠く。
石75	石帯	層1505	2.2	3.5	0.64	9.8	石英	12C前	丸軋。
石76	石帯	層1195	3.2	3.8	0.58	11.8	石英	11C～13C	逡方。
石77	箱状製品	土坑245	4.4	2.3	0.8	10.5	珪岩	19C前	側面に文様を彫る。
石78	文鎮	土坑90	9	1.6	0.6	17.5	貞岩～粘板岩	19C前	「高島硯」と同じ石材。片面に文様あり。
石79	石製円盤	土坑929	3.3	3.3	1.3	21.7	珪質貞岩～珪質粘板岩	16C末～17C初	砥石用石材と同じ。
石80	基石	土坑2001	径1.7		0.6	2.7	泥質ホルンフェルス	11C後～12C初	
石81	基石	2区小穴224	径1.7～1.9		0.6	2.6	泥質ホルンフェルス	14C	
石82	基石	土坑641	径2.1～2.3		0.8	5.5	泥質ホルンフェルス	16C末～17C初	
石83	基石	層900	径2.7～2.9		0.5	6.2	貞岩～粘板岩	17C前	大型品で歪みあり。

()は残存値、単位はcm

No	種類	出土遺構・層	計測値				材質	遺構年代	備考
			長さ	幅	厚さ	重量(g)			
石84	基石	層75	径1.7~2.1		0.44	2.5	泥質ホルンフェルス	19C	
石85	基石	土坑92	径1.9~2.1		0.60	3.6	泥質ホルンフェルス	19C前、18C後	
石86	基石	層75	径2.1		0.41	3.1	泥質ホルンフェルス	19C	真円形。
石87	基石	層75	径2.3~2.6		0.6	5.9	泥質ホルンフェルス	19C	
石88	基石	層75	径2.3~2.4		1.0	9.2	泥質ホルンフェルス	19C	
石89	基石	層75	径2.4~2.7		0.9	8.8	泥質ホルンフェルス	19C	楕円形。
石90	基石	掘下げ	径2.0~2.1		0.4	2.9	泥質ホルンフェルス		真円形。
石91	基石	掘下げ	径1.9~2.0		0.44	3.1	泥質ホルンフェルス		
石92	基石	溝内	径2.2		0.6	4.7	泥質ホルンフェルス		真円形。
石93	基石	検出中	径2.0~2.1		0.4	3.0	泥質ホルンフェルス		
石94	基石	土間	径2.1		0.7	3.0	泥質ホルンフェルス		真円形。
石95	基石	掘下げ	径2.4~2.5		0.84	8.5	泥質ホルンフェルス		
石96	基石	土坑899	径2.4		1.0	9.3	石英	16C後~17C前	白色の基石。厚い。
石97	基石	層75	径2.1		0.7	3.7	石英	19C	白色の基石。
石98	火打石	柱穴1634	3.4	3.2	1.3	21	チャート	16C前	
石99	火打石	土坑280	2.6	1.8	0.9	5	チャート	18C中	
石100	火打石	溝430	3.4	2.6	1.9	24	チャート	19C前	
石101	火打石	溝222	3.0	3.3	3.1	35	チャート	19C	
石102	火打石	X=-109,592 東西セクション	2.6	2.4	1.9	13	チャート	19C	
石103	火打石	土坑245	3.2	2.9	1.1	6	チャート	19C前	
石104	火打石	層75	2.8	2.6	2.6	20	チャート	19C	
石105	火打石	土坑157	3.5	2.6	2.7	35	チャート	18C後~19C前	
石106	火打石	層75	3.3	2.1	1.1	12	チャート	19C	
石107	火打石	土坑218	3.5	2.9	2.1	18	チャート	18C後~19C	
石108	火打石	層75	4.7	2.6	2.4	28	チャート	19C	
石109	火打石	層75	4.1	4.0	1.9	33	チャート	19C	
石110	火打石	土坑158	3.6	2.8	1.9	28	チャート	19C前	
石111	火打石	土坑220	4.6	7.4	2.1	62	チャート	18C後~19C	
石112	石盤	掘下げ	(12.1)	(6.0)	0.2	30	頁岩~粘板岩		
石113	石盤	検出中	(8.0)	(6.8)	0.3	27	頁岩~粘板岩		
石114	石盤	検出中	(10.8)	(6.5)	0.4	25	頁岩~粘板岩		穿孔。
石115 a~d	石盤	攪乱内掘下げ	a (9.8) b (6.1) c (5.5) d (6.4)	a (5.3) b (4.3) c (2.9) d (5.4)	a 0.2 b 0.2 c 0.3 d 0.2	a 22 b 11 c 5 d 15	頁岩~粘板岩		枠線内に文字を刻む。「上京」と判読。
石116	石盤	土坑162	3.7	2.2	0.3	4	頁岩~粘板岩	19C後	線刻「文」。

()は残存値、単位はcm

No	種類	出土遺構・層	計測値				材質	遺構年代	備考
			長さ	幅	厚さ	重量(g)			
石117	石盤	土坑4	4.1	2.8	0.2	5	頁岩～粘板岩	19C後	線刻「条」。
石118	石盤	掘下げ	10.2	(7.2)	0.4	57	頁岩～粘板岩		直線で方眼を刻む。
石119	石盤	掘下げ	(12.1)	(9.2)	0.3	70	頁岩～粘板岩		直線で方眼を刻む。
石120	石筆	層75	4.1		径0.8	6.4	滑石	19C	角材。一辺0.8cm。7.5YR6/1灰色。
石121	石筆	掘下げ	3.9		径1.1	9.6	蠟石?		5Y6/2灰オリーブ色。
石122	石筆	土坑42	4.3		径0.7	4.7	蠟石?	空白	角材。白色で硬い。一辺0.7cm。
石123	石筆	掘下げ	2.9		径0.9	3.1	蠟石?		白色で硬い。
石124	石筆	層75	4.6		径0.8	5.5	蠟石?	19C	一端に孔・切り込みあり、孔内に別の石が詰まる。白色で硬い。
石125	石筆	井戸45	5.7		径0.6	4.3	蠟石?	19C後	2.5Y7/3浅黄色。
石126	石筆	土坑170	7.7		長径0.9 短径0.6	6.9	蠟石?	19C後	10YR7/3にぶい黄橙色に茶色混じる。
石127	石筆	土坑41	7.1		長径0.7 短径0.6	6.5	蠟石?	19C中～後	10YR7/4にぶい黄橙色。
石128	石筆	掘下げ	7.3		径0.5	6.7	蠟石?		10YR2/1黒色～白色。
石129	石筆	土坑486	7.5		径0.6	4.7	蠟石?	19C後	2.5GY7/1暗オリーブ灰色～2.5GY6/1オリーブ灰色。

観察表12 骨角製品一覧表 (図版80・143)

()は残存値、単位はcm

No	種類	出土遺構・層	計測値				材質	遺構年代	備考
			長さ	幅	厚さ	重量(g)			
骨1	櫛払	土坑34	(5.7)	0.9	0.4	2.8	骨	19C中～後	
骨2	櫛払	土坑170	(5.7)	0.9	0.4	2.0	骨	19C後	
骨3	櫛払	掘下げ	(6.7)	(1.2)	0.4	6.2	骨		
骨4	櫛払	土坑4	(9.1)	0.8	0.8	3.0	骨	19C後	
骨5	柄	土坑34	(3.9)	1.0	0.6	2.7	骨	19C中～後	
骨6	柄	掘下げ	(3.6)	0.8	0.3	1.0	骨		
骨7	棒状製品	掘下げ	(6.4)	0.7	0.7	3.4	骨		
骨8	棒状製品	掘下げ	8.0	0.4	0.4	1.2	骨	19C後	
骨9	棒状製品	井戸68	(9.6)	0.7	0.7	3.7	骨	19C後～20C	
骨10	棒状製品	土坑178	13.1	0.3	0.3	1.9	骨	19C後	
骨11	編針	埋甕9	14.1	0.3	0.3	1.9	骨	19C前	
骨12	籠状製品	土坑240	(8.0)	2.0	0.4	7.0	骨	19C後	
骨13	籠状製品	土坑104	(5.5)	(3.5)	0.2	2.8	骨	18C後～19C前	
骨14	釧	掘下げ	径2.3		0.6	2.8	鹿角		裏面に溝り穴あり
骨15	釧	掘下げ	径1.9		0.5	1.1	鹿角		裏面に溝り穴あり
骨16	櫛	掘下げ	10.2	3.1	0.5	4.7	骨		歯はすべて欠損。
骨17	装飾品?	掘下げ	4.9	0.7	0.1	0.4	骨		キセル形で扁平、黒漆に朱漆で文様と文字「うれし系?」
骨18	棹秤	土坑120	(2.16)	径0.4		0.3	骨	19C	目盛りは1列
骨19	棹秤	土坑625	(5.5)	径0.4		0.9	骨	18C後	目盛りは3列

観察表13 ガラス製品一覧表 (図版80・144)

()は残存値、単位はcm

No	種類	出土遺構・層	計測値				比重	遺構年代	備考
			長さ	幅	厚さ	重量(g)			
ガ1	玉	土間	径1.4			5.4		中心に孔あり。銀化。	
ガ2	玉	埋裏9	径1.3			3.0	19C前	中心に孔あり。	
ガ3	玉	掘下げ	径1.2			2.2		中心に孔あり。白濁。	
ガ4	玉	掘下げ	径1.3			3.3		中心に孔あり。白濁。	
ガ5	髪飾り	土坑218	(6.8)	1.0	0.73	3.66	2.12	18C後～19C	銀化、身はねじる。青色、下方欠損。
ガ6	髪飾り	2区土坑7	(3.67)	0.4	0.3	1.03	3.73	18C後～19C前	耳掻きをもつ。透明、下方欠損。
ガ7	髪飾り	層75	(3.53)	0.57	0.42	1.03	3.10	19C	耳掻きをもつ。白色、下方欠損。
ガ8	髪飾り	層75	(5.0)	0.55	0.23	1.74	3.23	19C	扁平、上下欠損。白色。
ガ9	髪飾り	土坑90	(5.06)	径0.37		1.24	2.47	19C前	上下欠損。青色、白濁。
ガ10	髪飾り	土坑90	(6.37)	0.35	0.26	1.61	3.84	19C前	先端が尖る。黄色。
ガ11	髪飾り	層75	(1.42)	1.5	0.6	2.19	3.22	19C	丸板部分、上下欠損。透明。
ガ12	髪飾り	土坑190	1.42	1.35	(0.53)	1.29	2.46	19C前～中	下方欠損、青色。
ガ13	髪飾り	層75	(1.4)	1.63	0.56	2.06	3.41	19C	花形の文様をもつ。下方欠損、青色。
ガ14	棒状製品	土坑190	(4.23)	径0.38		1.38	3.26	19C前～中	上下欠損。銀化。淡青色。
ガ15	棒状製品	土坑64	(5.7)	径0.35		1.40	2.62	18C後～19C中	上下欠損。透明。
ガ16	棒状製品	土坑393	(4.22)	0.31	0.16	0.60	3.51	19C前	扁平。上下欠損。銀化。白濁、透明。
ガ17	棒状製品	層75	(2.76)	0.67	0.33	1.76	3.32	19C	扁平。上下欠損。藍色。
ガ18	棒状製品	土坑5	(3.5)	0.34	0.34	0.84	2.31	19C後	断面方形。上下欠損。青色。
ガ19	棒状製品	土坑143	(4.6)	0.31	0.3	1.43	3.61	19C後	方形、上下欠損。銀化。透明。
ガ20	飾り玉	層75	(1.66)	径1.25		4.27	3.49	19C	下方欠損、白色、銀化。
ガ21	飾り玉	掘下げ	1.38	1.46	(1.41)	3.15	2.48		下方欠損、ねじりあり。淡青緑色。
ガ22	飾り玉	土坑132	径1.5		(1.35)	4.16	2.43	19C後	下方欠損、淡青緑色、白濁。
ガ23	飾り玉	土坑163	径1.48		(1.23)	3.36	2.47	19C後	下方欠損、淡青緑色、花形文。
ガ24	飾り玉	土坑163	径1.54		(1.4)	4.18	2.48	19C後	下方欠損、淡青緑色。
ガ25	飾り玉	掘下げ	径1.5		(1.38)	5.34	3.21		下方欠損、青色縦模様。
ガ26	飾り玉	土坑163	1.48	1.59	(1.54)	4.50	2.50	19C後	下方欠損、青色。
ガ27	ポッペン	溝38	(4.15)	径0.61		0.71	2.87	19C	ガラス管、銀化。
ガ28	ポッペン	土坑64	(4.83)	径0.5		0.64	2.74	18C後～19C中	ガラス管、銀化。
ガ29	ポッペン	溝38	(4.73)	径0.53		0.83	2.83	19C	ガラス管、銀化。
ガ30	小瓶	層75	(4.1)	1.45	1.3	15.79	2.71	19C	口欠損、透明、銀化、角瓶。
ガ31	小瓶	土坑445	(4.9)	1.59	1.45	8.18	2.58	19C後	口欠損、藍色、八角形で一面が窪む。
ガ32	小瓶	土坑5	(2.05)	1.81	1.1	2.67	2.98	19C後	角瓶、銀化、藍色。
ガ33	瓶	攪乱内掘下げ	(5.68)	径2.62		21.76	3.20		流水の文様、透明、銀化、口欠損。
ガ34	瓶	埋裏46	(9.0)	径2.5		17.33	2.51	19C後	側面「明楽」底部「虎印」、透明、口欠損。
ガ35	瓶	井戸16	6.97	径2.22		17.14	2.52	19C後～	「タムシ液」、透明。
ガ36	瓶	土坑393	(5.55)	径3.14		10.80	2.46	19C前	底部欠損、銀化。透明。
ガ37	栓	掘下げ	3.9	径1.75		17.94	2.55		ツマミ幅1.54、厚さ0.82。藍色。
ガ38	栓	掘下げ	4.0	径1.25		7.29	3.85		ツマミ幅2.13、厚さ0.4。銀化。透明。
ガ39	栓	埋裏46	4.29	径1.1		10.35	2.47	19C後	ツマミ幅2.2、厚さ1.82、透明。

()は残存値、単位はcm

No	種 類	出土遺構・層	計 測 値				比 重	遺構年代	備 考
			長さ	幅	厚さ	重量(g)			
ガ40	蓋	層75	2.9	径3.17		19.77	3.18	19C	ツマミ幅2.5、厚さ0.8、銀化。
ガ41	把手	掘下げ	(3.6)	(3.8)	1.4	18.34	2.91		表面に白色の流水文様。銀化。透明。
ガ42	容器	漆喰61	(4.8)	(3.4)	0.34	8.77	2.59	19C後～	側面に花形の文様。透明。
ガ43	菊形酒杯	土坑834	口径5.1	残存高 (2.95)	0.2	8.67	3.59	18C初～前	透明。
ガ44	コップ	土坑5	(4.93)	3.97	3.97	25.86	2.51	19C後	透明。上半欠損。
ガ45	タンブラー	土坑132	(3.94)	(3.1)	(3.0)	23.15	2.46	19C後	透明。上半割口を研磨。

観察表14 土製品一覽表(岡版80・140・141・145・写真13)

()は残存値、単位はcm

No	種 類	出土遺構・層	計 測 値				材 質	遺構年代	備 考
			長さ	幅	厚さ	重量(g)			
土1	基石	土坑41	径1.8 ～1.9		0.59	2.1	土製品	19C中～後	土製基石。
土2	基石	検出中	径2.0 ～2.1		0.56	2.4	土製品		土製基石。
土3	陶製オロシ金	土坑132	(14.1)	8.9～ 10.3	0.9	270	陶器	19C後	表面に刺穴でオロシ目を刻む。裏面には線刻「癸酉 明治六年六月廿一日 う桑田為吉 持用」。
土4	壁土	地業2000	3.8	2.2	1.9	15		11C後	
土5	壁土	池1570	4.8	4.0	3.4	45		11C末～12C前	
土6	壁土	池1570	4.7	3.0	2.5	28		11C末～12C前	
土7	壁土	池1570	5.1	4.7	4.5	62		11C末～12C前	
土8	壁土	柱穴1524	2.9	1.8	1.7	8		12C後	
土9	壁土	柱穴1524	3.9	2.4	1.5	11		12C後	
土10	壁土	池1570	6.6	4.5	4.6	79		11C末～12C前	
土11	壁土	池1570	5.6	3.9	4.3	45		11C末～12C前	
土12	壁土	土坑1654	4.6	4.1	3.0	33		11C末～12C初	
土13	壁土	土坑1654	5.1	4.2	2.8	40		11C末～12C初	
土14	壁土	土坑1615	5.0	4.1	3.3	46		11C～12C初	
土15	壁土	土坑1615	4.6	3.3	2.5	26		11C～12C初	
土16	壁土	土坑1615	3.5	3.1	2.5	16		11C～12C初	
土17	壁土	土坑1615	3.5	2.2	1.6	9		11C～12C初	
土18	壁土	土坑1155	6.4	5.3	2.4	60		16C末～17C前	
土19	壁土	土坑1155	5.9	4.8	3.8	67		16C末～17C前	
土20	壁土	土坑1155	6.4	5.2	3.8	67		16C末～17C前	
土21	壁土	土坑935	5.6	5.4	4.1	87		16C末～17C初	
土22	壁土	土坑1146	5.6	4.0	3.2	47		16C末	
土23	壁土	土坑1146	6.1	5.2	3.2	86		16C末	
土24	壁土	土坑1146	3.8	3.3	2.2	19		16C末	
土25	壁土	土坑1146	3.5	2.8	2.7	13		16C末	
土26	壁土	土坑1146	5.2	5.0	3.7	57		16C末	
土27	壁土	土坑1146	4.3	3.7	2.6	23		16C末	
土28	壁土	土坑1146	6.9	4.7	2.7	42		16C末	

観察表15 木簡・木製品一覧表 (図版81・82・146・図23)

()は残存値、単位はcm

No	種類	出土遺構・層	計測値			材質	遺構年代	備考
			長さ	幅	厚さ			
木筒1	木筒	地業2000	50.0	4.2	0.5		11C後	片面に墨書「方上」。頭部は圭頭で先端を尖らせる。
木筒2	木筒	地業2000	54.9	4.7	0.6		11C後	片面に墨書「匁二丈口一丈口行々口丈々」。頭部は圭頭で先端を尖らせる。
木筒3	木筒	落込925	19.5	1.6	0.6		16C末～17C前	片面に墨書。「口かはいの立口」
木筒4	木筒	落込925	8.1	2.1	0.2		16C末～17C前	両面に墨書。「一斗二升五合口」。「口口」。
木1	円盤型木製品	落込925	径5.2	—	1.5	スギ	16C末～17C前	
木2	円盤型木製品	落込925	径3.0	—	0.5	ヒノキ	16C末～17C前	
木3	木球	土坑959	長径4.7 短径4.1	—	2.3	散孔材	16C末～17C初	玩具。
木4	船形	土坑641	20.0	5.5	4.0	二葉マツ	16C末～17C初	玩具。
木5	刷毛	落込925	12.6	12.7～ 13.0	0.6～0.8	ヒノキ	16C末～17C初	
木6	棒状木製品	土坑971	(12.4)	1.7	1.05	ヒノキ	13C～14C	3cmの等間隔で線刻がある。中央に鉄釘が遺存。
木7	折敷底板	井戸1085	(7.1)	(4.0)	0.2	ヒノキ	13C後～14C前	
木8	曲物底	落込925	12.0	(4.2)	0.3	ヒノキ	16C末～17C前	
木9	曲物	土坑971	長径9.0 短径8.5	高さ3.8	0.2	ヒノキ	13C～14C	漆の容器として使用。
木10	曲物底	土坑1200	長径8.3 短径7.9	—	0.5	ヒノキ	14C後	
木11	曲物	落込925	長径21.8 短径20.7	高さ(6.8)	0.2	ヒノキ	16C末～17C前	焼き印あり。
木12	筥	落込925	21.9	0.5	0.6	スギ	16C末～17C前	両端部を細く削る。
木13	筥	落込925	22.5	0.5	0.6	スギ	16C末～17C前	両端部を細く削る。
木14	筥	落込925	22.4	0.7	0.4	ヒノキ	16C末～17C前	両端部を細く削る。
木15	筥	落込925	23.3	0.6	0.4	スギ	16C末～17C前	両端部を細く削る。
木16	筥	落込925	24.6	0.6	0.5	スギ	16C末～17C前	幅が端部まで均一。
木17	筥	落込925	25.1	0.6	0.4	ヒノキ	16C末～17C前	両端部を細く削る。
木18	筥	落込925	25.4	0.7	0.5	ヒノキ	16C末～17C前	幅が端部まで均一。
木19	櫛	井戸1085	7.5	(4.2)	1.2	イスノキ	13C後～14C前	
木20	櫛	落込925	4.5	(5.9)	1.2	ツゲ	16C末～17C前	
木21	櫛	落込925	(3.5)	(3.9)	1.1	ツゲ	16C末～17C前	
木22	下駄	落込925	21.8	8.6	(1.7)	ヒノキ	16C末～17C前	
木23	下駄	落込925	21.7	6.6	(4.0)	ヒノキ	16C末～17C前	
木24	下駄	落込925	17.4	5.7	(2.0)	ヒノキ	16C末～17C前	
木25	下駄	落込925	17.0	6.8	(1.8)	トチノキ	16C末～17C前	
木26	下駄	土坑959	19.3	8.7	(4.5)	オニグルミ	16C末～17C初	
木27	下駄	土坑1275	21.3	7.7	(5.0)	モミ属	16C後～17C初	
木28	下駄の歯	落込925	5.6	6.2～7.6	1.3～1.7	センダン	16C末～17C前	
木29	漆器椀	井戸1355	口径16.2 底径9.6	高さ5.5	—	トチノキ	13C	粗いロクロ目に内外面黒色。口縁部に赤色の線描あり。
木30	漆器椀	土坑935	口径14.6 底径6.8	高さ(7.2)	—	トチノキ	16C後～17C前	内面赤褐色、外面黒色。模様なし。
木31	漆器椀	土坑1275	口径(13.6) 底径6.0	高さ(6.1)	—	トチノキ	16C後～17C初	内・外面黒色。模様は外面と見込みに赤色で「ナ」

()は残存値、単位はcm

No	種 類	出土遺構・層	計 測 値			材 質	遺構年代	備 考
			長さ	幅	高さ			
木32	漆器椀	落込925	口径(12.2)	高さ(4.7)	—	トチノキ	16C末～17C前	内面赤色、外面黒色。模様は外面に赤色で「松」
木33	漆器椀	井戸1400	口径12.0 底径(7.6)	高さ(5.2)	—	トチノキ	15C後	内・外面黒色。模様は内・外面と見込みに赤色で「鳳」
木34	漆器椀	落込925	口径12.0 底径6.0	高さ4.8	—	トチノキ	16C末～17C前	内面赤褐色、外面黒色。外面に赤色で模様。
木35	漆器椀	落込925	口径(11.2) 底径(5.0)	高さ(5.5)	—	トチノキ	16C末～17C前	内面赤褐色、外面黒色。外面に赤色で模様。
木36	漆器椀	土坑959	口径(11.2) 底径(5.4)	高さ(6.7)	—	トチノキ	16C末～17C初	内・外面黒色。模様は外面に赤色で「鶴亀」
木37	漆器椀	土坑1275	口径12.6 底径6.2	高さ4.7	—	ケヤキ	16C後～17C初	内・外面赤色。模様なし。
木38	漆器椀	土坑959	口径11.2 底径(6.2)	高さ(3.7)	—	トチノキ	16C末～17C初	内面赤褐色。外面黒色。模様は外面に赤色で「紅葉」
木39	漆器椀	土坑641	口径11.8 底径6.8	高さ4.6	—	ブナ	16C末～17C初	内面赤褐色、外面黒色。模様は外面に赤色で「舟」
木40	漆器椀	土坑641	口径11.2 底径6.0	高さ3.9	—	ケヤキ	16C末～17C初	内・外面黒色。模様なし。
木41	漆器蓋	土坑935	口径11.2 つまみ径(-)	高さ(2.6)	—	トチノキ	16C後～17C前	内面赤色、外面黒色。模様は赤色。
木42	漆器蓋	落込925	口径9.3 つまみ径4.4	高さ3.7	—	トチノキ	16C末～17C前	内面赤色、外面黒色。模様は外面に黄色で「梅と草」
木43	箱物部材	落込925	(5.2)	3.0	0.9	ヒノキ	16C末～17C前	内・外面赤色。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょうにぼうじゅっちょう（ほりかわいん）あと							
書名	平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2007-17							
編著者名	丸川義広・東 洋一・田中利津子・南出俊彦・加納敬二							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 さんじょうにぼうじゅっちょう 三条二坊十町 （ほりかわいん）あと （堀河院）跡	きょうとしなかと 京都市中京区 あがらのこうじどおり 油小路通 おしこうじさがる 押小路下る おしあぶらのこうじちよう 押油小路町 238-1	26100		35度 00分 43秒	135度 45分 10秒	2006年12月 8日～2008 年3月10日	3,354㎡	高等学校 移転整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 三条二坊十町 （堀河院）跡	都城跡	縄文時代	流路	縄文土器		自然流路		
		平安時代	池、井戸、土坑、 地業、礎石、景石、 溝、柱穴、石敷	土師器、白色土器、黒 色土器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器、瓦器、 輸入陶磁器、瓦、土製 品、石製品、銭貨、木 製品、壁土		白河・鳥羽天皇が 利用した堀河院の 池を2箇所発見。		
		鎌倉時代～ 室町時代	井戸、溝、土坑、 建物、柱穴	土師器、瓦器、須恵器、 白色土器、輸入陶磁器、 焼締陶器、国産施釉陶 器、瓦、土製品、石製 品、銭貨、木製品		建物は1棟分確認。 井戸は平均的に分 布。		
		桃山時代～ 江戸時代	井戸、溝、土坑、 建物、柱穴	土師器、瓦器、国産施 釉陶磁器、焼締陶器、 輸入陶磁器、瓦、土製 品、石製品、銭貨、金 属製品、木製品、骨角 製品、鑄造遺物、壁土		桃山時代には船入 状の遺構が掘られ る。江戸時代には 土井家の屋敷とな る。南限の溝・柵・ 東限の門を確認。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17
平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡

発行日 2008年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961